

八雲町

おとし
落 部 1 遺 跡

—北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成14年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



遺跡周辺の空中写真 (これは国土地理院発行のもの
を複製したものである)



1 H-1 完掘 (南東から)



2 H-1 覆土7層土器出土状況 (東から)



3 H-1 覆土6層土器出土状況 (北から)



1 包含層出土のⅢ群a類土器(1)



2 包含層出土のⅢ群a類土器(2)



間宮林蔵『蝦夷全図』（伝1822年 文政5年）の八雲町落部付近（国立国会図書館所蔵）

例 言

1. 本書は日本道路公団北海道支社が行う北海道縦貫自動車道建設（七飯～長万部間）に伴い、財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成13年度に実施した八雲町落部1遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は第1調査部第4調査課が担当した。
3. 本書の執筆は第I～IV章、V章2、VII章1を藤原秀樹が、V章1・VII章2を遠藤香澄が担当した。各章の執筆者については文章の各項の文末に記してある。
4. 遺物の整理は土器を遠藤・藤原が、石器を藤原が担当した。
5. 現地調査時の写真撮影は藤原が、室内での遺物撮影は第1調査部第1調査課立川トマスが担当した。
6. 炭化物の放射性炭素年代については、(株)地球科学研究所に依頼した。
7. 黒曜石の原産地同定については、京都大学原子炉実験所薬科哲男氏に依頼した。
8. 火山灰分析は第1調査部第1調査課花岡正光による。
9. 石器の石材鑑定は第1調査部第1調査課花岡の指導のもと、藤原が行った。
10. 土器、石器などの実測・トレースは木下はるみ、小林晴美、藤内まゆみ、柳谷りさが行った。
11. 出土資料および記録類は、八雲町教育委員会で保管する。
12. 調査にあたっては下記の諸機関および諸氏にご協力、ご指導を頂いた。

北海道教育庁文化課、八雲町教育委員会、八雲町役場落部支所、長万部町教育委員会、森町教育委員会、七飯町教育委員会、八雲町教育委員会 三浦孝一・柴田信一・安西雅希・吉田 力、森町教育委員会 藤田 登・横山英介・荻野幸男・佐藤 稔、七飯町教育委員会 石本省三、南茅部町教育委員会 福田裕二、函館市教育委員会 野村祐一、木古内町教育委員会 山田 央、上ノ国町教育委員会 松崎水穂・斉藤邦典・松田輝哉、虻田町教育委員会 角田隆志、伊達市教育委員会 大島直行・青野友哉

凡 例

1. 本文および図・表中では以下の略号を用い、原則として確認順に番号を付した。
H：住居跡、P：土壌、TP：Tピット、F：焼土、C：炭化物集中
S：集石、HP：住居内の柱穴、HF：住居内の焼土
2. 挿図中の遺物のシンボルマークについては個々に凡例を付けた。
3. 掲載した実測図の縮尺は原則として以下のとおりである。礫石器の一部（台石・石皿）は1：4とした。各図にはスケールを付けている。
遺 構 1：40 遺物出土状況図 1：20 復元土器 1：3 土器拓本 1：3
剥片石器 1：2 磨 製 石 器 1：2 礫石器 1：3 土・石製品 1：2
4. 遺構の規模については以下の要領で示した。なお、一部破壊されているものについては現存長を（ ）で示した。
住居跡・土壌・Tピット
 確認面での長軸長×短軸長／床面・底面での長軸長×短軸長／最大深さ（単位cm）
焼土・炭化物集中
 確認面での長軸長×短軸長／最大深さ（単位cm）
集石
 確認面での長軸長×短軸長（単位cm）
5. 土層の表記は、基本土層はローマ数字で、遺構の覆土はアラビア数字で示した。
6. 土層の土色標記は『新版標準土色帖1997年版』を用いた。
7. 遺構図中の方位は真北を、細数字は標高（単位m）を示している。
8. 石器・土製品・石製品の大きさは以下の要領で示した。なお、破損しているものについては現存最大値を（ ）で示した。
 最大長×最大幅×最大厚（単位cm）
9. 掲載した石器実測図では、たたき痕は「V—V」、すり痕は「|←→|」で範囲を示した。

目 次

口絵カラー	
例言	
凡例	
目次	
挿図目次	
表目次	
図版目次	

I 調査の概要	1
1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査に至る経緯	1
4 調査の概要	2
II 遺跡の位置と環境	7
1 位置と環境	7
2 周辺の遺跡	9
III 調査の方法	15
1 発掘区の設定	15
2 調査の方法	15
(1) 発掘調査の方法	15
(2) 整理の方法	16
3 基本層序	17
4 遺物の分類	22
(1) 土器の分類	22
(2) 石器等の分類	24
IV 遺構と遺構出土の遺物	27
1 住居跡	27
2 土壌	36
3 Tピット	42
4 焼土	51
5 炭化物集中	58
6 集石	58
V 包含層出土の遺物	61
1 土器	61
(1) 縄文時代中期の土器	61
(2) 縄文時代後期の土器	95
(3) 縄文時代晩期の土器	96
(4) 統縄文時代の土器	96

2 石器等	99
遺構一覧表・遺物一覧表	122
VI 自然科学的分析	133
1 放射性炭素年代測定結果 (株)地球科学研究所	133
2 八雲町落部1遺跡出土の黒曜石製石器、石片の原材産地分析 京都大学原子炉実験所 薬科哲男	137
3 落部1遺跡のテフラ	147
VII 成果と問題点	151
1 Tピットについて	151
2 III群 a-3 類土器について	154
写真図版	
引用参考文献	
報告書抄録	
奥付け	

挿図目次

I 調査の概要	図IV-6 H-2遺物出土状況	35
図I-1 遺跡周辺の地形と発掘区	図IV-7 H-2出土の遺物	35
図I-2 遺跡の位置1)	図IV-8 P-1とP-1出土の遺物、P-2	37
II 遺跡の位置と環境	図IV-9 P-3・4	38
図II-1 遺跡の位置2)	図IV-10 P-5とP-5出土の遺物	40
図II-2 落部地区周辺の遺跡分布図	図IV-11 P-6、P-7とP-7出土の遺物	41
III 調査の方法	図IV-12 TP-1	44
図III-1 発掘区設定図	図IV-13 TP-2とTP-2出土の遺物	45
図III-2 発掘区の区分	図IV-14 TP-3	46
図III-3 基本層序	図IV-15 TP-4	47
図III-4 土層断面図1)	図IV-16 TP-5	48
図III-5 土層断面図2)	図IV-17 TP-6とTP-6出土の遺物	49
図III-6 土層断面図3)	図IV-18 TP-7	50
IV 遺構と遺構出土の遺物	図IV-19 F-1~6、S-2	53
図IV-1 最終面の地形と遺構位置図	図IV-20 F-3・5、S-2と沢地形部分	54
図IV-2 H-1(1)	図IV-21 F-7~12	55
図IV-3 H-1(2)と遺物出土状況	図IV-22 F-13・14、C-1、S-1	56
図IV-4 H-1出土の遺物	図IV-23 S-3	59
図IV-5 H-2	図IV-24 S-4	60
V 包含層出土の遺物		
図V-1 III群土器の分布		63

図V-2	土器出土状況① 土器集中1・2	65	図V-31	包含層出土の石器の分布④ すり石・北海道式石冠・ 半円状扁平打製石器・砥石	106
図V-3	土器出土状況② 土器集中3・4	66	図V-32	包含層出土の石器の分布⑤ 台石・石皿・鏝・礫片・安山岩礫片・ 泥岩・結核岩礫片	107
図V-4	土器出土状況③ 土器集中5・6・7	67	図V-33	包含層出土の石器の分布⑥ 軽石・土製品・石製品・焼成粘土塊	108
図V-5	土器出土状況④ 土器集中8・9・10・11	68	図V-34	包含層出土の石器① 石鏝・石槍または ナイフ・つまみ付きナイフ・スクレイパー	109
図V-6	土器出土状況⑤ 土器集中12・13	69	図V-35	包含層出土の石器② スクレイパー	110
図V-7	土器出土状況⑥ 土器集中14・15	70	図V-36	包含層出土の石器③ スクレイパー	111
図V-8	土器の分布① 総点数、Ⅲ群、Ⅲ群a類、Ⅲ群b類	71	図V-37	包含層出土の石器④ スクレイパー・石斧	112
図V-9	土器の分布② Ⅳ群a類、Ⅳ群b類、Ⅴ群、Ⅵ群	72	図V-38	包含層出土の石器⑤ たたき石	113
図V-10	包含層出土のⅢ群a類土器①	75	図V-39	包含層出土の石器⑥ たたき石・すり石	114
図V-11	包含層出土のⅢ群a類土器②	76	図V-40	包含層出土の石器⑦ 半円状扁平打製石器	115
図V-12	包含層出土のⅢ群a類土器③	77	図V-41	包含層出土の石器⑧ 半円状扁平打製石器	116
図V-13	包含層出土のⅢ群a類土器④	78	図V-42	包含層出土の石器⑨ 北海道式石冠・ 砥石・台石・石皿	117
図V-14	包含層出土のⅢ群a類土器⑤	79	図V-43	包含層出土の石器⑩ 台石・石皿	118
図V-15	包含層出土のⅢ群a類土器⑥	80	図V-44	包含層出土の石器⑪ 台石・石皿	119
図V-16	包含層出土のⅢ群a類土器⑦	81	図V-45	包含層出土の石器⑫ 台石・石皿	120
図V-17	包含層出土のⅢ群a類土器⑧	82	図V-46	包含層出土の石器等⑬ 台石・石皿・ 土製品・石製品	121
図V-18	包含層出土のⅢ群a類土器⑨	85			
図V-19	包含層出土のⅢ群a類土器⑩	86			
図V-20	包含層出土のⅢ群a類土器⑪	87			
図V-21	包含層出土のⅢ群a類土器⑫	88			
図V-22	包含層出土のⅢ群b類土器①	91			
図V-23	包含層出土のⅢ群a類土器⑬	92			
図V-24	包含層出土のⅢ群a類土器⑭	93			
図V-25	包含層出土のⅢ群a類土器⑮・ Ⅲ群b類土器②	94			
図V-26	包含層出土のⅢ群a類土器⑯・ Ⅲ群b類土器③	97			
図V-27	包含層出土のⅣ群a類・Ⅳ群b類・Ⅴ群・ Ⅵ群土器	98			
図V-28	包含層出土の石器の分布① 石鏝・石槍 またはナイフ・つまみ付きナイフ・ スクレイパー	103			
図V-29	包含層出土の石器の分布② 石核・ Rフレイク・Uフレイク・フレイク(頁岩)	104			
図V-30	包含層出土の石器の分布③ フレイク(その他)・石斧・たたき石	105			
			Ⅴ 自然科学的解析		
			図Ⅴ-1	黒曜石原産地	144
			図Ⅴ-2	テフラ柱状図	148
			Ⅵ 成果と問題点		
			図Ⅵ-1	八雲町周辺のTビット検出遺跡	151
			図Ⅵ-2	八雲町周辺のTビット規模一覧と 分類別グラフ	153
			図Ⅵ-3	落部1遺跡出土のⅢ群土器	155

表 目 次

<p>表 I - 1 遺構一覧 5</p> <p>表 I - 2 出土土器一覧 5</p> <p>表 I - 3 出土石器等一覧 5</p> <p>表 II - 1 八雲町内の遺跡 12</p> <p>表 IV - 1 遺構規模一覧1) 住居跡 122</p> <p>表 IV - 2 遺構規模一覧2) 土壇 122</p> <p>表 IV - 3 遺構規模一覧3) Tピット 122</p> <p>表 IV - 4 遺構規模一覧4) 焼土・炭化物集中 122</p> <p>表 IV - 5 遺構規模一覧5) 集石 122</p> <p>表 IV - 6 遺構別出土遺物一覧 123</p> <p>表 IV - 7 遺構出土掲載土器一覧 (復元土器) 住居跡・土壇 123</p> <p>表 IV - 8 遺構出土掲載土器一覧 (拓本) 住居跡・土壇・Tピット 124</p> <p>表 IV - 9 遺構出土掲載石器一覧 124</p>	<p>表 V - 1 包含層出土掲載土器一覧 (復元土器) Ⅲ群 a - 3 類・Ⅲ群 b 類 125</p> <p>表 V - 2 包含層出土掲載土器一覧 (拓本) Ⅲ群 a - 3 類・Ⅲ群 b 類 128</p> <p>表 V - 3 包含層出土掲載土器一覧 (拓本) Ⅳ群 a 類・Ⅳ群 b 類・Ⅴ群 130</p> <p>表 V - 4 包含層出土掲載土器一覧 (復元・拓本土器) Ⅵ群 130</p> <p>表 V - 5 包含層出土掲載石器一覧 131</p> <p>表 VI - 1 放射性炭素年代測定一覧 134</p> <p>表 VI - 2 各黒曜石の原産地における原石群の元素比の 平均値と標準偏差値 139</p> <p>表 VI - 3 八雲町落部 1 遺跡出土黒曜石製石器・剥片の 元素比分析結果 144</p> <p>表 VI - 4 八雲町落部 1 遺跡出土黒曜石製石器、石片の 産地分析結果 145</p> <p>表 VI - 5 テフラの構成物 148</p>
--	--

図版目次

口絵1	遺跡周辺の空中写真	2	P-3完掘(北から)
口絵2	1 H-1完掘(南東から)	3	P-4完掘(北西から)
	2 H-1覆土7層土器出土状況(東から)	4	P-5完掘(北から)
	3 H-1覆土6層土器出土状況(北から)	5	P-6完掘(北から)
口絵3	1 包含層出土のⅢ群a類土器①	6	P-7完掘(北東から)
	2 包含層出土のⅢ群a類土器②	図版11	1 TP-1セクション(北から)
口絵4	間宮林藏「蝦夷全国」(伝1822年 文政5年) の八雲町落部付近(国立国会図書館所蔵)	2	TP-1完掘(北東から)
		図版12	1 TP-2セクション(西から)
		2	TP-2完掘(西から)
図版1-1	遺跡周辺の空中写真 (1947年9月3日撮影。国土地理院発行のものを複製したものである) …………… 6	3	TP-3セクション(西から)
		4	TP-3完掘(南西から)
		図版13	1 TP-4セクション(西から)
		2	TP-4完掘(西から)
図版1	1 遺跡遠景(左手に胸ヶ岳を望む)	3	TP-5セクション(西から)
	2 遺跡遠景(北岸の段丘から)	4	TP-5完掘(西から)
図版2	1 A地区完掘(南西から)	図版14	1 TP-6セクション(西から)
	2 管理用道路部分完掘(東から)	2	TP-6完掘(北から)
図版3	1 B地区完掘(北西から)	3	TP-7セクション(南東から)
	2 B地区調査前風景(南東から)	4	TP-7完掘(東から)
図版4	1 C地区完掘(北西から)	図版15	1 F-1検出(南西から)
	2 C地区調査風景(北から)	2	F-2検出(南東から)
図版5	1 メインセクション①(Q-27杭から下方を望む)	3	F-3検出(北から)
	2 メインセクション②(O-20杭から下方を望む)	4	F-4検出(北から)
	3 メインセクション③(P-10杭から下方を望む)	5	F-5検出(北から)
		6	F-6検出(北から)
図版6	1 H-1完掘(南東から)	7	F-7検出(北から)
	2 H-1セクション①(南西から)	8	F-8検出(北から)
図版7	1 H-1セクション②(南東から)	図版16	1 F-9検出(南から)
	2 H-1覆土7層土器出土状況(東から)	2	F-10検出(西から)
	3 H-1覆土6層土器出土状況(北から)	3	F-11検出(北から)
図版8	1 H-2完掘(北西から)	4	F-12検出(東から)
	2 H-2セクション①(北から)	5	F-13検出(北から)
図版9	1 H-2セクション②(東から)	6	F-14検出(北西から)
	2 H-2 HF-1(北から)	7	S-1検出(南から)
	3 P-1完掘(西から)	8	S-2検出(東から)
図版10	1 P-2完掘(北西から)	図版17	1 S-3検出(北西から)
		2	S-4検出(北西から)
		3	沢地形部分(北から)

	4	沢地形部分遺物出土状況(北東から)		2	包含層出土の土器(図V-15-13)
	5	L-16-a・b区Ⅲ層4回目土器出土状況 (西から)		3	包含層出土の土器(図V-15-14)
	6	I-27-b区Ⅲ層4回目土器出土状況 (北西から)	図版26	4	包含層出土の土器(図V-16-15)
	7	G-27-c区Ⅲ層3回目土器出土状況 (北から)		1	包含層出土の土器(図V-16-16)
	8	J-26-a区Ⅲ層3回目土器出土状況 (北西から)		2	包含層出土の土器(図V-17-17)
				3	包含層出土の土器(図V-17-18)
				4	包含層出土の土器(図V-18-19)
				5	包含層出土の土器(図V-18-20d底部)
図版18	1	H-1出土の土器①	図版27	1	包含層出土の土器(図V-19-21)
	2	H-1出土の土器②		2	包含層出土の土器(図V-19-22)
	3	H-1出土の土器③		3	包含層出土の土器(図V-19-23)
	4	H-1出土の土器④		4	包含層出土の土器(図V-19-24)
	5	H-1出土の遺物		5	包含層出土の土器(図V-19-25)
図版19	1	H-2出土の土器①	図版28	6	包含層出土の土器(図V-19-26)
	2	H-2出土の土器②		1	包含層出土の土器(図V-20-27)
	3	H-2出土の土器③		2	包含層出土の土器(図V-20-28)
	4	P-5出土の土器		3	包含層出土の土器(図V-20-29)
	5	土曜出土の遺物		4	包含層出土の土器(図V-20-30)
図版20	1	TP-2出土の遺物		5	包含層出土の土器(図V-20-31)
	2	TP-6出土の遺物	図版29	6	包含層出土の土器(図V-21-32)
	3	H-1、H-2出土の土器		1	包含層出土の土器(図V-21-33)
図版21	1	包含層出土のⅢ群a類土器①		2	包含層出土の土器(図V-21-34)
	2	包含層出土のⅢ群a類土器②		3	包含層出土の土器(図V-22-35)
図版22	1	包含層出土の土器(図V-10-1)	図版30	4	包含層出土の土器(図V-22-36)
	2	包含層出土の土器(図V-10-2)		1	包含層出土の土器(図V-22-37d底部)
	3	包含層出土の土器(図V-10-3)		2	包含層出土の土器(図V-23-46c底部)
	4	包含層出土の土器(図V-10-4)		3	包含層出土の土器(図V-23-50L縁部)
	5	包含層出土の土器(図V-11-7)		4	包含層出土の土器(図V-26-74a口縁部)
図版23	1	包含層出土の土器(図V-11-5)	図版31	5	包含層出土の土器(図V-27-99b底部)
	2	左上(図V-11-5)の突起部(正面)		1	包含層出土の土器 (図V-18-20a～c口縁部)
	3	左上(図V-11-5)の突起部(側面)		2	包含層出土の土器 (図V-22-37a～c口縁部)
	4	左上(図V-11-5)の注口部(正面)		3	包含層出土のⅢ群a類土器①
	5	左上(図V-11-5)の注口部(側面)		1	包含層出土のⅢ群a類土器②
	6	包含層出土の土器(図V-11-6)	図版32	1	包含層出土のⅢ群a類土器③
図版24	1	包含層出土の土器(図V-12-8)	図版33	1	包含層出土のⅢ群a類③・Ⅲ群b類土器
	2	包含層出土の土器(図V-12-9)	図版34	1	包含層出土のⅢ群a類④・Ⅳ群a類・ Ⅳ群b類・Ⅴ群・Ⅵ群土器
	3	包含層出土の土器(図V-13-10)			
	4	包含層出土の土器(図V-14-11)	図版35	1	包含層出土の石器①(石鏃)
図版25	1	包含層出土の土器(図V-14-12)		2	包含層出土の石器②

		(石槍またはナイフ・つまみ付きナイフ・スクレイパー)			
図版36	1	包含層出土の石器3 (スクレイパー・石斧)		2	包含層出土の石器13 (台石・石皿)
図版37	1	包含層出土の石器4 (たたき石)		3	包含層出土の石器14 (台石・石皿)
	2	包含層出土の石器5 (たたき石)		4	包含層出土の石器15 (台石・石皿)
図版38	1	包含層出土の石器6 (たたき石・すり石)	図版42	1	包含層出土の石器16 (台石・石皿)
	2	包含層出土の石器7 (すり石・半円状扁平打製石器)		2	包含層出土の石器17 (台石・石皿)
図版39	1	包含層出土の石器8 (半円状扁平打製石器)		3	包含層出土の石器18 (台石・石皿)
	2	包含層出土の石器9 (半円状扁平打製石器)		4	包含層出土の石器19 (台石・石皿)
図版40	1	包含層出土の石器10 (半円状扁平打製石器・北海道式石冠・砥石)	図版43	1	包含層出土の石器20 (台石・石皿)
	2	包含層出土の石器11 (台石・石皿)		2	包含層出土の石器21 (台石・石皿)
図版41	1	包含層出土の石器12 (台石・石皿)		3	包含層出土の石器22 (台石・石皿)
				4	包含層出土の石器23 (台石・石皿)
			図版44	1	包含層出土の石器24 (台石・石皿)
				2	包含層出土の土製品・石製品
			図版VI-1	テフラの顕微鏡写真	150

I 調査の概要

1 調査要項

事業名	北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査
委託者	日本道路公団 北海道支社
受託者	財団法人北海道埋蔵文化財センター
受託期間	平成13年4月1日～平成15年3月31日
遺跡名	落部1遺跡（北海道教育委員会登録番号B-16-77）
発掘調査期間	平成13年5月7日～平成13年10月31日
整理作業期間	平成14年4月1日～平成15年3月31日
所在地	山越郡八雲町入沢374ほか
発掘調査面積	5,471㎡

2 調査体制

財団法人北海道埋蔵文化財センター

平成13年度（現地発掘調査）

理事長	大澤 満
専務理事	宮崎 勝
常務理事	木村尚俊（第1調査部長兼務、平成13年7月逝去）
第2調査部長	大沼忠春（第1調査部長兼務、7月18日から）
第4調査課長	遠藤香澄（落部1遺跡発掘担当者）
主 任	藤原秀樹（落部1遺跡発掘担当者）

平成14年度（整理作業）

理事長	大澤 満（平成14年6月30日まで）
	森重権一（平成14年7月1日から）
専務理事	宮崎 勝
常務理事	畑 宏明（第1調査部長兼務、平成14年6月1日から）
第1調査部長	畑 宏明（平成14年4月1日から）
第4調査課長	遠藤香澄（落部1遺跡発掘担当者）
普及活用課主任	藤原秀樹（落部1遺跡発掘担当者）

3 調査に至る経緯

北海道縦貫自動車道路は七飯町から室蘭市・札幌市を經由し名寄市へと至る総延長488kmの自動車専用道路で、国線I C～和寒I C間359kmは既に供用開始されている。

このうち、七飯～長万部間の路線については平成2年4月に日本道路公団札幌建設局（当時）から

北海道教育委員会へ埋蔵文化財についての事前協議がなされた。協議を受けた道教委は平成2年4月に所在確認調査を実施し、平成5年に北側の長万部町から順次試掘調査を開始した。八雲町内の試掘調査は平成13年で終了している。八雲町内での発掘調査を必要とする遺跡数は八雲IC以北で5ヶ所、八雲IC～落部IC間で9ヶ所、落部IC以南が5ヶ所の合計19ヶ所であった。この内、平成13年までに本遺跡を含めて17ヶ所の発掘調査が終了している。また、平成14年には八雲IC～落部IC間の遺跡1カ所、落部IC以南の遺跡1ヶ所の調査が行われ終了した。また、同年には平成12年に調査を終了していた山越2遺跡について工法変更が行われ、一部範囲を拡張し再調査を行った。

落部1遺跡については平成8年5月および平成12年11月に試掘調査を実施し、約6,400㎡が発掘調査を必要とする範囲とされた。日本道路公団では工法などを変更し、5,300㎡が発掘調査範囲となった。その後、平成13年度に再度工法変更を実施して工事幅を変更し、最終的には5,471㎡が発掘調査必要範囲となった。

4 調査の概要

落部1遺跡は落部川右岸段丘上の北東向き緩斜面に位置し、標高は23～39mである(図I-1)。つじ祭りで有名な落部公園に隣接し、北から北東方向にかけて噴火湾を望むことができる。海岸線からは1kmほど内陸である(図I-2)。現在のところ近接した遺跡は確認されておらず、落部市街地近くの海岸段丘上に縄文時代を主体とする浜中1遺跡、浜中2遺跡がある程度である。落部川をはさんで対岸の海岸段丘上も踏査したが遺物は採取できず、やや八雲町よりに小沢をはさんで旭丘1遺跡が所在している(八雲町教委2002)。

現在の調査区周辺は杉を主体とする人工林である。一部に有姿分譲時の取り付け道路造成による攪乱が見られたが、1640年降灰の駒ヶ岳火山灰(Ko-d)が平均で50cmほど堆積していたこともあり包含層の残りは極めて良好であった。

検出された遺構は住居跡2軒、土壌7基、Tピット7基、集石4ヶ所、焼土14ヶ所、炭化物集中1ヶ所である。遺構の多くは遺物を伴わず時期不明のものが多い。この他に縄文時代中期前半の土器集中15ヶ所も検出されている。

住居跡の内、H-1は長軸が3m以下の楕円形で掘り込みも不明瞭な小型の住居跡であったが、覆土中からサイベ沢Ⅶ式の古手に相当する土器が4個体折り重なるように出土した。もう一つの住居跡H-2は床面から地床坪が確認されたが、覆土中から遺物はほとんど出土しなかった。

土壌の内、P-1は塙口部に台石が検出された埋め戻しの土壌で、土壌墓の可能性もある。

Tピットは全てが溝状で、長軸方向が傾斜に平行するものが多く、列をなしているものもあった。TP-1・2・3、TP-4・5・7で一単位になると推測される。

焼土は調査区に散在して検出された。周辺から遺物が出土しないものも多く、人為的な焼土ではないと推測されるものもある。

集石のうちS-1・2は小型の円礫がまとまったもので、全点数の内10g以下のものが50%以上を占めており、中には焼成を受けているものもあった。

遺物は土器・石器などをあわせて9,896点が出土した。この内、遺構出土は土器389点・石器など1,107点の合計1,496点、包含層出土は土器7,475点・石器など925点の合計8,400点である。

土器は中期前半のサイベ沢Ⅶ式・見晴町式が多く、中期後半の榎林式に相当するものが続き、他に後期の天祐寺式・手稲式、晩期の大洞A式(尾白内I群に関連)、縄文時代の後北C₂・D式土器

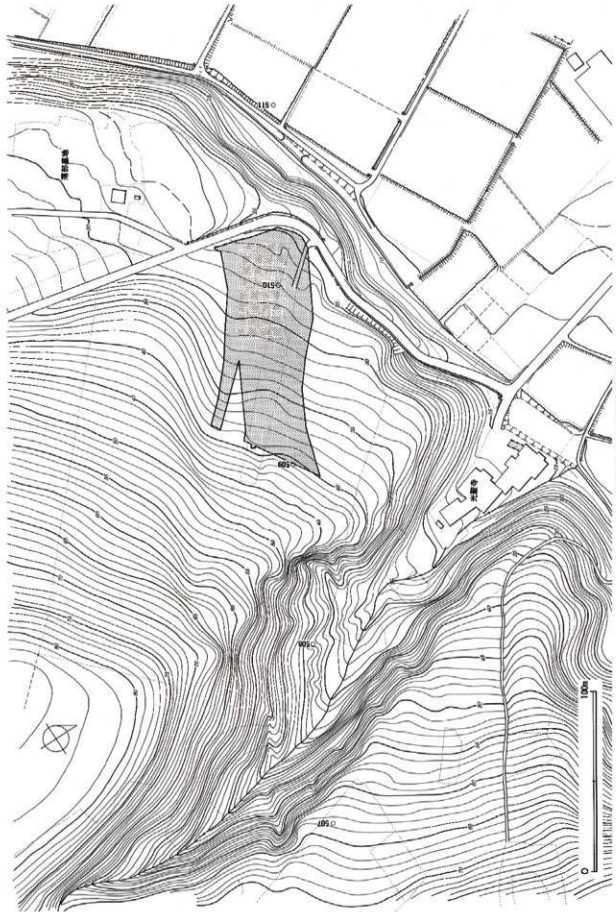


図1-1 遺跡周辺の地形と発掘区

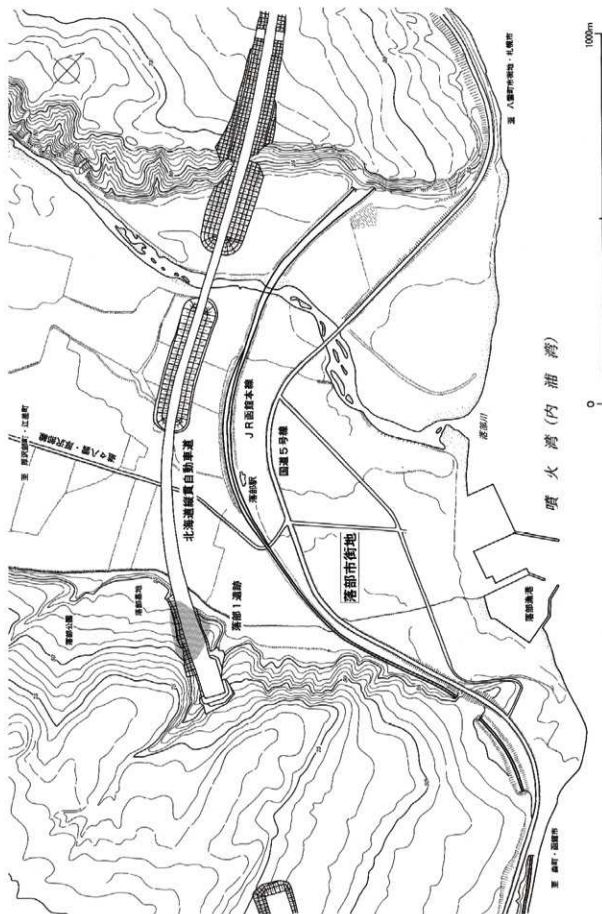


図 I-2 遺跡の位置(1)

が少数出土した。石器は石鍬、石槍またはナイフ、つまみ付きナイフ、スクレイパー、石斧、たつき石、すり石、半円状扁平打製石器、北海道式石冠、砥石、台石・石皿などが出土した。剥片石器ではフレイクが少なく、定形的石器の比率が高いことが特徴である。礫石器は30ライン以上の斜面下方部分にまとまる傾向がある。

石器の石材は剥片石器では頁岩がほとんどを占め、玉髄（めのう）が少数あり、黒曜石のものがわずかにあった。礫石器では安山岩が多く、凝灰岩が続く。なお、黒曜石製のものについてはフレイクも含めて今回出土した8点全ての原産地同定を行った（Ⅵ章2参照）。その結果、8点全て赤井川産であった。遺跡に最も近い産地で北方海上50kmに位置する豊浦町豊泉産のものはない。

また、性格不明の土製品1点、漏斗状の土製品1点、石棒破片の可能性のある粘板岩片1点、小型石斧状の石製品1点が出土している。
(藤原秀樹)

表Ⅰ－1 遺構一覧

住居跡	土 塚	Tピット	焼 土	炭化物集中	集 石
2	7	7	14	1	4

表Ⅰ－2 出土石器一覧

分 類	Ⅲ群a類	Ⅲ群b類	Ⅳ群a類	Ⅳ群b類	V群	Ⅵ群	合 計
包含層	6,315	948	104	5	34	69	7,475
遺 構	382	7					389
計	6,697	955	104	5	34	69	7,864

表Ⅰ－3 出土石器等一覧

分 類	剥片石器群									礫石器群										その他			合 計	
	Ⅰ群			Ⅲ群			Ⅴ群			Ⅵ群	Ⅶ群			Ⅷ群		Ⅸ群	Ⅹ群	Ⅺ群	Ⅻ群	土 製	石 製	そ の 他		
	A類	B類	未分類	A類	B類	未分類	A類	B類	C類		1類	3類	4類	B類	石									石皿
遺 構			1										2			4	1,100							1,107
包含層	7	1	7	56	1	17	36	84	11	40	15	32	3	6	250	338	6	2	13				925	
合 計	7	1	7	57	1	17	36	84	11	40	15	34	3	6	254	1,438	6	2	13				2,032	

個体数

遺 構			1										2			4	1,100							1,107
包含層	7	1	7	55	1	17	36	84	10	37	13	29	2	3	39	337	2	1	13				694	
合 計	7	1	7	56	1	17	36	84	10	37	13	31	2	3	43	1,437	2	1	13				1,801	



図版1-1 浦跡周辺の空中写真
(1947年9月3日撮影。国土地理院発行ものを複製したものである)

II 遺跡の位置と環境

1 位置と環境

八雲町は渡島支庁管内北部に位置し、北側は長万部町、南側は森町に、西側は今金町・北檜山町・熊石町・乙部町・厚沢部町に接している。町の面積は735.60km²で、平成12年度の人口は17,636人である。同年度の気候は最高気温30.4℃、最低気温-16.0℃で平均気温は8.2℃、年間降水量は1,585mm、最深積雪量は87cmであった。夏にはしばしば霧が発生し、気温が上がらない日も多い。

落部1遺跡は八雲町市街地から森町・函館市方面に向かって17kmほど南下し、右折して落部川に沿って厚沢部町に抜ける道々67号に面した落部川の右岸段丘上に位置する(図II-1)。落部川河口からは1kmほど上流となる。駒ヶ岳火山灰(Ko-d)の堆積が厚く、また山林であったため遺跡の存在は近年まで知られず、平成8年の北海道縦貫自動車道建設に伴う試掘確認調査により初めて確認された。

本遺跡の北から北東方向にかけては噴火湾を望むことができ、一年を通じて北～北東の風が卓越する。晴れた日には遺跡から羊蹄山を、背後の山向こうには駒ヶ岳および湯川地熱発電所の噴煙を望むことができる。

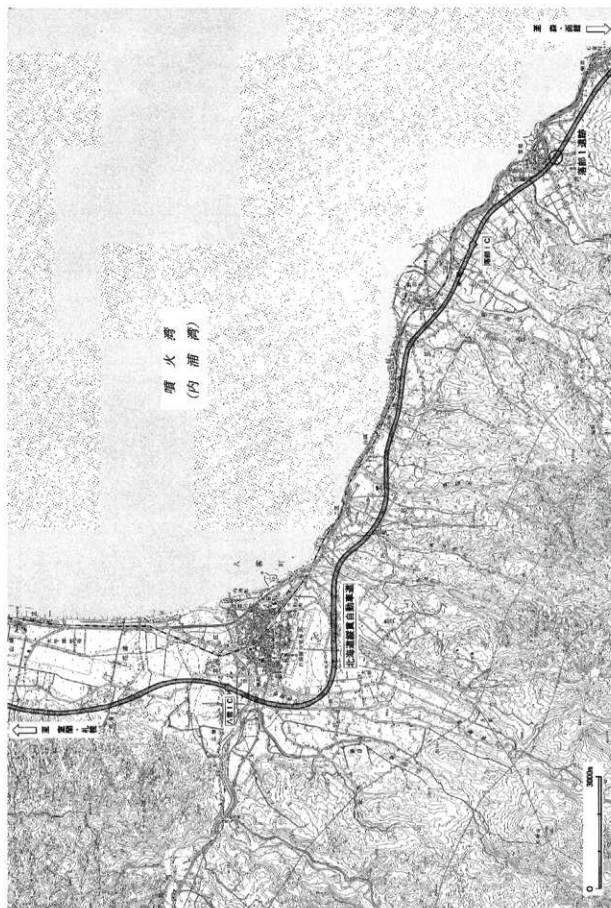
遺跡は6月につつじが満開となる道南の名所の一つ、落部公園に隣接しており、つつじ祭りが開催される時期には多くの観光客でにぎわっている。また、明治45年に設置された落部墓地が隣にある。この墓地のかたすみに昭和11年10月に見玉作左衛門により建てられた「落部土人供養碑」が残っている。これは、慶応元年(1865)に起こったイギリス人による落部村での「アイヌ人骨盗掘事件」に関連するものである。この事件が解決し、盗掘された人骨は返還され再埋葬し、墓碑も建立した。これを昭和10年に北海道帝国大学が調査の為再発掘した際に、人骨とともに大学に運ばれた江戸時代の墓碑の代わりとして建てられたものが「落部土人供養碑」である。

遺跡の所在する落部地区は、昭和32年4月に八雲町と合併するまでは落部村という独立した村であった。落部は少なくとも慶長5年(1600)以前に「野田追場所」が設けられたところで、茂無部川(現在の森町との境界)から境川(八雲町宇山越に所在)の間がその範囲であった。もともとは野田追が本村であったが、後に落部のほうが人口が多くなったため、安永5年(1776)に本村を移したという。

1741～1748年に記されたとする『蝦夷商売聞書』では落部(野田追場所)の産物として夏季には鮭・数の子・昆布が、冬季にはオットセイ・昆布があるとする。寛政3年(1791)の『東蝦夷道中記』では昆布、鱈のほかに樺木の皮、萩木の太いものが挙げられている。嘉永7年(1854)の『東蝦夷地海岸図台帳』によると鮭メ粕、鱈メ粕、駄昆布、いり子、折昆布、マス、サケがあり、弘化2年(1858)に落部を訪れた松浦武四郎は『蝦夷日誌』においては昆布、鱈(もだな)、数の子、カスベ、ホタテ、海苔、マス、タラ、煮海鼠を産物としている。ニシン・マス・サケ・昆布がほぼ一貫して産物とされていることが分かる。

また、『蝦夷日誌』には落部に畑があったことが記されている。安政年間には和入350坪、アイヌ人400坪の畑があったと記録されており、この頃の『東蝦夷地海岸図台帳』によると粟90俵、蕎麦60俵、大豆小豆などが収穫されていた。

この野田追場所は寛政13年(1801)に村並となり、安政5年(1858)に村となり落部村が誕生した。松浦武四郎の描写によると落部村には旅館、馬継所があり、また「ガマハバキ」と呼ばれる妓女も居



図II-1 遺跡の位置(2)

るなど、周辺でも大きな村の一つであったことが分かる。

その後、江戸時代が終わり明治12年12月に戸長が任命され、大正4年4月には二級町村制が施行された。そして昭和32年に八雲町と合併することとなる。

また、遺跡のすぐ下を通る、落部から厚沢部に抜ける現在の道々67号は古く「エサシルベシュベ」(＝江差へ下る道)と呼ばれた比較的通行量の多い道であった(口絵4など)。明治2年に乙部へ上陸した官軍の一隊もこの道を通って落部村へ到着しており、この後「官軍道路」とも呼ばれることになった。遺跡の所在する入沢地区にはこの官軍に対抗して、旧幕府軍が構築した土塁が現存している。

落部はアイヌ語の「オテシュベツ」(＝川尻にやなをかける所、の意)、に由来している。江戸時代の産物にもサケが挙げられており、このような状況を反映したものと考えられる。遺跡の所在する入沢は同じくアイヌ語の「イルエサラ」(＝クマの足跡のあるスゲの原野)もしくは「イルエサン」(＝クマの通った道がそこで浜の方に下っている)に由来している。江戸時代の紀行文などには産物としてクマなどの陸獣は挙げられていないが、明治3年7月13日に東本願寺の現如上人が落部村を訪れた際の『東本願寺北海道開拓錦絵』の記載には「昆布にしんくさくさの魚また鹿熊など取て世わたりなしける里なるに、…」とあり、周辺に熊や鹿が多く生息し、これらを捕獲していたであろうことが伺える。少なくとも江戸時代末から明治初期にかけては熊・鹿などの狩猟が盛んな場所であったことが分かっている。『落部村郷土史』によると熊は入沢地区などで多く出没し、明治20年には懸賞金をかけて捕獲させるほどであったという。また、鹿は落部村市街地近くでも多数見かけるほど生息していたが明治28年の記録の大豪雪で全滅したという。

落部のやや内陸寄りにある本遺跡で縄文時代にTピットが構築され狩猟場となっていることと直接結び付けることは出来ないが、この『東本願寺北海道開拓錦絵』は興味深い記載である。

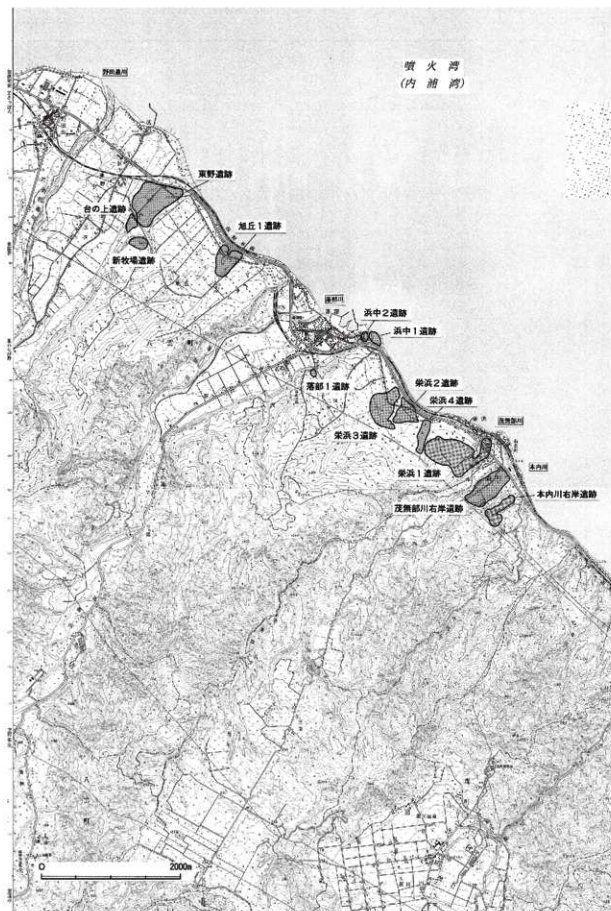
2 周辺の遺跡

八雲町内の遺跡については『八雲町シラリカ2遺跡』(道埋文2000b、北理調報142)や『八雲町山越2遺跡』(道埋文2001b、北理調報163)などの当センター報告書ですでに多く触れられているのでここでは省略し、落部地区を中心とした遺跡についてのみ記載することとする。

なお、八雲町内の周知の埋蔵文化財包蔵地一覧表と落部周辺の遺跡分布図は表Ⅱ-1、図Ⅱ-2に示しておいた。

落部市街地に近い海岸段丘上には浜中1遺跡、浜中2遺跡がある。この遺跡の存在は古くから知られており、1953年には既に堅穴住居跡と貝塚について簡単に報告されている(田川1953)。この内、浜中1遺跡は1961・1964年に桜井清彦により調査された落部遺跡に相当する(桜井1961・1964)。第1次調査では統縄文時代の墓壇1基、小貝塚1ヶ所および縄文時代中期の堅穴住居跡を確認した。第2次調査では石組炉を伴う縄文時代中期円筒土器上層式期の住居跡1軒、統縄文時代恵山式期の墓壇3基を確認している。この際に発掘された恵山式土器については及川研一郎が実測図を作製し報告しており、南川Ⅲ群を主体とした土器が出土している(及川1987)。また、1969年には同じ遺跡で八雲高校郷土史研究部が遺物を採取している。この際には西結梗B2遺跡出土土器に相当するものや南川Ⅲ群土器が出土している(八雲高校郷土史研究部1971)。

落部川をはさんで対岸の海岸段丘上には旭丘1遺跡がある。落部川には面しておらず、やや八雲町よりの小川をはさんだ両側に位置する。標高は50mほどで、紀行文などにより「クロハゲ」「アカハゲ」と言われた噴火湾に面した断崖絶壁上の段丘平坦面にある。旭丘1遺跡は平成2年に北海道縦貫



図Ⅱ-2 落部地区周辺の遺跡分布図

自動車道路建設にともなう所在確認調査により新たに発見され、平成9年に道管中山間地域総合整備事業により、平成12年には北海道縦貫自動車道路建設により発掘調査された。平成9年には住居跡1軒、土壘2基が検出され、縄文時代中期中葉を主体とする遺物が出土した。この他に、前期・晩期・統縄文時代の遺物も少数出土している（八雲町教委1998）。平成12年には平成9年検出のものの続きを含めて住居跡が4軒、土壘10基、焼土3ヶ所が検出され、縄文時代中期前半の円筒土器上層d式を主体とする遺物が出土した（八雲町教委2002）。

野田追川に面して同じ段丘上には台の上遺跡（八雲町教委1987）、新牧場遺跡、東野遺跡があるのみである。周辺を踏査したが、他に遺物は採取できなかった。この海岸段丘の標高が高く、海岸部や落部川に面した部分が断崖となっていることが一因と推測される。

落部1遺跡よりも森町側には栄浜1・栄浜2・栄浜3・栄浜4遺跡が所在する。

栄浜1遺跡は縄文時代前期～擦文時代にかけての大規模な遺跡であり、これまでも5冊の報告書が刊行されている。標高22～36mの段丘上は縄文時代前期・中期を主体とする区域で、環状に住居跡が巡っており、その内側・外側には墓塚・フラスコ状ピットなどの土壘が集中している。1997年の調査では『家形石製品』が出土し注目された。町教委による4回の調査により検出された遺構は住居跡203軒、小堅穴1基、土壘502基、配石遺構22基、集石17ヶ所、埋設土器4ヶ所にも上る（八雲町教委1983・1986・1987・1998）。また、海岸線から奥まった所に位置し、標高がやや高い37～51mの区域は縄文時代後期前葉を主体とする遺跡である。後期前葉の遺構は住居跡5軒、土壘8基、フラスコ状ピット14基、掘立柱建物跡1軒、小土壘46ヶ所、焼土1ヶ所、配石1ヶ所が検出された。この他に、早期、中期、統縄文時代後葉、擦文時代の遺構・遺物も検出されている。統縄文時代の遺構では後北B式土器3個体、石鏃22点などが副葬された土壘墓1基が調査されている（財団法人北海道埋蔵文化財センター2002、北埋調報175）。

栄浜2遺跡は2000・2001年に八雲町教委により調査された。標高31～41mの海岸段丘上に位置し、縄文時代後期初頭、擦文時代を主体とする遺跡で、住居跡7軒（後期初頭4軒、擦文時代3軒）、土壘21基が検出された。擦文時代の住居跡の内1軒は焼失住居である。この他に近世の畝状遺構も確認された（八雲町教委2002）。

栄浜3遺跡は小沢をはさんで栄浜2遺跡の対岸に位置し、2001・2002年に八雲町教委により調査された。2001年には遺構は住居跡4軒（内3軒は縄文中期末）、土壘11基、小土壘30基および栄浜2遺跡と同じ近世の畝状遺構5ヶ所が、2002年には更に住居跡3軒、土壘8基、小土壘12基が検出された。遺物は縄文時代中期～晩期、統縄文時代・擦文時代のものが出土した（八雲町教委2002）。

（藤原秀樹）

表Ⅱ-1 八雲町内の遺跡

登録番号	遺跡名	所在 地	立 地 (標高)	時 期	文獻・内容・備考
B-16-1	オタクナイ遺跡	浜松1-31、39ほか	奥津内川右岸海岸段丘(8~20m)	縄縄文(葦山式)	採取資料あり(柴田1991b)
B-16-2	トコタン1遺跡	熱田44~201ほか	海岸段丘(20~25m)	縄縄文(徳山式)	田川(1956)のトコタン遺跡C地点
B-16-3	ルコウ1遺跡	黒岩2251ほか	海岸段丘(30~35m)	縄文	平成12年度新規発掘 頁岩剥片
B-16-4	浜松1遺跡	浜松2591ほか	海岸段丘(25~28m)	中期	円筒土甎式
B-16-5	大田川庭遺跡	上八雲296-1ほか	遊樂部川河岸段丘(70~75m)	旧石器	昭和35年調査(大間遺跡、吉崎(1964)千代(1965)三浦・柴田(1993))
B-16-6	シタリカ3遺跡	黒岩98、326	海岸段丘(25~40m)	旧石器	平成12年度新規発掘 頁岩剥片
B-16-7	上八雲1遺跡	黒岩2861ほか	遊樂部川河岸段丘(70~80m)	旧石器	昭和35年10月22日高橋博徳物産調査
B-16-8	聖徳遺跡	富沢161ほか	遊樂部川河岸段丘(65~65m)	旧石器	昭和35年10月22日高橋博徳物産調査
B-16-9	コタン温泉遺跡	浜松281ほか	ビュウヒ川左岸の海岸段丘(21~34m)	早期~晩期、縄縄文	三浦・柴田(1992)集落跡、土甎、貝類 国指定重要文化財骨角牙製品 昭和20、30年代(田山賢二調査)の無形部遺跡、黒戸部コタン遺跡、八雲 高松塚土史研究部(1970)のコタン遺跡A遺跡
B-16-10	大原遺跡	大新47-1ほか	砂灘部川扇状地の扇状(32m)	早期、中期、晩期、縄縄文(後北)	三浦・柴田(1997、1998a)
B-16-11	山崎1遺跡	山崎434-1ほか	海岸段丘(30m)	中期	三浦(1980-1984)柴田(1991a、b)早期貝殻文・赤布文土器、魚形石器
B-16-12	山崎1遺跡	山崎154-7ほか	アイタクシナイ左岸海岸段丘(28m)	早期~晩期、縄縄文	三浦(1987) 後北式と弥生系土器(天王山式)が伴出
B-16-13	台の上遺跡	東野505ほか	シタリカ川河岸段丘(15~20m)	中期~晩期、縄縄文	
B-16-14	八雲1遺跡	八雲町40	砂灘部川扇状地(10m)	中期、晩期	円筒土甎式 タンネットウL式
B-16-15	シタリカ遺跡	黒岩1001ほか	シタリカ川河岸段丘(5~10m)	縄縄文(葦山式)、縄文	採取資料あり(魚形石器)、柴田(1991b)
B-16-16	小倉沢遺跡	東野625ほか	野田道川右岸の河岸段丘(40m)	中期	円筒土甎式
B-16-17	浜中1遺跡	落部470ほか	海岸段丘(15~17m)	縄縄文(葦山式)	板井(1961、1964)昭和34、37調査の舊部遺跡。藪塚・小貝塚・住居跡、魚形石器
B-16-18	松野1遺跡	松野25-1ほか	野田道川河岸段丘(60~65m)	中期	円筒土甎式
B-16-19	上八雲2遺跡	上八雲334-1ほか	遊樂部川の河岸段丘(85m)	旧石器	アレトド、ボイントンナイフ、石刃
B-16-20	ハシノスベツ遺跡	大新72-3ほか	砂灘部川の扇状地(30~30m)	中期	平成12年度新規発掘 土器片(黒曜石、頁岩)
B-16-21	元山牧場遺跡	浜松1051ほか	酒屋川左岸海岸段丘(20~30)	前期	田川(1958)昭和32年調査の元山遺跡、住居跡6
B-16-22	八雲2遺跡	相生町1161ほか	砂灘部川扇状地(20~28m)	晩期	タンネットウL式
B-16-23	トコタン2遺跡	熱田17-1ほか	海岸段丘(17~38m)	中期、縄縄文、縄文	武内・山田(1968)、野村(1982)、昭和42、55年調査の熱田遺跡、集形土器を伴う住居跡
B-16-24	トコタン4遺跡	熱田105-1ほか	海岸段丘(25~45m)	縄文	平成12年度新規発掘 土器片 剥片
B-16-25	浜松2遺跡	浜松123-1ほか	ビュウヒ川右岸河岸段丘(20~30m)	早期~晩期	三浦(1989) 三浦・柴田(1991)
B-16-26	浜松6遺跡	浜松214~220	海岸段丘(10~20m)	縄文	平成12年度新規発掘 土器片
B-16-27	浜松5遺跡	浜松224ほか	海岸段丘(25~32m)	中期	平成12年度町教委調査 住居跡1 土塚6 焼土9
B-16-28	熱田1遺跡	熱田229-1ほか	トコタン川右岸の砂丘(5~10m)	縄縄文(葦山式)	
B-16-29	熱田遺跡	浜松5171ほか	海岸段丘(90m)	後期	

登録番号	遺跡名	所在地	立地(標高)	時期	文獻・内容・備考
B-16-30	新宮地遺跡	東野7514小	海岸段丘(30m)	後期	昭和49年町文化財調査員が所在確認調査。三通(1984)
B-16-31	ナラマツカ遺跡	上八雲5214小	遊楽部川の河岸段丘(105m)	旧石器	採集資料(プレートコード)あり。三通(1984)
B-16-32	トコタン3遺跡	熱田6214小	海岸段丘(35m)	中期	
B-16-33	栄浜1遺跡	栄浜7214小	海岸段丘	前期～晩期、総縄文(恵山・後北式)	三通(1982・1983・1988) 三通・奈田(1986・1987) 奈田(1991b・1995) 前期未～中期にかけてなる大塚落(住居跡303軒他)、配石遺跡、平成19・13年度調査ではトリサキ式期の土堀、後北式の土堀墓など。
B-16-34	春日1遺跡	春日24-1	遊楽部川河岸段丘(14m)	後期・晩期	
B-16-35	上八雲4遺跡	上八雲502-4・6	遊楽部川河岸段丘(100m)	旧石器	
B-16-36	上八雲5遺跡	上八雲532・502	遊楽部川河岸段丘(60m)	旧石器	
B-16-37	上八雲6遺跡	上八雲29014小	独立丘(80m)	旧石器	採集資料(石核・プレート)あり。三通(1984)
B-16-38	山崎2遺跡	山崎154-114小	山崎川の河岸段丘(17～25m)	前期・中期、総縄文	
B-16-39	山崎3遺跡	山崎154-114小	山崎川左岸の河岸段丘(15～32m)	前期・中期	
B-16-40	黒岩1遺跡	黒岩275-114小	海岸段丘(38m)	中期	円筒下層・円筒上層式
B-16-41	黒岩2遺跡	黒岩257-114小	海岸段丘(40m)	中期	円筒上層式
B-16-42	八雲3遺跡	三杉町26	砂蔵部川の現状地(14m)	早期～前期	三通(1990)
B-16-43	浜松1遺跡	浜松254-114小	海岸段丘(20～40m)	晩期・縄文	
B-16-44	山越2遺跡	山越34914小	海岸段丘(20～30m)	前期～後期、総縄文(後北式)	平成11年度調査 住居跡10 土堀3014小 北照測報163。平成14年度八雲町教育委員会調査
B-16-45	山越3遺跡	山越402-114小	海岸段丘(32～34m)	前期～晩期	平成12年度調査 中期前半主体 住居跡3 土堀18 焼土312小
B-16-46	山越4遺跡	山越324-114小	海岸段丘(30～39m)	前期・中期、総縄文(後北式)	平成12年度調査 中期前半主体 住居跡4 土堀11 焼土41小 北照測報166
B-16-47	野田生1遺跡	野田生317-614小	海岸段丘(33～40m)	中期・後期	平成12・13年度調査 後期(総縄文)主体 住居跡35 土堀2814小 赤杉土器・石核・朱塗り器。北照測報183
B-16-48	野田生2遺跡	野田生355-114小	海岸段丘(34～39m)	中期・後期、総縄文	平成12・13年度調査 住居跡6 土堀2714小 北照測報167
B-16-49	野田生3遺跡	野田生394-114小	海岸段丘(25～37m)	中期	
B-16-50	野田生4遺跡	野田生27814小	海岸段丘(26～38m)	前期～晩期、総縄文	平成12年度調査 住居跡2 土堀13 焼土1 北照測報171
B-16-51	野田生5遺跡	野田生30014小	海岸段丘(30～35m)	総縄文(恵山・後北式)	平成12年度調査 土堀6 Tビット1 焼土8 北照測報164
B-16-52	松野2遺跡	松野41-14小	野田川河岸段丘(70～75m)	中期・晩期	タンネトウ式
B-16-53	松野3遺跡	松野2214小	野田川河岸段丘(70～75m)	中期・晩期	タンネトウ式
B-16-54	松野4遺跡	松野43014小	海岸段丘(15～18m)	総縄文(恵山式)	
B-16-55	栄浜2遺跡	栄浜2414小	海岸段丘(31m)	早期～後期 縄文	平成12・13年度町教育委員会調査 縄文焼失住居 住居跡7 土堀21
B-16-56	山越5遺跡	山越475・476	海岸段丘(14m)	前期～晩期	三通・奈田(1988) 三通(2002)
B-16-57	山越6遺跡	山越214・474・475	海岸段丘(14m)	前期・中期、総縄文	三通・奈田(1988) 恵山式、後北式
B-16-58	浜松5遺跡	浜松114-114小	海岸段丘(10～30m)	早・後・晩期、総縄文	三通・奈田(1995)
B-16-59	旭丘1遺跡	旭丘3-814小	海岸段丘(42～55m)	前期・中期	平成12年度八雲町教育委員会調査 住居跡3 土堀7

II 遺跡の位置と環境

登録番号	遺跡名	所在地	立地(標高)	時期	文献・内容・備考
B-16-60	山崎4遺跡	山崎158-114小	海岸段丘(25~45m)	早期~後期	平成10~12年度調査 中期主体 住居跡18 土壇88 北西側掘162
B-16-61	ギンシウリカ1遺跡	黒岩692-113小	海岸段丘(30m)	早期~前期	平成11・12年度調査 住居跡2 土壇4 焼土5 北西側掘155
B-16-62	山崎5遺跡	山崎116-114小	海岸段丘(35~45m)	早期~後期, 続縄文	平成11・12年度調査 北西側掘165
B-16-63	黒岩3遺跡	黒岩244	海岸段丘(45m)	早期~後期	平成12年度調査 住居跡3 焼土21ほか 北西側掘155
B-16-64	シウリカ2遺跡	黒岩289・290・586	海岸段丘(38~40m)	早期~中期, 続縄文	平成11年新規調査 住居跡2 土壇2 焼土跡13 集石1 前期後半のトス(舞臺跡?) (赤鬼川産) 北西側掘142
B-16-65	山崎10遺跡	山崎399-401	海岸段丘(40~50m)	早期~中期, 続縄文	平成12年新規登録
B-16-66	浜松7遺跡	浜松273-114小	海岸段丘(30~45m)	続縄文(想山式)	平成12年新規登録
B-16-67	浜松8遺跡	浜松280ほか	海岸段丘(50~60m)	続縄文(想山式)	平成12年新規登録
B-16-68	浜松9遺跡	浜松302ほか	海岸段丘(30~50m)	早期~中期, 続縄文	平成12年新規登録
B-16-69	山崎7遺跡	山崎47114小	海岸段丘(30~40m)	中期?	平成12年新規登録
B-16-70	山崎8遺跡	山崎43814小	海岸段丘(30~40m)	中期?	平成12年新規登録 石斧片
B-16-71	山崎9遺跡	山崎32514小	海岸段丘(20~45m)	中期	平成12年新規登録
B-16-72	野田生6遺跡	野田生43414小	海岸段丘(20~30m)	後期, 晩期 続文	平成12年新規登録
B-16-73	東野遺跡	東野25214小	海岸段丘(10~40m)	後期, 晩期, 晩期, 最縄文, 続文, 古世	平成12年新規登録 平成13・14年度八雲町教委調査 住居跡7 土壇19 小土壇42ほか
B-16-74	栄浜4遺跡	栄浜240・入沢41114小	海岸段丘(10~40m)	前期(?)	平成12年新規登録
B-16-75	栄浜4遺跡	栄浜260ほか河川敷	海岸段丘(25~50m)	前期(?)	平成12年新規登録 北海道式石冠, すり石, たたき石, ナイフ
B-16-76	黒岩4遺跡	黒岩350	海岸段丘(35~50m)	中期~晩期, 続縄文	平成13年度調査 住居跡2 土壇7 Tピット7 焼土141ほか 本報告
B-16-77	黒部1遺跡	入沢374	黒部山右岸段丘(26~38m)	早期~中期, 後期	平成14年度八雲町教委調査 住居跡3 土壇10 石組伊1 焼土14ほか
B-16-78	春日2遺跡	春日204-114小	砂礫部川右岸段丘(22m)	早期~中期, 後期	

III 調査の方法

1 発掘区の設定

発掘区の設定にあたっては、北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）森北工事区測量図（縮尺1000分の1）を使用した。落部1遺跡では工事予定中心線上の中心杭であるSTA.509とSTA.510を結ぶ線を基準のMラインとした。Mラインから平行に南西へ向かって4m毎にL、K…とし、同様に北東へ向かってN、O…とした。また、STA.509を通りそれと直交する線を10ラインとし、同様に4m毎に北西に向かって11、12、13…、南東に向かって9、8、7…とした。そして、これらの交差する地点に杭を打設した。

発掘区はこの4m方眼を基本としその南側（図左上）の交点のアルファベットと数字の組み合わせで呼ばれる（例：M-20、M-21など、）。また、平坦部では調査の必要に応じて4m方眼の発掘区を2m方眼に4分割し（小発掘区）遺物の取り上げを行った。小発掘区は杭のある側（南端）から時計回りにa、b、c、dを付し、「N-20-a、N-21-c」のように呼称した（図III-1）。

Mラインの真北はN-62°-Wである。

この方眼の平面直角座標は第X I系で以下のとおりである（旧測量法、日本測地系による）。

STA. 509	（調査区杭番号M-10）	X = -201981.068	Y = 14644.508
STA. 509+60	（調査区杭番号M-25）	X = -201952.483	Y = 14591.762
STA. 510	（調査区杭番号M-35）	X = -201933.425	Y = 14556.594

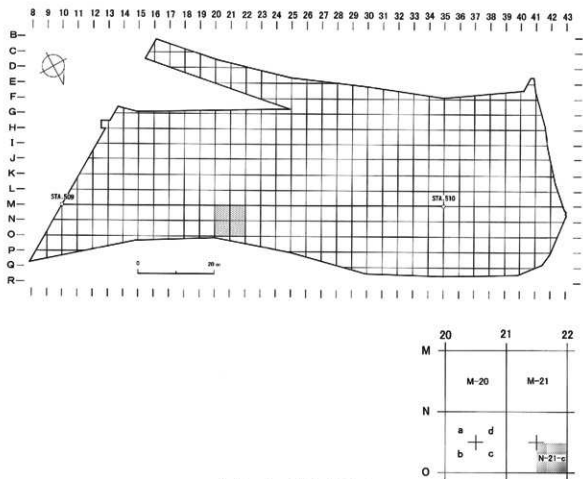
2 調査の方法

(1) 発掘調査の方法

発掘調査に先行し重機により表土・駒ヶ岳火山灰（Ko-d）を除去した。試掘調査時にKo-dが厚く堆積しており、また現況が山林で攪乱が及んでいないことから、包含層の残りは非常に良いことが指摘されていた。そのため、重機などによる抜根を行わず、多くの木根を残したままKo-dを除去した。火山灰除去の結果、一部に有姿分譲時の取り付け道路による攪乱が見られたが、包含層の残りは非常に良好であった。

火山灰および発掘時の排土を調査区外へ搬出できないため、調査区をA～C地区の大きく3ヶ所に分けて排土置き場を確保し、調査を行うこととした。また、本線から分離してトンネル入り口へ向かう側道を「管理用道路部分」とした（図III-2）。試掘調査の結果からA地区→B地区→C地区→管理用道路部分の順に遺物の散布状況が薄くなると推測されたため、現地での発掘もこの順に行うこととした。

いずれの地区でも、調査計画を立てるため、先ず当初発掘調査面積の12.5%程度の調査を行った。その結果、遺物や遺構の分布に濃淡が見られ、まったく遺物が出土しない部分もあった。この調査結果を基にA～C地区においては移植ゴテを用いてⅥ層まで掘り下げる区域、Ⅲ層は移植ゴテを用いてⅣ～Ⅵ層は主にスコップ・ジョレンを用いる区域、遺物の出土状況によりⅢ層途中からスコップ・ジョレンを用いる区域などに分け調査を実施した。管理用道路部分の内、先行調査で遺物が出土しなかった範囲については重機で包含層を除去し、遺構確認を主眼とした調査を行うこととした。しかし、黒



図Ⅲ-1 発掘区設定図

色土（Ⅲ層）中にごく少量の遺物が包含されている可能性があるため、除去した黒色土を脇に寄せて移植ゴテで遺物回収を行った。この部分の遺物は出土した位置により3分し、「管理用道路部分上・中・下」として取り上げた。

移植ゴテを用い調査した主たる遺物包含層については5cm毎に掘り下げ、1グリットを4分割した小発掘区単位で遺物を取り上げるとともに、その掘り下げ回数についても明記した（例：Ⅲ層2回目など）。また、掘り下げる毎に遺構の確認に努めた。遺構の遺物については全点の出土位置、標高、層位を計測して取り上げを行った。

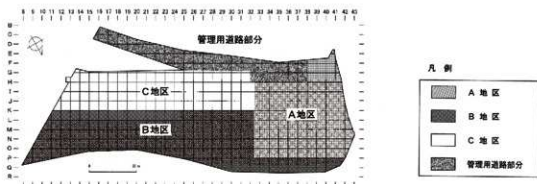
なお、旧石器確認調査のためトレンチを設定し、Ⅵ層から更に50cmほど掘り下げた部分がある。しかし、明確な旧石器時代の遺物は確認できなかった。

（2）整理の方法

現地では遺物取り上げ後、水洗し大まかな分類を行い遺物台帳・遺物カードを作成した。遺物の内、深さ5cm単位で取り上げたものについては掘り下げ回数を台帳・カードの備考欄に書き入れた。台帳整理が終わったものから順次注記作業を行った。土器片・定形の石器・遺構出土遺物については遺跡名の略号（「オト1」）、発掘区（遺構名）、遺物番号、出土層位を記した。

平成14年度からの室内整理作業では遺物台帳・カードの点検、台帳の補正、土器の接合・復元作業、剥片類・礫石器の接合作業、遺物の実測および作図、集計、記録類の整理を行った。

土器については分類の見直しを行い、接合作業を行った。接合・復元作業にあたっては同一個体の



図Ⅲ-2 発掘区の区分

破片を把握することに努めた。また、発掘区毎に口縁部破片を抽出し個体数を推定した。実測図では、断面は最も器形の特徴を表している部分を表現するために90°回転した位置で実測したもの、現存部分を実測し復元したものもある。破片資料は文様構成・器形の分かる口縁部・胴部破片を中心に拓影図を作成した。整理作業終了後の収納は報告書掲載のものとそれ以外のものに分けて行った。報告書掲載のものは図版に対応するように小分けして収納し、それ以外のは分類毎に遺構別もしくは包含層の場合は発掘区の単位別に分け収納した。なお、包含層の資料については口縁部・底部・胴部に分け収納し、その際同一個体と見られるものは一つにまとめた。

石器についても分類の見直しを行い、一部の剥片や礫石器については接合作業を行った。これと並行し完形品を中心に器種や分類に偏りの無いように選び出して実測し、この報告書掲載石器に限り最大長・最大幅・最大厚・重さについて計測した。出土した全ての黒曜石製の定形の石器・剥片については原産地同定の分析を行った(第Ⅵ章2参照)。整理終了後の収納は報告書掲載のものとそれ以外のものに分けて行った。報告書掲載のものは図版に対応するように1点づつ収納し、それ以外のは細分類した器種毎に分け、遺構別もしくは包含層の場合は発掘区の単位別に分け収納した。

3 基本層序

土層は八雲町教育委員会によるこれまでの調査(『栄浜』八雲町教委1983など。なお黒色土のⅢ層をさらに細分する例が多い)、および財団法人北海道埋蔵文化財センターによる長万部町・八雲町での調査(『八雲町シリカ2遺跡』北理調報142、『八雲町山崎5遺跡』北理調報165)に準じて6層に分層した(図Ⅲ-3)。ただし、遺跡により火山灰の堆積状況など、土層の状況が若干異なるため、周辺の遺跡との層位の統一はしていない。

- I 層：黒褐色土(10YR2/2) 表土。Ko-dが混じる。
- II 層：胸ヶ岳火山灰 Ko-d。
- III 層：黒色土(10YR1.7/1) しまりやや弱、粘性弱。乾燥するとクラックが入る。
- IV 層：黒褐色(10YR2/3) しまり、粘性ともやや強。所々に径10mm以下のボール状の褐色火山灰(Ko-g)が混じる。
- V 層：暗褐色土(10YR3/3) 漸移層。しまりやや強、粘性強。
- VI 層：にぶい黄褐色土(10YR4/3) ローム質土。しまり・粘性強。下位には風化度の弱いバミスがある。

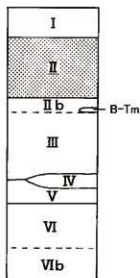
周辺の遺跡ではⅣ層とⅤ層の差異が不明瞭で分層しない場合もあるが、本遺跡では主に窪地において明瞭にKo-gが堆積している部分がみられたため、これを指標にⅣ層とⅤ層を分層した。

なお、Ⅲ層上面には主に長万部町などに分布する褐色風成層（長万部町教委1999）に類似する黒褐色土が部分的に確認された。この層の下位にはB-Tmが混じる部分がある。これを便宜的にⅡb層とし記載したが、遺物取り上げ時にはⅢ層として扱っており、ほぼⅢ層1回目がこれに該当する。

また、Ⅵ層より下位では濁川テフラ（Ng）が確認され、Ⅶ～Ⅻ層まで分層した部分もある。特にTピットの壁面ではフォルム・ユニットも見られるため、主に色調や粒子の粗さから4つに分け、本文中では便宜的にNg1～4の略号を用いている。この濁川テフラ等については、第Ⅵ章3を参照されたい。

遺物の本来的包含層はⅢ層上面（縄文時代）、Ⅲ層（縄文時代晩期・後期）、Ⅲ～Ⅳ層上面（縄文時代中期）である。調査区が斜面に位置しているため包含層が流出している部分やより厚く堆積している部分があり、それに伴い遺物も移動しているため、本来的包含層から出土しないものもあった。

（藤原）



図Ⅲ-3 基本層序

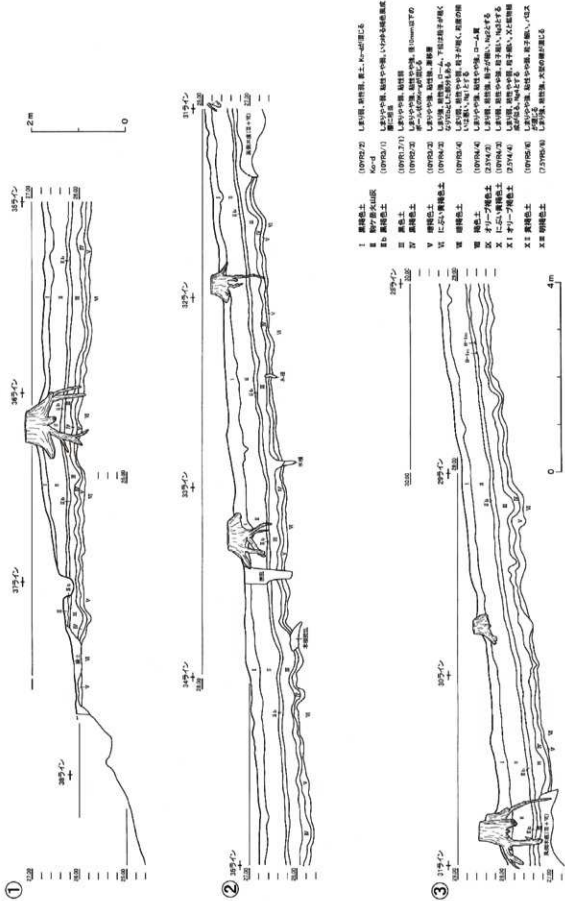
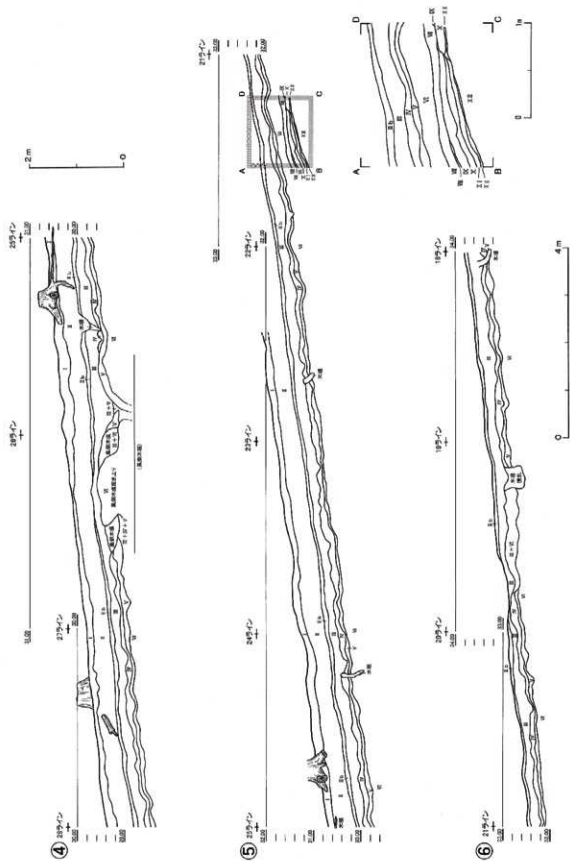
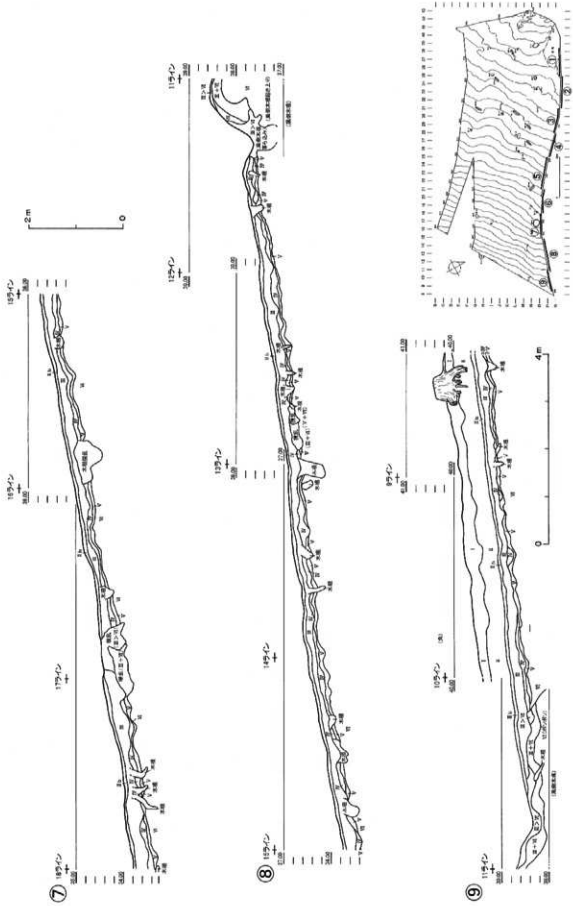


図 1-4 土層断面図(1)



図五-5 土層断面図(2)



図Ⅲ-6 土層断面図(3)

4 遺物の分類

(1) 土器の分類

土器は縄文時代早期に属するものをⅠ群とし、以下前期をⅡ群、中期をⅢ群、後期をⅣ群、晩期をⅤ群とした。続縄文時代のものはⅥ群、擦文時代のものはⅦ群である。

また、a・b類に2分したものはa類が前半、b類が後半を意味する。同様にa・b・c類に分類したものはa類が前葉、b類が中葉、c類が後葉を意味する。

なお、本遺跡ではⅠ・Ⅱ・Ⅶ群に相当する資料は出土していない。

〔Ⅰ群〕 縄文時代早期に属する土器群

本群はa、bの2群に分類され、さらに細分される。

a類：条痕文平底土器。アルトリ式に相当するもの。

b類：縄文、捺糸文、組紐圧痕文、貼付文等のある土器群

b-1類：東銅路Ⅱ式、東銅路Ⅲ式に相当するもの。

b-2類：コックロ式に相当するもの。

b-3類：中茶路式に相当するもの。

b-4類：東銅路Ⅳ式に相当するもの。

〔Ⅱ群〕 縄文時代前期に属する土器群

本群はa、bの2群に分類され、さらに細分される。

a類：縄文尖底土器群。

b類：円筒土器下層式に相当するもの。

〔Ⅲ群〕 縄文時代中期に属する土器群

本群はa、bの2群に分類され、さらに細分される。

a類：円筒土器上層式に相当する土器群。

a-1類：円筒土器上層b・c式に相当するもの。サイベ沢Ⅴ式に相当するもの。

a-2類：サイベ沢Ⅵ式に相当するもの。

a-3類：サイベ沢Ⅶ式、見晴町式に相当するもの。

b類：中期後半の土器群。

〔Ⅳ群〕 縄文時代後期に属する土器群

本群はa、b、cの3群に分類される。

a類：天祐寺式、涌元式、入江式、トリサキ式、大津式、白坂3式に相当するもの。

b類：ウサクマイC式、船泊上層式、手稲式、鯉調式に相当するもの。

c類：堂林式、三ツ谷式、湯の里3式に相当するもの。

〔Ⅴ群〕 縄文時代晩期に属する土器群

本群はa、b、cの3群に分類される。

a類：大洞B式、大洞B-C式に相当するもの。

b類：大洞C₁式、大洞C₂式に相当するもの。

c類：大洞A式、大洞A'式に相当するもの。

[VI群] 続縄文時代に属する土器群

本群はa、b、cの3群に分類される。

a類：恵山式以前に相当するもの。

b類：恵山式に相当するもの。

c類：後北式に相当するもの。

[VII群] 擦文時代に属する土器群

(2) 石器等の分類

石器の分類は平成13年度刊行の『八雲町山崎5遺跡』（北埋調報165集、2002）および『八雲町山越3遺跡・山越4遺跡』（北埋調報166集、2002）の分類を踏襲し剥片石器群、磨製石器群、礫石器群に大別した。更に従来当センターで行われている分類を参考にし、定形的石器群をⅠ～Ⅳ、Ⅵ～Ⅺ群に分け、石核・原石および定形的な石器としがたい加工痕或使用痕のある剥片をⅤ群、同様に加工痕或使用痕のある礫・礫片をⅫ群とした。いくつかの器種については細分類も行った。

なお、複数の器種が複合していると考えられるものは、形態をより多く残す分類もしくは下位の分類に含めている。分類記号を用いなかったものには土製品、石製品、焼成粘土塊がある。

剥片石器群

Ⅰ群 石鏃・石槍

(A類) 石鏃 形態を中心に5細分した。

- 1 石刃鏃
- 2 薄手で細身のもの
 - a 柳葉形のもの
 - b 五角形のもの
- 3 三角形のもの
- 4 木葉形のもの、菱形のもの
- 5 有茎のもの
- 9 破片（細分の困難な破片）・未成品など

(B類) 石槍または両面加工のナイフ 尖頭部を持つ木葉形・柳葉形のもの。形態から2細分した。

- 1 有茎のもの
- 2 無茎で菱形、木葉形のもの
- 9 破片（細分の困難な破片）・未成品など

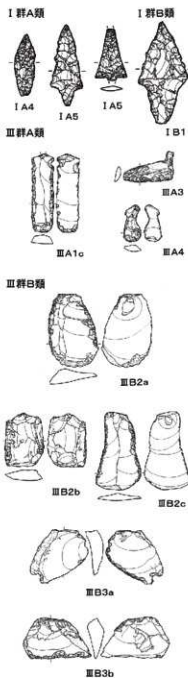
Ⅱ群 石錐 形態から3細分した。

- 1 剥片に刺突部を作り出したもの
- 2 棒状のもの
- 3 棒状のものにつまみ部を作り出したもの
- 9 破片（細分の困難な破片）・未成品など

Ⅲ群 ナイフ・スクレイパー類

(A類) つまみ付きナイフ 身部の加工状況から4細分した。

- 1 片面加工のもの
 - a 裏面の一側縁に表面調整の打面があるもの
 - b 片面のみ加工のもの
 - c 片面の周縁を加工したもの
- 2 両面加工のもの
- 3 横形のもの
- 4 素材の剥片の形状を大きく変えないもの
- 9 破片（細分の困難な破片）・未成品など



(B類) スクレイパー 連続する剥離によって刃部を作り出しているもの。形態から7細分した。

- 1 石筥と称されるもの、筥状石器 三角形・方形に近い台形状のもの。
 - a 片面加工のもの
 - b 両面加工のもの
- 2 縦長の剥片を用い、側縁を加工したもの
 - a 刃部が外湾するもの
 - b 刃部が直線的なもの
 - c 刃部が内湾するもの
- 3 横長の剥片を用い、側縁を加工したもの
刃部の形状からB2類と同じくa b c に細分した
- 4 ラウンドスクレイパー
- 5 エンドスクレイパー
- 6 先端部のあるもの
- 7 挟りこみのあるもの
- 8 素材の剥片の形状を大きく変えないもの
- 9 破片(細分の困難な破片)・未成品など

IV群 両面調整石器 両面が加工された石器のうち、上記分類に含めることができないもの。形態により3細分した。

- 1 円形・楕円形のもの
- 2 木葉形のもの
- 3 半円形で一方の側縁に平坦面をもつもの
- 9 破片(細分の困難な破片)・未成品など

V群 石核、フレイク・チップ類

(A類) 石核

- 1 石核
- 2 石器原石と考えられるもの

(B類) 加工痕・使用痕のある剥片

- 1 剥片に加工痕のみられるもの(Rフレイク)
- 2 剥片に使用痕のみられるもの(Uフレイク)
- 3 楔形石器(ピエス・エスキーユ)と称されるもの

(C類) フレイク・チップ

磨製石器群

VI群 石斧

(A類) 磨製石斧 製作技法から4細分した。

- 1 擦り切り技法により製作されたもの
- 2 打ち欠きにより整形されたもの
- 3 敲打(ベッキング)により整形されたもの

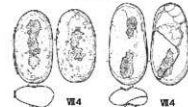
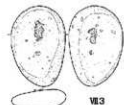
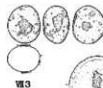
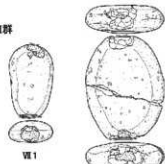
III群B類



VI群



VII群



III 調査の方法

- 4 磨きのみにより整形されたもの
 - 5 擦り切り残片
 - 6 研磨石材
 - 9 破片（細分の困難な破片）・未成品など
- (B類) 石のみ

礫石器群

Ⅵ群 たたき石 素材の形態および、たたき痕の位置から4細分した。

- 1 棒状礫・扁平礫の一端もしくは両端にたたき痕のあるもの
- 2 扁平礫の周縁にたたき痕のあるもの
- 3 扁平礫の腹背面にたたき痕のあるもの
- 4 くほみ石と称されるもの

9 破片（細分の困難な破片）・未成品など

Ⅶ群 すり石 素材の形態から5細分した。

- 1 断面三角形の礫の稜にすり面のあるもの
 - 2 扁平礫の側縁にすり面のあるもの
 - 3 半円状扁平打製石器と称されるもの
 - 4 北海道式石冠と称せられるもの
 - 5 円礫などの一部にすり面のあるもの
- 9 破片（細分の困難な破片）・未成品など

Ⅷ群 石鋸・砥石

(A類) 石鋸 素材の断面幅が狭く、擦痕のある機能部の断面形がU字、V字状となるもの。

- 1 石鋸
 - 9 破片（細分の困難な破片）・未成品など
- (B類) 砥石 機能部の形態から2細分した。
- 1 砥面に溝のあるもの
 - 2 砥面が平滑かやや凹状になるもの
 - 9 破片（細分の困難な破片）・未成品など

Ⅸ群 台石・石皿

Ⅹ群 石錘 打ち欠きの位置から3細分した。

- 1 四ヶ所に打ち欠きをもつもの
- 2 長軸両端に打ち欠きをもつもの
- 3 短軸両端に打ち欠きをもつもの

Ⅺ群 礫・礫片

- 1 加工痕・使用痕のある礫
- 2 礫・礫片

Ⅵ群2類



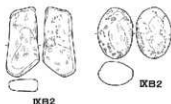
Ⅵ群3類



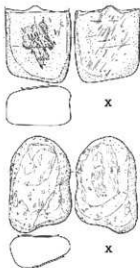
Ⅵ群4類



Ⅶ群



Ⅷ群



土製品



石製品



IV 遺構と遺構出土の遺物

遺構の概要

落部1遺跡の調査区からは住居跡2軒、土壇7基、Tピット7基、焼土14ヶ所、炭化物集中1ヶ所、集石4ヶ所の遺構が検出された。Tピットを除く遺構は、標高26m以下の傾斜下方部分に比較的まとまる傾向がある。その他の遺構は調査区全域に散在している(図IV-1)。また、遺構の多くは遺物が出土せず、時期不明のものもある。

住居跡のうち、H-1は周辺に遺物が少なく、覆土中から土器4個体が折り重なるように出土した。H-2は周辺の包含層からややまとまって遺物が出土したが、住居跡では覆土上位から土器片数点が出土したのみであった。いずれも小型の住居で、掘り込みは浅く、地床炉が中央からややずれて1ヶ所あり、明瞭な柱穴は確認できなかった。2軒とも中期前半の住居跡である。

土壇のうち、P-1は楕円形で掘り込みが深く、埋め戻しの土壇であった。壇口部に台石片が置かれており土壇墓の可能性がある。その他の土壇はいずれも浅く、壁面の立ち上がりも不明瞭なものが多いため、一部の土壇は人為的なものではない可能性がある。

Tピットはいずれも溝状のもので、長軸方向が傾斜の等高線に沿うものが多い。TP-1~3およびTP-4・5・7は列を作り、それぞれ3基で一単位となっている。

焼土は14ヶ所が検出されたが、周辺に遺物が全く無く、風倒木痕のくぼみから検出されたものもあり、人為的な焼土と推測できないものもある。

集石は小型の円礫がまとまるもの(S-1・2)と大型礫が散在するもの(S-3・4)がある。前者は焼成を受けた礫も多く、近接して焼土があることが特徴である。後者は近くに大きな風倒木痕があり、定型的な石器や焼成を受けた礫が無いこと、周辺から遺物がほとんど出土しないことから、古い風倒木痕により地山の礫が巻き上げられ移動してまとまったもので、人為的な集石である可能性は低いと思われる。

なお、M-41杭周辺に沢状地形が認められ、その両側の微高地を中心に台石・石皿などの大型の礫石器数点が出土した(図IV-20)。焼土(F-5)や被熱した礫を含む集石(S-2)もこの沢地形部分にあることから、台石・石皿を用いた作業場の空間と推測できる。

1 住居跡

H-1 (図IV-2~4、図版6・7・18、表IV-1・6~9)

位置 N-38-c・d、N-39-a・b

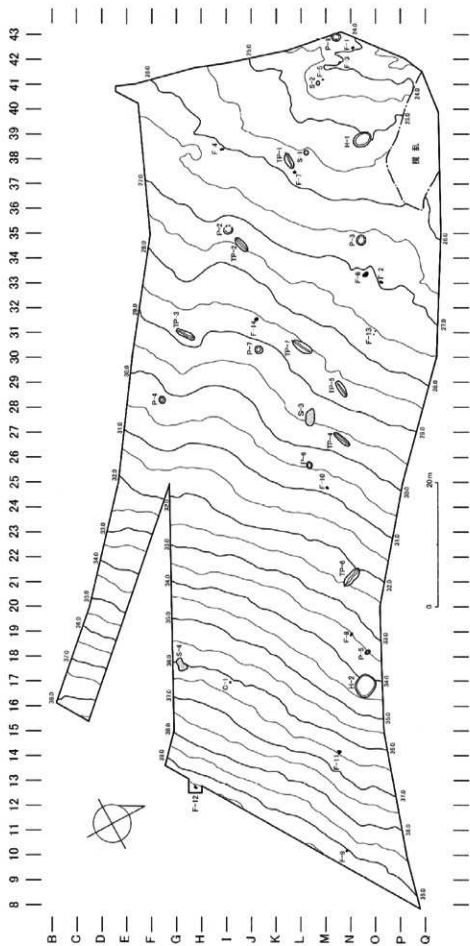
規模 293×248/218×164/38

平面形 楕円形

長軸方向 N-3°-E

確認調査 N-39区をVI層まで掘り下げた際に、土器集中とプランの一部を確認した。遺構の存在を想定してN-38区は当初からベルトを設定して掘り下げた。ベルトに沿ってトレンチを入れると平坦な床面となだらかに立ち上がる壁が確認でき、床面から焼土が検出されたため住居跡とした。断面観察によると、Ⅲ層上面から10cmほど下位が掘り込み面である。

壁・床 壁はなだらかに立ち上がり、一部の壁は不明瞭であった。壁際の覆土にはK o-gが混じる



図IV—1 最終面の地形と遺構位置図

ことから、壁が崩落したためと考えられる。床面は平坦である。

炉 地床炉が床面中央部よりややずれた位置で確認された。確認面は床面より若干レベルが高い。
覆土 全部で7層に分層した。遺物の取り上げもこれに準じて行った。壁際には崩落したKo-gが混じっている(6層)。

柱穴 柱穴は竪穴内に3基(HP-2~4)が確認された。この内、HP-2は支柱穴の可能性はある。他に、浅い土壌1基(HP-1)が検出された。竪穴外からも小土壌6基(HP-5~10)が検出されたが浅く、規則的な配置をとらないため、住居跡に伴う可能性は低いと推測される。

遺物 覆土2層から土器6点、3層から土器4点、3層下位・7層から土器110点、半円状扁平打製石器1点、6層から土器188点、スクレイパー1点の合計310点が出土した。住居跡の斜面上方側からは土器1個体と半円状扁平打製石器が出土した。斜面下方のN-39区側からは土器3個体が折り重なるように出土した。いずれも床面から数cmほど高いレベルからの検出であるが、周辺に遺物がほとんど見られないことから、この住居に伴うものと考えられる。

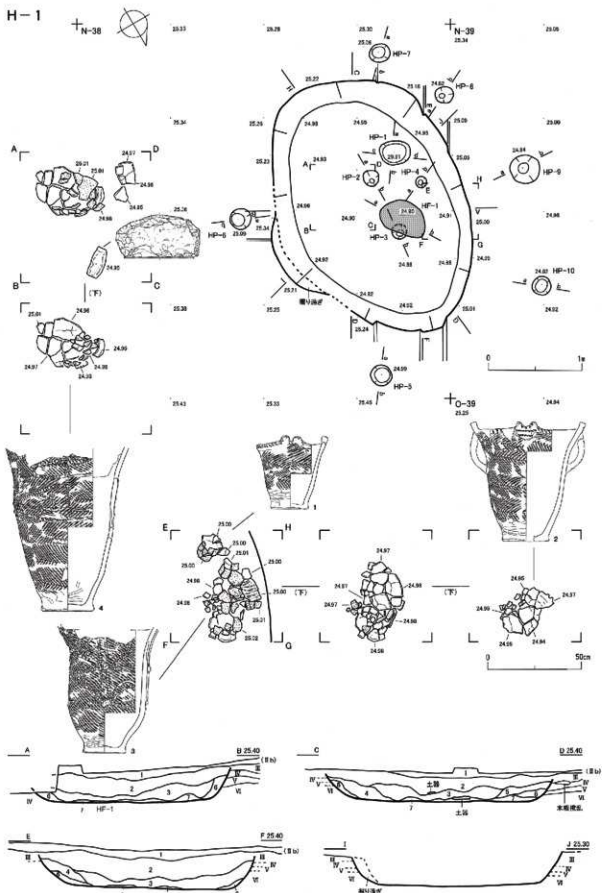
1~3は壁際の覆土6層から折り重なるようにまとめて出土し復元できた土器(図IV-2)。1・2は地文の結束第1種羽状縄文のみが施文されたもの。1の口唇部には棒状工具による刻みがある。2は2種2対の突起で、橋状把手のあるもの。口唇部にはLRの捻紐の押捺がある。いずれも内面は丁寧に磨かれており平滑である。3はRL斜行縄文施文後に2本1組の貼付文が胴部下半まで施されたもの。突起部は欠失する。4は地床炉近くでまとめて出土したもので口縁部は欠失している(図IV-2)。地文の結束第1種羽状縄文上に直線および弧状の貼付文が胴部上半に施文されている。いずれも貼付文上には捻糸が押捺されている。

5~7、9・10は覆土2層、8は覆土3層出土で、全てこの住居廃絶後に流れ込んだものと考えられる。5・6は口縁部近くに地文の縄文のみが施文されたもので、口縁部の断面形は丸みを帯びている。5は口唇部に地文と同じ原体が回転施文されている。7・8は斜行縄文が施文された胴部破片で内面はいずれも丁寧に調整されており、平滑である。9・10はいずれも0段多条RLの原体による縄文が施文されたもので、9は縦走気味、10は横走気味である。1~4はⅢ群a-3類の古手、5~8はⅢ群a-3類、9・10はⅢ群b類土器である。

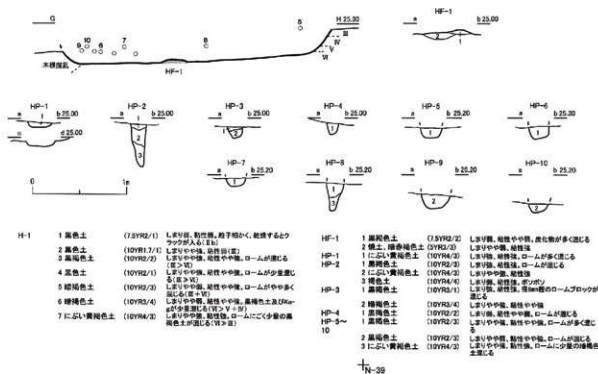
11は横長剥片を用い、刃部が直線状となるスクレイパー(ⅢB3b)。覆土6層出土で石材は玄武岩?である。12は4の土器に隣接して覆土7層から出土した半円状扁平打製石器(Ⅳ3)。腹背両面に踵面を残し、周囲を打ち欠いて整形したもので、幅1cmほどの平坦なすり面があるもの。一部にタール状の物質が付着している。石材は安山岩である。

時期 覆土出土の遺物はこの住居跡に伴うものと考えられることから、縄文時代中期前半のⅢ群a-3類、サイベ沢Ⅳ式の古手に相当する時期の遺構である。

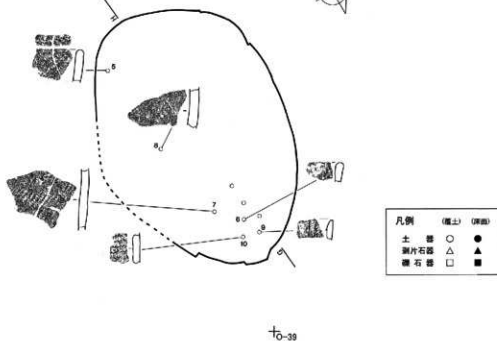
なお、床面の地床炉から採取した炭化物では4460±40yBP(試料名YOT-1)、覆土出土の復元土器3に付着した炭化物では4360±60yBP(試料名YOT-4)の補正放射性炭素年代が出ており(第Ⅵ章1参照)若干の年代差がある。



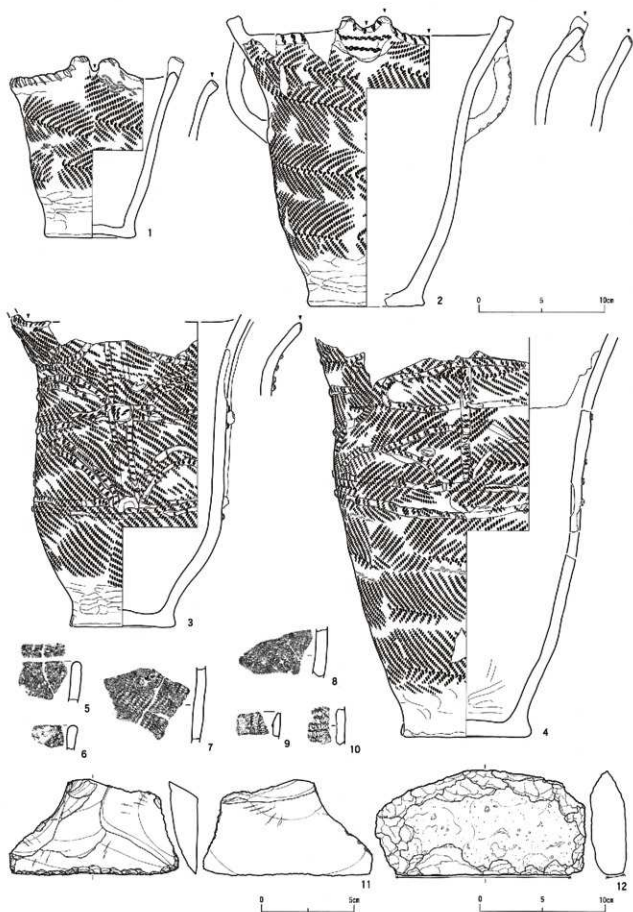
図M-2 H-1(1)



H-1 遺物出土状況



図IV-3 H-1(2)と遺物出土状況



図IV-4 H-1出土の遺物

H-2 (図IV-5~7、図版8・9・19、表IV-1・7・8)

位置 N-16、N-17-a・b

規模 351×328/302×268/55

平面形 不整形円形

長軸方向 N-24° -W

確認調査 VI層上面で楕円形の黒色土の落ち込みを確認した。ベルトを設定し、トレンチを掘り下げると斜面上方に壁の立ち上がり確認できた。また、床面相当層から焼土が検出されたため住居跡とした。

壁・床 壁・床面ともに木根攪乱の影響を受けており、不明瞭な部分が多い。特に北西側の壁は判然としなかった。床面は若干傾斜している。

炉 地床炉が床面中央部よりややずれた位置で確認できた。床面から数cmほど上位が確認面である。

覆土 全部で9層に分層した。遺物の取り上げもこれに準じて行った。2次堆積のKo-gが混じる層がある(2・5層)。

柱穴 柱穴は竪穴内に3基が確認された。この内、HP-3は住居に伴う柱穴であるが、HP-1・2は木根攪乱の可能性がある。

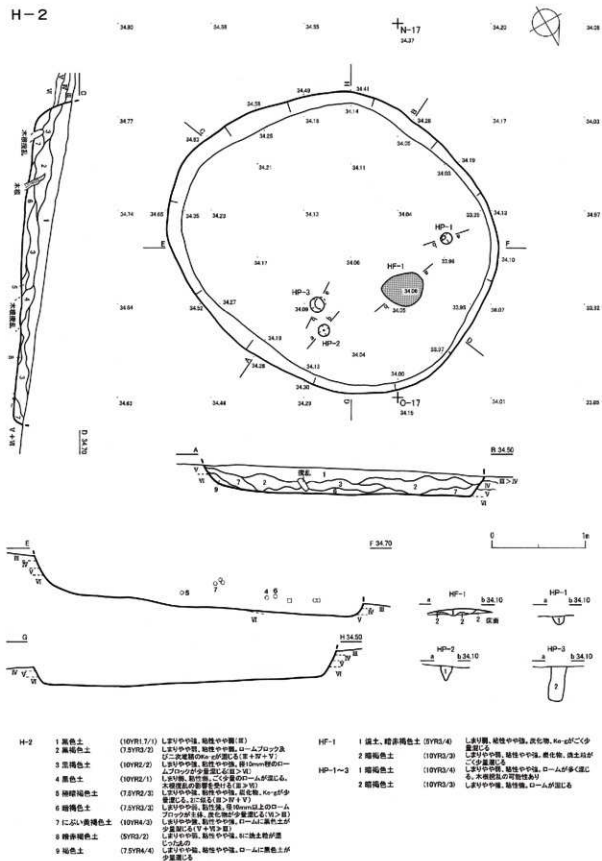
遺物 住居跡周辺の包含層は比較的遺物が多い区域であるが、覆土中の遺物の出土は少ない。覆土1層から土器7点、被熱した台石片?1点、覆土7層から土器1点の合計9点が出土した。

1は覆土1層出土の土器片1点とL-19・20区、M-19区、N-16区の破片が接合し復元できたもの。なお、底部と胴部は接合せず推定復元した。RLの地文施文後に2本1組の貼付文が施されている。平縁で、口縁部断面形は切り出しナイフ形に近く、口唇部直下には太い貼付文が巡っている。口唇部とこの貼付文上にはLの原体による2本1組の細い撚紐が押捺されている。2は覆土1層出土の土器片1点とN-17・18区、O-17・18区出土の破片が接合したもの。3はN-17-c区出土の口縁部で2と同一個体である。口縁部断面形は四角形に近く、地文のRL斜行縄文上に2本1組の沈線文が施文されている。突起部下で沈線文の交わる部分には刻みのある粘土塊の貼付もある。4は口縁部近くに沈線文が施文されており、口縁部断面形が尖り気味のもの。口唇部には地文と同一原体の縄文が回転施文されている。5は覆土7層出土の無文の突起部で、口唇部に先端の尖った棒状工具もしくはヘラ状工具による刻みのあるもの。6・7は斜行縄文の施文された胴部。いずれも内面は丁寧に磨かれ平滑である。

1はⅢ群a-3類の古手、2~7はⅢ群a-3類である。

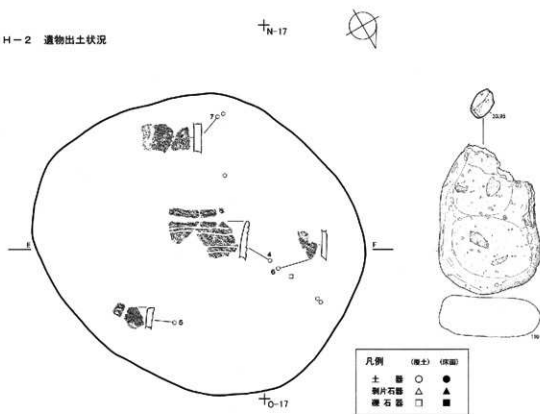
時期 覆土出土および周辺の遺物から縄文時代中期前半、Ⅲ群a-3類に相当する円筒土器上層式に相当する時期の遺構である。

H-2

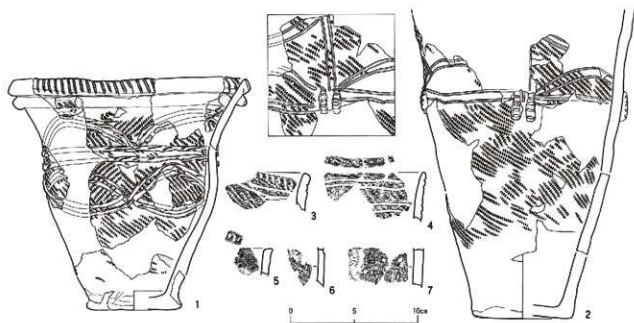


図H-5 H-2

H-2 遺物出土状況



図IV-6 H-2 遺物出土状況



図IV-7 H-2 出土の遺物

2 土壌

P-1 (図IV-8、図版9・19、表IV-2・6・8・9)

位置 M-42-c・d 規模 132×112/105×86/54

平面形 楕円形 長軸方向 N-34°-E

確認調査 III層下位からIV層上面において円形の黒色土の落ち込みを確認した。近くに木の切り株があり、また町道建設時の盛り土が認められ、当初は平面プランが判然としなかった。半截すると垂直気味に立ち上がる壁と平坦な壙底面が確認できた。土壌は、遺物がまとまって出土した沢地形部分に面する微高地に位置する。埋土や遺物の出土状況から土壌墓の可能性はある。

覆土 全部で8層に分層した。ロームが混じる埋め土である。

遺物 覆土1層から土器3点・石皿1点、覆土2層から土器2点、覆土3層から土器1点、覆土6層から土器1点の合計8点が出土した。石皿は壙口部から検出された(図IV-8)。

1-3は同一個体で、1・3は埋土出土のもの、2は近接した包含層から出土したのもの。頸部がくびれ口縁部が大きく外側に開く器形で、横走気味の縄文が施文されている。胎土には小砂利が多く入っている。4は斜行縄文が施文された胴部で、胎土・焼成などは1-3に類似する。いずれもIII群b類土器である。

5は壙口部から検出された石皿(X)。土壌を埋めた後に落ち込んだくぼみに堆積した覆土1層(=III層)出土である。腹背両面にやや窪んだすり面があるもので、全体の半分ほどを欠損する。周辺から接合する破片が出土しないことや、出土状況から、意図的に折られた可能性がある。石材は安山岩である。

時期 覆土出土の遺物から縄文時代中期後半、III群b類椀林式に相当する時期の遺構と推測される。

P-2 (図IV-8、図版10、表IV-2)

位置 H-35-b、I-35-a 規模 131×115/—×—/26

平面形 楕円形? 長軸方向 N-11°-E

確認調査 VI層上面において楕円形の黒色土の落ち込みを確認した。抜根で全体の半分ほどは攪乱されている。浅い皿状の土壌で、壙底面には凹凸がある。性格不明の土壌である。

覆土 全部で6層に分層した。III層が主体となる自然堆積である。

遺物 出土しなかった。

時期 周辺の遺物から縄文時代中期前半、円筒土器上層式に相当する時期の遺構である。

P-3 (図IV-9、図版10、表IV-2)

位置 N-34-c・d 規模 144×120/130×(107)/29

平面形 楕円形? 長軸方向 N-31°-W

確認調査 VI層上面において楕円形の黒色土の落ち込みを確認した。攪乱が多いが、壁が明瞭に立ち上がる部分があったので土壌とした。壙底面は凹凸があり、木根攪乱の可能性もある。

覆土 全部で5層に分層した。III層が主体となる自然堆積である。

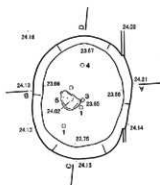
遺物 出土しなかった。

時期 周辺からも遺物が出土せず不明である。

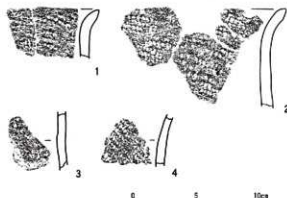
P-1

* (M-42-c)

+ M-43



* (M-42-c)



B 24.30



D 24.30

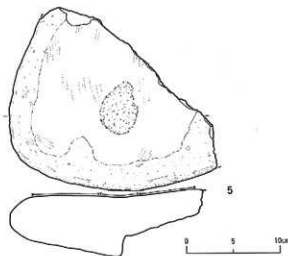
凡例 (硬土)

- 土 器 ○
- 削片石器 △
- 礫石 器 □

+ M-43

P-1

- | | |
|--------------------|---------------------------------|
| 1 黒色土 (7.8YR1.7/1) | しまりや中層、粘性や中強(良) |
| 2 暗褐色土 (10YR2/2) | しまりや中層、粘性強、ロームが混入(良>V) |
| 3 黒褐色土 (10YR2/3) | しまり強、粘性強、しまり少な(ロームが混入)(良>V) |
| 4 黒褐色土 (10YR2/2) | しまりや中層、粘性や中強(V+V) |
| 5 黒褐色土 (10YR2/2) | しまりや中層、粘性や中強、ロームが混入(V+V) |
| 6 黒褐色土 (10YR2/3) | しまりや中層、粘性や中強、ロームが混入(V+V) |
| 7 暗褐色土 (10YR2/4) | しまりや中層、粘性や中強、未炭化のハエスが多(混入)(良>V) |
| 8 反黄褐色土 (10YR4/2) | しまりや中層、粘性や中強、未炭化のハエス(V良) |

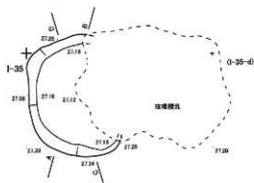


P-2

27.25

27.09

27.05



B 27.40



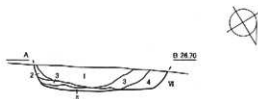
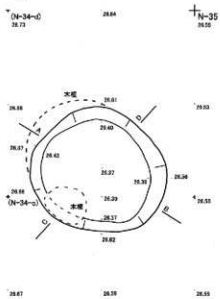
D 27.40

P-2

- | | |
|------------------|---------------------------|
| 1 黒色土 (10YR2/1) | しまり強、粘性強、粘性強、ロームがごく少量混入 |
| 2 黒褐色土 (10YR2/2) | しまりや中層、粘性や中強 |
| 3 暗褐色土 (10YR2/4) | しまりや中層、粘性や中強、ロームに黒色土が少し混入 |
| 4 褐色土 (10YR4/4) | しまりや中層、粘性や中強、反黄よりしまりや中層 |
| 5 暗褐色土 (10YR2/4) | しまり強、粘性や中強、混入ローム |
| 6 褐色土 (10YR4/4) | しまり強、粘性強、反黄よりしまりや中層 |

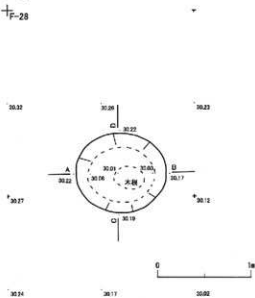
図IV-8 P-1とP-1出土の遺物、P-2

P-3



- P-3
- | | | |
|-----------|-----------|----------------------------------|
| 1 黒色土 | (10YR2/1) | しまり肌、黏性弱、ごく少量の炭化物が混じる(注) |
| 2 にみり質褐色土 | (10YR4/2) | しまり肌、黏性強、ロームにごく少量の黒色土が混じる(注>注) |
| 3 黒褐色土 | (10YR2/2) | しまり肌、黏性やや強、ロームが多く混じる(注>注) |
| 4 暗褐色土 | (10YR2/3) | しまり肌、黏性やや強、暗褐色土にロームブロックが混じる(注>注) |
| 5 暗褐色土 | (10YR2/4) | しまり肌、黏性強、ロームに暗褐色土が少量混じる(注>注) |

P-4



- P-4
- | | | |
|--------|-----------|---------------------------------------|
| 1 黒褐色土 | (10YR2/2) | しまり肌、黏性強、ロームブロックが多く混じる(注>注) |
| 2 褐色土 | (10YR2/1) | しまりやや強、黏性やや強、少量のロームが混じる(注>注) |
| 3 黒色土 | (10YR2/1) | しまり強、黏性やや強、ロームが混じる、土が木根の腐敗を受けたもの(注>注) |
| 4 黒褐色土 | (10YR2/2) | しまり強、黏性やや強、汚れたローム(注>注) |
| 5 暗褐色土 | (10YR3/4) | しまり強、黏性やや強、汚れたローム、4よりも褐色土含量が少ない(注>注) |
| 6 暗褐色土 | (10YR3/4) | しまり強、黏性やや強、汚/汚(注>注) |

図M-9 P-3・4

P-4 (図IV-9、図版10、表IV-2)

位置 F-28-a・b 規模 97×72/86×59/23

平面形 円形 長軸方向 一

確認調査 VI層上面において円形の黒色土の落ち込みを確認した。木根による攪乱が見られたが、一部になだらかな立ち上がりが確認できたので土壌とした。性格不明の土壌である。

覆土 全部で6層に分層した。III層が主体となる自然堆積である。

遺物 出土しなかった。

時期 周辺からも遺物が出土せず不明である。

P-5 (図IV-10、図版10・19、表IV-2・6・7)

位置 N-18-b 規模 66×56/46×39/25

平面形 楕円形 長軸方向 N-16°-E

確認調査 VI層上面において楕円形の黒色土の落ち込みを確認した。半載したところ垂直気味に立ち上がる壁が確認できたので遺構とした。H-2に近接し、関連する遺構と推測される。

覆土 全部で5層に分層した。III層が主体となる自然堆積である。

遺物 覆土1層から土器4点が出土した。1はP-5出土土器2点と隣接したN-17・18区でまとまって出土した土器片56点が接合し、復元できたもの。口縁部断面形は四角形に近く、地文の結束第1種羽状縄文のみが施文されている。突起部には孔があり、また貼付文が剥離した痕跡がある。III群a-3類土器である。

時期 覆土中出土の遺物から縄文時代中期前半、III群a-3類、サイベ沢VII式に相当する時期の遺構である。

P-6 (図IV-11、図版10、表IV-2)

位置 L-25-d 規模 91×73/75×54/26

平面形 卵形 長軸方向 N-79°-W

確認調査 VI層上面において楕円形の黒色土の落ち込みを確認した。半載したところ、斜面下方に明瞭な立ち上がりが確認できたので遺構とした。木根攪乱が多く、壁が不明瞭な部分もあった。性格不明の土壌である。

覆土 全部で5層に分層した。III層が主体となる自然堆積で、木根攪乱の影響を受けている。

遺物 出土しなかった。

時期 周辺からも遺物が出土せず不明である。

P-7 (図IV-11、図版10・19、表IV-2・6・8)

位置 J-30-a 規模 108×73/107×81/36

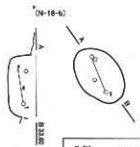
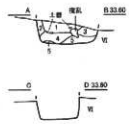
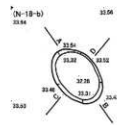
平面形 円形 長軸方向 一

確認調査 VI層上面において円形の黒色土の落ち込みを確認した。半載したところ、明瞭な立ち上がりが確認できたので遺構とした。性格不明の土壌である。

覆土 全部で7層に分層した。III層が主体となる自然堆積である。

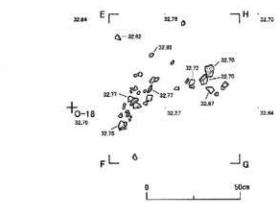
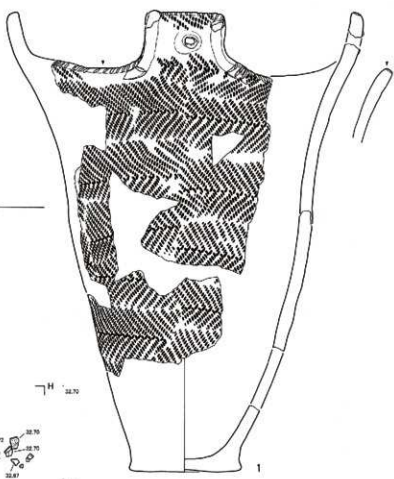
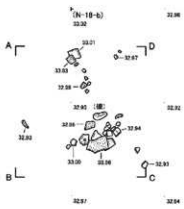
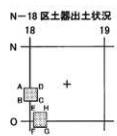
遺物 覆土1・2層から土器5点、覆土3層から焼成を受けた礫1点、覆土4層から土器3点の合計9点が出土した。1は覆土4層出土のRL斜行縄文が施文された胴部破片。2は覆土2層出土の無

P-5



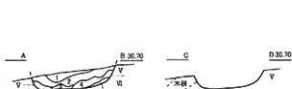
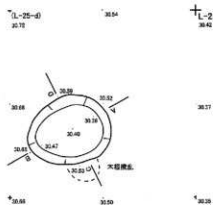
- P-5
- 1 黒色土 (10YR1/2) しじりや中粒、粘りや中粒、ごく少量のロームが含まれる(※>V)
 - 2 暗褐色土 (10YR3/4) しじり、粘りや中粒、ロームに暗褐色土が混じる(※>B)
 - 3 暗褐色土 (10YR2/2) しじり、粘りや中粒、僅少な量のロームが混じる(※>B)
 - 4 黒褐色土 (10YR2/2) しじりや中粒、粘りや中粒、※に似るが、しじりが少ない(※>B)
 - 5 暗褐色土 (10YR3/3) しじりや中粒、粘りや中粒、僅(※B)のロームに暗褐色土が少量混じる(※>V)

凡例 (遺土)	
土 器	○
銅片石器	△
糖石器	□



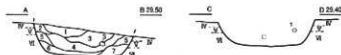
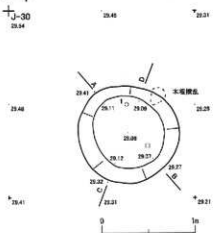
図N-10 P-5とP-5出土の遺物

P-6

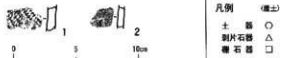


- P-6
- | | | |
|--------|-------------|--|
| 1 黒色土 | (10YR2/1) | しまり肌、粘性弱、ごく少量のロームが混じる(湿>干) |
| 2 黒色土 | (10YR1.5/1) | しまり肌、粘性やや強、ロームが混じる(湿>干) |
| 3 黒褐色土 | (10YR2/2) | しまりやや強、粘性やや強、ロームブロックが少量混じり、木器痕の影を打つ(湿>干) |
| 4 黒褐色土 | (10YR2/3) | しまり弱、粘性やや強、ロームブロックが多く混じる(湿>干) |
| 5 暗褐色土 | (10YR3/4) | しまりやや弱、粘性強、汚れたローム(V+VI) |

P-7



- P-7
- | | | |
|-----------|-------------|--------------------------------|
| 1 黒色土 | (10YR2/1) | しまり弱、粘性やや強、ごく少量のロームが混じる(湿>干) |
| 2 暗褐色土 | (10YR3/2) | しまり弱、粘性やや強、ロームが混じる(湿>干) |
| 3 黒色土 | (10YR1.5/1) | しまりやや強、粘性やや強(湿) |
| 4 黒褐色土 | (10YR2/1) | しまり弱、粘性やや強、少量のロームが混じる(湿>干) |
| 5 暗褐色土 | (10YR3/3) | しまりやや強、粘性やや強、ロームが多く混じる(干) |
| 6 暗褐色土 | (10YR3/4) | しまりやや強、粘性やや強、ロームに暗褐色土が混じる(湿>干) |
| 7 にぶい黄褐色土 | (10YR4/2) | しまりやや強、粘性やや強、汚れたローム(VI) |



図IV-11 P-6、P-7とP-7出土の遺物

文で薄手の胴部破片。いずれもⅢ群 a-3 類である。

時期 覆土出土の遺物から縄文時代中期前半、Ⅲ群 a-3 類に相当する時期の遺構である。

3 Tピット

TP-1 (図IV-12、図版11、表IV-3・6)

位置 K-37-c・d、K-38-a・b 規模 263×114/281×26/152

平面形 溝状 長軸方向 N-85°-W

確認調査 VI層上面において溝状の黒色土の落ち込みを確認した。濁川テフラを掘り抜き、大型礫が包含されるⅫ層まで掘り込んでいる。壙底面は長軸両方向でオーバーハングしている。

覆土 全部で28層に分層した。上位はⅢ層、中位はVI層、下位は濁川テフラが主体となっている。

遺物 覆土16層から礫1点が出土した。

時期 不明である。

TP-2 (図IV-13、図版12・20、表IV-3・6・9)

位置 I-34-b~d 規模 265×95/268×25/149

平面形 溝状 長軸方向 N-71°-E

確認調査 VI層上面において溝状の黒色土の落ち込みを確認した。濁川テフラを掘り抜き、Ⅻ層まで掘り込んでいるが、大型礫は見られない。壁の一部は木根による擾乱を受けており、壙底面は長軸両方向でオーバーハングしている。

覆土 全部で16層に分層した。上位はⅢ層、中位はVI層、下位はVI層と濁川テフラが主体となっている。

遺物 覆土1層から台石1点、礫1点が出土した。1は覆土1層出土の台石(X)で、浅いたつき痕があるもの。石材は安山岩である。

時期 不明である。

TP-3 (図IV-14、図版12、表IV-3・6)

位置 G-30-c・d、G-31-a 規模 315×82/288×24/125

平面形 溝状 長軸方向 N-51°-E

確認調査 VI層上面まで遺構確認のため重機で掘り下げた際に溝状の黒色土の落ち込みを確認した。濁川テフラを掘り抜き、大型礫が包含されるⅫ層まで掘り込んでいる。壙底面は長軸方向の斜面上位側でわずかにオーバーハングしている。

覆土 全部で14層に分層した。上位はⅢ・Ⅳ層、下位はⅢ・Ⅵ層が主体となっている。

遺物 覆土2層から土器・礫各1点が出土した。土器は小破片であり、器表面の摩滅が著しいため掲載できなかった。

時期 不明である。

TP-4 (図IV-15、図版13、表IV-3・6)

位置 M-26-c・d 規模 301×73/274×21/109

平面形 溝状 長軸方向 N-61°-E

確認調査 VI層上面において溝状の黒色土の落ち込みを確認した。濁川テフラを掘り抜き、大型礫が包含されるⅫ層まで掘り込んでいる。大型礫は斜面下位の西側に偏っており、その部分の掘り下げは浅い。壙底面は長軸方向の斜面上位でわずかにオーバーハングしている。

覆土 全部で13層に分層した。上位はⅢ層、中位はⅥ層、下位はⅢ・Ⅵ層と濁川テフラが主体となっている。

遺物 覆土1層から礫1点が出土した。

時期 不明である。

TP-5 (図Ⅳ-16、図版13、表Ⅳ-3)

位置 M-28-b~d、M-29-a・b **規模** 284×103/256×20/142

平面形 溝状 **長軸方向** N-84°-E

確認調査 V層上面において溝状の黒色土の落ち込みを確認した。濁川テフラを掘り抜き、大型礫が包含されるⅫ層まで掘り込んでいる。今回検出されたTピットの中で、横底幅は最も狭い。Ⅻ層に大型礫が多く含まれていたためと推測される。

覆土 全部で18層に分層した。上位はⅢ層、中位はⅥ層、下位は濁川テフラが主体となっている。

遺物 出土しなかった。

時期 不明である。

TP-6 (図Ⅳ-17、図版14・20、表Ⅳ-3・6・8・9)

位置 M-20-c、M-21-b、N-20-d、N-21-a **規模** 336×133/362×30/163

平面形 溝状 **長軸方向** N-21°-W

確認調査 V層上面において溝状の黒色土の落ち込みを確認した。濁川テフラを掘り抜き、大型礫が包含されるⅫ層まで掘り込んでいる。近接して木根があり、平面プランはこの攪乱の影響を受けている。横底面は傾斜に沿って傾いており、長軸両方向でオーバーハングしている。

覆土 全部で16層に分層した。上位はⅢ層、中位はⅥ層、下位は濁川テフラが主体となっている。

遺物 覆土1層から小破片となった土器片53点、2層から礫1点、4層から半円状扁平打製石器1点、5層から台石1点の合計56点が出土した。

1・2は同一個体でL R斜行縄文と綾絡文が施文されたもの。厚手で胎土には砂が多く入っている。3はR L斜行縄文が施文された胴部破片。1・2はⅢ群a-3類の古手、3はⅢ群a-3類である。

4は覆土4層から出土した半円状扁平打製石器(Ⅷ3)。背面に礫面を残し、腹面の全面を打ち欠いたもの。平坦なすり面はなく、一部に炭化物が付着している。5は覆土5層から出土した台石(X)。扁平礫を用い、敲打による窪みが数ヶ所ある。石材は4が安山岩、5が凝灰岩である。

時期 不明である。

TP-7 (図Ⅳ-18、図版14、表Ⅳ-3)

位置 K-30-b・c、L-30-a・d **規模** 338×135/315×32/120

平面形 溝状 **長軸方向** N-61°-E

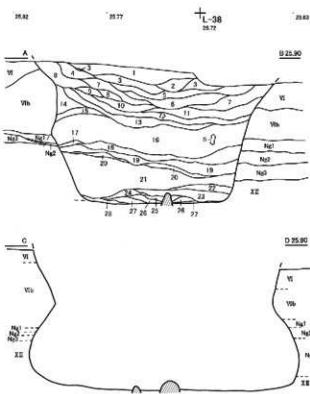
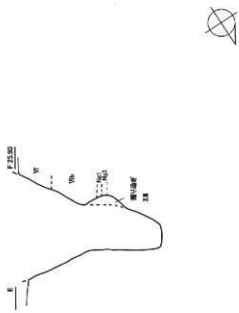
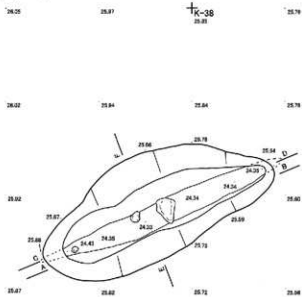
確認調査 V層上面において溝状の黒色土の落ち込みを確認した。濁川テフラを掘り抜き、大型礫が包含されるⅫ層まで掘り込んでいる。横底面は長軸両方向でオーバーハングしている。濁川テフラは凍上現象等により、層序が乱れている。

覆土 全部で14層に分層した。上位はⅢ層、中位はⅥ層、下位はⅢ層・濁川テフラが主体となっている。

遺物 出土しなかった。

時期 不明である。

TP-1

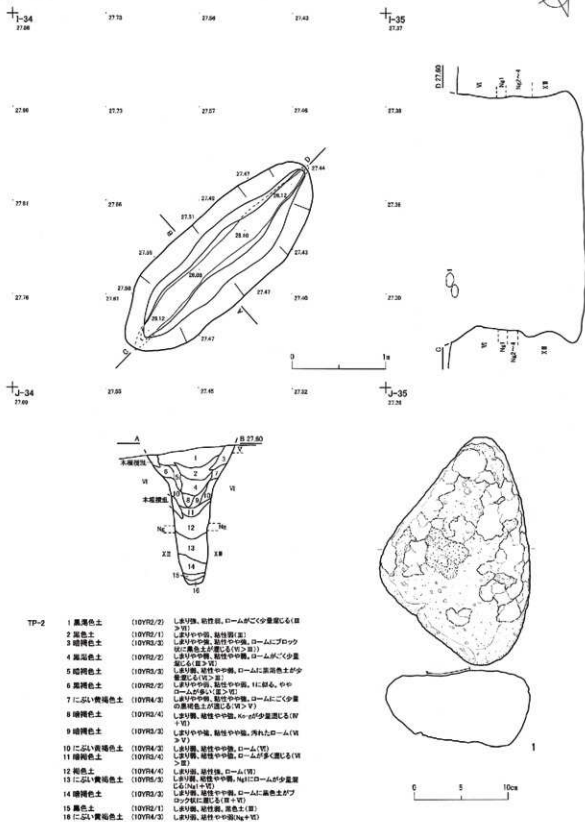


TP-1

- 1 黒色土 (10YR/1.7/1) しまり肌、粘性や中質(黒)
- 2 黒色土 (10YR2/1) しまり肌、粘性や中質、ごく少量のロームと骨片が混入(黒>黄)
- 3 暗褐色土 (10YR3/4) しまり肌、粘性強、ロームに<少量の暗褐色土が混入(黒>黄)
- 4 黄褐色土 (10YR2/2) しまり肌、粘性強、しまりしまり肌(黒)
- 5 黄褐色土 (10YR2/2) しまりや中質、粘性や中質、少量のロームが混入(黒>黄)
- 6 黄褐色土 (10YR3/1) しまりや中質、粘性や中質、ローム、炭化物が混入(黒>黄)
- 7 黄褐色土 (10YR3/2) しまりや中質、粘性や中質、少量のロームと炭化物が混入(黒>黄)
- 8 暗褐色土 (10YR3/2) しまりや中質、粘性や中質、ロームと暗褐色土が混入(黒>黄)
- 9 黄褐色土 (10YR2/2) しまり肌、粘性や中質、ロームが混入(黒>黄)
- 10 黄褐色土 (10YR3/2) しまり肌、粘性や中質、ロームが混入(黒>黄)
- 11 暗褐色土 (10YR3/2) しまりや中質、粘性や中質、骨10mm程度のロームが混入(黒>黄)
- 12 黄褐色土 (10YR2/2) しまり肌、粘性強、少量のKagが混入(黒>黄)
- 13 暗褐色土 (10YR3/4) しまり肌、粘性や中質、Kagが多く混入(黄)
- 14 にぶい黄褐色土 (10YR4/2) しまりや中質、粘性強、ロームの堆積したもの(V)
- 15 黄褐色土 (10YR3/4) しまり肌、粘性や中質、少量のKagが混入(V+黄)
- 16 褐色土 (10YR4/4) しまり肌、粘性や中質、少量の赤黒化ハリスが堆積したもの(V>黄)
- 17 褐色土 (10YR4/6) しまり肌、粘性強、ロームの堆積したもの(V)
- 18 暗褐色土 (10YR3/4) しまり肌、粘性や中質、ローム+Ngに黒色土がローム状に混入(V+Ng>黒)
- 19 黄褐色土 (10YR2/2) しまり肌、粘性や中質、黒色土(Ng)にNgが混入(黒+Ng=黒)
- 20 灰黄褐色土 (10YR4/2) しまりや中質、粘性や中質、Kagが混入(V)
- 21 にぶい黄褐色土 (10YR4/4) しまりや中質、粘性強、ごく少量のNgが混入(黒>黄)
- 22 暗褐色土 (10YR3/1) しまり肌、粘性強、黒色土にロームが少量混入(黒>黄)
- 23 にぶい黄褐色土 (10YR4/2) しまり肌、粘性や中質、Ng=黒土に黒色土が少量混入(Ng>黒)
- 24 褐色土 (10YR4/6) しまりや中質、粘性強、下位の粘質土が堆積したもの
- 25 にぶい黄褐色土 (10YR4/2) しまりや中質、粘性強、Ng=黒土に下位の粘質土が混入
- 26 にぶい黄褐色土 (10YR4/2) しまりや中質、粘性強(V+Ng=黒)
- 27 黄褐色土 (10YR2/2) しまり肌、粘性や中質、黒色土(ローム)がごく少量混入(黒>黄)
- 28 褐色土 (10YR4/4) しまり肌、粘性強、Ngの堆積(Ng)

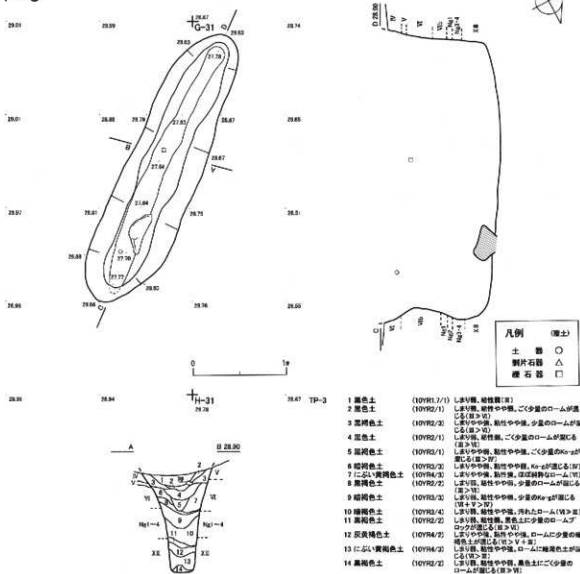
図IV-12 TP-1

TP-2



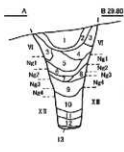
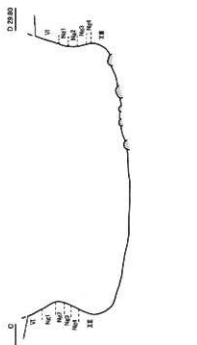
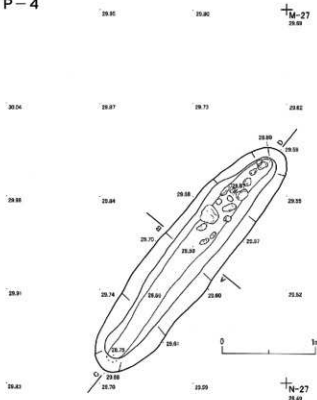
図N-13 TP-2とTP-2出土の遺物

TP-3



図IV-14 TP-3

TP-4



TP-4

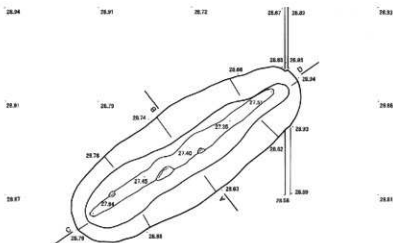
- 1 黒色土 (10YR1.7/1) しまりやや腐、動物や中層(Ⅱ)
- 2 黒褐色土 (10YR2.2/1) しまりやや腐、動物や中層、ロームが混じる(Ⅱ + VI)
- 3 にぶい黄褐色土 (10YR4.2/1) しまりやや腐、動物腐、ほぼ鉄質心ローム(VI)
- 4 灰黄褐色土 (10YR4.2/2) しまりやや腐、動物腐、中や鉄質心ローム(VI)多量
- 5 灰褐色土 (10YR1.2/2) しまりやや腐、動物や中層、ロームに黒色土が混じる(Ⅱ + VI)
- 6 暗褐色土 (10YR3.2/2) しまりやや腐、動物腐、ロームにごく少量の黒色土が混じる(VI + Ⅱ)
- 7 暗褐色土 (10YR3.2/3) しまりやや腐、動物や中層、黒色土にロームが混じる(Ⅱ + VI)
- 8 にぶい黄褐色土 (10YR4.2/1) しまりやや腐、動物腐、ほぼ鉄質心ローム(VI)
- 9 にぶい黄褐色土 (10YR4.2/2) しまりやや腐、動物や中層、ロームに黒土が少量混じる(VI + Ⅱ)
- 10 灰黄褐色土 (10YR4.2/2) しまりやや腐、動物腐、ロームに黒土が多量混じる(Ⅱ + Ⅵ)
- 11 暗褐色土 (10YR3.2/2) しまりやや腐、動物腐、黒土に黒色土が少量混じる(Ⅱ + Ⅵ)
- 12 暗褐色土 (10YR3.2/4) しまりやや腐、動物腐、黒土に黒色土がごく少量混じる(Ⅱ + Ⅵ)
- 13 暗褐色土 (10YR3.2/5) しまりやや腐、動物腐、黒色土に黒土が少量混じる(Ⅱ + Ⅵ)

ⅩN-15 TP-4

TP-5

M-28

M-29



N-28

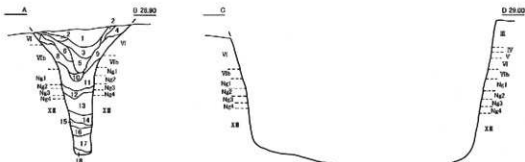
M-29

M-29

N-29

M-29

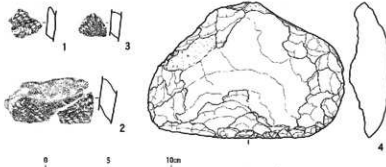
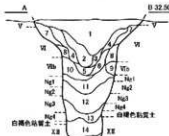
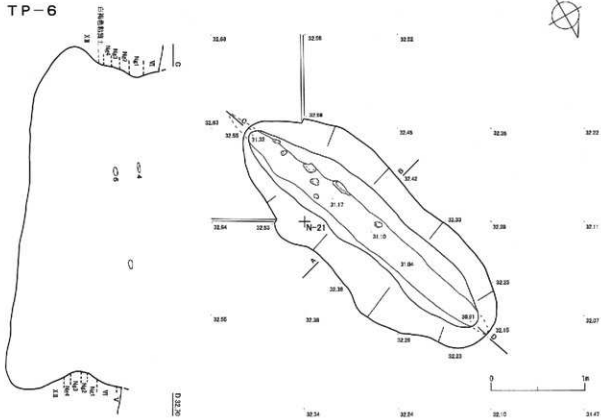
0 1m



- TP-5
- | | | | |
|---------------------|------------------------------------|----------------------|---------------------------------|
| 1 黒色土 (10YR1.3/1) | しまりや中強、粘性や中強 (H) | 10 緑褐色土 (10YR3/2) | しまり弱、粘性や中強、ロームが多く混入 (H+V) |
| 2 黒彩色土 (10YR2/2) | しまりや中強、粘性や中強、少量のロームが混入 (H+V) | 11 に広い黄褐色土 (10YR4/3) | しまり弱、粘性や中強、Vb5層に黒色土が少量混入 (H+V) |
| 3 黒色土 (10YR2/1) | しまりや中強、粘性や中強、ごく少量のロームが混入 (H+V) | 12 緑褐色土 (10YR2/2) | しまり弱、粘性や中強、Vb5層に黒色土が少量混入 (H+V) |
| 4 黒褐色土 (10YR2/3) | しまりや中強、粘性や中強、少量のロームが混入 (H+V) | 13 褐色土 (10YR4/4) | しまり弱、粘性や中強、Vb4次にHb1が少量混入 (H+V) |
| 5 黒褐色土 (10YR2/2) | しまりや中強、粘性や中強、少量のロームと土を物が混入 (H+V) | 14 に広い黄褐色土 (10YR5/4) | しまり弱、粘性弱、ロームにHb3や少量混入 (H+V) |
| 6 黒褐色土 (10YR2/2) | しまりや中強、粘性や中強、ロームが混入 (H+V) | 15 褐色土 (10YR4/4) | しまり弱、粘性や中強、ロームにHb1が混入 (H+V) |
| 7 黒褐色土 (10YR2/2) | しまりや中強、粘性や中強、少量のロームが混入 (H+V) | 16 に広い黄褐色土 (10YR5/4) | しまり弱、粘性や中強、ロームにHb1が混入 (H+V) |
| 8 に広い黄褐色土 (10YR4/3) | しまりや中強、粘性や中強 (Vb) | 17 に広い黄褐色土 (10YR6/4) | しまり弱、粘性や中強、Vb6次に黒色の塊状土が混入 (H+V) |
| 9 黄褐色土 (10YR3/3) | しまり弱、粘性や中強、ロームにブロック状に黄褐色土が混入 (H+V) | 18 暗褐色土 (10YR3/4) | しまり弱、粘性や中強、Vb6次に少量の塊状土が混入 (H+V) |

図IV-16 TP-5

TP-6



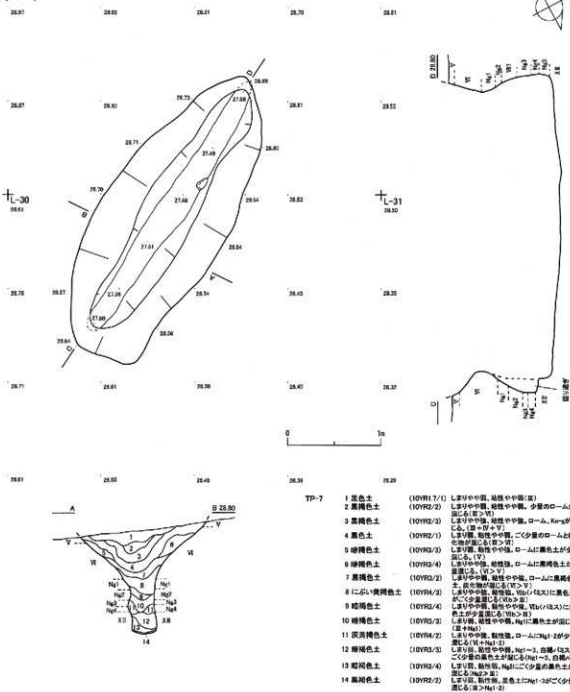
TP-6

- | | | |
|-------------|-------------|-----------------------------------|
| 1 黒色土 | (10YR1.3/1) | しまりや中硬、粘粒中硬(Ⅱ) |
| 2 黒褐色土 | (10YR2/2) | しまりや中硬、粘粒中硬、少量のロームが混入(Ⅱ>Ⅲ) |
| 3 黒色土 | (10YR2/1) | しまりや中硬、粘粒中硬、少量のロームが混入(Ⅱ>Ⅲ) |
| 4 黒褐色土 | (10YR3/2) | しまりや中硬、粘粒中硬、少量のロームが混入(Ⅱ>Ⅲ) |
| 5 黒褐色土 | (10YR2/2) | しまりや中硬、粘粒中硬、少量のロームが混入(Ⅱ>Ⅲ) |
| 6 暗褐色土 | (10YR3/4) | しまりや中硬、粘粒中硬、ロームが混入(Ⅱ>Ⅲ) |
| 7 暗褐色土 | (10YR3/4) | しまりや中硬、粘粒中硬、少量の黒色土が混入(Ⅱ>Ⅲ) |
| 8 にぶい黄褐色土 | (10YR4/2) | しまりや中硬、粘粒中硬、鉄質(Ⅱ) |
| 9 にぶい黄褐色土 | (10YR4/2) | しまりや中硬、粘粒中硬、鉄質(Ⅱ) |
| 10 褐色土 | (10YR4/4) | しまりや中硬、粘粒中硬、鉄質(Ⅱ) |
| 11 暗褐色土 | (10YR3/4) | しまりや中硬、粘粒中硬、少量の黒色土が混入(Ⅱ>Ⅲ) |
| 12 褐色土 | (10YR4/4) | しまりや中硬、粘粒中硬、ロームに鉄質(Ⅱ)が混入(Ⅱ>Ⅲ) |
| 13 にぶい黄褐色土 | (10YR4/2) | しまりや中硬、粘粒中硬、少量のロームが混入(Ⅱ>Ⅲ) |
| 14 にぶい黄褐色土 | (10YR4/2) | しまりや中硬、粘粒中硬、少量のロームが混入(Ⅱ>Ⅲ) |
| 15 鈍オリーブ灰色土 | (2.5Y3/2) | しまりや中硬、粘粒中硬、鉄質(Ⅱ) |
| 16 黒褐色土 | (10YR3/1) | しまりや中硬、粘粒中硬、黒色土に粘粒主体とL.T.Ng1-4が混入 |



図N-17 TP-6とTP-6出土の遺物

TP-7



図IV-18 TP-7

4 焼土

F-1 (図IV-19、図版15、表IV-4)

位置 N-42-a 規模 49×24/4 平面形 楕円形

確認調査 Ⅲ層2回目で暗赤褐色土のまとまりを確認した。沢地形部分に面した微高地に位置し、直上から被熱した台石(包含層掲載No108)が出土した。

時期 検出した層位および周辺の遺物から、縄文時代中期前半の遺構と推測される。

F-2 (図IV-19、図版15、表IV-4)

位置 O-33-a 規模 57×32/4 平面形 楕円形

確認調査 Ⅲ層2回目で暗赤褐色土のまとまりを確認した。周辺には炭化物が散在していた。近接してF-6がある。なお、周囲の包含層から遺物はほとんど出土していない。

時期 検出した層位から、縄文時代中期前半の遺構と推測される。

F-3 (図IV-19・20、図版15、表IV-4)

位置 M-41-c 規模 30×30/3 平面形 円形

確認調査 Ⅲ層1回目で暗赤褐色土のまとまりと炭化物の散在を確認した。沢地形部分で検出したものであるが、周辺の遺物よりも検出レベルが高い。

時期 検出した層位から、縄文時代中期前半もしくはそれよりも新しい時期の遺構と推測される。

F-4 (図IV-19、図版15、表IV-4)

位置 H-38-b 規模 57×25/9 平面形 不整楕円形

確認調査 Ⅲ層4回目で暗赤褐色土のまとまりを確認した。周辺の包含層からは土器片がややまとまって出土している。

時期 検出した層位および周辺の遺物から、縄文時代中期前半の遺構と推測される。

F-5 (図IV-19・20、図版15、表IV-4)

位置 L-41-b 規模 28×23/6 平面形 楕円形

確認調査 沢地形部分のⅢ層5回目で極暗赤褐色土のまとまりを確認した。この周辺でまとまって出土した台石・石皿とレベル的に同一面である。また、近接して被熱した円礫を含む集石S-2が検出されている。これらのことから、この沢地形部分で焚火を行い、台石を使用した作業が行われていたと推測される。

時期 検出した層位および周辺の遺物から、縄文時代中期の遺構と推測される。

F-6 (図IV-19、図版15、表IV-4)

位置 N-33-b 規模 144×70/8 平面形 不整形

確認調査 Ⅲ層3回目で暗赤褐色土のまとまりを確認した。焼土は大きく3ヶ所に分かれ、中央部には炭化物が散在していた。近接してF-2がある。周辺の包含層から遺物はほとんど出土していない。

時期 検出した層位から、縄文時代中期前半の遺構と推測される。

F-7 (図IV-21、図版15、表IV-4)

位置 K-37-b 規模 8×7/2 平面形 円形

確認調査 Ⅲ層3回目で炭化物が散在しており、Ⅲ層4回目で極暗赤褐色土のまとまりを確認した。木根攪乱と推測されるしまりの弱い部分に炭化物がまとまっており、焼土はごく一部である。周辺の包含層から遺物の出土は少ない。

時期 検出した層位から、縄文時代中期前半の遺構と推測される。

F-8 (図IV-21、図版15、表IV-4)

位置 M-18-c、N-18-d 規模 61×29/5 平面形 不整形

確認調査 Ⅲ層上面でいぶい赤褐色土の焼土粒のまとまりを確認した。周辺には炭化物が散在しており、焼土の一部は斜面下方に流れた二次堆積と推測できる。周辺の包含層からは同一層位で縄文時代中期前半の遺物が出土している。

時期 検出した層位および周辺の遺物から、縄文時代中期前半の遺構と推測される。

F-9 (図IV-21、図版16、表IV-4)

位置 M-10-b 規模 40×35/12 平面形 不整形

確認調査 Ⅲ層風倒木痕中でいぶい赤褐色土のまとまりを確認した。同じ風倒木痕中から縄文時代中期前半の土器がややまとまって出土している。縄文時代中期の焼土が風倒木痕攪乱の影響を受けたものと推測される。

時期 近接して出出した遺物から、縄文時代中期前半の遺構と推測される。

F-10 (図IV-21、図版16、表IV-4)

位置 M-24-d 規模 44×30/7 平面形 楕円形

確認調査 Ⅲ層1回目で炭化物が散在しており、Ⅲ層2回目で暗赤褐色土のまとまりを確認した。周辺の包含層から遺物の出土はほとんどない。

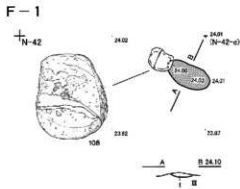
時期 検出した層位から縄文時代中期前半の遺構の可能性はあるが、周辺から遺物はほとんど出していない。

F-11 (図IV-21、図版16、表IV-4)

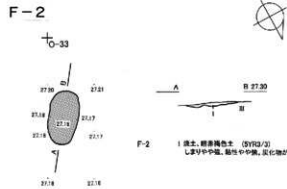
位置 N-14-a・b 規模 65×48/3 平面形 不整形

確認調査 Ⅲ層2回目で炭化物が散在しており、Ⅲ層3回目でやや赤味を帯びた黒褐色土のまとまりを確認した。焼土は非常に不明瞭で薄い。周辺の包含層から遺物の出土は少ない。

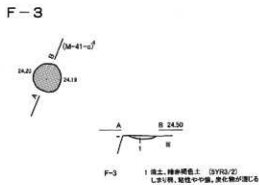
時期 周辺から遺物が出土せず不明である。



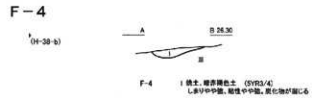
F-1 1 焼土、暗赤褐色土 (SYR3/6) Lまじり中盤、胎性弱



F-2 1 焼土、暗赤褐色土 (SYR3/2) Lまじり中盤、胎性やや強、灰化跡が散在

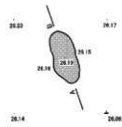


F-3 1 焼土、暗赤褐色土 (SYR3/2) Lまじり弱、胎性やや強、灰化跡が散在

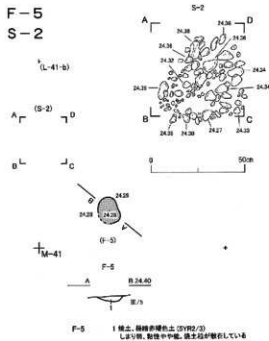


F-4 1 焼土、暗赤褐色土 (SYR3/4) Lまじり中盤、胎性やや強、灰化跡が散在

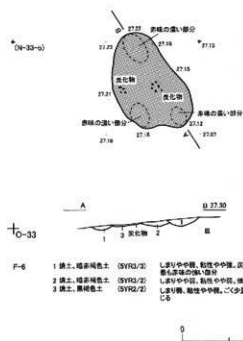
N-42



F-6

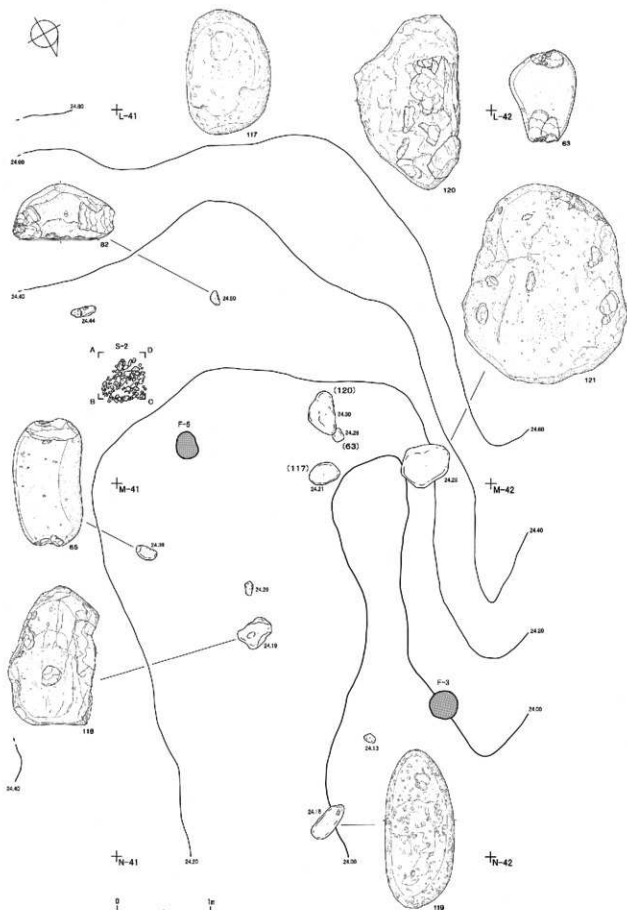


F-5 1 焼土、暗赤褐色土 (SYR2/3) Lまじり弱、胎性やや強、焼土層が散在している

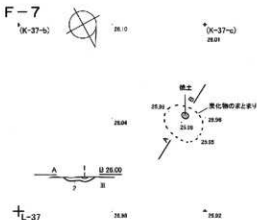


F-6 1 焼土、暗赤褐色土 (SYR3/2) Lまじり中盤、胎性中強、灰化跡が散在、器の深縁の強い部分
2 焼土、暗赤褐色土 (SYR3/2) Lまじり中盤、胎性中強、焼土層が散在
3 焼土、黒褐色土 (SYR2/2) Lまじり弱、胎性中強、二少量の灰化跡が散在

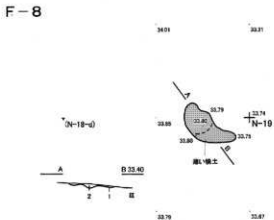
図M-19 F-1~6、S-2



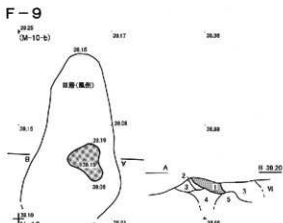
図IV-20 F-3・5、S-2と沢地形部分



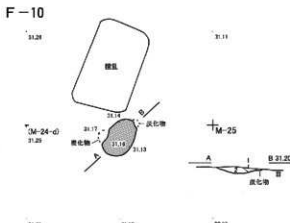
F-7 1 焼土、緑褐色腐色土 (SYR2/2) Lより弱、粘性やや弱、炭化物が散在
 2 黄褐色土 (10YR2/2) Lより弱、粘性弱、炭化物が散在



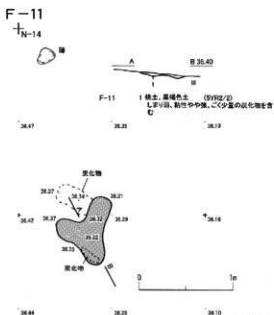
F-8 1 焼土、黄褐色土 (SYR2/2) Lより弱、粘性弱、黄褐色、炭化物が散在、断面で次第に増殖したものをLより弱、粘性弱、焼土、炭化物が少量散在



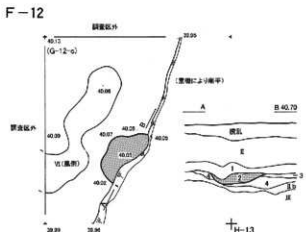
F-9 1 焼土、に濃い赤褐色 (SYR4/6) Lより弱、粘性弱、Lよりやや弱、粘性弱、焼土粒が少量散在する部分
 2 黄褐色土 (10YR2/2) Lより弱、粘性やや弱 (黄)
 3 黒色土 (10YR1.7/1) Lより弱、粘性やや弱 (黒)
 4 黄褐色土 (10YR2/2) Lより弱、粘性やや弱、ロームが散在し、ボソボソ感がある
 5 黒色土 (10YR1.7/1) Lより弱、粘性やや弱、ごく少量のロームが散在する、ボソボソ感あり (ボソボソ)
 2~5 炭化物が散在



F-10 1 焼土、緑褐色腐色土 (SYR2/2) Lより弱、粘性やや弱、ボソボソ感があり粘性が弱い
 2 焼土、に濃い赤褐色 (SYR4/2) Lより弱、粘性やや弱

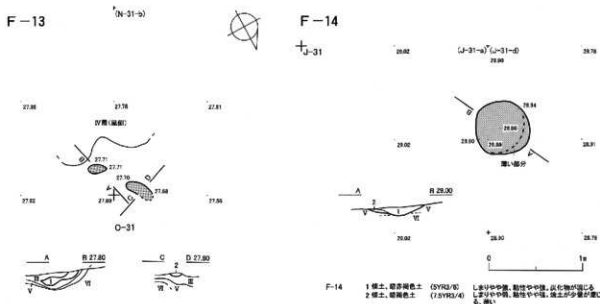


F-11 1 焼土、黄褐色土 (SYR2/2) Lより弱、粘性やや弱、ごく少量の炭化物が散在



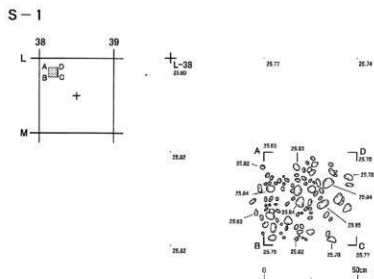
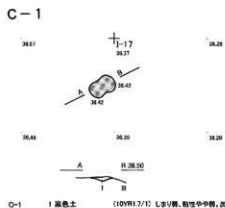
F-12 1 黄褐色土 (10YR2/2) Lより弱、粘性やや弱、ごく少量の焼土粒が散在する部分
 2 焼土、赤褐色土 (2YR4/6) Lよりやや弱、粘性やや弱、断面が上下ともに同じで二次堆積を考えた場合
 3 黒色土 (10YR2/1) Lより弱、粘性弱、ごく少量のロームが散在
 4 黄褐色土 (10YR2/2) Lより弱、粘性やや弱、ごく少量の焼土がローム状に散在

図N-21 F-7~12



1. 赤褐色土、粘粒や中粒
2. 赤褐色土、粘粒や中粒、微土粒が混入、二次堆積物

1. 赤褐色土、粘粒や中粒、炭化物が混入
2. 赤褐色土、粘粒や中粒、黄土が少量が混入、黄い



図IV-22 F-13・14、C-1、S-1

F-12 (図IV-21、図版16、表IV-4)

位置 G-12-c 規模 60×(32)／12 平面形 楕円形？

確認調査 重機での火山灰除去時に、Ⅲ層の一部を深く掘り下げてしまったため、調査区縁の壁面で赤褐色土の焼土断面を確認した。この部分を拡張し調査したところ、Ⅲ層2回目相当層が確認面であった。風倒木痕落ち込み中の焼土で焼土の輪郭・断面が明瞭なことから二次堆積の焼土と考えられる。周囲に遺物は無く、人為的な焼土である可能性は低い。

時期 周辺から遺物が出土せず不明である。

F-13 (図IV-22、図版16、表IV-4)

位置 N-30-c、N-31-b 規模 19×9／8 平面形 不整楕円形

確認調査 Ⅲ層4回目にてぶい赤褐色土のまとまりを確認した。大きく2ヶ所に分かれるが、一方は二次堆積である。風倒木痕中の焼土で、周辺での遺物の出土も無いことから、人為的な焼土である可能性は低い。

時期 周辺から遺物が出土せず不明である。

F-14 (図IV-22、図版16、表IV-4)

位置 J-31-a・b 規模 62×60／10 平面形 楕円形

確認調査 V層上面で暗赤褐色土のまとまりを確認した。周辺には炭化物が散在していた。

時期 確認面が深く、周辺から遺物が出土しないことから不明である。

5 炭化物集中

C-1 (図IV-22、表IV-4)

位置 I-16-d 規模 29×18/5 平面形 不整楕円形

確認調査 Ⅲ層3回目で炭化物のまとまりを確認した。周辺から遺物は出土していない。

時期 周辺から遺物が出土せず不明である。なお、C-1から採取した炭化物からは1200±40y B P (試料名YOT-2)の補正放射性炭素年代が出ている(第VI章1参照)。

6 集石

S-1 (図IV-22、図版16、表IV-5)

位置 L-38-a 規模 57×54

確認調査 Ⅲ層1回目で一部の礫が現れ、更に掘り下げて、Ⅲ層2回目で全体を確認した。礫は小型の円礫が多く、被熱したものもあった。周辺からはⅢ群b類土器が少数出土している。

遺物 礫186点が出土した。総重量は3.3kgである。

時期 検出した層位および周辺の遺物から、縄文時代中期後半の遺構と推測される。

S-2 (図IV-19・20、図版16、表IV-5)

位置 L-40-c、L-41-b 規模 55×43

確認調査 沢地形部分のⅢ層6回目で礫のまとまりを確認した。小型の円礫が大半を占め、被熱したものもあった。F-5に隣接しており、沢地形部分での台石を用いた作業に関連する遺構と推測される。

遺物 礫176点が出土した。総重量は5.8kgである。

時期 検出した層位および周辺の遺物から、縄文時代中期前半の遺構と推測される。

S-3 (図IV-23、図版17、表IV-5)

位置 L-28 規模 258×219

確認調査 Ⅲ層3回目で礫の一部が現れ、更に掘り下げⅢ層4回目でまとまりを確認した。小型の礫とやや大型の礫がまとまる傾向がある。周囲のⅢ層に礫がほとんどないため集石としたが、風倒木痕が近接しており地山の礫が巻き上げられ、まとまったものである可能性が高い。

遺物 礫408点が出土した。総重量は12.7kgである。

時期 不明である。

S-4 (図IV-24、図版17、表IV-5)

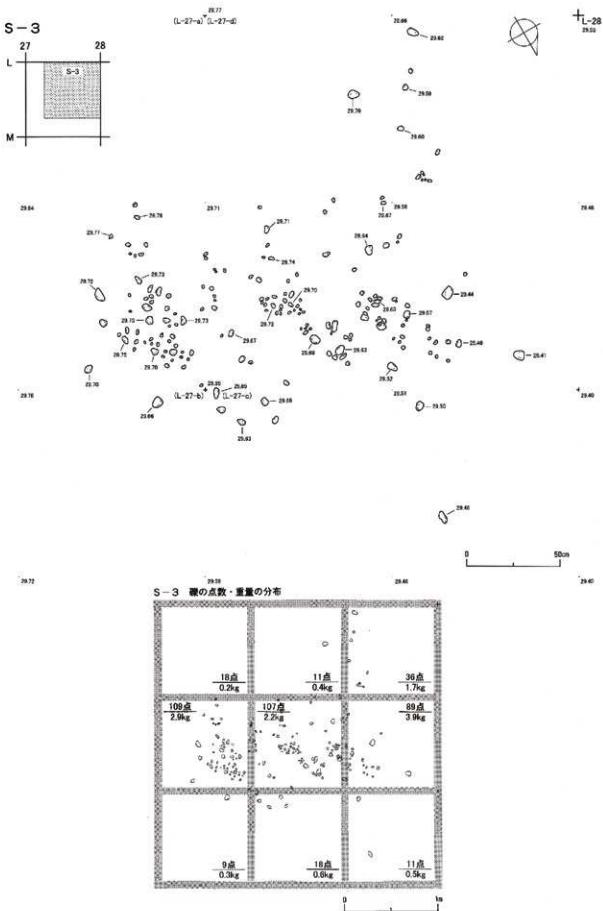
位置 G-17-a・d 規模 225×220

確認調査 Ⅲ層4回目で礫のまとまりを確認した。大型の礫がまとまる傾向がある。周囲のⅢ層に礫がほとんどないため集石としたが、風倒木痕が近接しており、周囲のⅢ層およびB-Tmに凹凸が見られる。そのため、風倒木痕により地山の礫が巻き上げられ、まとまったものである可能性が高い。

遺物 礫324点が出土した。総重量は41.9kgである。

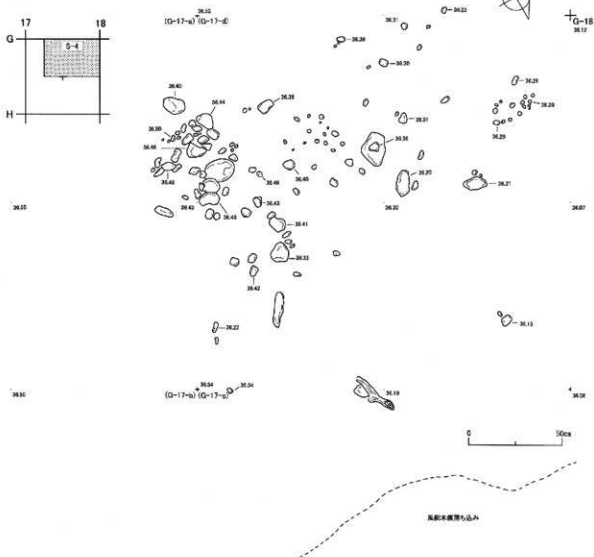
時期 不明である。

(藤原)

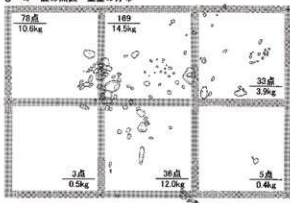


図IV-23 S-3

S-4



S-4 罫の点数・重量の分布



図IV-24 S-4

V 包含層出土の遺物

1 土器

包含層からは7,475点出土した。主体となるのは中期の土器でその8割以上を占め、そのうち前半期のⅢ群a類が6,315点、後半期のⅢ群b類が948点である。ほかに後期のⅣ群a類・b類土器、縄文時代のⅥ群土器、晩期Ⅴ群土器もわずかながら出土している(表Ⅰ-2)。4m四方の発掘区単位での出土点数の分布を見ると、多くても数点がまったく出土しないところと数百点が集中して出土するところがあるといった極端な出土傾向がみられる。また、最も多いⅢ群土器の出土地点とⅤ群、Ⅵ群のそれとはほとんど重ならない。遺構、遺物のごく少ない標高の高い急斜面から縄文期のものが出土している(図Ⅴ-8・9)。以下、縄文中期から順に記載することとする。

(1) 縄文時代中期の土器

土器の出土状況について(図Ⅴ-1~8)

遺跡全体を大きくみると、①調査区東側の標高37~34mのやや急な斜面(土器集中4~11・13)、②調査区ほぼ中央部の標高31~28mの緩やかな斜面(土器集中1~3・12・14)、③調査区の北端の標高26m~24mの沢地形部分(土器集中15)の3か所にまとまりがあり、これらの範囲から検出された土器の集中域は17か所である。図Ⅴ-1については実測した破片の散らばり一つずつ加筆するときわめて煩雑な図になるので、出土地点を2m四方の小グリッド単位でまとめ、丸印を落として任意の線で括ったものである。いずれもⅢ層3回目~5回目の発掘で検出されたものが多い。これらは出土状況図を作成し、必要に応じていくつかのブロックにまとめ、レベルを測って取り上げている。17か所のうち土器が復元できたものを「土器集中1~15」として出土状況図に掲載した(図Ⅴ-2~7)。このほか2、3の特徴的なあり方がある。最も標高の高い地点の調査区M-10区にはスポット的に遺物が集中し、出土した破片が20mほど離れた①の集中地点のものと接合する例が7個体(4、6、7、15、23、24、30)にある。また13のように50m以上離れた地点の破片が接合している例、22のように広範囲に散在しているものもある。ここで見られるような出土状況については、調査区が標高差が15m以上ある斜面(図左から右に傾斜する)であり、層位的に出土したものではないことを考慮に入れる必要は多分にあるが、大まかにはⅢ群a-3類のうち新しい段階である見晴町式(31~33)のものとⅢ群b類榎林式、元和D群(大沼1976)に関連するもの(35~37、破片資料では68~73、75等)は斜面の低い地点に、特に後者は③沢地形部分から出土する傾向が見てとれる。

Ⅲ群a-3類(図Ⅴ-10~21・23~26-1~34・38~67・77~90 図版21~34 表Ⅴ-1・2)

サイベ沢Ⅶ式、見晴町式のものがある。出土した土器の中には貼付帯で文様が構成される等の特徴付けられるⅢ群a-2類；サイベ沢Ⅵ式(高橋1981)の相当すると考えられるものがあるが、縄文のみのものが多い本遺跡ではa-3類サイベ沢Ⅶ式、見晴町式と混在して出土する傾向が認められ、土器の組成上、分離が困難なものが多い。ここではサイベ沢Ⅵ式に類するものについてはサイベ沢Ⅶ式の古い段階のものと一緒に一括して捉え分類していない。

口縁部破片数から推定できるⅢ群a-3類の個体数は掲載したものを含め120個体あまりで、このほかに突起部の破片が17点ある。底部の破片は23個体分である。なお、サイベ沢Ⅶ式の注口部の付い

た土器(図V-11-5)が1個体復元されている。

1) サイバ沢Ⅷ式に相当するもの(1-30, 34, 38-53, 56-60, 67, 68)

細い貼付帯により文様を描くもの、2条ないしは3条の沈線により文様を描くもの、口縁部、突起部周辺に施文はあるが地文の縄文のみのもの、魚骨回転文の施されたもの等がある。貼付帯、沈線文のものは破片資料でも点数は少ない。口縁部や突起部周辺にのみ貼り付けや施文があるものを含め縄文のみのものが多い。器形は口縁の4か所に突起部を有するものと平縁のものがある。いずれも口縁部が開くもので、頸部でくびれ外反するもの、底部からまっすぐ立ち上がるものがあり、胴部がわずかに膨らむものも認められる。底部は全般的に張り出すもので、その度合いは様々である。口唇直下のごく狭い範囲を無文とし刻みを付けるものが認められる。底部周辺も無文に調整されているが、比較的広い範囲を無文とするものが少数みられる。内面はほとんどのものが底面付近まで丁寧に調整される。

大きさは推定の高さが35cmを優に超えるものと見られるものもあるが(10)、図上での復元も含め、①器高26-34cmに収まるもの、同じく②17-23cm前後のものとの2種類に集約できる。特に①では30cm前後にまとまる。また、②ではまるで双子のような土器(25と26)もある。ミニチュア土器を除き、最も小型のものは14.6cm(4)である。また、全般的にいびつな器形のものが多い点も本遺跡での特徴で、胴部中ほどから口縁部にかけて大きく傾くものが数個体あり、上面観が楕円形のものもある。粘土土圧により底部の一方がつぶれるものも多い。胎土には海綿骨針が混入するが、顕著なものは少なく、大半がルーベを使用して確認できる程度のものである。全く混入しないものもある。ほかに白色岩片、石英、輝石などの鉱物、小砂利が混入するものもある。

a類 細い貼付帯で文様が描かれるもの(1-4, 9, 10, 19, 28, 38-49)

文様帯が胴部半ばまで及ぶもの(1-4)、突起部周辺あるいは口縁部にのみ施文されるもの(9, 10)がある。文様帯に施文のあるもの、縄文を磨り消し無文地にするものがある。貼付帯の幅は4, 5mmで、より細いものもある。貼付帯上に熱紐の押捺されるもの、縄の圧痕あるもの、ヘラ状施文具による刻みが付けられるものなどがあり、口唇上にも同様の施文がある。口唇断面は切り出し形(3, 4, 9, 28, 49)、尖り気味(2, 48)、丸みを帯びた角形(19, 43, 46)などがある。

a-1類 文様帯が縄文地のもので、貼付帯上に施文のあるもの(1, 46)

いずれも地文は結束第1種羽状縄文で、貼付帯上にはヘラ状施文具による刻みがある。

1はH-27区の「土器集中1」から出土したものである(図V-2)。全体の3分の2が残存する。平縁で口唇に沿って粘土紐をめぐらせ肥厚させ上位に沈線に沿わせて、「ハ」の字状に深く刻みを入れている。粘土紐の端を内面に折り返しつまみ出し、向かい合わせで一對となる突起が形成されている。その中央部下に縦にアーチ状の貼り付けがある。残りの3か所は剥落しているが痕跡がある。胴部半ばには文様帯を区画する2条の貼付帯がめぐり、突起部直下から1条垂下させ、ほかは2本組みの弧線、直線で文様を描いているようである。内面調整は丁寧であるが凹凸がある。胎土に輝石などの鉱物の混入が顕著であるが海綿骨針は認められない。

46a-fは同一個体の破片。いずれも剥落しているが口唇部直下(46a)と体部(46b・e・f)に施文がある。底部(46c)は丁寧に磨かれ比較的広い範囲が無文でやや張り出しが強い。

a-2類 縄文地で貼付帯上に施文のないもの(3, 48)

3は結束第1種羽状縄文のもので、口縁部はごく一部しか残存していない。底部はあまり張り出さないもので、突起部あるいは波頂部を4か所に有するものであろう。文様帯下部は2条の貼付帯で区切られ、波頂部から垂下する1条のものとして斜格子目状の文様が描かれている。口唇上から直下にか

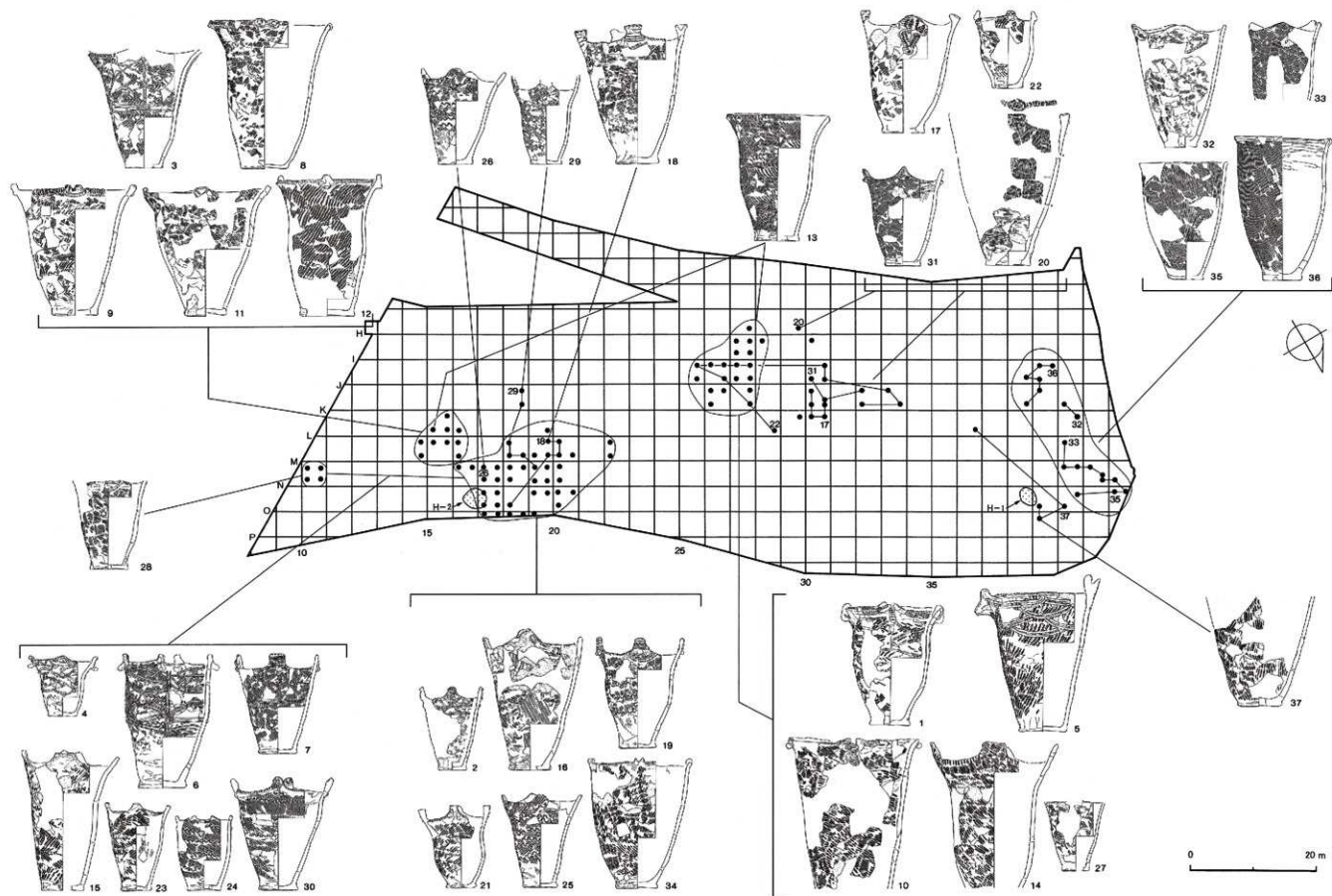
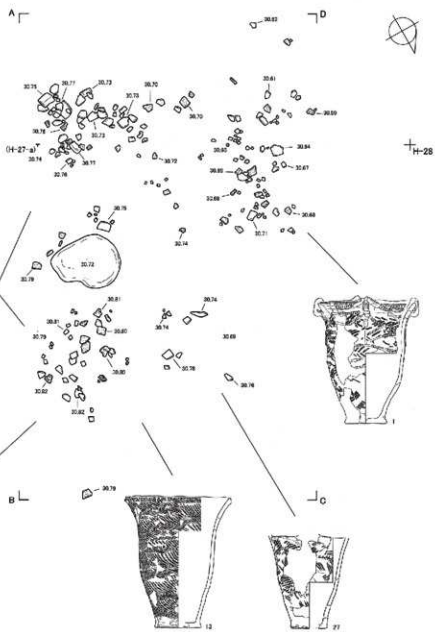
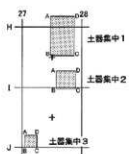


図 V-1 Ⅲ群土器の分布

土器集中 1



B L



土器集中 2

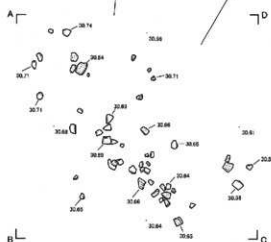
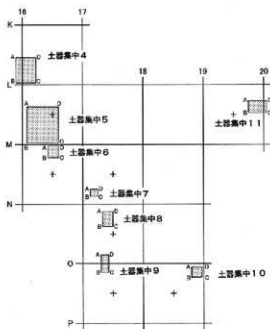
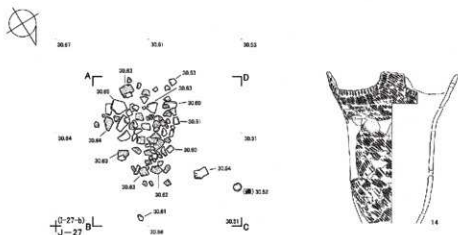
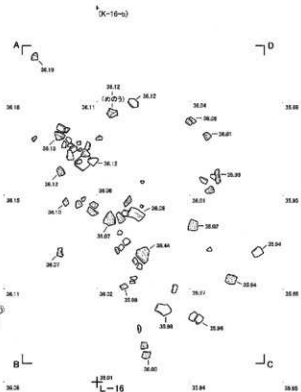


图 V-2 土器出土状況(1) 土器集中 1・2

土器集中3

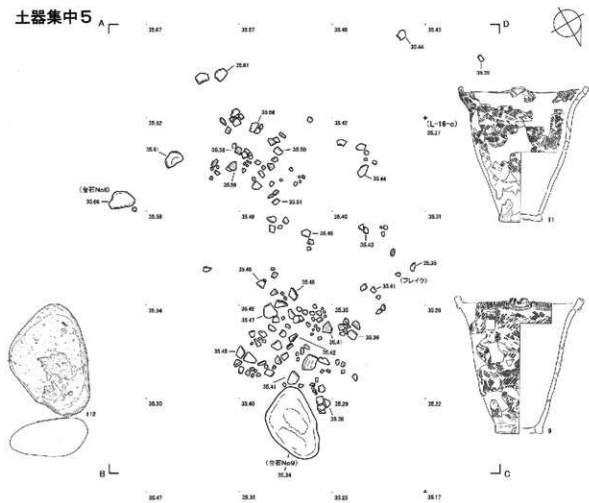


土器集中4

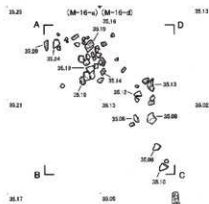


図V-3 土器出土状況(2) 土器集中3・4

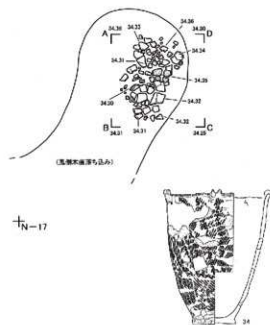
土器集中5



土器集中6



土器集中7



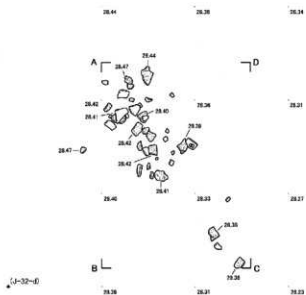
図V-4 土器出土状況(3) 土器集中5・6・7

土器集中12

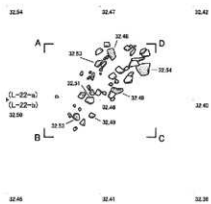
J-32-0



+J-33

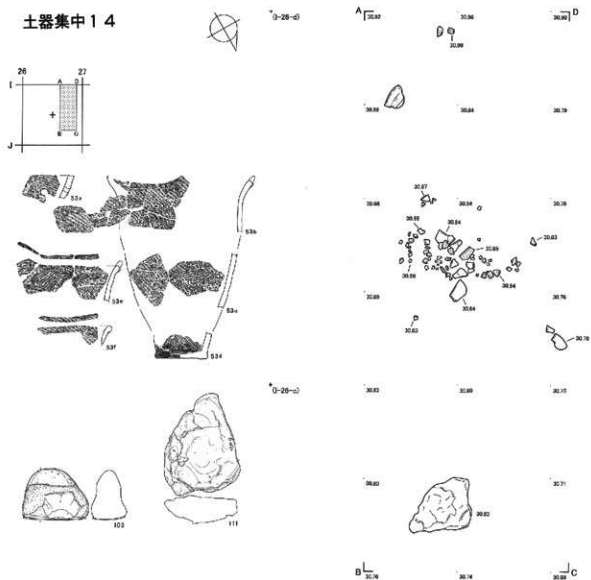


土器集中13

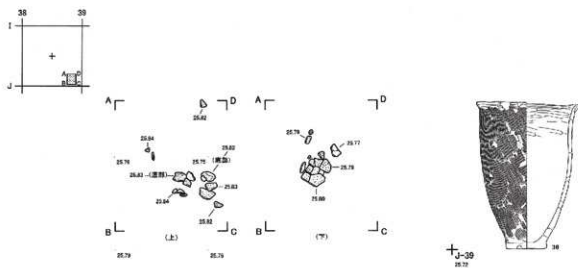


图V-6 土器出土状况(5) 土器集中12·13

土器集中14

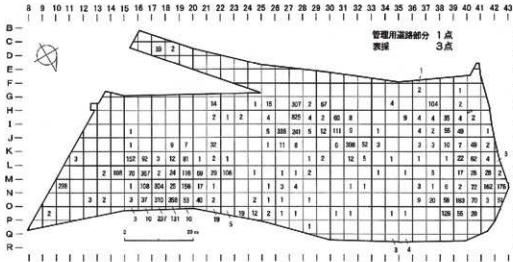


土器集中15

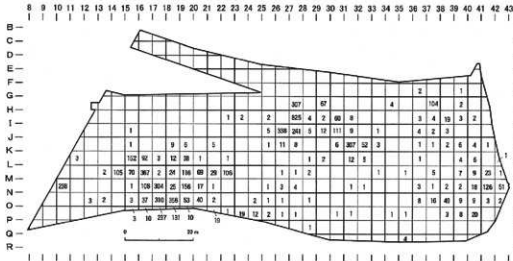


図V-7 土器出土状況(6) 土器集中14・15

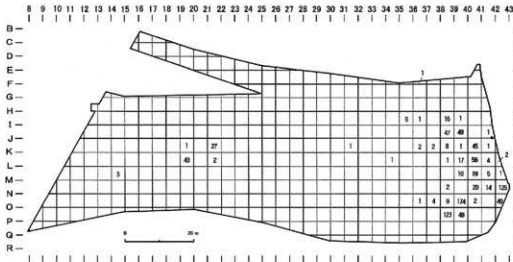
土器総点数 7475点



Ⅲ群・Ⅲ群a類土器 6315点

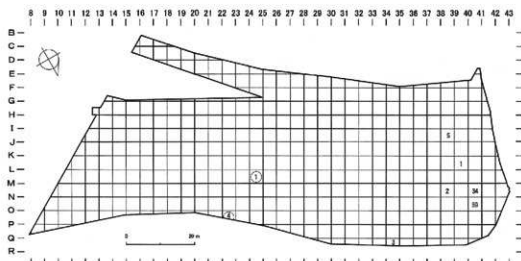


Ⅲ群b類土器 948点

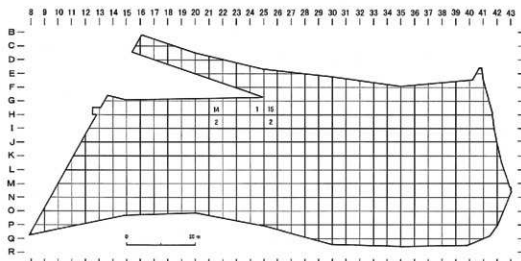


図V-8 土器の分布(1) 総点数、Ⅲ群、Ⅲ群a類、Ⅲ群b類

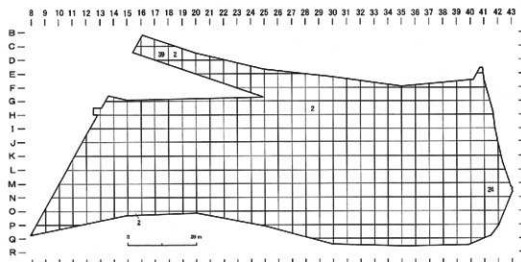
IV群a類土器 104点
IV群b類土器 (○の数字) 5点



V群土器 34点



VI群土器 69点



図V-9 土器の分布(2) IV群a類、IV群b類、V群、VI群

けて繩の圧痕がある。胎土に石英等の鉱物、小砂利の混入が目立つものである。48は薄くて焼成の良い土器である。棒状突起をやや肥厚させ凹ませ、斜行縄文地に2条単位の粘土紐で弧状の文様が配されている。いずれにも胎土に海綿骨針は混入していない。

a-3類 無文地で貼付帯上は施文のあるもの(2)

2は全体の3分の1ほどが残存する。L原体による無節の縄文のもので、文様帯は突起部周辺と体部上半の狭い範囲に限られ、この部分の縄文は一部残るところもあるが磨り消されている。突起下には貼付帯が交差して付けられ小さな円形の貼り付けがあり、口縁部にも波状に施文されている。繩の圧痕に加え、横走する貼付帯間に長めの捻紐を挿入している部分がある。胎土に小砂利の混入が目立つ。

a-4類 無文地で貼付帯上に施文の無いもの(4, 47)

4は器高14.6cm、復元された中で最も小型のものである。結束第1種羽状縄文を施した後、文様帯と底部を無文としているが前者では一部縄文が磨り消されず残っている。幅3mm程と他のものと比べて細い粘土紐を口縁部では波状に、突起部では形状に添って三角形に貼り付けている。器面のものは剥離しているものが多いが、基本的には2本一組の粘土紐により弧線状の文様がつけられているとみられる。突起下には三つにわかれた把手状の貼り付けが4か所にあったとみられ、図正面にのみ一部が残る。焼成は良好で色調はぶい赤橙色を呈する。胎土に白色岩片、鉱物が多く混入する。47a・bは棒状の突起部のある小型のもので、肥厚させた頂部には指頭でくぼみが付けられている。胎土に海綿骨針は混入していない。

a-5類 貼付帯による文様が突起部周辺あるいは口縁部のみ施文されるもの(9, 10, 19, 28, 38-45, 49)

このうち38-45, 49は全体は知られないが突起部の周囲に施文のあるものである。地文は結束第1種羽状縄文(9, 41)、RL原体による斜行縄文(10, 28, 42, 49)、結束第2種羽状縄文(19)のものがある。貼付帯上には捻糸の挿入(38)、繩の圧痕(9, 39, 10, 19)、縄端の圧痕(45)、ヘラ状施文具での刻み(40, 41, 43, 44)がある。

9は「土器集中5」から出土した(図V-4)。全体の5分の3ほどが残存する。破片は多数あったが接合できなかったものである。平縁で2個1対の突起があるか残存するのは1か所のみである。縄文は浅く施され、口縁部の狭い範囲が無文で斜めに粘土紐の貼り付けがあり突起下にも廻っている。内面の凹凸が著しい。「土器集中5」から混在して出土した11と比べると器形、大きさ、胎土が良く似ている。10は「土器集中1」から出土したもので(図V-2)。破片は200点以上あったが半数以上が接合されず、3つに大きく接合できた破片を器形を想定して復元した。平縁で胴部の張り出さない筒形に近い器形で、底部は欠損しているが高さは35cmを優に超えるであろう。縄文は0段多条の原体で粗く施文され横走気味のところもある。4か所に2個で一对となる粘土紐をつまみ出したような小さな突起がある。残存するのはこの1か所のみで、突起下位には把手状の貼り付けが縦方向に、さらにもう1か所では横位にある(実測図上)。向かい合わせで一对になる可能性がある。口唇の作り出しは明瞭ではなく一部切り出し形、尖り気味の部分がある。口唇上と貼り付けには無文の細い粘土紐が波状に付けられている部分と繩の圧痕のあるところがある。貼り付け部分はあらかじめ無文に調整されている。

19は「土器集中6」から出土したものである(図V-4)。焼成は良好で胎土、色調が4と非常に良く似ており、炭化物が付着している。器面の縄文は結束部の回転が強調され、胴下半部の広い範囲で無文となっている。突起部の直下には瘤状の貼り付けが2個ありその周辺にのみ粘土紐を廻らせ、

施文後上下をヘラ状工具で調整している。口唇上の刻みは断面が円形をした棒状工具を半割したような工具によるとみられる。28は口縁部は一部を除き欠損している。波頂部あるいは突起部が少なくとも2か所にあり、狭い無文部に粘土紐の貼り付けがある。口唇は薄く切り出し方に成形され、縄文が施されている。器面の凹凸が著しい。38～40は台形状の突起部で中央に孔が穿たれている。38a・bは撚りの異なる三本一組の捻糸の押捺が、41a・bはやや太目の貼付帯のもの。42はレンズ状の文様がある。胎土には白色岩片が多量に混入する。43～45は口縁部に添って貼付されるもので、45は1に類する貼り付けである。49a・bは突起下に円形の貼り付けがあり、口縁に添ってある貼付帯が剥落した痕跡がある。

b類 縄文地に沈線で文様が描かれるもの（5～7）

2条ないし3条一組の沈線で突起部から垂下する文様、弧状、菱形などの直線的な文様（5）が描かれている。地文は複節のもの（5）、L R原体による斜行縄文に結節の回転文を加えるもの（6、7）で、後者では口唇上に縄の圧痕がある。

5はG-27区、H-27区の「土器集中1・2」から出土した（図V-2）。口縁部の一部を欠くが全体の9割以上が復元されている。口縁の向かい合う2か所に注口部と突起部を有する深鉢形土器である。底部から直線的に立ち上がるが注口部を正面にするとして左方に大きく傾いている。L R L原体による複節の縄文がほぼ全面に施され幅4mm程の少し厚みのあるヘラ状工具により弧線をつなぐ文様が、口縁部中心とした器面上部に描かれている。施文後口唇部の外側を指でつまみ出し平滑に成形し、幅4、5mmの無文の粘土紐を波状に貼り付けている（図版23-4・5）。剥落しているが全面に付けられていたと見られる。口径が2.5cmの注口部は全体を貼り付けたものではなく、一旦、口縁部を片口形に作りその後アーチ状に粘土紐を貼り付け成形したようである。突起部は一部欠損しているが螺ネジ状である。いずれも正面、側面に沈線と同じ原体による刺突文がめぐっている。色調は17によく似ており赤橙色を呈し、使用された痕跡として胴上半部に炭化物が付着している。焼成は良好であるが内外面の凹凸が比較的目的立つ。胎土には小砂利が多く混じっている。6は口縁部から底部までのほぼ全体が残っている。胴下半から底部にかけての比較的広い範囲が無文である。4か所に2個で1対となる棒状の突起があり、突起状は指頭で押され凹んでいる。それぞれの小突起に対応して粘土瘤の貼り付けがあるが残存しているのは3か所だけである。0段多条のL R原体による斜行縄文に結節の回転文を加え地文とし、胴部をめぐる横走沈線で区画された中に文様が描かれるが、全体の割付が整っていない。胴部の横走沈線には小さなドーナツ状の貼り付けがある。海綿骨針が比較的多く混入する。

7は器高23.3cmと小型のもので、全体の4分の3ほどが残存する。4か所に方形の突起部があり、下位には短い粘土の貼り付けがあるが向かい合う突起下で形状が異なっている。細い撚りの原体による斜行縄文が丁寧に施され結節の回転文である綾絡文がきれいに横走する。沈線文は突起部にも複数めぐる。胎土に白色岩片の混入が顕著である。色調はにぶい赤橙色を呈する。

c類 縄文のみのもの（8、11～18、21～23、25～28、30、34、50～53、57～60）

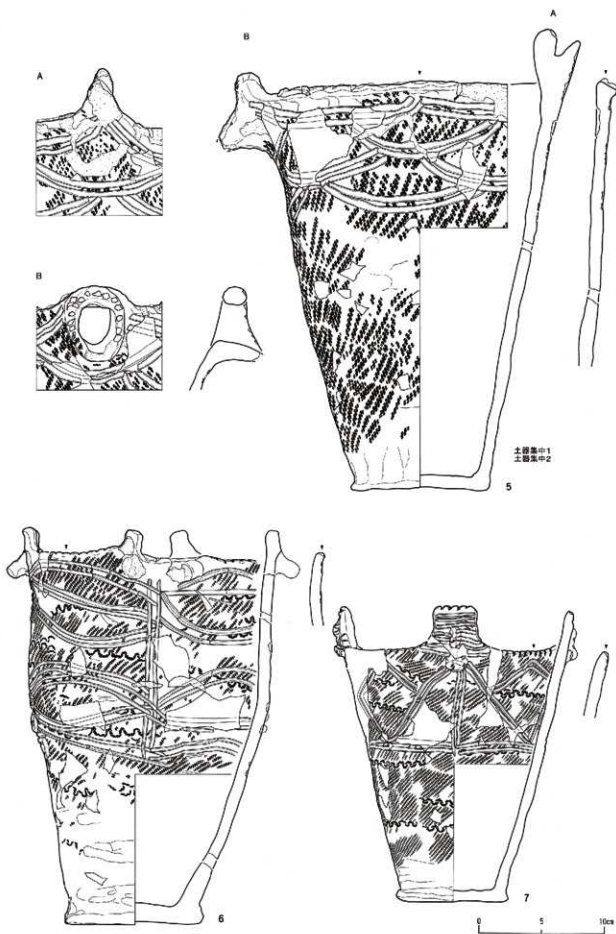
地文は結束第1種・結束第2種の羽状縄文、斜行縄文、斜行縄文に結節の回転文が加えられるものである。平線のもの、口縁の4か所に小さな貼り付けや突起部があるもの、比較的大きな台形状突起部を有するもの、棒状や小さな山形、方形、半円形状の突起部のあるもの等があり、口唇部には縄の圧痕、ヘラ状工具や棒状工具での刻み、縄文が施されるが、施文のないものもある。

c-1類 結束第1種羽状縄文のもの（8、15、21～23、27、50、53）

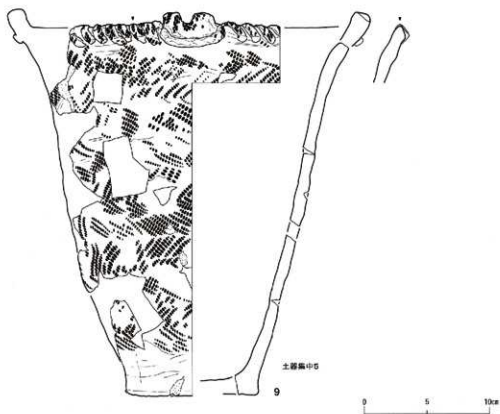
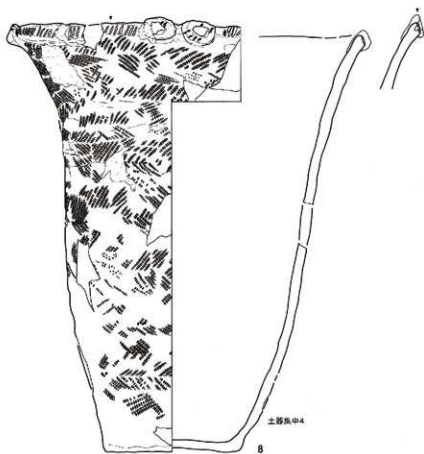
口唇には縄の圧痕（8、50）、ヘラ状工具による刻み目（8、21）の付けられているものや、縄文が施されているもの（53、22）がある。



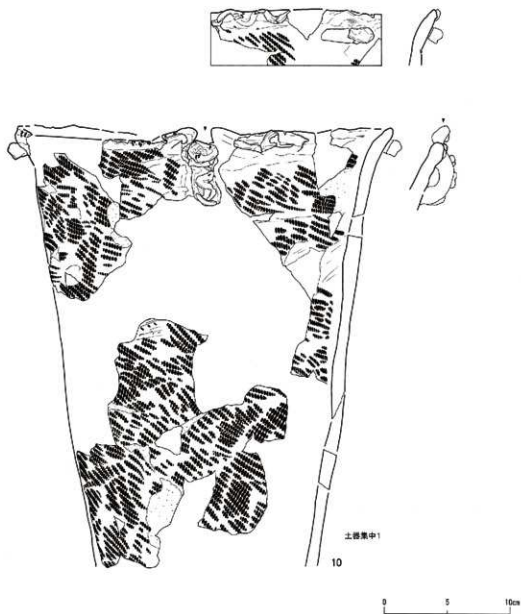
図V-10 包含層出土のⅢ群a類土器(1)



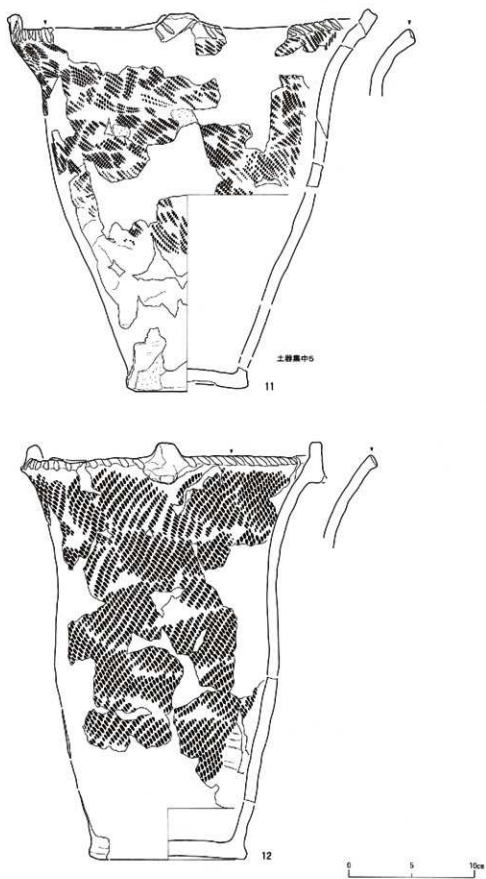
図V-11 包含層出土のⅢ群a類土器(2)



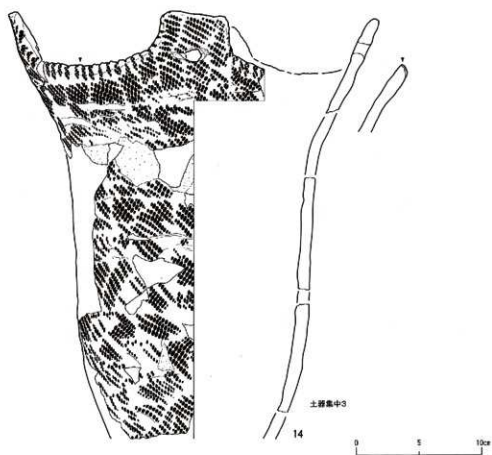
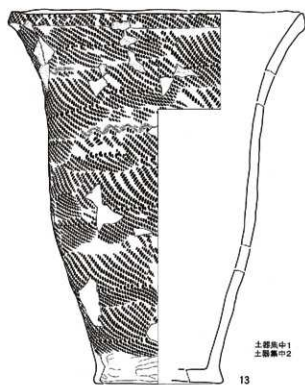
図V-12 包含層出土のⅢ群a類土器(3)



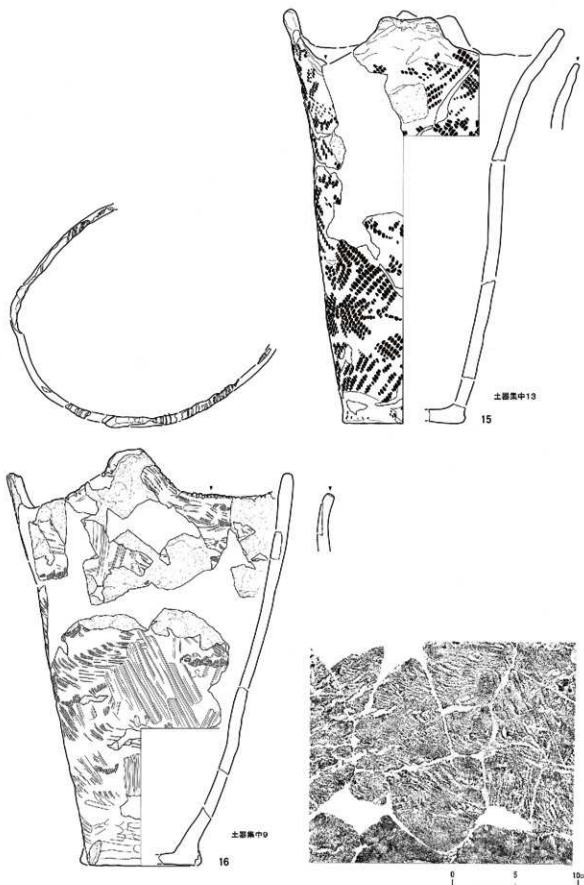
図V-13 包含層出土のⅢ群a類土器(4)



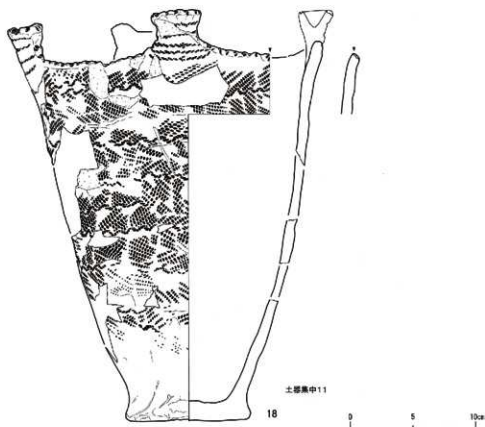
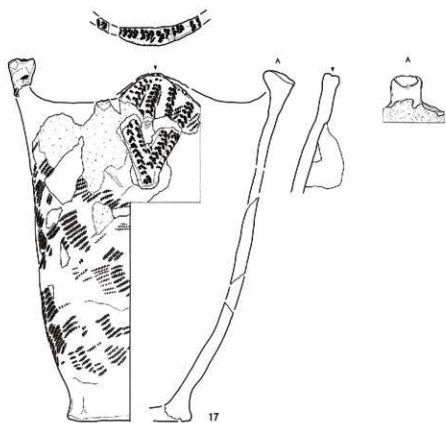
図V-14 包含層出土のⅢ群a類土器(5)



図V-15 包含層出土のⅢ群a類土器(6)



図V-16 包含層出土のⅢ群a類土器(7)



図V-17 包含層出土のⅢ群a類土器(8)

① 平縁のもの (50)

50は胴上半部までの2分の1が残存する。口縁部やや厚みがあり、まるみを帯びた角形である。結束の縄は一方に0段多条の縄を使用している。

② 平縁で4か所に小さな貼り付けあるもの (8)

8は「土器集中4」のもので、大き目の破片がほぼ一か所にまとまっていた(図V-3)。口縁の一部分を除き底部までのほぼ全体が復元された。口縁部が外反する器形のもの。細い0段多条の原体が使用されている。口縁部は粘土紐を貼り付けわずかに肥厚させ、4か所に2個一對の円形の貼り付けを施している。貼り付けは親指大に楕円形に凹が付けられている。口唇には先端が二つに割れているヘラ状工具による刻みと縄の圧痕があり(図裏面)、まったく施文されない部分もある。口縁部付近は指で調整した跡が残り凹凸がある。胎土に鉱物、白色岩片、2mmほどの砂粒の混入が著しい。

③ 比較的大きな台形状突起部を有するもの (15、53)

15は「土器集中13」から出土した(図V-6)。全体の5分の3ほどが残存する。突起部は指頭等で調整され緩やかにくぼんでおり、二つの山形になっているものが1か所ある。口唇上に施文はなく調整され丸みを帯びた角形、薄手になるところがある。53a~fは口縁部から底部までの破片を図上で復元したもの。突起部の中央には孔が穿たれている(53a)。口唇断面は角形で、一部折り返して肥厚させている部分がある(53e・f)。口唇には縄文が施文されているが無文のところ(53b)もある。

④ 棒状、小さな方形の突起部のあるもの (21~23、27)

21、22は胴部がやや膨らむ器形のものである。21は図V-16-16と混在して「土器集中9」から出土した(図V-5)。底部の張り出しが強い。突起部1か所のみが残存している。口唇直下のやや広い範囲を無文とし、突起の下部に粘土を貼り付けた跡が2個対で残っている。内外面共に調整は丁寧である。22は全体の半分ほどが残存している。破片19点は広範囲に広がっており、30~40m離れた破片が接合している。口唇断面は切り出し形で、方形の突起部は粘土を貼り付け肥厚させ口唇上同様の施文がある。胎土に石英等の鉱物の混入が顕著である。

23は突起部をわずかに肥厚させ無文としている。27は「土器集中1・2」から出土した(図V-2)。口縁部は半分程しか残っておらず、3か所に突起部あるいは波頂部の兆しが見られる。23、27の口唇断面は尖り気味で施文は無い。

c-2類 結束第2種羽状縄文のもの (18、24~26、30)

これらは棒状、小さな方形・舌状の突起があるものである。突起下に小さな粘土瘤を貼り付けるものがある(24、30)。口唇内面から口唇上にはいずれも縄の圧痕が施されている。

18は「土器集中1」から出土したもので(図V-2)であるが破片は広範囲に散在していた。上面観が楕円形を呈するもので全体の5分の4ほどが残存する。底部は比較的大きい範囲が無文となっている。肥厚させた棒状の突起部は頂部に大きな凹みがあり、縄線が5条押捺されている。体部の原体を用いたもので、突起中央の真下に結束部が当たるように施している。胎土、色調や表面の粘土の剥離の具合が16と非常に良く似ている。24は突起部は一部しか残っていないが、2個一對となる小さな突起があるものと見られる。突起下にはわずかに粘土瘤が残り、楕円形の貼り付けがあったことが剥離痕から知られる。18、24の内面調整は非常に丁寧である。

25、26は半円状の突起部を有するものである。いずれも口唇断面は尖り気味で、口唇上から内面にかけて施文される縄の圧痕は2条を1単位としている。26は胴下半部から底部にかけての磨きが顕著である。25はO-18区の「土器集中10」、26は5mほど離れたN-17区の「土器集中8」から出土し

たものである(図V-5)。これら2つは大きさ、胎土、文様の施文の調子が非常に良く似ている。

30は底部がやや強く張りだし、胴部の影らみが無く直線的にたちあがる器形のもの。突起部を肥厚させ内側には指頭によると見られる凹みがある。周辺には口唇同様の圧痕を施し、突起下の扁平な粘土層では横位に押されている。地文は口縁部付近では羽状を構成するが、胴部では結束部分と斜行縄文のみが施文される部分もある。残存する2つの突起部では縦方向に回転施文されている。胎土に海綿骨針の混入が顕著である。

c-3類 斜行縄文のもの(11-14、16、17、51、52)

R Lの縄文のもの(11、14、51、52)、L Rの縄文のもの(12、17)、結束のある斜行縄文のもの(13)、自縄自巻的縄文のもの(16)がある。口唇には縄の圧痕(14、17、51、52)、ヘラ状工具での刻み目(12、16)、棒状工具での刻み目(11)、縄文の施されるもの(13)がある。平縁のものでは口唇断面は切り出し形である。

① 平縁のもの(13、51)

13は「土器集中1・2」から出土したもの(図V-2)。全体の5分の3ほどが残存する。口唇直下と底部を除きほぼ全面に丁寧に施文されている。内面も底部まできれいに調整されている。胎土に白色岩片が少し混入する。51a・bは太目の原体による縄文が粗く施文されるもので、胎土には径2、3mmの小砂利が多く混じる。

② 平縁で4か所に小さな突起や貼り付けがあるもの(11、12)

11は「土器集中5」から出土したもの(図V-4)。口縁部から胴下半部まで接合したものと底部片を器高を想定し復元したもので、図の裏側はほとんど欠損している。口縁部が比較的強く外反する器形のもので、平縁ではあるが少し波打つ部分もある。4か所の突起はごく小さな方形で頂部が凹んでいる。口唇の刻みは深く付けられ、意図的かどうかはわからないが爪による刻みのある部分もある。胎土の小砂利が抜け落ち小さな孔があいている。部分的に炭化物が付着する。12は底部がごく一部しか残っていなかったもので、11と同様に高さを推定し復元した。小さな台形状の突起の下に粘土をつまみ出して成形されたかのような貼り付けがある。突起は1個しか残っていないが4か所にあったものとみられる。比較的太い原体による縄文が施されている。胎土に小砂利が混じる。

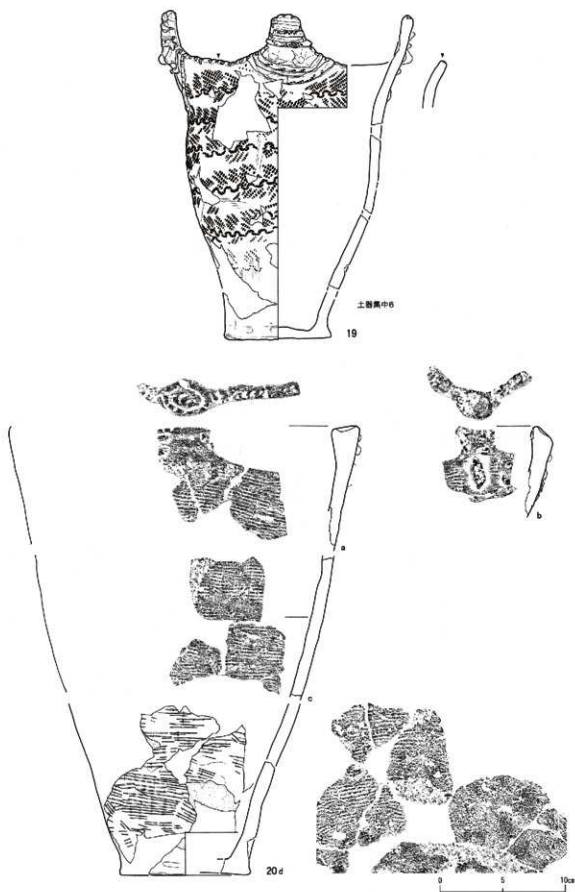
③ 比較的大きな台形状の突起部があるもの(14、16)

14は「土器集中3」から出土した(図V-3)。底部と胴部の一部を欠損するが全体の4分の3ほどが残存する。口唇断面は切り出し形で、突起部中央には楕円形の孔が穿たれている。器面の所々に竹管状工具の背面での調整跡が横位に観察される。内面は凹凸が著しい。

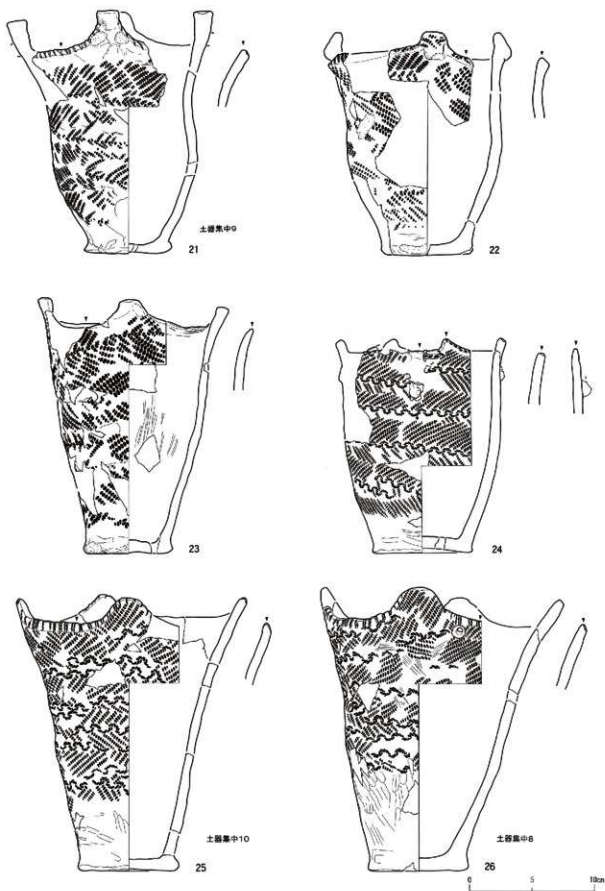
16は「土器集中9」から出土したもの(図V-5)。全体の4分の3ほどが残存する。図手前から後方に大きく傾き、さらに胴部から上半分は手で扶んで押しつぶしたかの様になっており、上面観は楕円形である。復元された中では最も歪な土器である。器面は剥落が著しい。突起部は14のものよりも小さめで2か所残存している。施文は浅く、無造作になされている。右下がりや横走するものなどがあり、0段1の縄を自縄自巻的に巻いた縄を原体としたとみられ、2条ずつが並列して燃糸文のように見えるところがある。部分的に結節の回転も加えている。施文後、幅5、6mmほどの先端がさくくれたヘラ状工具で器面を粗く調整している。胎土に白色岩片、鉱物が混じる。

④ 棒状、山形、方形の突起部のあるもの(17、52)

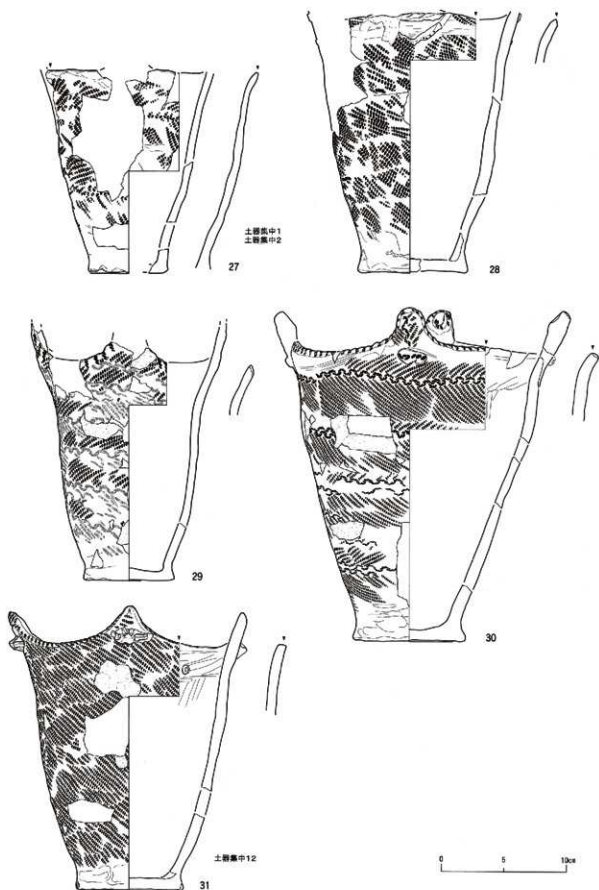
17は口縁部から底部までの4分の3程が残存する。突起部は3か所残っており、2種2対になるようである。一つは山形でもう一方は棒状である。前者では真下には上位が「Vの字」様に二又の把手状の粘土紐が貼り付けられ、この部分で肥厚させた口唇に1段の縄を折り曲げて押捺した圧痕が付け



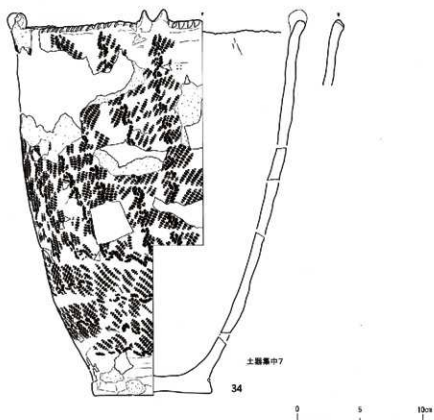
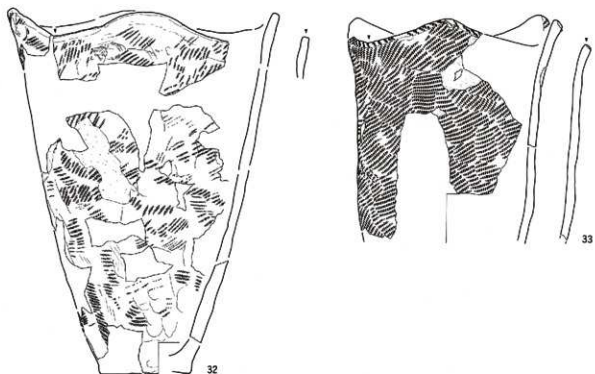
図V-18 包含層出土のⅢ群a類土器(9)



図V-19 包含層出土のⅢ群a類土器(10)



図V-20 包含層出土のⅢ群a類土器(11)



図V-21 包含層出土のⅢ群a類土器(12)

られている。後者では頂部を凹ませその内の1か所には縄の押捺がある。器面は剥落した部分が多く、胎土に混入していた小砂利が抜け落ちた小さな孔が無数にあるが、内面は平滑に調整されている。52 a～eは底部はないが、図上で器形を復元したものである。突起部(52 a・bと52 d)の形状は違わないが一方には縦位にやや長めの縄の圧痕がある(52 a・b)。突起下には横位に粘土紐が貼り付けられていたようである。

c-4類 縄文地に結節の回転が加えられるもの(29、34)

29は全体の2分の1が残存する。2つ残る突起部は上部が欠損している。25・26に類する形態とみられる。LR原体による斜行縄文に1段Rの縄の結節の回転を加えている。この際右下がり無節の縄文も施文することで単節と無節の羽状縄文になった部分がある。口唇断面は尖り気味では縄の圧痕が深く付けられている。

34は「土器集中7」から出土したもので、全体の3分の2ほどが残る。底部が張り出し胴部がやや膨らむ器形のもの。口縁部の4か所に指でつまみ上げたような小さな貼り付けが2個一対である。口縁部から胴下半部まではRL原体による縦行気味の縄文に結節の回転を同じく縦方向に、ほぼ等間隔で施文している。底部付近では斜行縄文で結節の回転も横位に加えられているが上部ほどは明瞭ではない。口唇断面は角形でヘラ状施文工具での深い刻みがある。焼成良好で胎土に鉱物の混入が顕著である。胴部上半の広い範囲に炭化物が付着する。

d類 魚骨回転文のもの(20 a～d)

20 a～dは底部以外は復元できなかったもので図上で器形を想定した。底部から直線的に立ち上がるもので、器形の類似する18と比較すると、底径が5mmしか違わないことからほとんど同じか幾分大きめであろう。ニシンタイプの椎骨を原体とした回転文がほぼ全面に施されている。突起部は2個残存している。いずれも棒状で一つは肥厚させた頂部を凹ませ周囲に細い粘土紐をめぐらせている。その直下にも貼り付けがあったようである(20 a)。もう一方は半分ほどの大きさの小振りのもので、同様の粘土紐と縦に短い貼り付けがある(20 b)。口唇上と頂部の凹み(20 a)には縄の圧痕があるが頂部のものはU字状に曲げて押し付けている。胎土は白色岩片や鉱物が多く、小砂利の抜け落ちた痕が無数に見られる。

e類 その他全体の文様構成は不明である口縁、突起部の破片(56～60)

口唇上に縄の圧痕(56、57)、ヘラ状工具による刻み(58)、縄端による刺突文(60)がある。56は口縁部に沿って縦絡文が加えられるもので突起の頂部に縄をコイル状に巻いた馬蹄形圧痕文が施されている。本遺跡から出土した中で唯一馬蹄形圧痕が施文される例である。58は薄手のもので縦絡文が2条ある。59は口唇に沈線が施文されるもので、60は口唇直下が斜行、その下が横走する縄文のもの。59、60は新しい段階のものである可能性がある。

f類 ミニチュア土器(66、67)

66 a～cは無文のもの。小さいながらも突起部を肥厚させるなど丁寧に作り出されている。

2) 見晴町式に相当するもの(31～33、54、55、61～65)

器形のわかるものでは、3か所ないし4か所に緩やかな波頂部を有するもの、4か所に山形突起部を有するものがある。底部からほぼ直線的に立ち上がる器形のもので、底部の狭い範囲を無文にするが、前段階ほどは張り出さない。突起部下には小さな貼り付けがあるもの(31)、頂部に刺突や凹みを加えるもの(54、55)がある。地文は主に斜行縄文(31～33、54)、縦行気味の縄文(55)である。口唇断面は角形で施文されるもの(31、33)もみられる。破片資料ではあるが縄文地、無文地に沈線

で文様を描くものがある(61~65)。

31は「土器集中12」出土のもの(図V-6)。底部と胴部の一部を欠くほかほぼ全体が残る。胴部がやや膨らむもので、0段多条の原体による縄文が口唇上から底部付近にまで施文されている。底部付近は指頭での調整で凹凸が著しい。4か所にやや高さのある貼り付けがあり上位と両側面には棒状工具による刻みがある。32は4か所に緩やかな波頂部のあるもの。器高を想定して口縁部と胴部以下の破片を復元したもので全体の2分の1ほどが残存する。色調はにぶい黄橙色で、胎土に海綿骨針が顕著であることも含め、ほかのⅢ群a類土器とはやや趣を異にするものである。細い0段多条のLR原体を口縁部から胴部までは横位に、胴下半から底部では縦位に施しているが帯状になっているところもある。全体に回転方向に規則性が無く、疎らに施文している様子が伺える。口唇上と口唇直下は意識して作り出され、一部口唇上にも施文される。底部付近では施文後の磨り消しで凹凸が著しい。33は口縁部が全周しないが、胴部の大きさからみて3か所に波頂部があると見られる。胴部はあまり張り出さない。縄文は器面に密に施文され横走気味のところもある。波頂部をやや肥厚させ刺突文を加えている。全体に炭化物が付着している。54は色調が灰褐色を呈するもので、肥厚させた頂部に深い刻み目状の刺突がある。55a・bは胎土に白色岩片、小砂利が多いもので器面の剥落が著しい。54、55には海綿骨針は混入しない。

61は角形の口唇上に刺突文があるもので、口縁の波形に沿うかとみられる直線的な沈線が見られる。62~64は口唇断面が尖り気味のもので浅く施文された縄文地に弧線で文様が描かれている。62、63は緩やかな波状口縁。64a・bはL原体の無節の横走気味の縄文が浅く施されている。65は61~64とは趣きが異なり胎土に鉱物を含むが、海綿骨針が含まれない薄手のもの。縄文地かとみられ2条ないし3条の沈線文で渦巻き、舌状の文様がある。新しい段階のものかもしれない。

Ⅲ群b類(図V-22・25・26-35-37・68-76 図版29・30・33・34 表V-1・2)

948点出土した。これらは複林式、元和D群に関連の認められるものである。復元された3個体を含め破片の9割以上が前述の③調査区北側の沢地形部分から出土している(図V-1)。

平縁や複数か所に頂部のある波状口縁のものがある。器形はまっすぐに立ち上がり口縁部がやや外反するもの(35、36)、底部からほぼまっすぐに立ち上がるもの(37、75)、胴部が比較的強く張り出し頸部がくびれて口縁がゆるく外反するものがある。いずれも底部は狭い範囲を無文とし、あまり張り出さない。口唇の作り出しが明瞭で内面から口唇直下にかけて磨いて無文とすることが顕著に認められる。口唇上に刺突文と沈線を引くもの、縄文、熱糸文のみのもの、体部に沈線で文様を描くものがある。

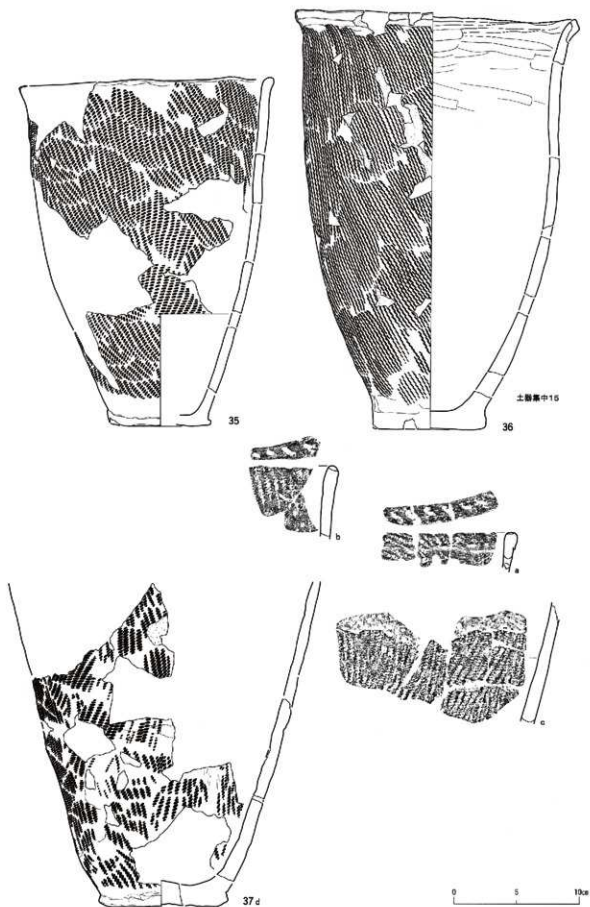
1類 やや肥厚させた口唇上に沈線文をめぐるもの(68~73)

68はLR原体による横走気味の縄文のもので台形状の頂部の刺突から左右に幅広の沈線が浅く引かれる。胎土に海綿骨針の混入が顕著である。69a~dは平縁と見られ、R原体による無節の縦行縄文が施されている。口縁部の破片(69a)のうち1点は90m以上離れた地点から出土したものである。

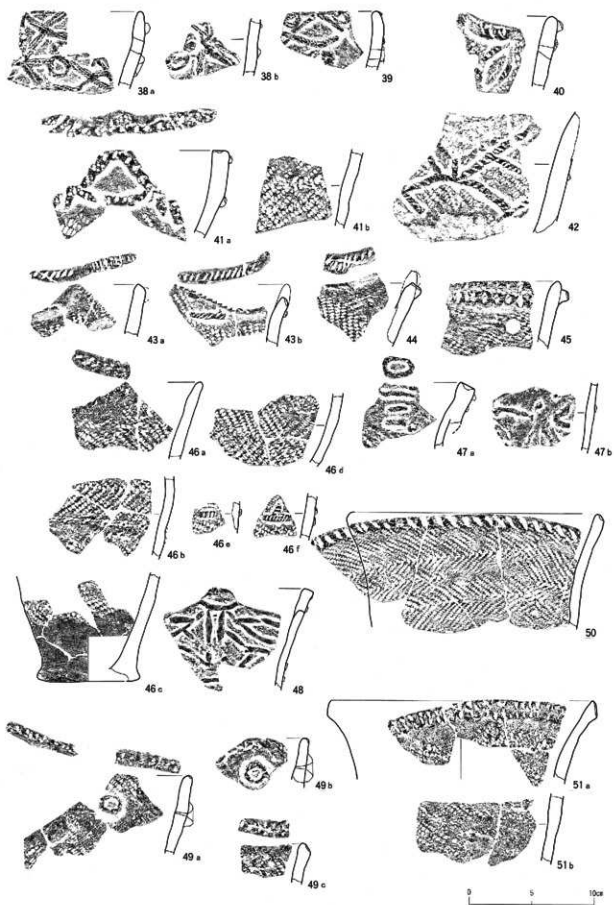
70は波状縁のもので頂部に凹み状の縦の刺突が加えられている。71は縄文地に沈線による文様があるものであるが、器面にヌメリがあり大きさに比べ軽い土器である。73には縄文がある。

2類 縄文のみもの(35、37、74)

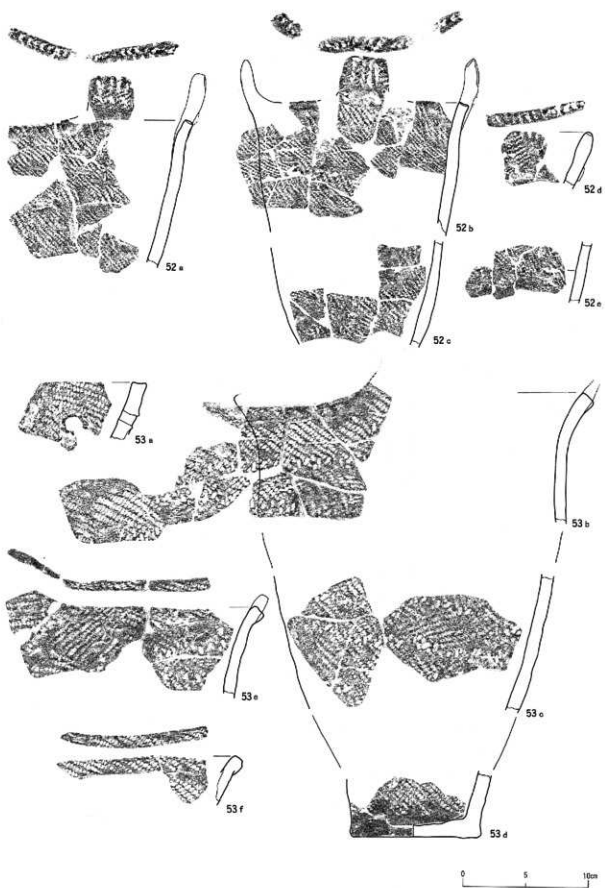
35、37は0段多条のRL原体による縦行縄文、74はLR原体による斜行縄文のもの。35は全体の3分の2が残存する。口唇断面は丸みを帯びる。底部は幾分粘土が外側にはみ出るところがあるけれど、本来的には張り出さないであろう。縄文は底部付近では斜行気味となっている。口縁部から胴上半



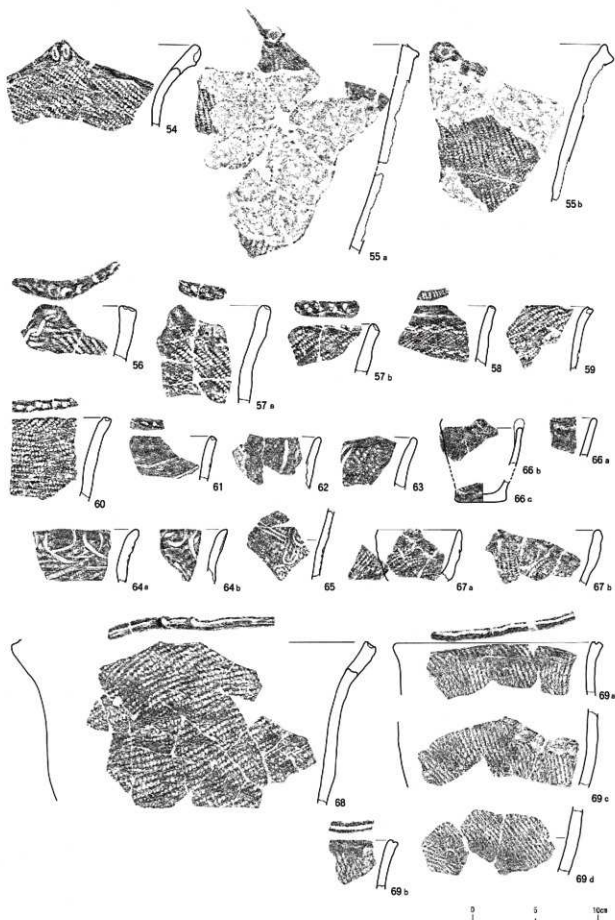
図V-22 包含層出土のⅢ群b類土器(1)



図V-23 包含層出土のⅢ群a類土器(13)



図V-24 包含層出土のⅢ群a類土器(14)



図V-25 包含層出土のⅢ群a類土器(15)・Ⅲ群b類土器(2)

部には炭化物が付着する。36と同様に丁寧に施文、作られている土器である。37a～dは破片は多くあったが復元できたのは胴部下半から底部までの一部分である(37b)。器高は30cmを超えるであろう。口縁を折り返しやや肥厚させ、その下をヘラ状工具でなぞって無文にしている(37a)。口唇上には縄端による刻みが付けられている。海綿骨針が混入している。

74a～cは破片は多数あったが接合できなかったのもので図上で復元した。2か所に緩やかな山形の波頂部があるが口縁は全体に波打っている。底部はやや張り出し気味である。縄文は粗く施文されている。胎土に小砂利が多く混じる。

3類 燃糸文のみのもの(36、75)

36は「土器集中15」から出土したもので(図V-7)、ほぼ全体が復元された。口唇は丁寧に作り出され断面は切り出し形を呈する。R原体を密に右巻きにした筋が間のびする燃糸文が丁寧に施文されている。内面はヘラ状施文具による横方向の調整痕が明瞭に残る。胎土に白色岩片や小砂利が混入し、それらが抜け落ちた孔が顕著である。海綿骨針は混入しない。口縁部から胴半ばまで炭化物が付着する。75a～eは破片が広範囲から出土しているが、2割ほどしか接合できなかった。口唇の作り出しはあまり明瞭ではなく、丸みを帯びるところと尖り気味のところがある。小さな山形の波頂部があり、原体はRの縄を緩く間隔をあけて巻いているものである。条が交差するところ(75d)、口縁部付近では横走するところがある。底部は比較的広い範囲が無文である。炭化物が付着する。胎土は粗く、径2mm前後の小砂利が多く混じるが、海綿骨針は認められない。

4類 胴部に垂下する沈線文や縦に蛇行する線、渦巻き文で文様が描かれるもの(76a～e)

口縁と底部を欠くが74に類する比較的胴部の張り出す器形(76d)になるとみられる。76a・cに横走する沈線文が2条認められ、これらは頸部の括れる部分をめぐるとみられる。少なくとも口縁部から垂下する文様が3単位ある。体部は燃糸文を重複施文し網目状になっている。焼成良好で胎土に海綿骨針がわずかに混じる。

Ⅲ群土器の底部(77～90)

ほとんどはⅢ群a-3類のものとみられる。86～90は同一個体のもので表面がにぶい黄褐色、内部が黒褐色を呈する破片で大きさに比較し軽く、硬質な感じのするものである。全体にヌメリがあり胎土に海綿骨針は混入せず、小砂利が顕著である。Ⅲ群b類の口縁部71に良く似ている。

(2) 縄文時代後期の土器

Ⅳ群a類(図V-27-91a～c 図版34 表V-3)

34点出土している。調査区北側の沢地形部分にややまとまっている。91a～cは破片の大部分がⅢ層1回目、2回目の調査で出土した。器高は30cmを超すとみられる大型のもので、焼成が非常に良く厚さは5mmと薄手である。口縁のごく一部と胴部の破片がある。口縁部に沿って幅の狭い扁平な粘土紐をめぐらせ口唇上を平滑にナデ調整している。0段多条のLR原体による縄文が丁寧に施され、口縁部では縦方向に施文し条の向きを変えている。胎土に長石などの混入が顕著であるが、海綿骨針は含まれない。炭化物が付着している。天祐寺式に相当するものである。

Ⅳ群b類(図V-27-92～94 図版34 表V-3)

5点出土している。いずれも無文の口縁部、胴部の破片である。92a・bは頸部がくびれ外反するもの。この破片にのみ海綿骨針が混入する。胎土や口縁部の形状から手桶式相当のものと考えられる。

(3) 縄文時代晩期の土器**V群 c 類 (図V-27-95 図版34 表V-3)**

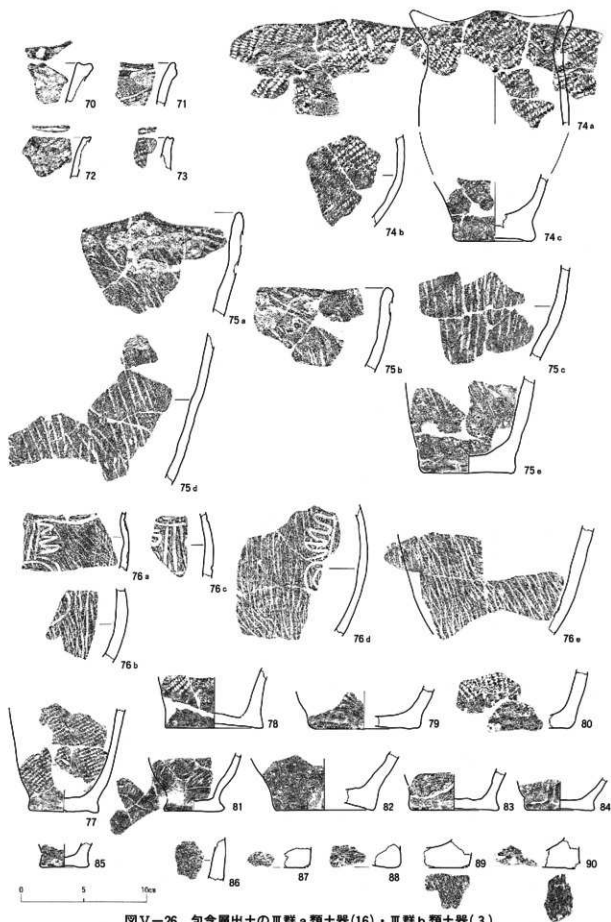
34点出土している。調査区中央部南側に2か所のまとまりがある。95はG-21-c区Ⅲ層1回目の調査で出土した。あらかじめ0段多条のLR原体による斜行縄文を全体に施し頸部の沈線の施文範囲のみを磨り消している。口縁部には形状は異なるがいずれも二つの山のある突起が3か所にある。頸部の上位と下位の沈線文の突起に対応する位置には小さな2個1対の貼り瘤が、刻みを入れただけの突起では1個あり、各の沈線はそこから配されている。貼り瘤はいずれも扁平である。蝶ネジ状の突起下では貼り瘤の間も沈線で三角形に刻むことで一見宇字文風となっている。内面にも突起の形状をなぞるようにして太いへら削りの沈線文が1条めぐっている。胴部では上下2条の沈線で区画された中に弧状の線で文様が描かれている。非常に焼成が良く、器面には黒色物質の付着が認められる。尾白内I群(千代肇1981)に関連するとみられ、大洞A式の中でも最も新しい段階に位置付けられる可能性がある。

(4) 続縄文時代の土器**VI群 (図V-27-96~99 図版30・34 表V-4)**

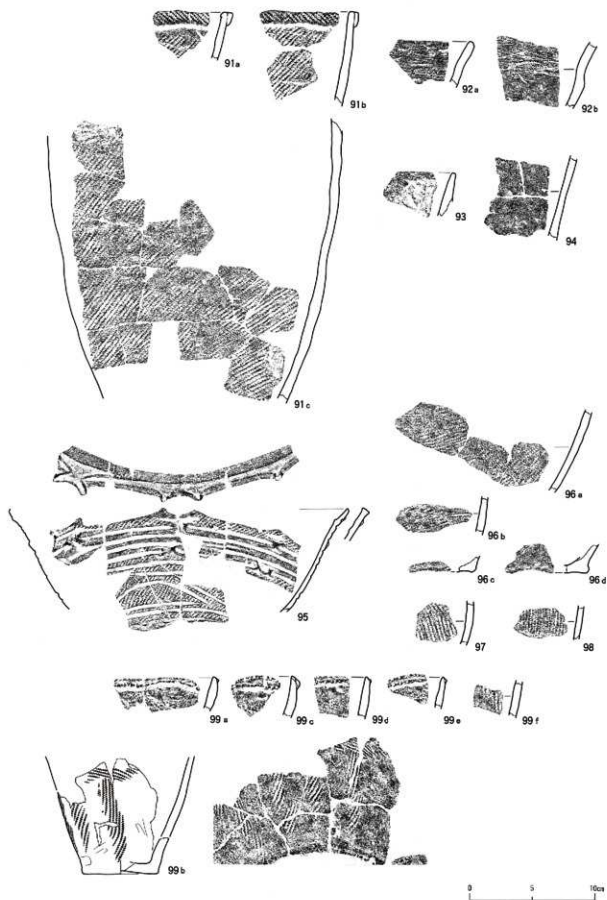
69点出土している。96a~dは調査区の南端標高37m前後の地点、北西から南東に延びている「管理用道路部分」のⅢ層2回目でややまとまって出土したものである。破片は多くあったがほとんど接合されなかった。0段多条の細い原体による斜行縄文が施されている。やや上げ底気味である(96d)。97、98は縦行縄文のもので、これらは恵山式に相当するものとみられる。

99a~dは調査区北側の沢地形部分のⅢ層1回目で出土した。口縁部の破片は多数あったが接合できなかった。緩やかな山を持つ波状口縁の小型の鉢形土器。わずかに上げ底である(99b)。器高は15、6cm程度とみられる。口縁部は幅1cmほどの範囲が無文で、口唇直下に1条微隆起線をめぐらせ口唇上と微隆起線上には断面が三角形の刻みを入れているが、施文されない部分もある(99a)。99cでは口唇を肥厚させ波頂部の中央に切り込みが付けられている。胴上半では横走る縄文が(99d)、胴半ばから底部では縦行、やや斜め方向に間隔をあけて帯状に施文されている(99b)。内外面の調整は余り丁寧ではなく、後から貼り付けた粘土の塊がいくつも観察される。底部付近に炭化物が付着する。胎土には1、2mmほどの小砂利、海綿骨針が混入する。後北C₂・D式に相当するものである。

(遠藤香澄)



図V-26 包含層出土のⅢ群a類土器(16)・Ⅲ群b類土器(3)



図V-27 包含層出土のM群a類・N群b類・V群・VI群土器

2 石器等

今回の調査により包含層から出土した石器、礫・礫片、土・石製品の総数は925点である。定形的石器について接合・未接合を問わず同一個体と判断したものを1点として計算すると総数は694点である。

剥片石器群では石鏃、石槍またはナイフ、つまみ付きナイフ、スクレイパー、石核、Rフレイク、Uフレイク、フレイクが出土した。石錐、両面調整石器は出土していない。磨製石器群では石斧が出土した。擦り切り残片、研磨石材、石のみは出土していない。礫石器群ではたたき石、すり石、半円状扁平打製石器、北海道式石冠、砥石、台石・石皿が出土した。石鏃、石錐は出土していない。

石器群毎の内訳は剥片石器群209点、磨製石器群11点、礫石器群705点である。個体数では剥片石器群208点、磨製石器群10点、礫石器群460点で土製品3点、石製品1点、その他13点である(表I-3)。

個体数を対象とした包含層に占める器種毎の割合は剥片石器群ではフレイクが40.4%を占め、スクレイパー26.4%、Uフレイク17.3%と続く。フレイクを除く剥片石器群の割合はスクレイパー44.4%、Uフレイク29.0%、Rフレイク13.7%、石鏃・つまみ付きナイフ5.6%、石槍またはナイフ・石核0.8%である。フレイクが少なく、定形的石器の占める割合が比較的高いことが特徴である。

礫石器群では礫・礫片が73.3%、台石・石皿8.5%、たたき石8.0%と続く。礫・礫片を除く礫石器群の割合は台石・石皿31.7%、たたき石30.1%、半円状扁平打製石器23.6%、すり石10.6%、砥石2.4%、北海道式石冠1.6%である。台石・石皿は明瞭な使用痕が認められないものも含んでいるため数が多くなっている。それを除くと、北海道式石冠が非常に少ないことが特徴である。

本遺跡では住居跡が2軒確認されたが、いずれも規模が小さく仮小屋の要素が強いものである。そして、Tピットの存在および、スクレイパーや石鏃、つまみ付きナイフなどの剥片石器群が多く、北海道式石冠が少ないことから、本遺跡は定形的要素が少なく、主に狩猟場としての傾向が強いと推測される。石核・フレイクが少ないこと、剥片の一部を加工したり使用したRフレイク・Uフレイクが多いことも非定住性を裏付けるものと考えられる。

剥片石器群の石材は頁岩がほとんどを占め、めのう、黒曜石、流紋岩が少数あった。なお、出土した8点全ての黒曜石について原産地分析を行った(第VI章2)。その結果、全て赤井川産であった。最も遺跡に近い豊浦町の豊泉産のものは無い。磨製石器群では緑色泥岩が多く、粘板岩、泥岩が各1点あった。礫石器群では安山岩が多く、石英斑岩、砂岩、軽石が少数あった。

【剥片石器群】

石鏃 (図V-34-1~7、図版35、表V-5)

7点が出土し、全てを図示した。出土点数の分布は図V-28に示した。調査区全域に散在し、周辺から遺物がほとんど出土しないグリットでも石鏃だけが出土する例がある。

1は木葉形に近い無茎鏃(IA4)。2~7は有茎鏃(IA5)で2~6は凸基、7は平基である。3・4・6・7は尖頭部を、7は基部も欠損する。石材は1が黒曜石で、原産地分析によると赤井川産である(VI章2、分析番号82668試料番号1)。その他は全て頁岩である。

石槍またはナイフ (図V-34-8、図版35、表V-5)

1点がK-36-b区から出土した。8は有茎のもの(IB1)で一次剥離面を残す。石材は頁岩である。

つまみ付きナイフ (図V-34-9~15、図版35、表V-5)

7点が出土し、全てを図示した。出土点数の分布は図V-28に示した。土器が比較的多く出土する区域にまとまる傾向がある。

9・10は片面の周縁を加工したものの(ⅢA1c)。9は両側縁に刃部を作出している。11・12は横型もしくは斜形のもの(ⅢA3)。12のつまみ部は礫面を残す。13~15は素材の剥片の形状を大きく変えず、つまみ部を作出したもの(ⅢA4)。いずれも明瞭な刃部は作出されていない。石材はいずれも頁岩である。

スクレイパー (図V-34-37-16~51、図版35・36、表V-5)

55点が出土した。分類別の内訳はⅢ群B2a類23点、Ⅲ群B2b類11点、Ⅲ群B2c類4点、Ⅲ群B3a類1点、Ⅲ群B3b類6点、Ⅲ群B3c類1点、Ⅲ群B6類1点、Ⅲ群B7類1点、Ⅲ群B8類4点、Ⅲ群B9類3点である。この内36点を図示した。全て片面加工である。出土点数の分布は図V-28に示した。調査区全域に散在しているが、斜面上方、下方およびその中間部の大きく3ヶ所に分布が分かれる。土器が比較的多く出土する区域にまとまる傾向がある。

16~29は縦長剥片を用い側縁を加工したもので刃部が外湾するもの(ⅢB2a)。17は下側縁に、19・22・26・27は両側縁に刃部が作出されている。24は安山岩?の円礫の剥片を用いたもの。30~36は直線状のもの(ⅢB2b)。35は両側縁に刃部が作出されている。37~40は刃部が内湾するもの(ⅢB2c)。38・39は二側縁に刃部が作出され、いずれも内湾もしくは内湾気味である。41は横長剥片を用い、刃部が外湾するもの(ⅢB3a)。42~47は刃部が直線状のもの(ⅢB3b)。48は内湾気味のもの(ⅢB3c)。横長剥片を用いたものはいずれも下側縁に刃部が作出される。49は先端部のあるもの(ⅢB6)。50は挟りこみのあるもの(ⅢB7)。51は素材となる剥片の形状をあまり変えないもの(ⅢB8)。この内、17・23~25・27~31・35・36・39・41・43~45・47・48・51は礫面を、19~21・26・33・34・37・40・46・49・50は節理面を残している。このことから、比較的小さい原石を用いて製作したと推測される。

石材は16・51が黒曜石で、原産地分析によるといずれも赤井川産である(Ⅵ章2、分析番号82669試料番号2、分析番号82670試料番号3)。また17・23・31・32・44・45はめのう、24は安山岩?、47は流紋岩で他は全て頁岩である。

石核 (図V-29)

石核の破片と推測されるもの1点がI-29-d区から出土したが、小破片のため掲載していない。石材は頁岩である。

【磨製石器群】**石斧** (図V-37-52~56、図版36、表V-5)

器表面の剥落した破片を含めて10点が出土した。分類別の内訳はⅥ群A2類1点、Ⅵ群A4類4点、破片などのⅥ群A9類5点である。この内、破片を除く5点を図示した。出土点数の分布は図V-30に示した。調査区全域に散在しており、石礫と同じく他に遺物がほとんど出土しないグリットからも出土する特徴がある。

52は打ち欠きにより形を整え、刃部・側縁などを磨いて製作されたもの(ⅥA2)で、節理面を残す。片刃で偏刃である。53~56は全面磨製(ⅥA4)で、成・整形方法が不明のもの。53・54は片刃で円刃のもの。54にはたき痕も見られる。55・56は両刃で55が偏刃、56は円刃のもの。いずれも基部を欠損する。石材は52が粘板岩、56は砂岩で、その他は緑色泥岩である。

【礫石器群】

たたき石 (図V-38-57-75、図版37、表V-5)

個体数で37点が出土した。分類別の内訳はⅦ群1類25点、3類8点、4類4点である。この内19点を図示した。出土点数の分布は図V-30に示した。37ラインより斜面下方に比較的多く分布する傾向がある。

57-67は棒状礫もしくは扁平礫の一端もしくは両端にたたき痕のあるもの(Ⅶ1)。61は三角錐状の礫の頂部3ヶ所にたたき痕が見られる。62-65は両端に打ち欠きのあるもので、つぶれたたたき痕がほとんど無いか見られないもの。65は腹背面に炭化物が付着している。66・67は端部の他に腹背面の一部にもたたき痕のあるもの。

68-71は扁平礫の腹背面にたたき痕のあるもの(Ⅶ3)。長軸長が短く、たたき痕が基本的に腹背面のいずれかもしくは両面の各1ヶ所で、たたき痕も浅いものを本類とし、Ⅶ群4類と区別した。68・69は円礫に近い小さいものを、70・71は扁平礫を用いている。

72-75はくぼみ石と称されるもの(Ⅶ4)。出土した全てを図示した。いずれも長円形の扁平礫を用い、長軸上に2ヶ所並んで、深くくぼみ状のたたき痕があるもの。74を除いて腹背両面にくぼみ状のたたき痕がある。石材は61が石英斑岩、73は砂岩で、その他はいずれも安山岩である。

すり石 (図V-39-42-76-103、図版38-40、表V-5) すり石については細分ごとに記述する。なお、断面三角形の礫の稜にすり面のあるもの(Ⅶ1)、円礫などの一部にすり面のあるもの(Ⅶ5)は出土していない。

扁平礫の側縁にすり面のあるもの(Ⅶ2) (図V-39-76-83、図版38、表V-5)

13点が出土し、8点を図示した。機能部の打ち欠きが顕著でないもの、周縁の打ち欠きが全周せず長軸両端のみのものは本類に分類した。出土点数の分布は図V-31に示した。38ラインよりも斜面下方でJ~Nラインにはさまれた沢地形部分周辺に多く分布する。

76-83は扁平礫の側縁にすり面のあるもの(Ⅶ2)で、76・77を除きいずれも長軸両端に打ち欠きがある。79は上下両側縁にすり面のあるもの。80は上側縁を打ち欠き半円状扁平打製石器状に加工した。すり面に顕著な打ち欠きが見られなかったので本類とした。石材はいずれも安山岩である。

半円状扁平打製石器(Ⅶ3) (図V-40・41-84-101、図版38-40、表V-5)

個体数で29点が出土した。多くは扁平礫を用い、周縁もしくは片面・両面の全面を半円状に打ち欠いて整形し弦をするものである。なかには平坦なすり面が無く断面形が「V」字状になるものもある。周縁の打ち欠きが全周していないものもあるが、機能部の打ち欠きが顕著なものは本類に分類した。

半円状扁平打製石器は主に製作方法からa~f類に7細分した。a類：腹背面ともに礫面を残し主に機能部のみを打ち欠いたもの。b類：腹背面ともに礫面を残し周縁のみを打ち欠いたもの。c類：図裏面に礫面を残し、更に図正面の一部にも礫面を残しほぼ全周を打ち欠いたもの。d類：図裏面に礫面を残し、図正面の全面を打ち欠いたもの。e類：破片。f類：未成品。個体数29点のうち細分毎の内訳はa類：3点、b類：1点、c類：8点、d類：9点、e類3点、f類：5点である。この内ほぼ全体の形がわかる18点を図示した。出土点数の分布は図V-31に示した。全域に散在して出土しているが、土器の多く分布する周辺にまとまる傾向がある。

84-86はa類でいずれも平坦なすり面があるもの。84・85は機能部の打ち欠きから本類とした。87はb類ですり面の幅は1.6cmと最も広い。88-92はc類で、88を除いて平坦なすり面がある。90の長軸両端には打ち欠きがある。93-98はd類で、この内93-95は一部を除いて平坦なすり面がなく、断面形が「V」字状になるもの、96-98は平坦なすり面のあるもの。96は図右側の破片が被熱し赤褐色

となっている。99～101はf類の未成品。99は周縁を打ち欠き、弦部に若干のたたき痕があるもの。100は弦部が被熱しており、そこを打ち欠いた後、長軸両端に大きな打ち欠きを施したものの。101は扁平礫の周縁の一部を打ち欠いたもの。これらは打ち欠きを重視し未成品としたが、そのまま礫器として機能した可能性もある。石材はいずれも安山岩である。

北海道式石冠(Ⅷ4) (図V-42-102・103、図版40、表V-5)

2点のみが出土し、全てを図示した。出土点数の分布は図V-31に示した。

102・103ともに把握部のみを敲打し、溝を作出したもの。102の機能部にはたたき痕が見られる。103は包含層I-26-c区出土土器(図V-24-53a-f)および111の台石に近接し出土した(図V-7)。石材はいずれも安山岩である。

砥石(図V-42-104・105、図版40、表V-5)

3点が出土し、この内2点を図示した。砥面に溝のあるもの(ⅨB1)は出土していない。出土点数の分布は図V-31に示した。104は凝灰質砂岩製で腹背両面にすり面があるもの。105は軽石製で、擦痕は不明瞭であるが、平坦面が数ヶ所形成されているため砥石と判断した。

台石・石皿(図V-42-46-106～121、図版40～44、表V-5)

破片も含めると250点が出土し、接合したものや同一個体と認識したものを除いて、個体数では39点が確認できた。台石は29点で、この中には使用痕が見られないが、形態・出土状況から台石と推定したものも含んでいる。この内8点を図示した。出土点数の分布は図V-32に示した。調査区全域に散在するが、土器の多く分布する区域の周辺にややまとまる傾向がある。また、平坦なもしくはくぼんだ平滑な面があり、石皿としたものは10点で、この内8点を図示した。分布は図V-32に示した。主に沢地形部分から多くが出土した。

106～113は台石(X)。106は腹背両面に窪み状のたたき痕がある。107は図正面に溝状のたたき痕、図裏面に斜め方向のやや深い擦痕が数条あるもの。108はF-1に一部重なるように出土したもの(図IV-19)で、被熱し2つに割れていた。110はH-2に近接して出土したもの(図IV-6)。109・110はいずれも浅く不明瞭なたたき痕がある。111は包含層I-26-c区出土土器(図V-24-53a-f)および103の北海道式石冠に近接して出土したもの(図V-7)。明瞭な使用痕は確認できないが出土状況から台石とした。図裏面は被熱しており、器表面の多くが剥離している。112は包含層L-16-b区出土土器(図V-12-9、図V-14-11)に近接して出土したもので(図V-4)、浅いたたき痕のあるもの。113は器表面の多くが剥離し、周辺の包含層に散在していたもので、確認できた使用面には斑状のたたき痕がある。

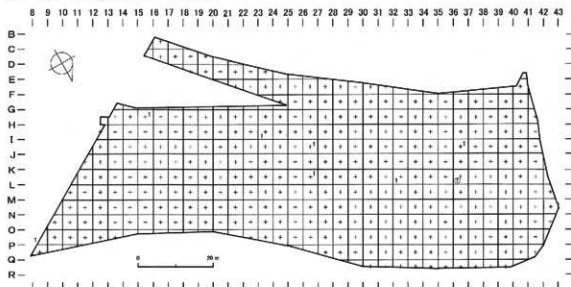
114～121は石皿(X)で、この内117～121は沢地形部分から出土したもの(図IV-20)。114は腹背両面ともにややくぼんだ使用面のあるもの。115・116は擦痕が不明瞭であるが、図正面の一部に平滑な部分があるため石皿としたもの。117・118は若干くぼんだすり面のあるもの。119は凸状の腹背両面にすり面のあるもので、図正面は平滑気味であるが、裏面は凹凸がある。120は一部にくぼんだ使用面のあるもので、器表面は被熱し剥離した部分もある。121は平滑な使用面のあるもので、側縁の一部は被熱し赤褐色を呈している。

石材は119が軽石で、他はいずれも安山岩である。

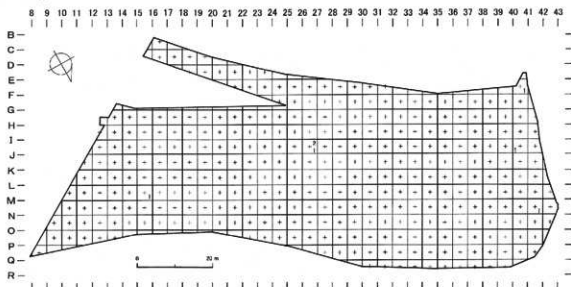
土製品(図V-46-122・123、図版44、表V-5)

122はH-27-c区で5点が出土し接合した土製品。三角錐状で中央部に直径1cmほどの孔がある。胎土には砂が多く入っており、Ⅲ群b類土器に類似する。123は小型の漏斗状の土製品。無文で、若

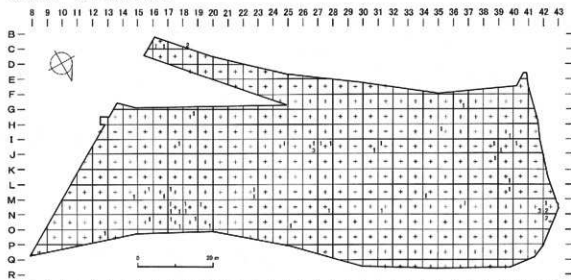
石鏃 7点 石槍またはナイフ 1点(丸数字)



つまみ付きナイフ 7点

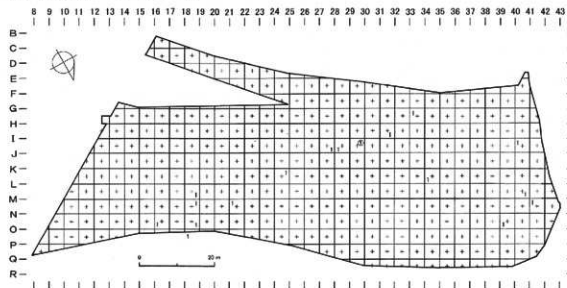


スクレイパー 55点 管理用記録部分: 2点

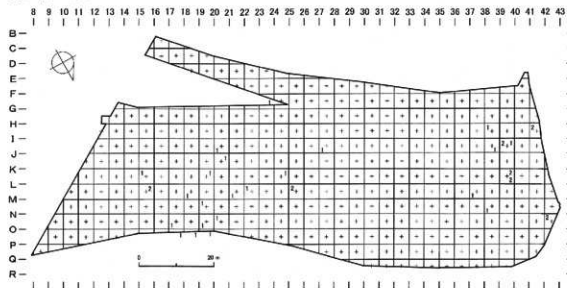


図V-28 包含層出土の石器の分布(1) 石鏃・石槍またはナイフ・つまみ付きナイフ・スクレイパー

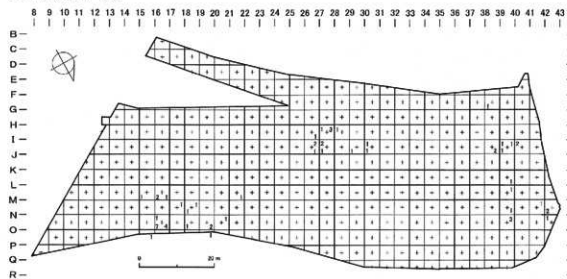
石核 1点 (丸数字) Rフレイク 17点



Uフレイク 36点

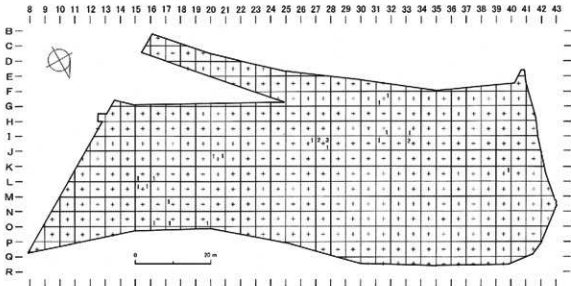


フレイク (頁岩) 59点

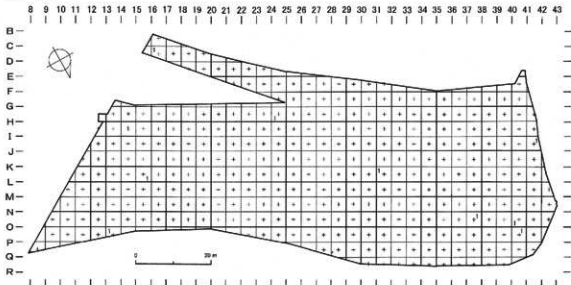


図V-29 包含層出土の石器の分布(2) 石核・Rフレイク・Uフレイク・フレイク(頁岩)

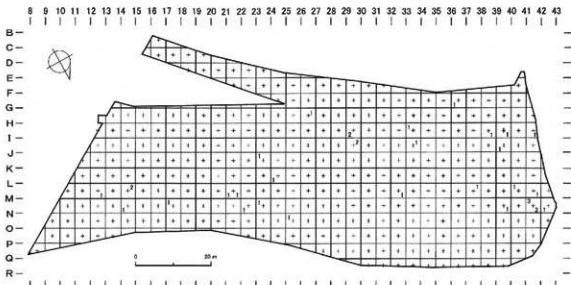
フレイク(その他) 25点 管轄調査範囲部分: 1点



石斧 10点

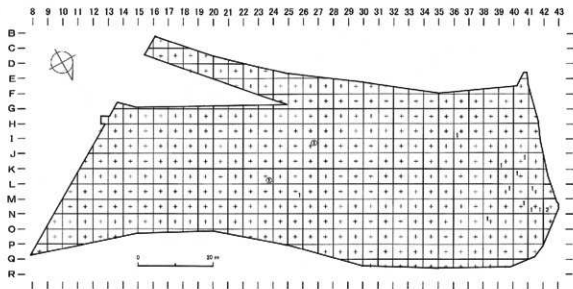


たたき石 37点

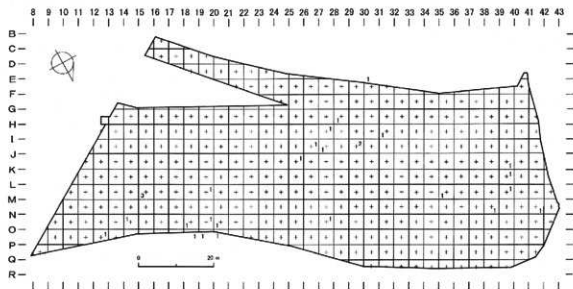


図V-30 包含層出土の石器の分布(3) フレイク(その他)・石斧・たたき石

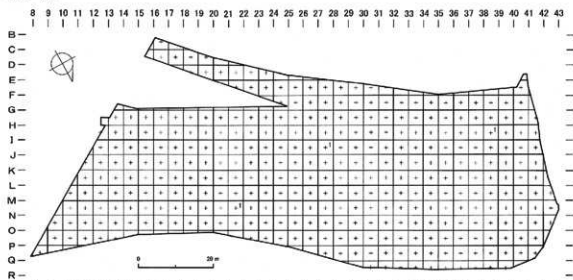
すり石 13点 北海道式石冠 2点 (丸数字)



半円状扁平打製石器 29点 管理用遺物部分：1点

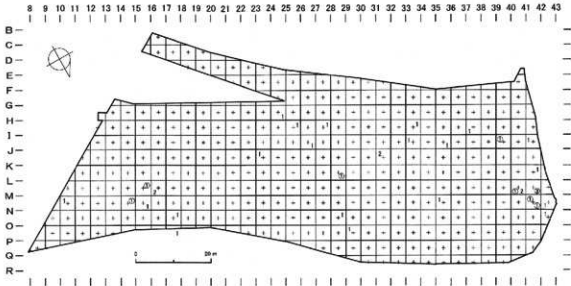


砥石 3点

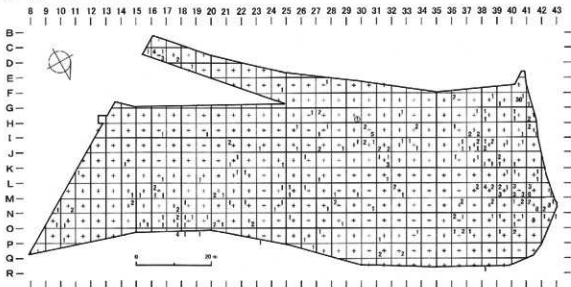


図V-31 包含層出土の石器の分布(4) すり石・北海道式石冠・半円状扁平打製石器・砥石

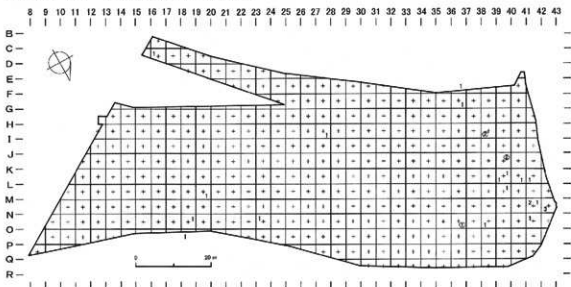
台石 29点 管絃用通線部分：3点 石皿 10点（丸数字）



礫・礫片 304点 管絃用通線部分：18点

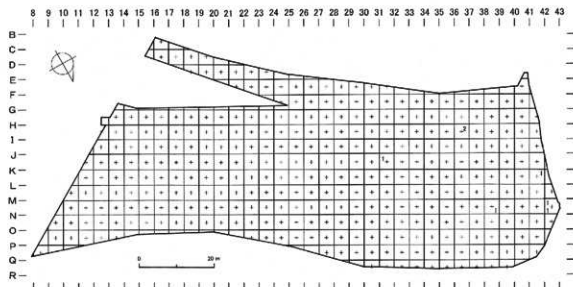


安山岩礫片 21点 泥岩・粘板岩礫片 5点（丸数字）

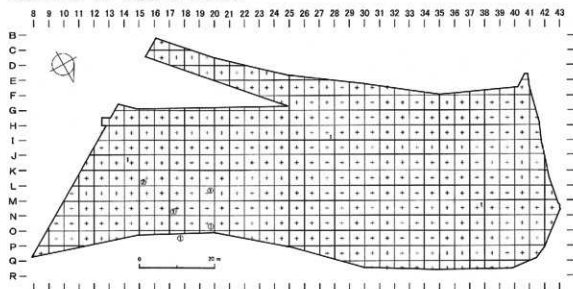


図V-32 包含層出土の石器の分布(5) 台石・石皿・礫・礫片・安山岩礫片・泥岩・粘板岩礫片

軽石 7点



土製品・石製品 3点 焼成粘土塊 6点 (丸数字)



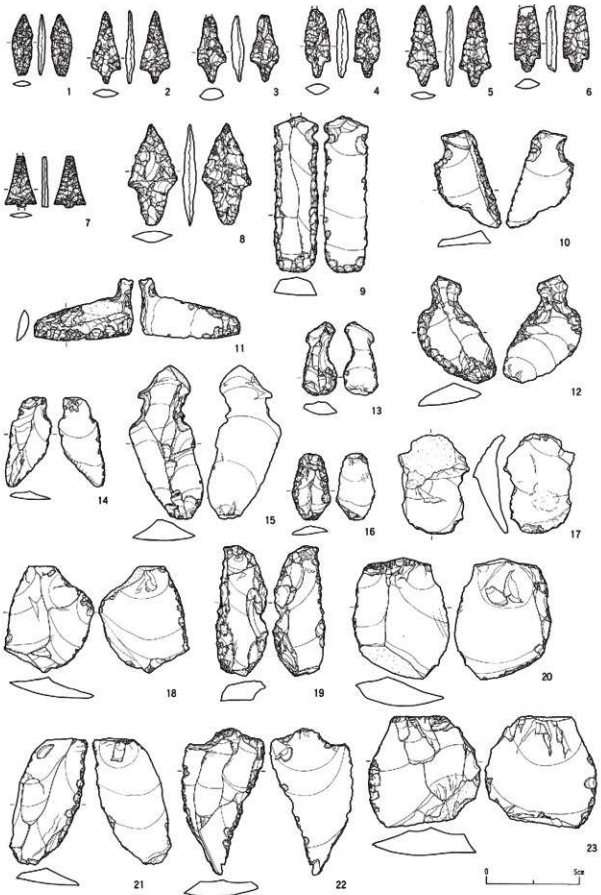
図V-33 包含層出土の石器の分布(6) 軽石・土製品・石製品・焼成粘土塊

干内湾気味にすぼまる器形である。

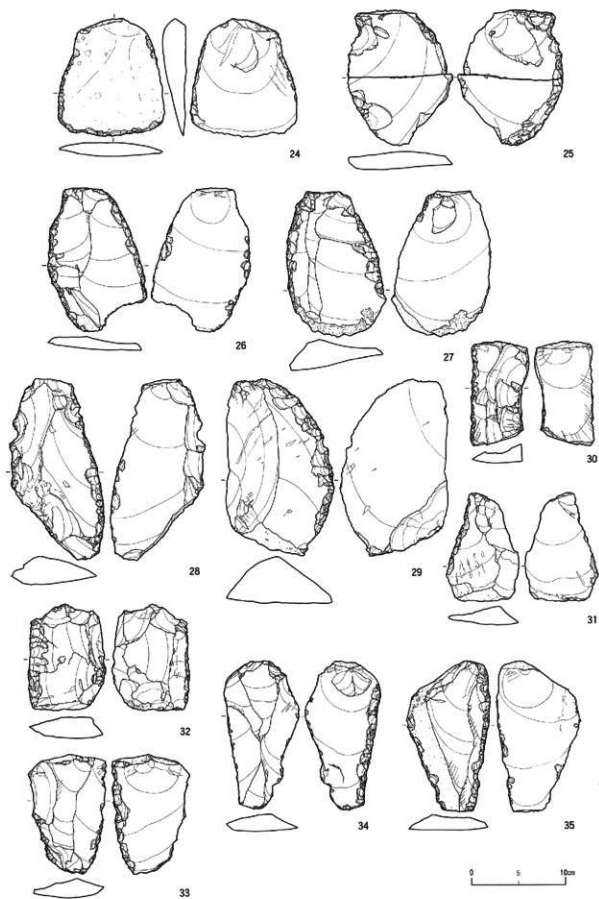
なお、他に土製円盤の可能性のある土器片も出土したが、小破片であったため掲載していない。

石製品 (図V-46-124・125、図版44、表V-5)

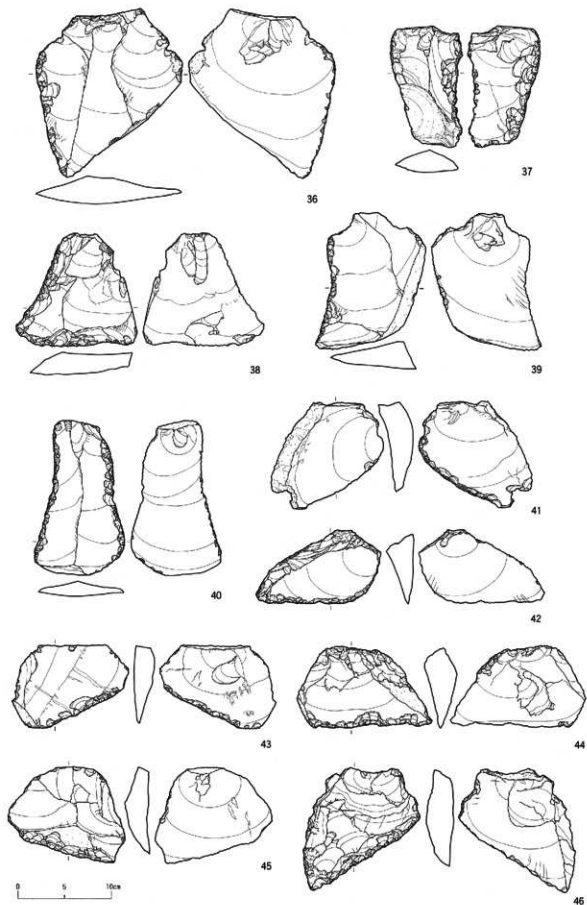
124は小型石斧状の石製品で、M-37-d区から出土したもので、全面が研磨され整形されたもので、刃部は作出されていない。石材は泥岩である。125は一部に磨かれた痕跡の見える粘板岩片で、J-14-a区から出土したもので、石斧片とも推測されるが、磨かれた部分の形状から石棒もしくは魚形石器破片の可能性があるので、石製品とした。(藤原)



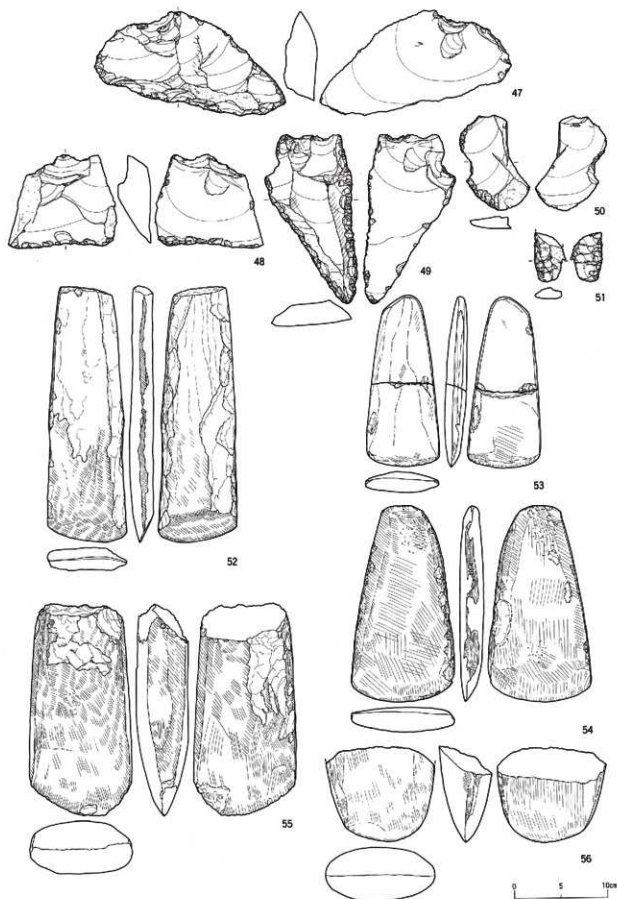
図V-34 包含層出土の石器(1) 石鏃・石槍またはナイフ・つまみ付きナイフ・スクレイパー



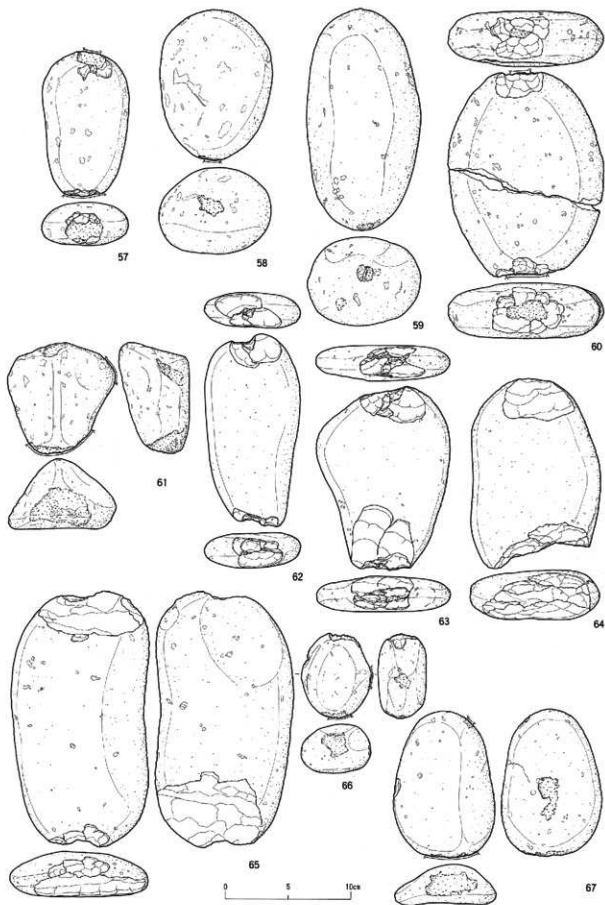
図V-35 包含層出土の石器(2) スクレイパー



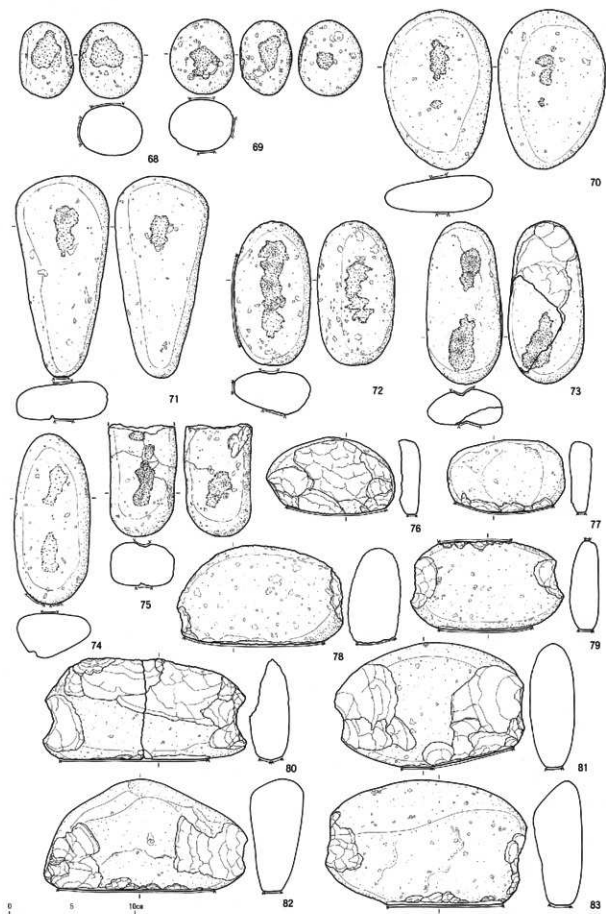
図V-36 包含層出土の石器(3) スクレイバー



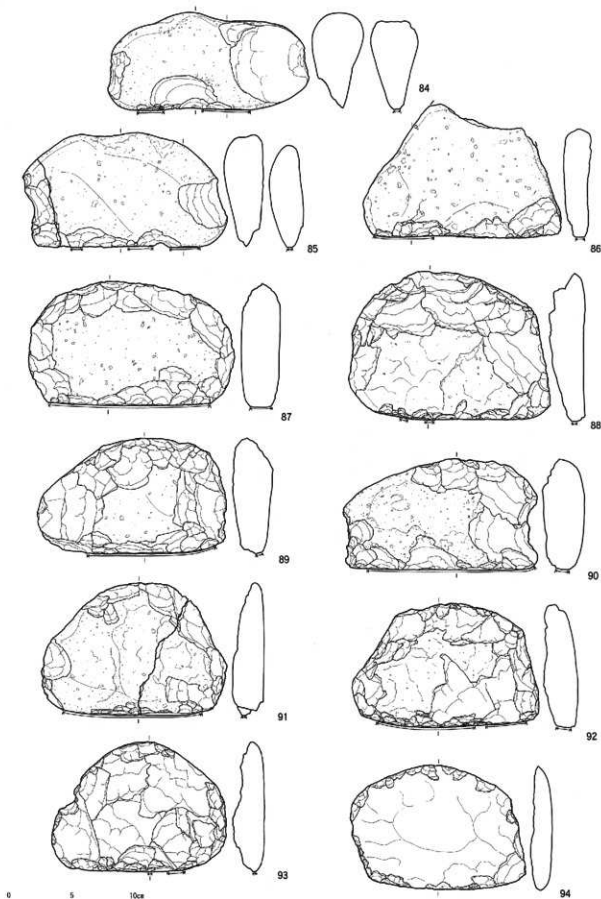
図V-37 包含層出土の石器(4) スクレイパー・石斧



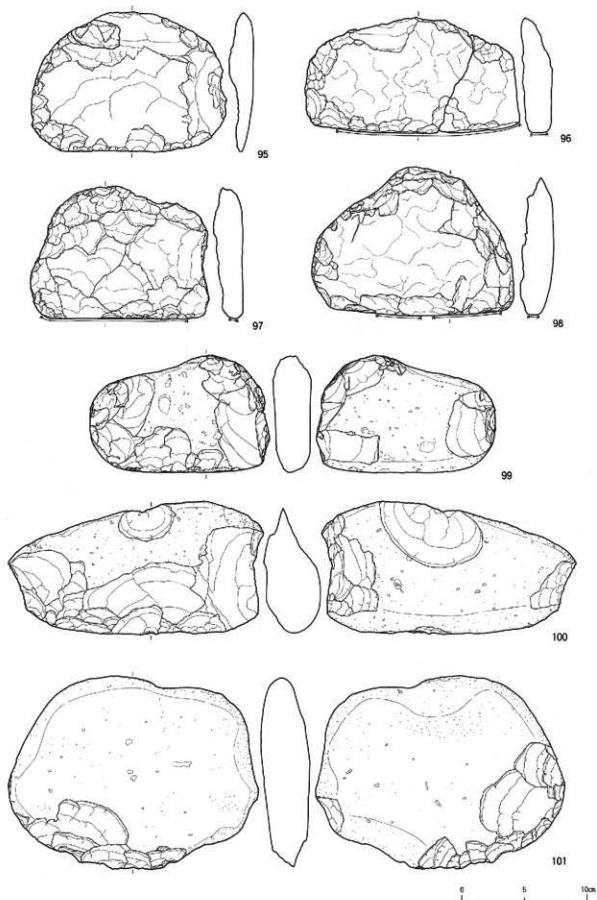
図V-38 包含層出土の石器(5) たたき石



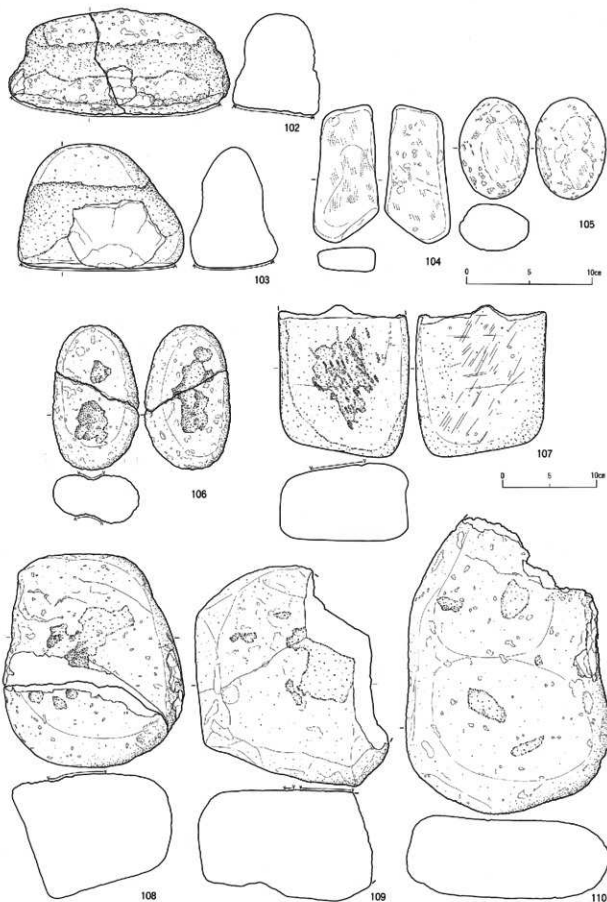
図V-39 包含層出土の石器(6) たたき石・すり石



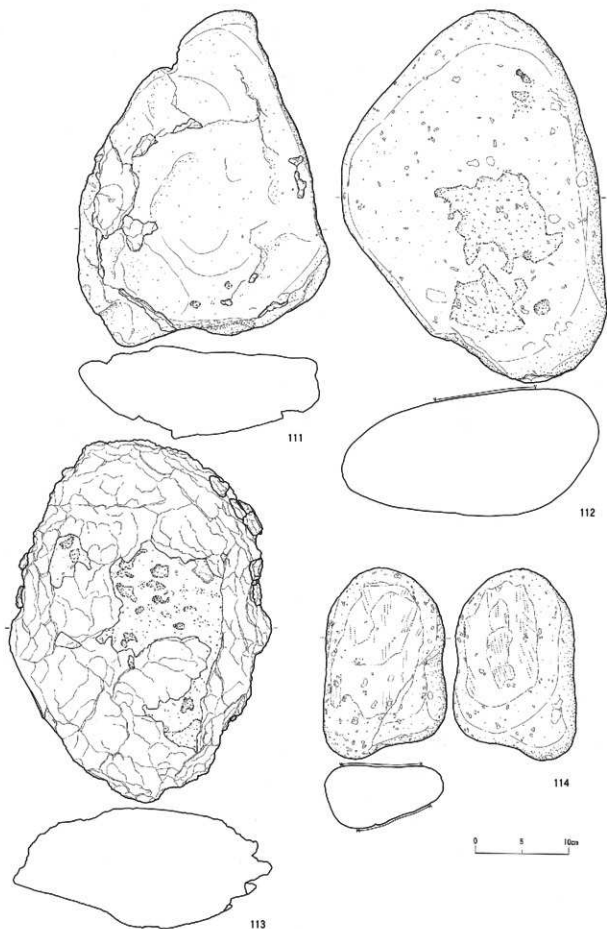
図V-40 包含層出土の石器(7) 半円状扁平打製石器



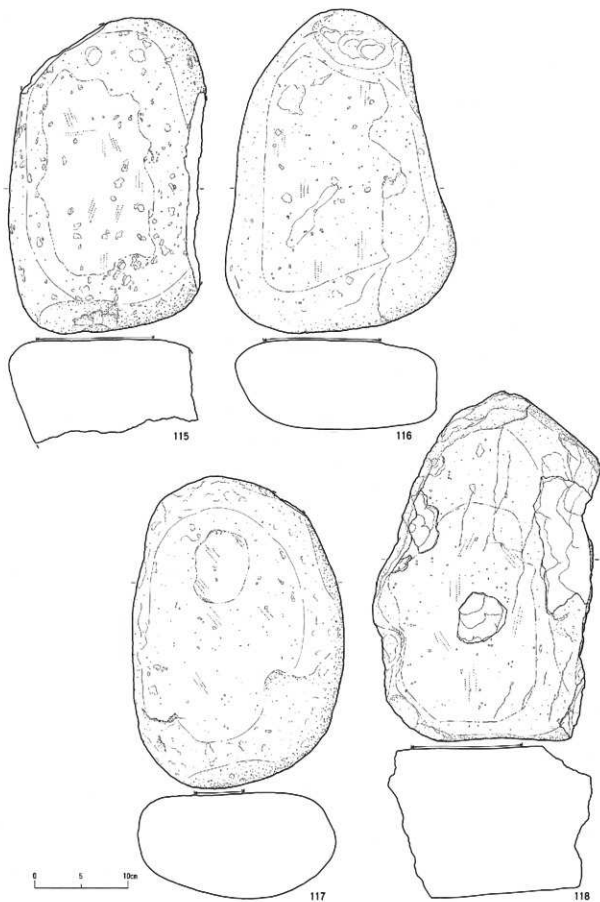
図V-41 包含層出土の石器(8) 半円状扁平打製石器



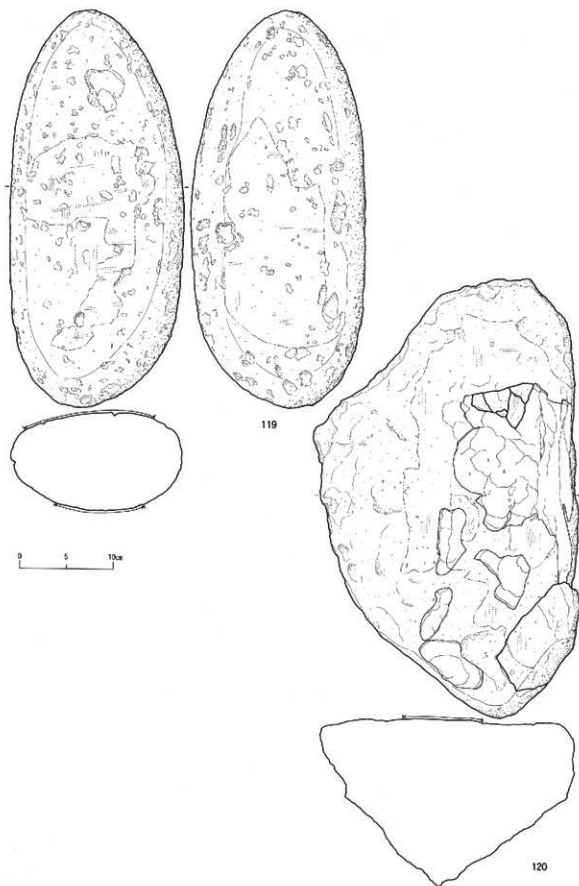
図V-42 包含層出土の石器(9) 北海道式石冠・砥石・台石・石皿



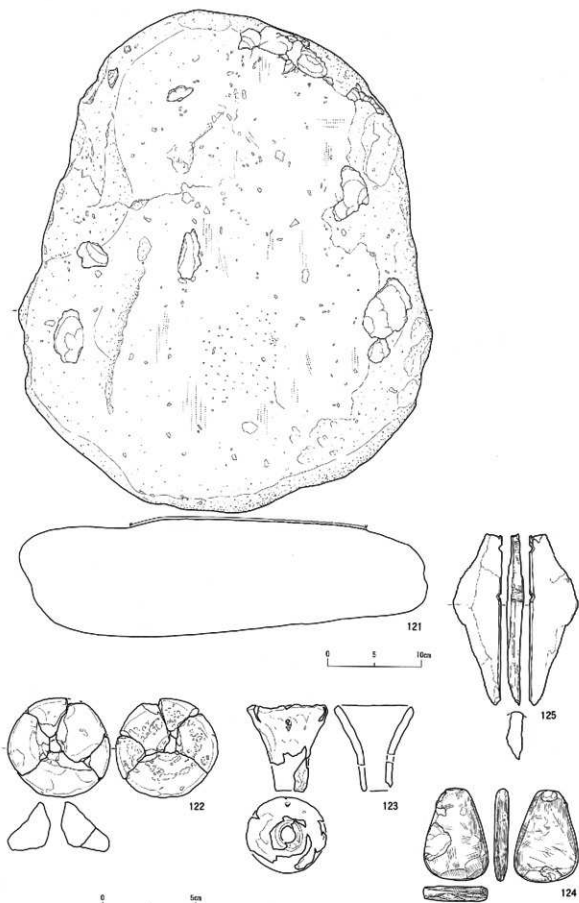
113
図V-43 包含層出土の石器(10) 台石・石皿



図V-44 包含層出土の石器(11) 台石・石皿



図V-45 包含層出土の石器(12) 台石・石皿



図V-46 包含層出土の石器(13) 台石・石皿・土製品・石製品

表Ⅳ-1 遺構規模一覧(1) 住居跡

遺構	位置(調査区)	確認面			平面形	長軸方向	時期	遺物	備考
		長軸 × 短軸	長軸 × 短軸	深さ					
H-1	N-38-c-d, N-39-a-b	250 × 268	216 × 164	38	楕円形	N-37-E	中期前半	土器38点, 石器52点	土器集中4個体
H-2	N-36, N-17-a-b	351 × 328	302 × 269	55	不整形円形	N-24-W	中期前半	土器6点, 石器21点	周辺に遺物が多い

表Ⅳ-2 遺構規模一覧(2) 土壇

遺構	位置(調査区)	確認面			平面形	長軸方向	時期	遺物	備考
		長軸 × 短軸	長軸 × 短軸	深さ					
P-1	M-42-c-d	132 × 112	105 × 86	54	楕円形	N-34-E	中期後半	土器7, 石器1	溝口部に石積
P-2	H-35-b, I-35-a	131 × 115	— × —	26	楕円形?	N-11-E	中期前半	なし	段板残高あり
P-3	N-34-c-d	144 × 120	130 × 107	29	楕円形?	N-33-W	不明	なし	周辺に遺物無し, 本級の可塑性あり
P-4	F-28-a-b	97 × 72	86 × 59	23	円形	—	不明	なし	周辺に遺物無し
P-5	N-18-b	66 × 56	46 × 39	25	楕円形	N-16-E	中期前半	土器4	目-2土壇連か
P-6	L-25-d	91 × 73	75 × 54	26	楕円形	N-79-W	不明	なし	周辺に遺物無し
P-7	J-30-a	106 × 73	107 × 81	36	円形	—	中期前半	土器8, 礎1	

表Ⅳ-3 遺構規模一覧(3) Tピット

遺構	位置(調査区)	確認面			平面形	長軸方向	時期	遺物	備考
		長軸 × 短軸	長軸 × 短軸	深さ					
T P-1	K-27-c-d, K-38-a-b	263 × 114	281 × 26	152	溝状	N-65-E	不明	礎1	
T P-2	I-34-b-c-d	260 × 95	268 × 25	149	溝状	N-71-E	不明	石台1, 礎1	溝底面に大型礎なし
T P-3	G-30-c-d, G-31-a	315 × 82	288 × 24	125	溝状	N-61-E	不明	土器1, 礎1	
T P-4	M-26-c-d	301 × 73	274 × 21	109	溝状	N-61-E	不明	礎1	
T P-5	M-28-b-d, M-29-a-b	284 × 103	256 × 20	142	溝状	N-64-E	不明	なし	溝底縁が狭い
T P-6	M-20-c, M-21-b, N-20-d, N-21-a	336 × 133	362 × 30	163	溝状	N-21-W	不明	土器5, 半円状石平打石6個, 石臼, 礎1	木炭残片の影響をうける
T P-7	K-30-b-e, L-30-a-d	338 × 135	315 × 32	130	溝状	N-61-E	不明	なし	

表Ⅳ-4 遺構規模一覧(4) 焼土・炭化物集中

遺構	位置(調査区)	規模		確認面	時期	遺物	備考
		長軸 × 短軸	深さ				
F-1	N-42-a	49 × 24	4	第6回2回目	中期前半	なし	直上(台石 3a108)
F-2	O-33-a	57 × 32	4	第6回2回目	中期前半	なし	周辺に炭化物散在
F-3	M-41-c	30 × 30	3	第6回1回目	中期前半?	なし	凹地部分で散在
F-4	H-38-b	57 × 25	9	第6回4回目	中期前半	なし	周辺に土器片
F-5	L-41-b	28 × 23	6	第6回5回目	中期前半	なし	凹地部分で散在, S-2に近接
F-6	N-33-b	144 × 70	8	第6回3回目	中期前半	なし	大きく3ヶ所に分かれる
F-7	K-37-b	8 × 7	2	第6回4回目	中期前半	なし	周辺に炭化物散在, 焼土は一部
F-8	M-18-c, N-18-d	61 × 29	5	第6回1回目	中期前半	なし	跡面に広がる
F-9	M-10-b	40 × 35	12	第6回風倒木	中期前半	なし	同じ風倒木中に土器集中あり
F-10	M-24-d	44 × 30	7	第6回2回目	中期前半?	なし	周辺に遺物無し
F-11	N-14-a-b	65 × 48	3	第6回3回目	不明	なし	周辺に遺物無し
F-12	G-12-c	60 × 32	12	第6回2回目	不明	なし	風倒木中の焼土, 人為的ではないか
F-13	N-30-c, N-31-b	19 × 9	8	第6回4回目	不明	なし	風倒木中の焼土, 人為的ではないか
F-14	J-31-a-b	62 × 60	10	V層上面	不明	なし	周辺に遺物無し
C-1	I-16-d	29 × 18	5	第6回3回目	不明	なし	周辺に遺物無し

表Ⅳ-5 遺構規模一覧(5) 集石

遺構	位置(調査区)	規模		確認面	時期	遺物	備考
		長軸 × 短軸	深さ				
S-1	L-38-a	57 × 54	—	第6回2回目	中期後半	礎186	重量3.3kg
S-2	L-40-c, L-41-b	55 × 43	—	第6回6回目	中期前半	礎176	重量5.8kg, 凹地部分で検出
S-3	L-28	258 × 219	—	第6回4回目	不明	礎408	重量12.7kg, 人為的なものではないか
S-4	G-17-a-d	225 × 220	—	第6回4回目	不明	礎324	重量41.9kg, 人為的なものではないか

表Ⅳ-6 遺構別出土遺物一覧

遺構名	土 部	石 部 等					合 計
		ステレライバー	白石	特別製煉瓦部	礎	礎片	
H-1	308	1		1			310
H-2	8		1				9
P-1	7		1				8
P-5	4						4
P-7	8				1		9
S-1					186		186
S-2					175	1	176
S-3					408		408
S-4					324		324
TFP-1					1		1
TFP-2				1	1		2
TFP-3	1				1		2
TFP-4					1		1
TFP-6	53			2	1		56
合計	389	1	2	4	1099	1	1496

表Ⅳ-7 遺構出土掲載土器一覧（復元土器）住居跡・土塙

H-1

図番号	組 合	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	同一個体未掲合	分類	図取番号	備 考
図Ⅳ-4-1	H-1-15覆6×16	(13.2)	7.3	14.3			Ⅱa-3	18
	計16							
図Ⅳ-4-2	H-1-16覆6×6, H-1-18覆6×21 H-1-19覆6×20	(22.4)	9.3	22.3	H-1-14覆6×1, H-1-16覆6×1 H-1-18覆6×11, H-1-19覆6×12 未注記×4		Ⅱa-3	18
	計53						計29	
図Ⅳ-4-3	H-1-16覆6×30, H-1-18覆6×34 H-1-19覆6×1	(18.9)	8.4	24.3	H-1-16覆6×12, H-1-18覆6×3 未注記×10		Ⅱa-3	18
	計65						計25	
図Ⅳ-4-4	H-1-13覆3下位×6, H-1-14覆7×12 H-1-17覆3下位×55, 未注記×2	(10.5)	(31.6)		H-1-14覆7×5, H-1-17覆3×7×12 未注記×4		Ⅱa-3	18
	計75						計21	

H-2

図番号	組 合	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	同一個体未掲合	分類	図取番号	備 考
図Ⅳ-7-1	H-2-3覆1×1 L-19-c-2蓋×1, L-19-c-4蓋×12 L-19-c-6蓋計画×1 L-20-b-3蓋×2, L-20-b-5蓋×1 M-19-d-1蓋×1, N-16-d-1蓋×2 N-16-d-4蓋×9	(19.0)	(7.5)	(18.3)	H-2-9覆1×1, L-19-c-3蓋×1 L-19-c-6蓋計画×1 L-19-d-3蓋×1, L-19-d-7蓋×6 L-20-b-3蓋×2, L-20-b-5蓋×1 L-20-d-4蓋×1, N-16-d-4蓋×3 N-17-c-3蓋×1, N-18-a-1蓋×2 N-18-a-7蓋×1		Ⅱa-3	19
	計31						計21	
図Ⅳ-7-2	H-2-1覆1×1, H-2-2覆1×1 N-17-a-1蓋×2, N-17-a-3蓋×1 N-17-a-4蓋×1, N-17-b-1蓋×1 N-17-c-3蓋×9, N-17-c-5蓋×2 N-17-c-9蓋木組×1 N-17-d-3蓋×1, N-18-b-4蓋×1 O-17-d-3蓋×1, O-17-d-6蓋×2 O-17-d-14蓋×2, O-18-a-5蓋×3	—	8.0	(23.1)	N-17-c-1蓋×1, N-17-c-3蓋×9 N-17-c-8蓋×1 N-17-c-9蓋木組×1 N-18-b-7蓋×2, O-17-d-1蓋×1 O-17-d-2蓋×1, O-17-d-3蓋×1 O-17-d-14蓋×2, O-18-d-4蓋×1 未注記×2		Ⅱa-3	19
	計29						計18	

P-5

図番号	組 合	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	同一個体未掲合	分類	図取番号	備 考
図Ⅳ-10-1	P-5-1覆1×1, P-5-4覆1×1 N-17-c-11蓋×1 N-17-c-11蓋木組×1 N-18-a-4蓋×2, N-18-b-1蓋×4 N-18-b-4蓋×10, N-18-b-6蓋×14 N-18-b-7蓋×10, N-18-b-8蓋×1 N-18-b-10蓋×6, N-18-b-11蓋×2	(26.3)	9.0	(32.2)	P-5-3覆1×2, N-18-a-5蓋×1 N-18-a-8蓋×1, N-18-b-6蓋×1 N-18-b-10蓋×2, N-18-b-11蓋×2 N-18-d-7蓋×2, N-19-b-5蓋×1		Ⅱa-3	19
	計56						計12	

表Ⅳ-8 遺構出土掲載土器一覧(拓本) 住居跡・土壇・Tピット

H-1

図番号	組合	同一個体未組合	分類	回数番号	備考
図Ⅳ-4-5	H-1-1 覆2×1, N-38-b-5 覆3×1 計2		Ⅱa-3	18	
図Ⅳ-4-6	H-1-4 覆2×1		Ⅱa-3	18	
図Ⅳ-4-7	H-1-2 覆2×1, N-38-b-4 覆3×2 計3	N-37-c-1 Ⅱ×2, N-37-c-2 Ⅱ×2 N-38-a-3 Ⅱ×1, N-38-b-2 Ⅱ×1 N-38-b-4 Ⅱ×5	Ⅱa-3	18	
図Ⅳ-4-8	H-1-8 覆3×1		Ⅱa-3	18	
図Ⅳ-4-9	H-1-10 覆2×1		Ⅱb	18	
図Ⅳ-4-10	H-1-3 覆2×1		Ⅱb	18	

H-2

図番号	組合	同一個体未組合	分類	回数番号	備考
図Ⅳ-7-3	N-17-c-1 Ⅲ1×1, N-17-c-3 Ⅲ3×1 計2		Ⅱa-3	19	図Ⅳ-7-2と同-
図Ⅳ-7-4	H-2-8 覆1×1, N-17-b-2 覆5×2 計3	N-17-b-2 Ⅱ×1, O-17-d-3 Ⅱ×1	Ⅱa-3	19	
図Ⅳ-7-5	H-2-5 覆7×1		Ⅱa-3	19	
図Ⅳ-7-6	H-2-7 覆1×1		Ⅱa-3	19	
図Ⅳ-7-7	H-2-4 覆1×1, N-16-a-4 覆5×1 計2		Ⅱa-3	19	

P-1

図番号	組合	同一個体未組合	分類	回数番号	備考
図Ⅳ-8-1	P-1-6 覆6×1, P-1-7 覆3×1 計2		Ⅱb	19	図Ⅳ-8-2と同-
図Ⅳ-8-2	H-39-c-1 Ⅲ2×2, I-38-b-2 Ⅲ2×1 K-41-d-4 Ⅲ4×2 計5		Ⅱb	19	遺構内出土。図Ⅳ-8-1と同-個体。
図Ⅳ-8-3	P-1-5 覆2×1		Ⅱb	19	
図Ⅳ-8-4	P-1-2 覆1×2		Ⅱb	19	

P-7

図番号	組合	同一個体未組合	分類	回数番号	備考
図Ⅳ-11-1	P-7-2 覆4×1, 未詳記×1 計2		Ⅱa-3	19	
図Ⅳ-11-2	P-7-1 覆1・2×1	P-7-1 覆1・2×4, P-7-2 覆4×1 J-38-a-1 Ⅲ1×2 計7	Ⅱa-3	19	

TP-6

図番号	組合	同一個体未組合	分類	回数番号	備考
図Ⅳ-17-1	TP-6-4 覆1×1		Ⅱa-3	20	
図Ⅳ-17-2	TP-6-4 覆1×2	TP-6-4 覆1×2	Ⅱa-3	20	
図Ⅳ-17-3	TP-6-4 覆1×1		Ⅱa-3	20	

表Ⅳ-9 遺構出土掲載石器一覧

H-1

図番号	器 種 名	遺物番号	分類	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	組合	回数番号	備考
図Ⅳ-4-11	スクレイバー	12	Ⅲ3	Ⅲ土6	5.2	9.1	1.2	57.2	玄武岩		18	
図Ⅳ-4-12	平円状扁平打製石器	11	Ⅲ3	Ⅲ土7	8.4	16.8	2.9	503.8	安山岩		18	

P-1

図番号	器 種 名	遺物番号	分類	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	組合	回数番号	備考
図Ⅳ-8-5	石皿	3	X	Ⅲ土1	19.7	22.5	7.0	2790.0	安山岩		19	

TP-2

図番号	器 種 名	遺物番号	分類	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	組合	回数番号	備考
図Ⅳ-13-1	台石	1	X	Ⅲ土1	24.4	16.0	8.2	4050.0	安山岩		20	

TP-6

図番号	器 種 名	遺物番号	分類	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	組合	回数番号	備考
図Ⅳ-17-4	平円状扁平打製石器	2	Ⅲ3	Ⅲ土4	10.8	15.6	3.1	556.4	安山岩		20	
図Ⅳ-17-5	台石	3	X	Ⅲ土5	21.0	11.2	3.2	1070.0	安山岩		20	

表V-1 包含層出土掲載載土器一覽(復元土器) Ⅲ群 a-3類・Ⅲ群 b類

図番号	備 考	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	同一個体重複割合	分類	図面番号	備 考
図V-10-1	H-27-a-3B3×2, H-27-a-4×4×3 H-27-d-2B2×2, H-27-d-3B2×11 H-27-d-4B3×8, H-27-d-7B3×18 H-27-d-10B4×10, H-27-d-14B3×4 H-27-d-15B3×8, I-26-b-1B1×1 H-27-a-5B4×3, H-27-a-7B5×1 H-27-d-18B4×1, H-27-d-22V1×3 H-27-d-25V2×1 計76	21.8	9.5	28.3	H-27-a-4×4×2, H-27-a-5B4×1×1 H-27-d-2B2×1, H-27-d-3B2×25 H-27-d-5B3×2, H-27-d-7B3×7 H-27-d-10B4×1, H-27-d-14B3×3 H-27-d-15B3×5, H-27-d-18B4×1 H-27-d-22B4×1, I-26-b-2B2B×1 H-27-e-1B3×1, H-27-e-5B6B×1 H-27-d-9B3×2, H-27-d-10B4×1 未詳×1, 不明×1	H _a -3	図22	土器集中1 (図V-2)
図V-10-2	N-16-b-6B3×13, N-16-b-7B4×7 N-16-b-10B4×2, N-16-b-11B4×1 O-17-d-6B4×2, O-18-a-3B2×4 計29	(13.8)	6.6	19.8	N-17-c-3B4×1, N-17-c-9B6B×1 N-16-b-6B3×2, N-16-b-11B4×1 O-17-d-7B5×2, O-18-a-11B3×1 O-18-d-2B3×1	H _a -3	22	
図V-10-3	K-15-b-2B4×8, K-15-b-3B5×38 K-15-b-4B6×23, K-15-b-5B6B×12 計81	(24.3)	(8.6)	(26.8)	I-26-c-3B2×1, K-15-b-4B6×1 K-15-b-2B4×2, K-15-b-3B5×13 K-15-b-4B6×11, K-15-b-5B6B×10 K-15-d-1B4×1, K-16-b-2B3×2	H _a -3	22	
図V-10-4	M-10-b-3B2×1, M-10-b-1B2×2 M-10-d-1B1×1, N-20-a-1B1×1 N-20-a-2B2×15, N-20-b-4B3×12 N-20-d-1B2×3, N-20-d-3B3×1 N-20-d-4B5×1 計37	15.6	6.6	14.6	未詳記×3	H _a -1	22	
図V-11-5	G-27-c-1B2×1, G-27-c-2B2×1 G-27-c-3B2×34, G-27-c-4B2×2 G-27-c-6B2×3, G-27-c-7B3×1 G-27-c-8B3×38 G-27-c-9B3×3, G-27-c-10B4×2 G-27-c-12B3×40, G-27-c-14B2×1 H-27-d-2B2×5, H-27-d-14B3×2 H-28-a-3B4×1, J-26-a-1B3×1 計135	(23.8)	11.0	32.6	G-27-c-1B2×1, G-27-c-1B2×7 G-27-c-8B3×5, G-27-c-12B3×11 H-27-d-1B2×19, H-27-d-2B2×7 H-27-d-9B3×1, G-27-c-4B2×9 G-27-c-6B2×5, G-27-c-9B3×38 G-27-c-11B4×1, H-27-a-5B4×3 H-27-b-4B6B×1, H-27-d-3B2×11 H-27-d-2B2×18, H-27-d-9B3×3 H-27-d-12B4×2, H-27-d-14B3×2 H-27-d-16B3×22	H _a -1	23	土器集中1・2 (図V-2)
図V-11-6	L-10-b-2B4×1, L-10-c-2B2×2 L-10-c-3B3×2, M-10-a-1B2×5 M-10-a-2B3×20, M-10-a-4B4×8 M-10-a-5B5×2, M-10-b-6B5×3 M-10-d-2B3×1, M-10-d-3B4×1 M-20-a-1B6B×2, M-20-a-3B5×1 M-20-b-1B1×1, M-10-a-3B2×8 M-10-a-4B3×4, M-10-a-5B4×1 M-10-a-6B5×2, M-10-b-3B2×1 M-10-c-7V×1, M-10-d-2B2×1 M-10-d-3B3×7, M-10-d-3B4×5 M-10-d-6B5×4, L-20-b-1B1×1 計84	20.5	11.0	31.6	M-10-a-2B3×3, M-10-a-4B4×1	H _a -3	23	
図V-11-7	L-10-c-3B3×3, M-10-b-3B2×6 M-10-b-4B3×3, M-10-b-5B4×2 M-10-c-2B3×13, M-10-c-3B4×1 M-10-c-4B4×14, M-10-c-5B5×2 M-10-c-6B6×1, M-10-d-3B3×4 M-10-d-5B4×1, M-20-b-4B7B×1 計51	(17.9)	8.9	23.3	M-10-c-2B3×1, M-10-c-3B4×1	H _a -3	22	
図V-12-8	K-15-c-1B2×1, K-15-c-3B3B×1 K-15-d-1B4×14, K-16-b-1B2×2 K-16-b-2B3×60, K-16-b-4B4×13 K-16-b-5B6×1, K-16-b-6B6B×8 L-15-d-1B3×3, L-16-a-4B4×1 L-16-b-1B2×1, L-16-b-5B4×1 計109	(28.0)	10.8	34.2	K-15-b-3B5×1, K-15-d-1B4×1	H _a -3	24	土器集中4 (図V-3)
図V-12-9	L-16-b-2B3×7, L-16-b-6B4×70 計77	(28.4)	(10.6)	31.2	L-16-b-2B3×3, L-16-b-6B4×92 L-16-c-3B4×1	H _a -3	24	土器集中5 (図V-4)
図V-13-10	G-27-c-4B2×3, G-27-c-9B3×10 G-27-c-10B4×7, G-27-c-11B4×1 G-27-c-14B2×1, H-27-c-1B3×1 H-27-d-2B2×7, H-27-d-3B2×2 H-27-d-4B2×14, H-27-d-5B3×6 H-27-d-7B3×3, H-27-d-9B3×5 H-27-d-12B4×1, H-27-d-14B3×2 H-27-d-16B3×14, H-27-d-20B4×2 H-27-d-24V2×2, H-28-a-2B4×1 I-26-a-1B3×3, I-26-a-2B4×2 I-26-d-2B3×2, I-26-d-6B4×3 計77	(29.9)	-	(34.8)	G-27-c-4B2×5, G-27-c-9B3×16 G-27-c-10B4×6, G-27-c-12B3×1 H-27-d-2B2×12, H-27-d-3B2×2 H-27-d-4B4×7, H-27-d-5B3×3 H-27-d-7B3×1, H-27-d-8B3×1 H-27-d-9B3×4, H-27-d-14B3×6 H-27-d-20B4×2, I-26-a-1B1×1 I-26-a-2B5×1, I-26-b-2B4×1 I-26-b-6B×1, I-26-c-2B3×1 I-26-d-1B2×1, I-26-d-2B3×5 I-26-d-6B4×27, I-26-d-11B5×7	H _a -3	24	土器集中1 (図V-2)

図番号	図 合	口径(m)	底径(m)	部高(m)	図一個体体系合	分類	図番号	備 考
図V-13-10	1-20-d-11E5×3, 1-27-c-2E1×2 1-27-d-3E5×1, 1-28-1E6×1 未定尺×1 計100				1-27-d-3E5×1, 1-27-d-7E5×1 計123			
図V-14-11	1-16-a-3E2×2, L-16-b-1E2×1 L-16-b-2E2×2, L-16-b-6E4×3 L-16-b-11E本欄×8, L-16-b-12E×1 計78	(28.7)	9.6	(30.1)	L-16-c-1E2×2, L-16-a-3E2×2 L-16-a-4E4×5, L-16-a-6E5×1 L-16-b-2E2×2, L-16-b-6E4×1 L-16-d-1E4×2, L-16-d-2E4×1 不明×1 計74	Ⅱ-a-3	24	土部集中5 (図V-4)
図V-14-12	1-16-c-1E2×2, L-16-d-3E4×1 L-16-a-3E4×1, L-16-a-4E6×2 L-16-a-5E本欄×1, L-16-d-1E3×1 L-16-a-4E4×1, L-16-b-5E4×1 L-16-b-11E本欄×1 計74	(21.3)	(12.6)	(32.2)	L-16-c-1E2×2, L-16-c-2E3×1 L-16-d-3E4×1, L-16-a-4E6×1 L-16-a-5E本欄×1, L-16-d-1E3×1 L-16-d-4E4×2, L-16-d-6E4×1 L-16-b-1E2×1, L-16-b-6E4×1 L-16-b-11E本欄×1 計73	Ⅱ-a-3	25	
図V-18-13	H-27-b-2E4×1, H-27-c-1E3×1 H-27-c-3E本欄×1, H-27-c-4E本欄×1 H-27-d-7E3×1, H-27-d-12E4×3 H-27-d-10E4×1, J-27-c-4E5×1 J-27-d-3E5×1, J-27-c-1E3×1 J-27-d-1E2×1, J-27-d-2E2×1 K-16-b-1E6本欄×1 計79	(23.2)	(16.3)	29.6	H-27-c-3E本欄×1, H-27-d-3E3×1 H-27-d-10E4×2, H-27-d-20E3×1 計16	Ⅱ-a-2	25	土部集中1-2 (図V-2)
図V-15-14	1-27-a-1E1×1, 1-27-b-4E4×1 計113	26.7	-	(34.3)	1-27-b-4E4×6 計63	Ⅱ-a-3	25	土部集中3 (図V-3)
図V-16-15	L-15-d-1E3×1, L-22-a-1E1×9 L-22-a-2E3×6, L-22-a-4E4×8 L-22-b-1E1×4, M-10-c-1E2×1 計80	(19.8)	(9.6)	33.0	L-22-a-1E1×1, L-22-a-1E3×9 L-22-a-4E4×8, L-22-b-2E5×1 計19	Ⅱ-a-3	25	土部集中13 (図V-6)
図V-16-16	N-17-a-2E4×1, N-17-a-6E2×1 N-17-b-1E4×9, N-17-b-2E5×1 N-17-b-4E×2, N-17-b-5V×1 N-17-c-6E4×1, N-17-d-1E3×1 O-17-a-1E1×4, O-17-a-3E3×1 O-17-a-4E4×8, O-17-a-5E5×1 O-17-a-6E2×4, O-17-a-7E3×2 O-17-d-1E1×1 計86	(22.4)	(9.6)	32.9	N-16-d-4E5×4, N-17-a-1E4×4 N-17-a-3E5×4, N-17-b-1E4×2 N-17-b-2E5×4, N-17-b-1E4×4 O-16-d-1E1×3, O-17-a-2E3×1 O-17-a-3E3×2 O-17-a-4E4×2, O-17-a-6E2×7 O-17-a-7E3×4, O-17-a-8E2×2 O-17-d-6E4×4, O-17-d-7E5×1 O-16-d-2E4×1 計92	Ⅱ-a-3	26	土部集中9 (図V-5)
図V-17-17	J-21-a-2E2×6, J-21-a-5E3×10 J-21-a-9E3×5, J-21-b-1E2×8 J-21-c-1E1×3, J-21-c-2E2×4 J-21-c-3E2×2, J-21-c-9E3×2 J-21-c-11E4×1, K-21-a-1E1×2 K-21-d-1E2×2, K-21-d-2E3×2 計75	(21.3)	(9.8)	28.6	J-20-d-6E4×1, J-20-c-9E3×1 J-21-a-2E2×9, J-21-a-5E2×6 J-21-a-9E3×1, J-21-b-1E2×2 J-21-b-3E2×1, J-21-c-1E1×4 J-21-c-2E2×4, J-21-c-3E2×3 J-21-c-4E3×1, J-21-c-6E4×3 J-21-c-9E3×1, J-21-c-10V×1 J-21-d-1E2×1, K-21-a-1E1×2 K-21-c-1E1×1, K-21-d-1E2×1 計54	Ⅱ-a-3	26	
図V-17-18	L-19-c-2E2×1, L-19-c-3E3×2 L-19-d-1E2×6, L-19-d-2E3×6 L-19-d-4E4×4, L-19-d-5E5×2 L-20-a-1E4×5, L-20-b-2E2×1 N-18-b-1E1×1, N-18-b-4E3×4 N-18-b-7E4×3 計75	(24.2)	9.9	33.2	L-19-c-3E3×1, L-19-d-1E2×2 L-19-d-2E2×2, L-19-d-4E4×2 L-19-d-5E3×1, L-19-d-6E本欄×2 L-20-b-3E×1 計21	Ⅱ-a-3	26	土部集中11 (図V-5)
図V-18-19	M-16-a-1E3×2, M-16-a-3E4×6 M-16-a-4E5×7, M-16-d-1E2×1 M-16-d-2E3×9, M-16-d-3E4×2 M-16-d-4E5×1, N-18-b-7E4×3 O-18-a-1E3×1 計84	18.8	8.5	25.9	N-16-d-4E3×1 計1	Ⅱ-a-3	26	土部集中6 (図V-4)
図V-18-20a 20b 20c 20d	G-28-c-2E本欄×2, H-30-a-1E1×1 H-30-a-3E本欄×1 G-28-c-2E本欄×1, H-30-a-1E1×3 G-28-c-2E本欄×1, 不明×2 計21	-	(10.4)	-	G-28-c-2E本欄×6, H-27-d-5E2×2 H-27-d-10E4×1 H-28-c-1V×1, H-29-d-1E3×1 H-30-a-1E1×2, H-30-a-2E2×5 H-30-a-3E3×1, H-30-b-1E2×1 H-31-c-1E2×4, M-20-a-1E2×1 不明×2 計82	Ⅱ-a-3 31-1	26	図上既元 20d: 復元既部
図V-19-21	N-17-a-6E3×1, N-17-b-1E4×4 N-17-b-2E5×2, N-17-c-1E5×2 O-17-a-4E4×3, O-17-a-5E5×4 O-17-a-6E2×1, O-17-a-7E3×6 O-17-d-3E3×1, O-17-d-7E5×1 計25	(14.8)	6.9	19.4	M-16-c-2E4×1 計1	Ⅱ-a-3	27	土部集中9 (図V-5)
図V-19-22	1-25-d-1E2×1, 1-25-d-2E3×1 1-26-c-2E3×3, 1-26-c-10E4×1 1-26-c-12E5×2, 1-29-b-1E5×1 1-30-c-3E3×2, J-32-b-1E2×1 J-33-a-1E3×1, J-33-c-1E3×1	13.5	7.3	(17.7)	1-30-a-2E3×1, 1-30-d-4E4×2 J-33-a-1E3×1 計1	Ⅱ-a-3	27	

図番号	説 合	口幅(m)	底径(m)	器高(m)	同一個体未組合	分類	図例番号	備 考
図V-19-22	K-20-d-1E1×1, K-20-d-2E2×1 和辻記×1, I-20-d-2E3×1 K-20-c-1E2×1 計19							
図V-19-23	L-20-b-5E4×2, L-20-b-7E5×8 L-20-b-8E6×1, L-20-b-9E6×2 L-20-b-10E7×1, L-20-c-1E3×11 L-20-c-2E4×16, L-20-c-3E5×7 M-10-a-2E3×2, M-10-d-1E2×1 M-10-d-2E3×7, M-10-d-3E4×2 M-10-d-4E1×1 計55	(13.9)	7.1	20.4	L-20-a-2E6×1, L-20-c-3E5×1 M-10-b-1E6E1×1, M-10-a-5E4×1 M-20-a-2E2×2, L-20-c-2E4×1	Ⅱa-3	27	
図V-19-24	L-19-c-1E1×1, L-19-c-3E3×3 L-20-b-3E2×2, M-10-a-2E3×1 M-10-b-5E4×3, M-17-c-2E5×1 M-17-d-2E3×3, M-18-a-1E1×1 M-18-a-4E4×2, M-18-b-2E2×1 M-18-b-4E4×2, M-18-c-2E3×1 M-18-c-5E5×1, M-18-c-7E5×1 M-18-d-3E2×3, M-18-d-5E4×1 M-18-d-7E6E1×1, N-18-a-1E3×1 N-18-d-1E2×2, N-18-d-2E3×2 N-18-d-3E4×2 計35	(13.2)	8.0	17.1		Ⅱa-3	27	
図V-19-25	O-18-a-1E1×3, O-18-a-7E6×1 O-18-d-2E3×1, O-18-d-3E4×6 O-18-d-7E6×6, O-18-a-5E6×2 計53	(17.2)	8.1	22.1	O-18-a-1E1×1, O-18-a-4E3×1 O-18-d-7E6×1	Ⅱa-3	27	土器集中10 (図V-5)
図V-19-26	N-17-a-1E3×20, N-17-a-4E4×30 N-17-a-5E5×2 計52	(18.0)	8.0	22.3	N-17-b-1E4×1, N-17-b-2E5×1 N-17-c-3E4×1 計3	Ⅱa-3	27	土器集中8 (図V-5)
図V-20-27	H-27-c-1E3×2, H-27-c-3E6E1×6 H-27-d-1E4×14, I-26-c-2E3×1 I-26-c-1E2×1, I-26-c-2E3×1 I-27-d-3E5×2, I-27-d-7E7×1 I-27-d-9E8E1×1, I-28-d-1E6×1 J-28-a-2E4×2, J-28-d-1E8×1 計26	13.8	(6.3)	16.0	G-27-d-2E6E1×1, H-26-d-1E2×1 H-27-b-1E1×1, H-27-d-1E2×2 H-27-b-1E1×1, H-27-d-1E2×3 H-27-b-1E1×1, H-27-d-1E2×4	Ⅱa-3	28	土器集中1・2 (図V-2)
図V-20-28	M-10-b-1E6E1×31 計31	(16.4)	8.7	(26.8)	M-10-b-1E6E1×1 計1	Ⅱa-3	28	
図V-20-29	J-18-c-1E2×7, K-18-c-1E2×4 K-18-d-1E2×5, L-18-c-1E2×3 L-18-a-2E4×1, L-18-b-1E2×1 L-18-b-2E3×1, L-18-b-4E6E1×7 L-18-b-6E8E1×4, L-18-c-1E2E1×3 L-18-c-2E3E1×1, M-18-a-1E3×1 M-18-a-3E2×3 計43	(14.4)	7.3	(20.4)	K-18-d-1E1×1, L-17-d-1E5×1 L-18-b-3E4×1, L-18-c-2E6E1×1 M-18-a-3E2×4, M-18-c-3E2×1 O-18-d-3E4×1 計12	Ⅱa-3	28	
図V-20-30	K-19-c-1E3×1, M-10-a-2E3×7 M-10-d-3E4×1, M-18-a-7E6E1×2 M-19-c-1E2×1, M-19-c-2E3×9 M-19-c-3E4×7, M-19-d-5E5×7 M-19-d-1E1×1, M-19-d-3E2×6 M-19-d-5E4×4, M-19-d-6E5×1 M-20-b-2E8E1×1, N-19-d-2E3×4 計51	(20.1)	9.0	26.6	M-19-a-2E2×1, M-10-b-1E6E1×1 M-19-a-4E6×1, M-19-c-2E2×1 M-19-c-5E5×1, M-19-d-3E2×2	Ⅱa-3	28	
図V-20-31	I-20-b-1E6E1×1, J-20-c-1E2×1 J-20-d-1E3×4E, 和辻記×1 計52	17.5	8.6	20.7	I-20-d-2E3×1, I-20-d-6E5×1 和辻記×4 計6	Ⅱa-3	28	土器集中12 (図V-6)
図V-20-32	K-40-d-1E1×1, K-40-d-3E2×1 K-40-d-4E2×2E, K-40-d-5E3×3 K-40-d-6E4×6, J-40-c-2E2×2E J-40-c-5E3×2 計59	20.4	(7.2)	(29.4)	H-38-c-4E4×1, I-38-b-2E3×1 J-38-c-4E6E1×1, J-40-c-2E2×1E J-40-c-3E3×1, K-20-a-1E1×1 K-40-a-2E2×1, K-40-d-1E1×2 K-40-d-3E2×1, K-40-d-4E3×5 K-40-d-6E4×2, K-42-b-1E1×1 計38	Ⅱa-3	28	
図V-20-33	L-40-a-5E2×1, M-40-a-5E4×1 M-40-d-5E3×4, M-40-d-4E4×1 M-40-d-6E5×1, M-41-a-2E1×1 M-41-a-5E5×3, M-41-a-1E7×1 M-41-c-6E4×2 計15	(16.4)	-	-	M-20-a-2E6E1×1, M-18-a-1E4×1 M-20-b-4E4×1, M-40-d-3E3×5 M-40-d-4E4×1, M-41-a-2E1×1 M-41-a-5E5×5 計15	Ⅱa-3	29	
図V-20-34	M-17-b-1E4×2, M-17-b-2E4×3 M-17-b-3E5×1E, N-17-b-2E5×1 N-17-c-3E3×2, N-17-c-5E4×2 N-17-b-8E5×1, N-18-b-1E1×1 N-18-b-4E3×4, O-18-a-5E4×2 和辻記×2 計173	(23.6)	9.3	30.0	M-17-b-1E4×3, M-17-b-2E4×3 M-17-b-3E5×4E, N-17-c-5E4×3, N-17-c-7E4×1 N-17-c-1E5×1, N-18-b-4E3×1 N-18-b-7E4×1, 和辻記×8 計69	Ⅱa-3	29	土器集中7 (図V-4)
図V-22-35	M-41-c-1E5×1, M-42-b-8E4×6 M-42-b-1E2×3E, N-42-a-5E2×4 N-42-a-7E3×7, N-42-a-1E6×7 N-40-d-1E2×1, N-42-d-1E1×2 計20.4	(20.4)	8.1	27.6	M-40-a-1E1×1, M-40-c-1E1×1 M-41-a-4E4×2, M-41-a-5E5×3 M-41-b-1E2×1, M-41-c-4E3×5 M-41-c-5E4×2E, M-41-c-1E5×1 計20.4	Ⅱb	29	

図番号	組 合	口深(m)	底径(m)	器高(m)	同一個体系統合	分類	図号番号	備 考
図V-22-35					M-01-c-2003×1, M-02-a-553×1 M-02-a-684×1, M-02-b-848×2 M-02-b-1204×3, N-39-b-2303×1 N-39-d-111×1, N-02-a-111×2 N-02-a-552×4, N-02-a-703×9 N-02-a-1004×2, N-02-d-111×2 N-02-d-322×1, N-02-d-443×1 O-30-a-45×1			
	詳56				詳136			
図V-22-36	I-30-c-111×1, I-30-c-224×9 I-30-c-335×20, I-30-a-2511×4 I-30-a-652×1, I-30-b-112×1 I-30-b-223×10, I-30-b-544×2 I-30-b-744×15, I-30-d-223×1 J-30-c-35×2, J-30-c-456×3 J-30-a-423×1	22.4	9.0	33.5	I-30-b-953×1, I-30-c-335×1 I-30-b-223×2, I-30-b-544×1	Ⅱb	29	土器集中15 (図V-7)
	詳93				詳5			
図V-22-37a	N-30-b-222×1, N-30-b-444×2	-	30.2	-	H-20-d-325×1, N-27-c-324×1 N-30-a-323×1, N-30-b-443×1 N-30-b-553×2, N-30-b-684×1 N-30-b-111×1, N-30-b-222×2 N-30-b-323×2, N-30-b-444×6 N-30-b-544×1, N-30-b-775×1 N-30-b-848×4, N-30-c-111×1 N-30-c-223×2, N-30-c-335×2 O-20-a-111×2	Ⅱb	30	27d: 復元磁器
37b	N-30-c-224×1, N-30-b-554×1						31-2	
37c	N-30-b-333×5, N-30-b-848×1							
37d	K-30-c-112×1, N-30-b-222×4 N-30-b-323×5, N-30-b-444×5 N-30-b-554×2, N-40-b-112×1 O-20-a-111×2							
	詳56				詳144			

表V-2 包含層出土掲載土器一覧(拓本) Ⅲ群a-3類・Ⅲ群b類

図番号	組 合	同一個体系統合	分類	図号番号	備 考
図V-23-36a	M-18-a-211×3	L-17-c-111×4, M-18-a-211×2	Ⅱa-3	31	
36b	M-18-a-211×1	L-17-c-111×4	詳4		
図V-23-39	I-27-d-311×5, G-27-c-911×1 G-27-c-152×1		Ⅱa-3	31	
	詳3				
図V-23-40	N-18-a-411×1		Ⅱa-3	31	
図V-23-41a	L-15-d-111×1, L-16-b-611×2		Ⅱa-3	31	
41b	L-15-c-211×1	詳4			
図V-23-42	M-10-b-111×1	M-10-b-111×2, M-10-b-411×1	Ⅱa-3	31	
	詳2	詳3			
図V-23-43a	N-18-b-611×2	N-18-a-511×1, N-18-b-311×1 N-18-b-611×2, N-18-b-711×1 N-18-b-1011×1, N-19-d-311×1	Ⅱa-3	31	
43b	N-18-b-711×1, N-18-b-411×2	O-18-a-511×1, 未注記×1	詳9		
	詳5				
図V-23-44	N-18-b-611×1		Ⅱa-3	31	
図V-23-45	O-17-a-611×1	N-18-c-311×1, N-19-c-711×1 O-17-d-611×5, O-17-d-711×4 O-18-a-711×1, O-22-d-111×1	Ⅱa-3	31	
		詳13			
図V-23-46a	N-18-c-111×2, N-18-b-211×1	N-17-a-411×1, N-17-c-911×1 M-17-c-1115×2, N-18-a-511×1 N-18-a-711×3, N-18-b-311×1 N-18-b-411×3, N-18-b-611×2 N-18-b-711×4, N-18-b-811×1 N-18-b-1011×2, N-18-b-1116×1 N-18-b-1211×1	Ⅱa-3	30	
46b	N-18-b-1011×4			31	
46c	N-18-a-411×1, N-18-b-711×1				
	N-18-b-1011×3, N-18-b-1311×2				
	O-21-a-211×1, 不明×1				
46d	N-18-c-811×1				
46e	N-18-a-511×1, N-18-a-711×1				
	N-18-b-311×1				
46f	N-18-b-811×1	詳28			
	詳25				
図V-23-47a	I-20-b-211×2		Ⅱa-3	31	
47b	I-20-b-111×4	詳6			
図V-23-48	N-18-c-211×1, N-18-c-311×2		Ⅱa-3	31	
	詳3				
図V-23-49a	O-17-d-611×3	I-25-d-311×1, I-26-a-111×1 I-26-a-211×1, I-26-b-211×1 I-26-c-111×2, I-26-c-211×2 I-26-d-611×2, I-27-d-711×1 I-31-d-111×1	Ⅱa-3	31	
49b	O-17-d-711×1				
49c	O-17-d-711×1				
	詳5	詳11			
図V-23-50	O-19-a-611×1, N-19-c-811×1 N-19-c-911×2, N-19-c-111×1 N-19-d-不明×1	G-29-c-211×4 H-27-d-511×1, H-27-d-1811×1 H-27-d-2011×1, H-29-d-111×1 H-30-a-111×2, H-30-a-211×2 H-30-a-311×1, H-30-b-111×1 H-31-c-111×4, M-32-a-111×1	Ⅱa-3	30	
	詳6	詳6			
図V-23-51a	N-16-d-111×2, N-17-a-211×2	N-12-c-111×1, N-12-d-211×1 N-15-d-111×1, N-16-a-111×1 N-16-a-411×1, N-16-b-211×1 N-16-d-111×1, N-16-d-211×6	Ⅱa-3	31	
51b	N-12-d-111×1, N-13-c-211×1				

図番号	説 明	同一個体6組合	分類	図番号	備考
RV-25-51a 51b		N-16-d-4重5×7, N-17-a-2重3×1 N-17-c-1重1×2, N-17-c-2重2×6 N-17-c-3重3×1, N-17-c-5重4×1			
	詳5	詳31			
RV-25-52a 52b 52c 52d 52e	1-30-c-3重3×3, 1-30-d-2重3×1 1-30-d-4重4×3, 1-31-b-1重2×1 1-31-b-2重3×1, 不明×3 1-30-c-3重3×4, 1-30-d-2重3×2 1-30-d-4重4×5, J-31-a-9重3×1 J-31-a-11重4×1 1-30-c-3重3×4, 1-30-d-2重3×2 1-31-a-1重3×1 1-31-c-3重2×1, 1-30-d-2重3×1 1-30-d-4重4×2, J-31-a-2重2×1	1-30-c-3重3×16, 1-30-c-5重4×3 1-30-c-6重×2, 1-30-d-2重3×9 1-30-d-4重4×10, 1-31-b-2重3×3	Ⅱa-3	32	
	詳38	詳43			
RV-25-53a 53b 53c 53d 53e 53f	1-26-d-11重5×3 1-26-d-2重3×1, 1-26-d-6重4×1 1-26-d-11重5×12 1-26-d-11重5×2, 1-26-d-13重2×1 不明×2 J-26-a-4重4×2 1-26-d-2重3×2, 1-26-d-11重5×2 1-26-d-6重4×2, 1-26-d-13重2×1	1-26-d-6重4×3, 1-26-d-11重5×11	Ⅱa-3	32	
	詳31	詳14			
RV-25-54	J-37-d-2重4×1, 1-36-c-1重2×3	H-30-c-2重2×1, J-40-d-3重3×1 L-40-c-1重1×1	Ⅱa-3	32	
	詳4	詳3			
RV-25-55a 55b	G-37-d-1重縦割×14 G-37-d-1重縦割×4	G-37-d-1重縦割×50, H-21-b-2重4×1	Ⅱa-3	32	
	詳18	詳51			
RV-25-56	T-28-c-1重3×2		Ⅱa-3	32	
RV-25-57a 57b	N-18-b-6重3×4, N-18-b-7重4×1 O-17-d-6重4×1, O-17-d-12重4×1		Ⅱa-3	32	
	詳7				
RV-25-58	O-17-d-7重5×1	H-36-b-1重2×1, H-36-b-2重3×1 N-39-b-1重1×1, O-40-a-3重3×1	Ⅱa-3	32	
		詳4			
RV-25-59	M-42-c-1重3×1		Ⅱa-3	32	
RV-25-60	M-42-b-12重4×1, M-42-c-2重4×1		Ⅱa-3	33	
	詳2				
RV-25-61	O-18-d-4重4×1		Ⅱa-3	33	
RV-25-62	1-38-c-1重3×1, K-38-b-1重2×1		Ⅱa-3	33	
	詳2				
RV-25-63	O-18-d-4重4×1		Ⅱa-3	33	
RV-25-64a 64b	M-36-c-2重2×1, M-36-b-2重3×1 L-37-a-1重2×1		Ⅱa-3	33	
	詳3				
RV-25-65	N-24-c-1重4×2		Ⅱa-3	33	
RV-25-66a 66b 66c	T-27-b-4重4×1 1-26-c-12重5×1, H-27-c-1重3×1 T-26-c-2重3×1	1-26-c-1重2×1, T-26-c-7重4×2	Ⅱa-3	33	
	詳4	詳3			
RV-25-67a 67b	1-29-c-1重4×3 T-29-c-1重4×4		Ⅱa-3	33	
	詳7				
RV-25-68	O-38-a-1重1×1, O-38-a-2重2×11 O-38-a-3重3×1, O-38-a-4重1×5 O-38-d-3重3×1	N-37-b-2重2×1, N-37-b-3重4×2 N-31-c-1重2×1, N-37-c-2重3×1 M-41-d-1重1×1, O-38-a-1重1×10 O-38-a-2重2×37, O-38-a-3重3×30 O-38-a-4重1×10, O-38-a-5重2×3 O-38-d-1重1×2, O-38-d-3重3×2	Ⅱb	33	
	詳19	詳101			
RV-25-69a 69b 69c 69d	L-14-c-4重×2, L-40-b-9重縦孔×1 M-40-d-2重2×1 L-39-c-2重2×1, L-40-b-6重3×1 L-40-b-7重4×1 L-39-a-2重2×1, L-39-b-1重2×1 L-41-a-1重1×1	K-41-b-1重2×1, L-39-a-6重4×1 L-39-c-2重2×1, L-39-d-2重4×1 L-40-b-2重1×1, L-40-b-6重4×3 L-40-b-10重縦孔×3, L-40-c-3重1×2 M-40-a-1重1×4	Ⅱb	33	
	詳7	詳17			
RV-35-70	M-41-c-5重4×1		Ⅱb	33	
RV-35-71	N-36-d-2重3×1		Ⅱb	33	
RV-35-72	M-40-d-3重3×1		Ⅱb	33	
RV-35-73	N-42-d-3重2×1		Ⅱb	33	
RV-35-74a 74b 74c	J-21-a-1重4×1, J-21-d-1重3×9 K-19-d-1重4×2, K-19-d-4重V×1 K-21-a-1重2×1 K-19-d-1重4×7 K-19-d-1重4×2	J-19-b-1重2×1, J-21-c-1重3×1 J-21-d-1重3×16, K-19-d-1重4×30 K-19-d-3重5×1, K-21-a-1重2×2	Ⅱb	33	
	詳23	詳51			
RV-35-75a 75b	M-42-a-5重3×2, M-42-a-6重4×3 H-35-a-2重4×1, H-35-c-1重3×1 J-36-a-2重4×1	L-40-b-4重2×1, L-40-b-10重縦孔×1 L-41-c-2重5×1, L-41-c-11重5×2 L-42-b-1重2×1, M-40-a-1重1×4	Ⅱb	33	

図番号	組 合	同一物体系総合	分 類	図説番号	備 考
75c	L-40-b-9 Ⅱ群 2×2, M-40-a-1 Ⅱ群 1×3	M-40-a-2 Ⅱ群 2×1, M-40-a-3 Ⅱ群 4×1			
75d	M-42-a-5 Ⅱ群 3×3, M-42-a-6 Ⅱ群 4×4	M-40-d-2 Ⅱ群 2×1, M-41-c-4 Ⅱ群 3×1			
75e	J-37-d-1 Ⅱ群 2×1, M-41-a-5 Ⅱ群 5×1	M-41-c-13 Ⅱ群 5×1, M-41-d-5 Ⅱ群 5×1			
	M-41-c-20 Ⅱ群 3×1, M-42-b-12 Ⅱ群 4×1	M-42-a-3 Ⅱ群 3×2, M-42-a-4 Ⅱ群 4×7			
		M-42-a-5 Ⅱ群 3×8, M-42-a-6 Ⅱ群 5×8			
		M-42-a-7 Ⅱ群 4×4, M-42-a-8 Ⅱ群 5×3			
		M-42-b-8 Ⅱ群 4×19, M-42-b-12 Ⅱ群 4×3			
		E-36-c-1 Ⅱ群 2×1, H-35-a-2 Ⅱ群 4×3			
		H-35-a-3 Ⅱ群 5×1, H-35-d-1 Ⅱ群 3×1			
		H-35-d-2 Ⅱ群 5×2, H-36-a-1 Ⅱ群 3×1			
		H-38-c-4 Ⅱ群 4×5, J-36-a-2 Ⅱ群 4×1			
		J-37-d-3 Ⅱ群 4×1, K-39-a-3 Ⅱ群 6×1			
		K-39-c-3 Ⅱ群 5×1, L-39-a-5 Ⅱ群 3×1			
		L-39-d-7 Ⅱ群 6×1, L-39-d-11 Ⅱ群 8×1			
		L-40-b-2 Ⅱ群 1×4		註105	
ⅡV-26-75a	K-39-a-3 Ⅱ群 6×1, K-39-a-5 Ⅱ群 2×1		Ⅱa-b	33	
76b	K-39-d-7 Ⅱ群 1×1				
76c	K-39-a-3 Ⅱ群 6×1				
76d	K-39-c-1 Ⅱ群 3×3, K-40-d-5 Ⅱ群 3×1				
76e	K-39-a-2 Ⅱ群 5×1, K-39-a-3 Ⅱ群 6×2				
	K-39-d-4 Ⅱ群 5×1			註12	
ⅡV-26-77	L-41-b-2 Ⅱ群 6×8, L-41-b-5 Ⅱ群 7×2	L-41-b-5 Ⅱ群 7×4	Ⅱa-3	34	
				註10	
ⅡV-26-78	N-40-b-5 Ⅱ群 4×1, N-40-h-7 Ⅱ群 4×1		Ⅱa-3	34	
	N-40-c-2 Ⅱ群 4×3, N-40-c-Ⅱ群 5×1				
	N-41-a-1 Ⅱ群 3×1, O-40-d-3 Ⅱ群 1×1			註8	
ⅡV-26-79	N-16-d-2 Ⅱ群 4×1		Ⅱa-3	34	
ⅡV-26-80	J-31-a-13 Ⅱ群 5×3		Ⅱa-3	34	
ⅡV-26-81	L-15-c-1 Ⅱ群 3×1, L-15-c-2 Ⅱ群 4×6	H-27-d-5 Ⅱ群 3×1, L-15-a-1 Ⅱ群 2×2	Ⅱa-3	34	
	L-15-c-3 Ⅱ群 4×4, L-15-d-1 Ⅱ群 3×3	L-15-d-1 Ⅱ群 2×2, L-16-b-5 Ⅱ群 4×1			
		N-19-b-7 Ⅱ群 7×1		註7	
ⅡV-26-82	M-41-c-5 Ⅱ群 4×1, M-41-c-15 Ⅱ群 5×1		Ⅱa-3	34	
				註2	
ⅡV-26-83	N-17-c-6 Ⅱ群 5×2		Ⅱa-3	34	
ⅡV-26-84	K-40-a-2 Ⅱ群 2×2		Ⅱa-3	34	
ⅡV-26-85	K-39-d-9 Ⅱ群 2×2		Ⅱa-3	34	
ⅡV-26-86	H-28-b-3 Ⅱ群 4×1		Ⅱa-3	34	
ⅡV-26-87	H-28-b-3 Ⅱ群 4×1		Ⅱa-3	34	
ⅡV-26-88	H-28-b-5 Ⅱ群 5×1		Ⅱa-3	34	
ⅡV-26-89	H-28-b-5 Ⅱ群 5×1		Ⅱa-3	34	
ⅡV-26-90	H-28-b-5 Ⅱ群 5×1		Ⅱa-3	34	

表V-3 包含層出土掘載土器一覽(拓本) Ⅱ群 a類・Ⅱ群 b類・V群

図番号	組 合	同一物体系総合	分 類	図説番号	備 考
ⅡV-27-91a	M-40-b-7 Ⅱ群 3×1, N-40-a-2 Ⅱ群 2×1	N-40-a-1 Ⅱ群 1×15, N-40-a-2 Ⅱ群 2×22	Ⅱa	34	
91b	N-40-a-1 Ⅱ群 1×1, N-40-a-4 Ⅱ群 3×1	N-40-a-4 Ⅱ群 3×7, N-40-b-2 Ⅱ群 2×1			
91c	M-40-a-2 Ⅱ群 2×2, M-40-b-2 Ⅱ群 1×1	M-40-b-2 Ⅱ群 1×2, M-40-b-3 Ⅱ群 2×1			
	M-40-b-5 Ⅱ群 1×8, M-40-b-7 Ⅱ群 3×1	M-40-b-5 Ⅱ群 1×11, M-40-b-7 Ⅱ群 3×7			
	N-40-a-4 Ⅱ群 3×2	未注記×6		註72	
ⅡV-27-92a	L-24-a-1 Ⅱ群 4×1		Ⅱb	34	
92b	O-22-c-1 Ⅱ群 2×4				
ⅡV-27-93	K-39-b-2 Ⅱ群 1×1		Ⅱb	34	
ⅡV-27-94	Q-34-c-1 Ⅱ群 4×3		Ⅱb	34	
ⅡV-27-95	G-21-c-1 Ⅱ群 2×10, H-21-d-1 Ⅱ群 1×1	G-21-c-1 Ⅱ群 2×5, G-24-d-1 Ⅱ群 2×1	Vc	34	
		未注記×4		註10	

表V-4 包含層出土掘載土器一覽(復元・拓本土器) Ⅱ群

図番号	組 合	口徑(cm)	底径(cm)	器高(cm)	同一物体系総合	分 類	図説番号	備 考
ⅡV-27-96a	C-17-b-1 Ⅱ群 2×3				C-17-b-1 Ⅱ群 2×9, C-17-b-2 Ⅱ群 3×12	Ⅱb	34	
96b	C-17-b-1 Ⅱ群 2×1				C-17-c-1 Ⅱ群 2×9, C-18-a-1 Ⅱ群 6×2			
96c	C-17-c-1 Ⅱ群 2×1							
96d	C-17-b-1 Ⅱ群 2×1							註33
ⅡV-27-97	O-9-a-1 Ⅱ群 3×1				O-9-a-1 Ⅱ群 3×1	Ⅱb	34	
ⅡV-27-98	H-25-d-1 Ⅱ群 2×1				H-25-d-1 Ⅱ群 2×1	Ⅱb	34	
ⅡV-27-99b	M-41-c-1 Ⅱ群 1×10	-	6.1	-	M-41-c-1 Ⅱ群 1×8	Ⅱc	30	復元土器
99a	M-41-c-1 Ⅱ群 1×2						34	
99c	M-41-c-1 Ⅱ群 1×1							
99d	M-41-c-1 Ⅱ群 1×1							
99e	M-41-c-1 Ⅱ群 1×1							
99f	M-41-c-1 Ⅱ群 1×1							
99g	M-41-c-1 Ⅱ群 1×1							
99i	M-41-c-1 Ⅱ群 1×1							註8

表V-5 包含層出土掲載石器一覧

図番号	器種名	分類	発掘区	遺物 番号	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	組合	図表 番号	備考
図V-34-1	石鏝	I A 4	K-32-b	1	V層	3.2	1.1	0.3	1.0	黒曜石		図表35	
図V-34-2	石鏝	I A 5	I-26-d	3	遺層3 0101	3.3	1.6	0.4	1.5	頁岩		35	
図V-34-3	石鏝	I A 5	G-15-d	1	遺層5 0101	3.5	1.5	0.6	2.4	頁岩		35	
図V-34-4	石鏝	I A 5	K-26-d	1	遺層5 0101	3.6	1.4	0.5	2.6	頁岩		35	
図V-34-5	石鏝	I A 5	O-8-c	1	遺層2 0101	4.3	1.7	0.4	2.2	頁岩		35	
図V-34-6	石鏝	I A 5	I-36-b	1	遺層2 0101	3.5	1.4	0.6	2.6	頁岩		35	
図V-34-7	石鏝	I A 5	H-23-b	1	遺層2 0101	2.7	1.7	0.3	0.9	頁岩		35	
図V-34-8	石鏝またはナイフ	I B 1	K-36-b	1	遺層4 0101	5.4	2.6	0.6	6.1	頁岩		35	
図V-34-9	つまみ付きナイフ	Ⅱ A 1 c	I-26-d	7	遺層4 0101	8.3	2.4	0.9	24.2	頁岩		35	
図V-34-10	つまみ付きナイフ	Ⅱ A 1 c	L-15-c	1	遺層3 0101	5.2	3.6	1.0	11.1	頁岩		35	
図V-34-11	つまみ付きナイフ	Ⅱ A 3	E-40-c	1	IV層	3.3	5.3	0.7	8.8	頁岩		35	
図V-34-12	つまみ付きナイフ	Ⅱ A 3	I-26-d	8	遺層4 0101	5.7	4.2	1.2	19.5	頁岩		35	
図V-34-13	つまみ付きナイフ	Ⅱ A 4	I-26-c	3	遺層3 0101	4.0	1.9	0.7	5.3	頁岩		35	
図V-34-14	つまみ付きナイフ	Ⅱ A 4	I-40-b	1	遺層2 0101	4.8	2.5	0.5	4.4	頁岩		35	
図V-34-15	つまみ付きナイフ	Ⅱ A 4	M-41-c	17	遺層6 0101	8.2	2.9	1.1	26.4	頁岩		35	肌部分
図V-34-16	スタレイバー	Ⅱ B 2 a	M-27-c	1	遺層5 0101	3.5	2.0	0.7	3.8	黒曜石		35	
図V-34-17	スタレイバー	Ⅱ B 2 a	I-27-d	4	遺層5 0101	5.3	3.8	1.9	27.4	めのう		35	
図V-34-18	スタレイバー	Ⅱ B 2 a	L-34-b	1	遺層2 0101	5.7	4.8	1.1	29.8	頁岩		35	
図V-34-19	スタレイバー	Ⅱ B 2 a	L-15-d	2	遺層3 0101	7.0	2.2	1.1	23.4	頁岩		35	
図V-34-20	スタレイバー	Ⅱ B 2 a	L-22-d	1	遺層4 0101	6.5	5.2	1.1	42.0	頁岩		35	
図V-34-21	スタレイバー	Ⅱ B 2 a	I-39-b	3	遺層3 0101	6.7	4.2	1.0	21.2	頁岩		35	
図V-34-22	スタレイバー	Ⅱ B 2 a	N-15-d	2	遺層6 0101	7.8	4.5	0.9	24.8	頁岩		35	
図V-34-23	スタレイバー	Ⅱ B 2 a	N-18-d	1	遺層3 0101	6.0	6.0	1.6	63.0	めのう		35	
図V-34-24	スタレイバー	Ⅱ B 2 a	M-41-c	7	遺層4 0101	6.3	5.7	1.8	43.0	灰山岩?		35	
図V-35-25	スタレイバー	Ⅱ B 2 a	I-27-a	1	遺層1 0101	7.2	5.6	1.1	49.3	頁岩	I-27、4(重)と組合	35	
図V-35-26	スタレイバー	Ⅱ B 2 a	M-42-b	13	遺層4 0101	7.6	5.3	0.8	30.4	頁岩		35	
図V-35-27	スタレイバー	Ⅱ B 2 a	I-31-a	3	IV層	7.8	5.4	1.7	60.0	頁岩		35	
図V-35-28	スタレイバー	Ⅱ B 2 a	N-25-b	1	遺層2 0101	9.7	5.1	1.5	71.5	頁岩		35	
図V-35-29	スタレイバー	Ⅱ B 2 a	M-18-a	6	V層	9.4	5.7	2.3	116.9	頁岩		35	
図V-35-30	スタレイバー	Ⅱ B 2 b	M-42-a	1	遺層2 0101	5.6	3.1	1.0	21.6	頁岩		35	
図V-35-31	スタレイバー	Ⅱ B 2 b	K-39-c	2	遺層4 0101	5.8	4.0	1.0	20.0	めのう		35	
図V-35-32	スタレイバー	Ⅱ B 2 b	M-17-b	5	遺層木段	5.7	4.2	1.2	37.3	めのう		35	
図V-35-33	スタレイバー	Ⅱ B 2 b	I-17-d	1	遺層4 0101	6.4	4.2	1.0	28.6	頁岩		35	
図V-35-34	スタレイバー	Ⅱ B 2 b	管理用 土層部分	14	IV層	7.9	4.1	0.9	28.2	頁岩		図表36	管理用遺跡 土層出土
図V-35-35	スタレイバー	Ⅱ B 2 b	O-12-d	2	遺層2 0101	8.0	4.5	0.8	42.0	頁岩		36	
図V-36-36	スタレイバー	Ⅱ B 2 b	I-26-d	9	遺層4 0101	9.0	7.9	1.5	88.1	頁岩		36	
図V-36-37	スタレイバー	Ⅱ B 2 c	B-16-c	1	IV層2 0101	6.5	3.9	1.2	29.4	頁岩		36	
図V-36-38	スタレイバー	Ⅱ B 2 c	I-26-c	4	遺層3 0101	6.1	6.5	1.3	52.5	頁岩		36	
図V-36-39	スタレイバー	Ⅱ B 2 c	N-42-a	11	遺層4 0101	7.2	6.0	1.5	53.8	頁岩		36	
図V-36-40	スタレイバー	Ⅱ B 2 c	J-38-d	1	遺層1 0101	8.3	4.9	0.8	31.7	頁岩		36	
図V-36-41	スタレイバー	Ⅱ B 3 a	M-19-a	2	遺層1 0101	5.7	6.0	1.9	43.9	頁岩		36	
図V-36-42	スタレイバー	Ⅱ B 3 b	L-22-c	1	遺層3 0101	4.0	6.2	1.6	24.5	頁岩		36	
図V-36-43	スタレイバー	Ⅱ B 3 b	M-42-b	9	遺層4 0101	4.5	6.2	1.1	28.7	頁岩		36	
図V-36-44	スタレイバー	Ⅱ B 3 b	N-17-c	10	遺層木段	4.4	7.3	1.8	43.0	めのう		36	
図V-36-45	スタレイバー	Ⅱ B 3 b	M-36-d	1	遺層2 0101	5.2	6.3	1.4	34.1	めのう		36	
図V-36-46	スタレイバー	Ⅱ B 3 b	L-17-a	1	遺層2 0101	6.6	6.3	1.5	49.9	頁岩		36	
図V-37-47	スタレイバー	Ⅱ B 3 b	L-16-c	4	遺層4 0101	5.6	10.2	1.9	67.3	洗砂岩		36	
図V-37-48	スタレイバー	Ⅱ B 3 c	M-41-c	15	遺層5 0101	5.0	5.8	1.8	43.8	頁岩		36	
図V-37-49	スタレイバー	Ⅱ B 6	B-16-b	1	IV層	9.0	5.0	1.4	50.2	頁岩		36	
図V-37-50	スタレイバー	Ⅱ B 7	I-26-c	8	遺層4 0101	5.0	3.8	0.7	12.3	頁岩		36	
図V-37-51	スタレイバー	Ⅱ B 8	M-18-b	3	遺層風洞	2.6	1.7	0.7	2.4	黒曜石		36	
図V-37-52	石斧	Ⅱ A 2	H-14-a	1	遺層2 0101	13.7	4.2	1.3	123.3	黒曜石		36	
図V-37-53	石斧	Ⅱ A 4	C-16-a	3	遺層3 0101	9.1	4.0	1.1	61.7	緑色片岩	G-13-4、(11重)と組合	36	
図V-37-54	石斧	Ⅱ A 4	O-13-a	1	遺層2 0101	10.5	5.5	1.3	120.7	緑色片岩		36	
図V-37-55	石斧	Ⅱ A 4	K-15-c	2	遺層4 0101	11.3	5.8	2.8	303.0	緑色片岩		36	
図V-37-56	石斧	Ⅱ A 4	I-41-d	2	V層	5.1	5.9	2.9	87.0	砂岩		36	
図V-38-57	たたき石	Ⅱ 1	I-33-d	1	遺層2 0101	11.6	6.9	3.4	306.4	安山岩		図表37	
図V-38-58	たたき石	Ⅱ 1	F-36-b	1	遺層5 0101	12.0	9.0	6.9	938.0	安山岩		37	
図V-38-59	たたき石	Ⅱ 1	H-39-c	3	遺層4 0101	17.7	9.1	7.1	1684.0	安山岩		37	
図V-38-60	たたき石	Ⅱ 1	M-41-c	8	遺層4 0101	16.3	12.3	4.4	1211.0	安山岩	H-37-a、(21重)と組合	37	
図V-38-61	たたき石	Ⅱ 1	H-41-c	1	遺層3 0101	8.8	5.6	5.6	429.8	石英斑岩		37	
図V-38-62	たたき石	Ⅱ 1	M-41-a	9	遺層4 0101	15.4	7.7	2.8	471.2	安山岩		37	
図V-38-63	たたき石	Ⅱ 1	L-41-c	4	遺層5 0101	14.5	10.6	2.8	531.2	安山岩		37	肌部分
図V-38-64	たたき石	Ⅱ 1	H-38-c	5	遺層5 0101	15.1	10.4	3.9	865.0	安山岩		37	
図V-38-65	たたき石	Ⅱ 1	M-41-a	10	遺層5 0101	20.4	11.1	3.6	955.0	安山岩		37	肌部分

四番号	器種名	分類	発振区	通数番号	周知	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	採合	採取番号	備考	
関V-38-66	たたま石	Ⅲ1	H-29-b	1	普通	6.7	3.9	3.9	291.8	安山岩			37	
関V-38-67	たたま石	Ⅲ1	I-30-b	6	普通	11.7	8.1	3.3	364.0	安山岩			37	
関V-39-68	たたま石	Ⅲ3	I-29-d	1	普通	6.0	5.0	4.0	185.6	安山岩			37	
関V-39-69	たたま石	Ⅲ3	H-29-b	2	普通	6.1	5.1	4.1	173.2	安山岩			37	
関V-39-70	たたま石	Ⅲ3	L-37-d	1	普通	12.7	8.2	2.9	401.6	安山岩			37	
関V-39-71	たたま石	Ⅲ3	K-24-b	1	普通	16.0	7.5	3.1	492.8	安山岩			37	
関V-39-72	たたま石	Ⅲ4	M-23-a	1	普通	11.5	6.2	3.5	315.8	安山岩			37	
関V-39-73	たたま石	Ⅲ4	N-25-a	2	普通	13.0	6.1	2.9	272.2	砂岩		関取38		
関V-39-74	たたま石	Ⅲ4	J-23-a	1	普通	13.6	6.2	3.6	382.2	安山岩			38	
関V-39-75	たたま石	Ⅲ4	M-22-b	1	普通	9.0	5.4	3.4	257.0	安山岩			38	
関V-39-76	千早石	Ⅲ2	N-38-a	4	普通	6.2	10.2	1.8	137.8	安山岩			38	
関V-39-77	千早石	Ⅲ2	J-40-d	2	普通	6.0	9.4	1.8	135.8	安山岩			38	
関V-39-78	千早石	Ⅲ2	M-42-b	15	普通	8.1	13.7	4.3	546.2	安山岩			38	
関V-39-79	千早石	Ⅲ2	M-42-b	15	普通	7.1	12.2	2.4	278.1	安山岩			38	
関V-39-80	千早石	Ⅲ2	K-40-a	1	普通	8.2	16.1	3.1	579.8	安山岩	K-39-d, 5a (Ⅲ)と採合		38	
関V-39-81	千早石	Ⅲ2	M-41-c	10	普通	5.9	15.2	3.1	760.0	安山岩			38	
関V-39-82	千早石	Ⅲ2	L-41-a	6	普通	8.9	16.3	4.3	830.0	安山岩			38	
関V-39-83	千早石	Ⅲ2	L-25-c	1	普通	10.0	16.0	4.0	940.0	安山岩			38	
関V-40-84	平肉状扁平打製石器	Ⅲ3	J-39-c	2	普通	7.8	16.1	4.2	594.0	安山岩			38	
関V-40-85	平肉状扁平打製石器	Ⅲ3	M-38-c	2	普通	9.2	16.3	3.2	568.2	安山岩			38	
関V-40-86	平肉状扁平打製石器	Ⅲ3	O-20-a	1	普通	10.6	15.9	2.3	526.8	安山岩			38	
関V-40-87	平肉状扁平打製石器	Ⅲ3	N-19-d	4	普通	9.9	16.5	3.3	825.0	安山岩			38	
関V-40-88	平肉状扁平打製石器	Ⅲ3	I-29-d	5	Ⅳ類	11.7	16.1	2.8	620.0	安山岩		関取39		
関V-40-89	平肉状扁平打製石器	Ⅲ3	L-19-d	6	普通	9.2	15.0	3.3	515.8	安山岩			39	
関V-40-90	平肉状扁平打製石器	Ⅲ3	L-39-d	5	普通	8.9	15.5	3.4	582.4	安山岩			39	
関V-40-91	平肉状扁平打製石器	Ⅲ3	I-26-d	5	普通	10.6	14.8	2.5	479.6	安山岩	I-25-c, 1 (Ⅲ)と採合		39	
関V-40-92	平肉状扁平打製石器	Ⅲ3	O-18-d	6	普通	9.9	14.9	2.7	480.0	安山岩			39	
関V-40-93	平肉状扁平打製石器	Ⅲ3	N-20-b	2	普通	10.3	13.9	2.5	374.4	安山岩			39	
関V-40-94	平肉状扁平打製石器	Ⅲ3	I-29-d	4	普通	9.9	14.0	1.7	298.8	安山岩			39	
関V-41-95	平肉状扁平打製石器	Ⅲ3	L-15-b	5	普通	11.0	15.5	1.9	400.4	安山岩			39	
関V-41-96	平肉状扁平打製石器	Ⅲ3	G-28-b	2	普通	8.2	17.2	2.4	511.6	安山岩	G-27-c, 5 (Ⅲ)と採合		39	
関V-41-97	平肉状扁平打製石器	Ⅲ3	I-27	1	普通	10.5	14.3	2.4	478.2	安山岩			39	
関V-41-98	平肉状扁平打製石器	Ⅲ3	L-15-b	3	普通	11.8	16.1	2.7	564.6	安山岩			39	
関V-41-99	平肉状扁平打製石器	Ⅲ3	H-21-b	1	普通	8.3	14.3	3.1	610.0	安山岩			39	
関V-41-100	平肉状扁平打製石器	Ⅲ3		管理用 通路部分	5	Ⅳ類	10.5	20.4	4.6	1027.0	安山岩		関取40	未成品
関V-41-101	平肉状扁平打製石器	Ⅲ3	O-12-d	1	普通	15.4	20.0	4.0	1481.0	安山岩			40	
関V-42-102	北海道式石硯	Ⅲ4	K-23-c	1	普通	8.7	17.5	7.0	1349.0	安山岩	K-23-c, 2 (Ⅲ)と採合		40	
関V-42-103	北海道式石硯	Ⅲ4	I-27-d	8	Ⅳ類	10.0	13.2	6.9	1065.0	安山岩			40	
関V-42-104	砥石	ⅣB 2	M-21-d	1	V類	11.0	5.3	2.0	131.0	細肉質砂岩			40	
関V-42-105	砥石	ⅣB 2	H-38-d	1	普通	8.0	5.5	3.7	70.9	礫石			40	
関V-42-106	台石・石硯	X	N-28-c	1	普通	15.5	9.1	5.2	7790.0	安山岩	N-28-c, 2 (Ⅲ)と採合		40	
関V-42-107	台石・石硯	X	J-31-a	6	普通	20.2	14.0	8.3	8850.0	安山岩			40	
関V-42-108	台石・石硯	X	N-42-a	6	普通	22.8	19.3	13.4	7190.0	安山岩			40	
関V-42-109	台石・石硯	X		管理用 通路部分	15	Ⅳ類	23.7	20.6	12.0	7690.0	安山岩		関取41	上部分・ 台石
関V-42-110	台石・石硯	X	N-17-d	5	普通	31.6	21.8	8.9	8850.0	安山岩			41	
関V-43-111	台石・石硯	X	I-26-c	11	普通	27.0	36.0	9.8	9190.0	安山岩			41	
関V-43-112	台石・石硯	X	L-16-b	9	普通	28.7	28.5	13.6	19590.0	安山岩			41	
関V-43-113	台石・石硯	X	I-41-a	4	普通	38.8	28.0	12.9	14590.0	安山岩	I-41-a, 1 (Ⅲ)×5, 3 (Ⅲ)×8, 5 (Ⅲ)×3, 6 (Ⅲ)× 11点と採合		関取42	台石
関V-43-114	台石・石硯	X	L-15-d	7	普通	20.5	13.2	6.7	2690.0	安山岩			42	
関V-43-115	台石・石硯	X	I-39-a	2	普通	33.8	21.1	11.2	12590.0	安山岩			42	
関V-43-116	台石・石硯	X	L-40-b	11	Ⅳ類	34.7	24.7	9.5	12590.0	安山岩			42	
関V-43-117	台石・石硯	X	L-41-c	5	普通	33.4	22.6	11.4	14300.0	安山岩			関取43	上部部分・石硯
関V-43-118	台石・石硯	X	M-41-a	11	普通	37.5	24.4	16.1	22000.0	安山岩			関取43	上部部分・石硯
関V-43-119	台石・石硯	X	M-41-c	19	普通	42.3	18.7	10.5	6290.0	礫石			関取43	上部部分・石硯
関V-43-120	台石・石硯	X	L-41-c	6	普通	47.0	28.5	17.9	27590.0	安山岩	L-41-c, 2 (Ⅲ)と採合		関取43	上部部分・石硯
関V-46-121	台石・石硯	X	L-41-c	10	普通	53.7	44.2	12.6	42590.0	安山岩			関取44	上部部分・石硯
関V-46-122	土製品	X	H-27-c	4	普通	5.3	5.5	2.7	46.3				44	
関V-46-123	土製品	H-30-a	3	普通	4.5	4.3	4.1	17.4					44	
関V-46-124	土製品	M-37-d	1	普通	4.9	3.4	0.8	19.7	泥岩				44	
関V-46-125	石製品	J-14-a	1	普通	8.1	2.6	0.9	16.5	船板岩				44	

VI 自然科学的分析

1 放射性炭素年代測定結果

(株)地球科学研究所

報告内容の説明

14C age (y BP) : 14C 年代 "measured radiocarbon age"
試料の 14C/12C 比から、単純に現在(1950年AD)から何年(BP)かを計算した年代。
半減期はリビウムの5568年を用いた。

補正 14C age (y BP) : 補正 14C 年代 "conventional radiocarbon age"
試料の炭素安定同位体比(13C/12C)を測定して試料の炭素の同位体比を知り
14C/12C の測定値に補正値を加えた上で、算出した年代。
試料の 13C 値を-25(‰)に標準化することによって得られる年代値である。
暦年代を得る際にはこの年代値をもちいる。

δ 13C (permil) : 試料の測定 14C/12C 比を補正するための 13C/12C 比。
この安定同位体比は、下式のように標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)
で表現する。

$$\delta 13C (\text{‰}) = \frac{(13C/12C)[\text{試料}] - (13C/12C)[\text{標準}]}{(13C/12C)[\text{標準}]} \times 1000$$

ここで、13C/12C [標準] = 0.0112372 である。

暦年代 : 過去の宇宙線強度の変動による大気中14C 濃度の変動に対する補正により、暦年代を算出する。具体的には年代既知の樹木年輪の 14C の測定、サンゴの U-Th 年代と 14C 年代の比較により、補正曲線を作成し、暦年代を算出する。最新のデータベース("INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40 (3)) により約19000yBPまでの換算が可能となった。*

*但し、10000yBP以前のデータはまだ不完全であり今後も改善される可能性が高いので、補正前のデータの保管を推奨します。

"The calendar calibrations were calculated using the newest calibration data as published in Radiocarbon, Vol. 40, No. 3, 1998 using the cubic spline fit mathematics as published by Talma and Vogel, Radiocarbon, Vol. 35, No. 2, pp 317-322, 1993: A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates. Results are reported both as cal BC and cal BP. Note that calibration for samples beyond about 10,000 years is still very subjective. The calibration data beyond about 13,000 years is a "best fit" compilation of modeled data and, although an improvement on the accuracy of the radiocarbon date, should be considered illustrative. It is very likely that calibration data beyond 10,000 years will change in the future. Because of this, it is very important to quote the original BP dates and these references in your publications so that future refinements can be applied to your results."

測定方法などに関するデータ

測定方法 AMS : 加速器質量分析

Radiometric : 液体シンチレーションカウンタによる β-線計数法

処理・調製・その他 : 試料の前処理、調製などの情報

前処理 acid-alkali-acid : 酸-アルカリ-酸洗浄

acid washes : 酸洗浄

acid etch : 酸によるエッチング

none : 未処理

調製・その他

Bulk-Low Carbon Material : 低濃度有機物処理

Bone Collagen Extraction : 骨、歯などのコラーゲン抽出

Cellulose Extraction : 木材のセルロース抽出

Extended Counting : Radiometric による測定の際、測定時間を延長する

分析機関 BETA ANALYTIC INC.

4985 SW 74 Court, Miami, FL, U.S.A 33155

C14年代測定結果

試料データ	C14年代(y BP) (Measured C14 age)	δ 13C(permil)	補正 C14年代(y BP) (Conventional C14 age)
Beta- 167410	4500 \pm 40	-27.3	4460 \pm 40
試料名 (20463) YOT-1			
測定方法、期間	AMS-Standard		
試料種、前処理など	charred material acid/alkali/acid		
Beta- 167411	1220 \pm 40	-26.1	1200 \pm 40
試料名 (20464) YOT-2			
測定方法、期間	AMS-Standard		
試料種、前処理など	charred material acid/alkali/acid		
Beta- 167412	4080 \pm 40	-24.3	4090 \pm 40
試料名 (20465) YOT-3			
測定方法、期間	AMS-Standard		
試料種、前処理など	charred material acid/alkali/acid		
Beta- 167413	4380 \pm 60	-26.2	4360 \pm 60
試料名 (20466) YOT-4			
測定方法、期間	AMS-Standard		
試料種、前処理など	food residue acid washes		

年代値は RCYBP(1950A.D.を0年とする)で表記。モダン リファレンス スタンドは国際的な慣例として NBS Oxalic Acid の C14濃度の95%を使用し、半減期はリビエの5568年を使用した。。エラーは1シグマ(68%確率)である。

表VI-1 放射性炭素年代測定一覧

測定番号	試料名	出土地点	層位	14C年代 (yBP)	補正C14年代	校正歴年代		備 考
						交点	1 σ の範囲	
Beta-167410	YOT-1	H-1	床面焼土 HF-1	4500 \pm 40	4460 \pm 40	calBC3100	calBC3320to3220 calBC3120to3030	
Beta-167411	YOT-2	I-16-d	Ⅲ層3回目	1220 \pm 40	1200 \pm 40	calAD810 calAD840 calAD860	calAD780to890	
Beta-167412	YOT-3	J-14-d	Ⅲ層4回目	4080 \pm 40	4090 \pm 40	calBC2600	calBC2600to2820 calBC2670to2580	
Beta-167413	YOT-4	H-1	覆土3層 下位	4380 \pm 60	4360 \pm 60	calBC2920	calBC3030to2900	図IV-4-3の土器に付着

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

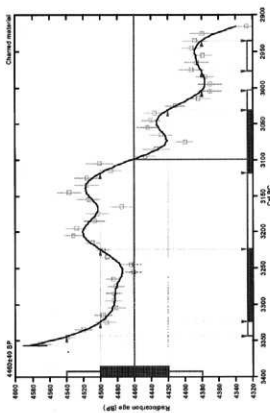
(Variables: C13C12=27.3, lab. multi=1)

試料名 YOT-1 Laboratory number: Bets-167410

Conventional radiocarbon age: 4460±40 BP

2 Sigma calibrated results: Cal BC 3540 to 3880 (Cal BP 5200 to 4820) and
(95% probability) Cal BC 2990 to 2940 (Cal BP 4630 to 4680)

Intercept data

Intercept of radiocarbon age
with calibration curve: Cal BC 3100 (Cal BP 5050)1 Sigma calibrated results: Cal BC 3220 to 3220 (Cal BP 5170 to 5170) and
(68% probability) Cal BC 3120 to 3030 (Cal BP 5070 to 4980)

References:

Debergh et al.
 Calibration Database
 Editor: Christophe Beaudou
 RINCELAB Radiocarbon Age Calibration
 Mathematics
 A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
 Taylor, R. C., Taylor, G. C., 1990, Radiocarbon 33(2), p177-122

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

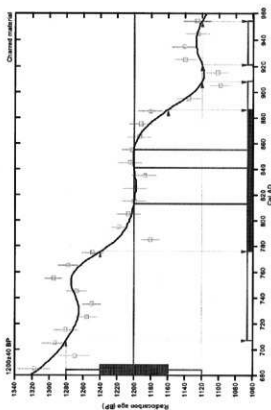
(Variables: C13C12=26.1, lab. multi=1)

試料名 YOT-2 Laboratory number: Bets-167413

Conventional radiocarbon age: 1260±40 BP

2 Sigma calibrated results: Cal AD 710 to 910 (Cal BP 1240 to 1040) and
(95% probability) Cal AD 920 to 940 (Cal BP 1030 to 1060)

Intercept data

Intercepts of radiocarbon age
with calibration curve: Cal AD 810 (Cal BP 1140) and
Cal AD 860 (Cal BP 1100) and
Cal AD 860 (Cal BP 1100)1 Sigma calibrated results: Cal AD 780 to 890 (Cal BP 1170 to 1060)
(68% probability)

References:

Debergh et al.
 Calibration Database
 Editor: Christophe Beaudou
 RINCELAB Radiocarbon Age Calibration
 Mathematics
 A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates
 Taylor, R. C., Taylor, G. C., 1990, Radiocarbon 33(2), p177-122

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13C12--24.3:lab_muh=1)

試料名 Y0T-3

Laboratory number: Beta-167412

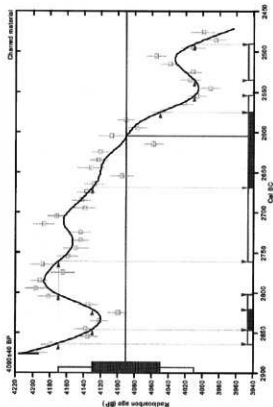
Conventional radiocarbon age: 4099±50 BP

2 Sigma calibrated results:
 Cal BC 2660 to 2800 (Cal BP 4810 to 4750) and
 Cal BC 2760 to 2550 (Cal BP 4710 to 4500) and
 Cal BC 2540 to 2490 (Cal BP 4480 to 4440)

Intercept data

Intercept of radiocarbon age
with calibration curve: Cal BC 2600 (Cal BP 4560)

1 Sigma calibrated results:
 Cal BC 2650 to 2820 (Cal BP 4600 to 4770) and
 Cal BC 2670 to 2580 (Cal BP 4620 to 4520)

References:
Binkley *et al.*

Calibrating Binkley
 Efflein, M., van der Pligk, H.: 1994, *Radiocarbon* 46(3), pp11-16
 INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration
 Stuiver, M., Reimer, P., et al.: 1998, *Earth and Planetary Science Letters* 163, pp103-108
 A Short History of Radiocarbon Dating
 Taylor, R. W., van der Pligk, H.: 1995, *Radiocarbon* 37(2), pp17-22

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13C12--26.2:lab_muh=1)

試料名 Y0T-4

Laboratory number: Beta-167413

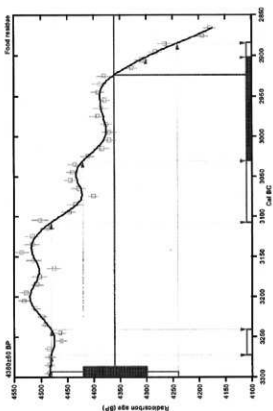
Conventional radiocarbon age: 4360±60 BP

2 Sigma calibrated results:
 Cal BC 3170 to 3240 (Cal BP 5230 to 5190) and
 Cal BC 3110 to 2880 (Cal BP 5060 to 4830)

Intercept data

Intercept of radiocarbon age
with calibration curve: Cal BC 2920 (Cal BP 4870)

1 Sigma calibrated results:
 Cal BC 3030 to 2990 (Cal BP 4980 to 4550)

References:
Binkley *et al.*

Calibrating Binkley
 Efflein, M., van der Pligk, H.: 1994, *Radiocarbon* 46(3), pp11-16
 INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration
 Stuiver, M., Reimer, P., et al.: 1998, *Earth and Planetary Science Letters* 163, pp103-108
 A Short History of Radiocarbon Dating
 Taylor, R. W., van der Pligk, H.: 1995, *Radiocarbon* 37(2), pp17-22

2 八雲町落部1遺跡出土の黒曜石製石器、石片の原材産地分析

薬科 哲 男

(京都大学原子炉実験所)

はじめに

石器石材の産地を自然科学的手法を用いて、客観的に、かつ定量的に推定し、古代の交流、交易および文化圏、交易圏を探ると言う目的で、蛍光X線分析法により黒曜石およびサヌカイト製遺物の石材産地推定を行なっている^{1, 2, 3)}。石材移動を証明するには必要条件と十分条件を満たす必要がある。地質時代に自然の力で移動した岩石の出発露頭を元素分析で求めるとき、移動原石と露頭原石の組成が一致すれば必要条件を満たし、その露頭からの流れたルートを地形学などで証明できれば、十分条件を満たし、ただ一カ所の一致する露頭産地の調査のみで移動原石の産地が特定できる。遺物の産地分析では「石器とある産地の原石が一致したからと言っても、他の産地にも一致する可能性があるために、一致した産地のものと言いきれないが、しかし一致しなかった場合その産地のものではないと言いきれる」が大原則である。考古学では、人工品の様式が一致すると言う結果が非常に重要な意味があり、見える様式としての形態、文様、見えない様式として土器、青銅器、ガラスなどの人手が加わった調査素材があり一致すると言うことは古代人が意識して一致させた可能性があり、一致すると言うことは、古代人の思考が一致すると考えてもよく、相互関係を調査する重要な結果である。石器の様式による分類ではなく、自然の法則で決定した石材の元素組成を指標にした分類では、例えば石材産地が遺跡から近い、移動キャンプ地のルート上に位置する、産地地方との交流を示す土器が出土しているなどを十分条件の代用にする産地分析は中途半端な結果となり、遠距離伝播した石器原材であっても、遺跡近くの似た組成の原石産地の石材と思いこみ誤判定する可能性がある。人が移動させた石器の元素組成とA産地原石の組成が一致し、必要条件を満足しても、原材産地と出土遺跡の間に地質的関連性がないため、十分条件の移動ルートを生自然の法則に従って地形学で証明できず、その石器原材がA産地の原石と決定することができない。従って、石器原材と産地原石が一致したことが、直ちに考古学の資料とならない、確かにA産地との交流で伝播した可能性は否定できなくなったが、B、C、Dの産地でないとの証拠がないために、A産地だと言いきれない。B産地と一致しなかった場合、結果は考古学の資料として非常に有用である。それは石器に関してはB産地と交流がなかったと言いきれる。ここで、十分条件として、可能なかぎり地球上の全ての原産地(A、B、C、D・・・)の原石群と比較して、A産地以外の産地とは一致しないことを十分条件として証明すれば、石器がA産地の原石と決定することができる。この十分条件を肉眼観察で求めることは分類基準が混乱し不可能であると思われる。また、自然科学的分析を用いても、全ての産地が区別できるかは、それぞれが使用している産地分析法によって、それぞれ異なり実際に行ってみなければ分からない。産地分析の結果の信頼性は何ヶ所の原材産地の原石と客観的に比較して得られたかにより、比較した産地が少なければ、信頼性の低い結果と言える。黒曜石、サヌカイトなどの主成分組成は、原産地ごとに大きな差はみられないが、不純物として含有される微量成分組成には異同があると考えられるため、微量成分を中心に元素分析を行ない、これを産地を特定する指標とした。分類の指標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ、各原産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値、分散などと遺物のそれを対比して、各平均値からの離れ具合(マハラノビス

の距離)を求める。次に、古代人が採取した原石産出地点と現代人が分析のために採取した原石産出地点と異なる地点の可能性は十分に考えられる。従って、分析した有限個の原石から産地全体の無限に近い個数の平均値と分散を推測して判定を行うホテリングのT2乗検定を行う。この検定を全ての産地について行い、ある石器原材と同じ成分組成の原石はA産地では10個中に一個みられ、B産地では一万個中に一個、C産地では百万個中に一個、D産地では・・・一個と各産地毎にもとめられるような、客観的な検定結果からA産地の原石を使用した可能性が高いと同定する。即ち多変量解析の手法を用いて、各産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。

今回分析を行なった試料は、八雲町落部1遺跡から出土した黒曜石製石器、石片の合計8個で、産地分析の結果が得られたので報告する。

黒曜石原石の分析

黒曜石原石の風化面を打ち欠き、新鮮面を出し、塊状の試料を作り、エネルギー分散型蛍光X分析装置によって元素分析を行なう。主に分析した元素はK、Ca、Ti、Mn、Fe、Rb、Sr、Y、Zr、Nbの各元素である。塊試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それをもって産地を特定する指標とした。黒曜石は、Ca/K、Ti/K、Mn/Zr、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zr、Nb/Zrの比量をそれぞれ用いる。黒曜石の原産地は北海道、東北、北陸、東関東、中信高原、伊豆箱根、伊豆七島の神津島、山陰、九州の各地に黒曜石の原産地は分布する。調査を終えた原産地を図VI-1に示す。黒曜石原産地のほとんどすべてがつくされている。元素組成によってこれら原石を分類し表VI-2に示す。この原石群に原産地は不明の遺物で作った遺物群を加えると211個の原石群になる。ここでは北海道地域および一部の東北地域の産地について記述すると、白滝地域の原産地は、北海道紋別郡白滝村に位置し、鹿野北方2kmの採石場の赤石山の露頭、鹿野東方約2kmの幌加沢地点、また白土沢、八号沢などより転礫として黒曜石が採取できる。赤石山の産地の黒曜石は色に関係無く赤石山群(旧白滝第1群)にまとまる。また、あじさいの滝の露頭からは赤石山と肉眼観察では区別できない原石が採取でき、あじさい群を作った(旧白滝第2群)、また、八号沢の黒曜石原石と白土沢の転礫は梨肌の黒曜石で組成はあじさい滝群に似るが肌で区別できる。幌加沢よりの転礫の中で70%は幌加沢群になりあじさい滝群と元素組成から両群を区別できず、残りの30%は赤石山群に一致する。置戸産原石は、北海道常呂郡置戸町の清水の沢林道より採取され、この原石の元素組成は置戸群にまとまる。この原産地は、常呂川に通じる流域にあり、この常呂川流域で黒曜石の円礫が採取されるが現在まだ調査していない。十勝三股産原石は、北海道河東郡上士幌町の十勝三股の十三ノ沢の谷筋および沢の中より原石が採取され、この原石の元素組成は十勝三股群にまとまる。この十勝三股産原石は十三の沢から音更川さらに十勝川に流れた可能性があり、十勝川から採取される黒曜石円礫の組成は、十勝三股産の原石の組成と相互に近似している。また、上士幌町のサンケオルベ川より採取される黒曜石円礫の組成も十勝三股産原石の組成と相互に近似している。これら組成の近似した原石の原産地は区別できず、遺物石材の産地分析でたとえ、この遺物の原産地が十勝三股群に同定されたとしても、これら十勝三股、音更川、十勝川、サンケオルベ川の複数の地点を考えなければならない。しかし、この複数の産地をまとめて、十勝地域としても、古代の地域間の交流を考察する場合、問題はないと考えられる。また、清水町、新得町、鹿追町にかけて広がる美蔓台地から産出する黒曜石から2個の美蔓原石群が作られた。この原石は産地近傍の遺跡で使用されている。名寄市の智南地域、智恵文川および忠烈布貯水池から上名寄にかけて黒曜石の円礫が採集される。これらを組成で分類すると88%は名寄第一群に、また12%は名寄第二群にそれぞれなる。旭川市の近文台、嵐山遺

原 产地	分析 项目名	分析 数据	元 素										
			Ca/K	Ti/K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/K	Si/K	
前南岳	伏流第一	34	0.283±0.013	0.078±0.006	0.020±0.006	1.492±0.059	0.821±0.047	0.288±0.018	0.689±0.017	0.021±0.004	0.338±0.013		
	第二	42	0.303±0.022	0.097±0.018	0.039±0.006	1.501±0.053	0.717±0.106	0.326±0.029	0.991±0.022	0.086±0.015	0.298±0.009		
	上 石 田	15	0.521±0.007	0.070±0.003	0.009±0.001	2.055±0.070	0.981±0.042	0.773±0.034	0.382±0.023	0.908±0.027	0.028±0.007	0.399±0.009	
大 白 山	津 津	42	0.869±0.012	0.124±0.007	0.020±0.005	1.608±0.049	0.801±0.042	0.332±0.011	0.150±0.015	0.043±0.011	0.696±0.013	0.611±0.014	
	岩 津	65	0.331±0.011	0.097±0.007	0.030±0.007	1.077±0.066	0.818±0.027	0.833±0.012	0.81±0.016	0.058±0.018	0.077±0.009	0.442±0.012	
	岩 津	55	0.163±0.019	0.030±0.005	0.009±0.001	1.354±0.058	1.615±0.063	0.084±0.012	0.309±0.036	0.100±0.028	0.050±0.007	0.340±0.030	
台 州 山	北 部	17	0.370±0.014	0.047±0.004	0.000±0.009	2.669±0.167	0.629±0.028	0.334±0.012	0.172±0.028	0.022±0.018	0.023±0.006	0.369±0.017	
	安 山	21	0.497±0.010	0.123±0.006	0.028±0.006	1.628±0.051	0.643±0.041	0.875±0.030	0.113±0.030	0.061±0.016	0.022±0.002	0.450±0.019	
海 防 市	二 里 山	21	0.370±0.018	0.123±0.008	0.036±0.006	1.561±0.081	0.688±0.031	0.678±0.039	0.600±0.021	0.082±0.013	0.028±0.002	0.381±0.009	
	南 洋 群 岛	30	0.216±0.005	0.062±0.002	0.045±0.007	1.828±0.056	0.883±0.034	0.265±0.012	0.997±0.021	0.120±0.038	0.024±0.007	0.365±0.009	
高 城 山	第一群	40	0.238±0.012	0.109±0.004	0.048±0.009	1.761±0.066	0.813±0.045	0.397±0.029	0.112±0.038	0.128±0.012	0.081±0.007	0.448±0.011	
	第二群	20	0.166±0.006	0.001±0.008	0.014±0.002	0.860±0.011	0.278±0.017	0.009±0.003	0.061±0.015	0.154±0.018	0.020±0.001	0.269±0.016	
	津 津	30	0.161±0.006	0.125±0.182	0.015±0.003	0.940±0.041	0.301±0.014	0.015±0.005	0.600±0.013	0.144±0.046	0.030±0.012	0.244±0.038	
普 陀 山	大 丸 兒	31	0.145±0.006	0.061±0.003	0.021±0.004	0.980±0.023	0.386±0.011	0.007±0.003	0.288±0.011	0.021±0.002	0.023±0.003	0.315±0.006	
	津 津	48	0.398±0.009	0.058±0.003	0.077±0.018	1.927±0.150	1.721±0.113	0.808±0.090	0.344±0.011	0.083±0.036	0.031±0.004	0.367±0.009	
普 陀 山	奥 達 群 岛	51	1.282±0.077	0.141±0.010	0.022±0.008	0.138±0.120	0.666±0.065	1.150±0.082	0.036±0.026	0.059±0.019	0.041±0.004	0.347±0.011	
	第二群	50	1.985±0.126	0.194±0.018	0.035±0.007	2.869±0.380	0.423±0.038	1.044±0.077	0.024±0.019	0.942±0.015	0.045±0.004	0.307±0.013	
	藤 山	50	1.224±0.081	0.144±0.011	0.035±0.012	3.138±0.363	0.669±0.079	1.335±0.091	0.023±0.027	0.061±0.020	0.040±0.003	0.300±0.012	
	神 戶 山	51	1.295±0.057	0.145±0.008	0.028±0.012	2.202±0.363	0.707±0.061	1.366±0.086	0.029±0.025	0.073±0.021	0.041±0.005	0.300±0.014	
	大 崎 山 群 岛	38	1.407±0.120	0.203±0.027	0.042±0.009	3.125±0.129	0.494±0.380	1.810±0.073	0.028±0.023	0.047±0.013	0.041±0.003	0.447±0.016	
普 陀 山	第二群	31	1.058±0.043	0.116±0.012	0.043±0.014	3.395±0.199	0.865±0.048	1.256±0.060	0.029±0.030	0.072±0.018	0.038±0.004	0.426±0.012	
	八 咫 群 岛	66	0.361±0.010	0.211±0.007	0.030±0.003	0.798±0.027	0.326±0.013	0.263±0.015	0.071±0.009	0.034±0.006	0.034±0.004	0.379±0.009	
	中 津 群 岛	39	0.387±0.007	0.087±0.003	0.027±0.003	1.619±0.063	0.628±0.028	0.348±0.015	0.303±0.006	0.028±0.011	0.027±0.007	0.321±0.011	
普 陀 山	第二群	40	0.345±0.007	0.104±0.003	0.027±0.005	1.535±0.039	0.430±0.017	0.397±0.014	0.669±0.016	0.089±0.014	0.059±0.008	0.328±0.008	
	群 岛	39	0.637±0.014	0.202±0.006	0.071±0.013	4.289±0.235	1.046±0.065	1.390±0.056	0.194±0.012	0.389±0.015	0.348±0.005	0.343±0.009	
	志 田	44	0.211±0.009	0.031±0.005	0.025±0.019	2.572±0.222	1.600±0.086	0.414±0.042	0.111±0.095	0.226±0.043	0.025±0.012	0.335±0.009	
	群 岛	39	0.414±0.009	0.071±0.003	0.201±0.012	2.967±0.142	1.253±0.061	0.915±0.090	0.147±0.013	0.215±0.069	0.010±0.017	0.386±0.009	
	中 津 群 岛	40	0.800±0.047	0.133±0.029	0.125±0.019	4.632±0.269	1.170±0.114	2.023±0.122	0.173±0.022	0.255±0.027	0.022±0.003	0.378±0.009	
大 分 县	第二群	40	0.653±0.027	0.307±0.010	0.126±0.013	6.666±0.342	0.866±0.031	1.907±0.119	0.147±0.059	0.194±0.028	0.013±0.008	0.383±0.015	
	観 音 寺	41	0.239±0.017	0.045±0.003	0.428±0.057	0.497±0.800	1.829±0.230	1.572±0.180	0.325±0.088	0.022±0.019	0.050±0.012	0.413±0.011	
	西 阿 蘇 山	33	0.221±0.021	0.045±0.003	0.450±0.061	1.248±0.668	1.917±0.194	1.660±0.173	0.355±0.067	0.669±0.105	0.015±0.012	0.419±0.009	
	第二	32	0.634±0.047	0.140±0.013	0.194±0.028	4.309±0.322	0.630±0.041	3.362±0.189	0.144±0.031	0.240±0.041	0.018±0.002	0.451±0.011	
	第三	10	1.013±0.180	0.211±0.026	0.126±0.016	3.491±0.231	0.655±0.067	4.002±0.174	0.109±0.021	0.177±0.028	0.040±0.004	0.417±0.017	
大 分 县	宇 布 川	29	1.074±0.119	0.224±0.024	0.122±0.012	3.460±0.301	0.286±0.036	4.039±0.197	0.101±0.022	0.133±0.025	0.040±0.003	0.469±0.014	
	宇 布 川	29	0.623±0.066	0.141±0.011	0.189±0.020	2.388±0.455	0.675±0.064	2.231±0.284	0.131±0.033	0.244±0.019	0.017±0.004	0.464±0.013	
	宇 布 川	30	1.133±0.023	0.127±0.009	0.065±0.010	1.400±0.124	0.600±0.011	0.666±0.082	0.175±0.018	0.312±0.020	0.028±0.012	0.371±0.008	
福 冈 县	宇 布 川	29	0.415±0.042	0.674±0.013	0.086±0.006	5.509±0.269	0.284±0.011	1.526±0.033	0.097±0.016	0.022±0.018	0.025±0.005	0.310±0.011	
	宇 布 川	64	0.482±0.036	0.286±0.015	0.051±0.008	1.361±0.065	0.303±0.019	0.712±0.043	0.090±0.028	0.055±0.012	0.022±0.010	0.288±0.016	
	宇 布 川	39	0.172±0.009	0.060±0.002	0.030±0.005	1.176±0.043	0.365±0.012	0.011±0.004	0.315±0.018	0.344±0.014	0.023±0.001	0.276±0.007	
福 冈 县	岩 川 浦	28	0.174±0.007	0.065±0.002	0.033±0.006	1.174±0.035	0.389±0.012	0.013±0.005	0.129±0.014	0.356±0.012	0.030±0.011	0.275±0.008	
	岩 川 浦	28	0.166±0.009	0.038±0.002	0.039±0.009	1.691±0.300	1.726±0.085	0.035±0.008	0.364±0.040	0.171±0.047	0.023±0.002	0.338±0.019	
	岩 川 浦	40	0.235±0.020	0.037±0.002	0.056±0.009	1.746±0.072	1.824±0.064	0.022±0.013	0.334±0.046	0.214±0.040	0.023±0.001	0.329±0.012	
	岩 川 浦	29	0.233±0.018	0.023±0.001	0.028±0.002	2.554±0.121	1.338±0.178	0.429±0.015	0.271±0.064	0.254±0.069	0.017±0.001	0.346±0.013	
	第二	17	0.138±0.011	0.013±0.005	0.071±0.025	1.238±0.219	1.323±0.143	0.309±0.063	0.244±0.074	0.246±0.099	0.044±0.002	0.337±0.010	
福 冈 县	第三	16	0.249±0.023	0.042±0.006	0.051±0.016	1.936±0.121	0.856±0.112	0.405±0.060	0.148±0.012	0.139±0.011	0.025±0.002	0.333±0.014	
	第四	22	0.284±0.022	0.066±0.008	0.045±0.012	1.800±0.157	0.774±0.129	0.544±0.036	0.230±0.044	0.132±0.026	0.036±0.002	0.343±0.019	
	第五	44	0.334±0.014	0.080±0.004	0.044±0.009	1.744±0.099	0.333±0.030	0.485±0.039	0.049±0.022	0.119±0.017	0.027±0.002	0.353±0.011	
	第六	25	0.243±0.019	0.059±0.007	0.057±0.015	1.849±0.104	0.817±0.080	0.388±0.028	0.135±0.033	0.020±0.013	0.005±0.002	0.345±0.009	
福 冈 县	第七	17	0.222±0.021	0.081±0.015	0.045±0.011	1.788±0.308	0.654±0.085	0.485±0.042	0.018±0.015	0.099±0.016	0.028±0.002	0.338±0.015	
	第八	38	0.199±0.011	0.039±0.004	0.083±0.018	2.649±0.195	1.714±0.195	0.421±0.060	0.306±0.035	0.265±0.044	0.041±0.002	0.333±0.009	
	第九	9	0.413±0.013	0.076±0.005	0.094±0.023	2.866±0.173	1.204±0.071	1.874±0.106	0.144±0.037	0.257±0.033	0.028±0.001	0.357±0.004	
	第十	19	0.266±0.025	0.065±0.010	0.032±0.009	1.847±0.146	1.788±0.308	0.199±0.048	0.127±0.040	0.137±0.040	0.025±0.002	0.335±0.019	
	第十一	43	0.194±0.040	0.054±0.005	0.049±0.008	1.866±0.114	0.833±0.058	0.251±0.025	0.182±0.032	0.124±0.029	0.048±0.011	0.323±0.017	
福 冈 县	第十二	71	0.176±0.012	0.050±0.002	0.041±0.012	1.730±0.081	0.912±0.036	0.811±0.022	0.392±0.059	0.123±0.014	0.023±0.002	0.319±0.019	
	小 田	30	0.317±0.023	0.127±0.006	0.063±0.007	1.641±0.070	0.611±0.022	0.703±0.014	0.175±0.033	0.097±0.017	0.022±0.002	0.320±0.007	
	南 阿 蘇	30	0.261±0.016	0.214±0.007	0.034±0.003	0.788±0.033	0.326±0.032	0.278±0.015	0.089±0.012	0.031±0.009	0.021±0.002	0.243±0.006	
福 冈 县	南 阿 蘇	44	0.298±0.009	0.214±0.006	0.032±0.003	0.794±0.028	0.329±0.017	0.275±0.010	0.666±0.011	0.033±0.009	0.020±0.003	0.243±0.006	
	大 畑	53	1.394±0.139	0.465±0.035	0.075±0.008	4.494±0.669	0.247±0.014	1.236±0.092	0.990±0.018	0.041±0.012	0.030±0.001	0.292±0.014	
	坂 田	21	0.261±0.021	0.211±0.006	0.016±0.001	1.719±0.063	0.444±0.017	0.644±0.018	0.279±0.013	0.085±0.016	0.005±0.002	0.277±0.009	
	坂 田	42	1.299±0.107	0.224±0.009	0.022±0.002	4.205±0.303	1.154±0.155	0.301±0.014	0.047±0.019	0.077±0.006	0.017±0.001		

取 出 産 地	分析 個数	元									
		Ca/K	Ti/K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Str/Zr	Ba/Zr	Nb/Zr	Al/K	Si/K
北 海 道	HS 1遺物群 67	0.241±0.021	0.397±0.005	0.028±0.006	1.296±0.077	0.430±0.038	0.153±0.009	0.149±0.025	0.008±0.013	0.028±0.012	0.225±0.043
	HS 2遺物群 60	0.453±0.011	0.125±0.008	0.941±0.008	1.765±0.075	0.448±0.021	0.429±0.029	0.139±0.025	0.025±0.019	0.044±0.030	0.500±0.653
	FR 1遺物群 51	0.643±0.012	0.124±0.008	0.029±0.007	2.547±0.143	0.530±0.032	0.699±0.032	0.136±0.015	0.094±0.006	0.039±0.011	0.407±0.067
	FR 2遺物群 59	0.335±0.003	0.159±0.012	0.023±0.009	2.545±0.139	0.537±0.031	0.695±0.029	0.165±0.021	0.056±0.022	0.027±0.009	0.373±0.643
	FR 3遺物群 57	0.260±0.007	0.084±0.007	0.022±0.009	2.568±0.145	0.586±0.036	0.562±0.031	0.344±0.031	0.057±0.023	0.023±0.006	0.202±0.057
	FR 4遺物群 44	0.382±0.043	0.044±0.010	0.053±0.006	2.560±0.117	0.639±0.057	0.679±0.032	0.155±0.021	0.094±0.017	0.028±0.006	0.358±0.036
	KI 1遺物群 32	0.608±0.002	0.221±0.007	0.054±0.006	2.540±0.101	0.426±0.038	0.802±0.023	0.109±0.013	0.027±0.021	0.007±0.001	0.447±0.011
	KT 1遺物群 56	1.103±0.050	0.166±0.007	0.061±0.006	2.962±0.133	0.314±0.033	0.775±0.082	0.133±0.036	0.059±0.021	0.043±0.007	0.516±0.633
	KT 2遺物群 38	0.959±0.027	0.154±0.005	0.085±0.010	2.862±0.082	0.547±0.028	1.111±0.040	0.107±0.035	0.022±0.016	0.042±0.008	0.528±0.039
	KS 1遺物群 32	0.275±0.016	0.307±0.005	0.067±0.010	1.731±0.061	0.836±0.038	0.498±0.021	0.180±0.039	0.023±0.028	0.025±0.017	0.345±0.039
	KS 2遺物群 82	0.284±0.011	0.059±0.004	0.056±0.013	1.749±0.106	1.080±0.136	0.424±0.036	0.267±0.042	0.027±0.011	0.023±0.011	0.279±0.017
	KS 3遺物群 48	0.364±0.006	0.381±0.012	0.080±0.013	2.363±0.121	1.490±0.057	0.342±0.019	0.269±0.042	0.069±0.028	0.024±0.012	0.337±0.033
	KS 4遺物群 48	0.285±0.047	0.049±0.003	0.061±0.012	2.382±0.122	1.021±0.041	0.425±0.025	0.363±0.028	0.056±0.019	0.023±0.012	0.303±0.049
青 森 県	HY 遺物群 31	0.286±0.011	0.331±0.006	0.048±0.006	1.056±0.066	0.438±0.028	1.441±0.035	0.082±0.014	0.059±0.008	0.030±0.015	0.481±0.044
	SN 1遺物群 33	0.287±0.006	0.097±0.004	0.033±0.005	1.587±0.032	0.284±0.011	0.298±0.011	0.281±0.012	0.009±0.012	0.021±0.006	0.329±0.040
	SN 2遺物群 29	0.209±0.006	0.126±0.006	0.076±0.008	1.571±0.082	0.716±0.035	0.350±0.017	0.364±0.029	0.028±0.003	0.033±0.009	0.303±0.015
秋 田 県	KN 遺物群 107	0.351±0.011	0.221±0.009	0.033±0.007	1.561±0.071	0.347±0.029	0.219±0.014	0.236±0.025	0.054±0.017	0.029±0.011	0.475±0.049
	TR 遺物群 60	0.252±0.014	0.113±0.007	0.124±0.015	1.805±0.098	0.875±0.056	0.963±0.038	0.272±0.029	0.083±0.017	0.026±0.008	0.278±0.017
岩 手 県	IB 遺物群 48	0.239±0.008	0.093±0.003	0.067±0.011	2.055±0.097	0.714±0.028	0.293±0.019	0.311±0.021	0.064±0.019	0.038±0.003	0.444±0.023
	AI 1遺物群 47	1.259±0.028	0.277±0.039	0.028±0.006	3.809±0.077	0.377±0.019	0.528±0.017	0.251±0.032	0.009±0.012	0.028±0.017	0.859±0.043
	AI 2遺物群 61	1.141±0.024	0.552±0.031	0.080±0.008	2.752±0.062	0.964±0.009	0.739±0.019	0.242±0.011	0.008±0.014	0.063±0.029	1.353±0.049
	AI 3遺物群 61	0.950±0.013	0.215±0.004	0.117±0.009	4.306±0.109	0.114±0.008	0.909±0.028	0.284±0.022	0.014±0.016	0.028±0.006	0.360±0.049
	AI 4遺物群 122	1.800±0.059	0.474±0.025	0.067±0.007	2.093±0.077	0.982±0.030	0.531±0.030	0.177±0.010	0.011±0.013	0.064±0.025	1.261±0.105
	AI 5遺物群 122	1.674±0.082	0.806±0.027	0.101±0.009	2.787±0.108	0.114±0.010	0.862±0.026	0.241±0.022	0.006±0.012	0.091±0.030	1.234±0.032
	FS 遺物群 45	0.272±0.009	0.097±0.029	0.033±0.007	1.791±0.063	0.327±0.019	0.433±0.024	0.207±0.038	0.029±0.027	0.027±0.011	1.359±0.011
	NM 遺物群 48	2.900±0.020	0.241±0.016	0.128±0.010	3.922±0.077	0.117±0.012	0.906±0.028	0.248±0.013	0.008±0.017	0.083±0.013	0.205±0.029
	AC 1遺物群 63	0.479±0.014	0.392±0.006	0.054±0.008	1.561±0.075	0.490±0.017	0.440±0.019	0.289±0.019	0.061±0.015	0.033±0.005	0.427±0.074
	AC 2遺物群 48	0.251±0.007	0.184±0.013	0.123±0.013	2.041±0.078	0.943±0.033	0.908±0.029	0.189±0.024	0.136±0.023	0.036±0.019	0.519±0.047
AC 3遺物群 26	0.657±0.016	0.144±0.005	0.083±0.020	1.891±0.051	0.252±0.029	0.381±0.017	0.286±0.018	0.041±0.023	0.049±0.005	0.616±0.013	
新 潟 県	IN 1遺物群 48	0.226±0.012	0.028±0.004	0.066±0.010	2.056±0.177	0.461±0.048	0.711±0.045	0.124±0.030	0.068±0.016	0.028±0.010	0.336±0.037
	IN 2遺物群 48	0.745±0.013	0.110±0.004	0.140±0.015	1.136±0.212	0.728±0.039	1.562±0.060	0.170±0.030	0.028±0.013	0.026±0.003	0.366±0.010
	YM 遺物群 52	0.566±0.019	0.383±0.007	0.086±0.011	1.822±0.084	0.467±0.031	1.691±0.064	0.202±0.021	0.041±0.028	0.038±0.003	0.500±0.014
	NK 遺物群 56	0.381±0.016	0.128±0.005	0.038±0.012	1.611±0.102	0.721±0.039	0.497±0.028	0.328±0.022	0.047±0.016	0.033±0.003	0.331±0.013
	NM 遺物群 49	0.330±0.019	0.393±0.003	0.082±0.012	1.731±0.063	0.948±0.057	0.528±0.034	0.196±0.037	0.038±0.016	0.022±0.003	0.328±0.011
山 口 県	MK-1遺物群 48	0.087±0.008	0.069±0.002	0.030±0.003	0.627±0.023	0.329±0.017	0.006±0.012	0.235±0.012	0.282±0.019	0.022±0.002	0.257±0.014
	MK-2遺物群 48	0.298±0.019	0.028±0.012	0.053±0.013	1.719±0.121	1.149±0.082	0.297±0.029	0.252±0.027	0.177±0.022	0.021±0.002	0.484±0.085
大 分 県	1遺物群 54	0.784±0.017	0.202±0.009	0.061±0.013	1.721±0.122	0.390±0.020	0.200±0.006	0.038±0.012	0.079±0.022	0.040±0.014	0.424±0.013
	宮 崎 県	HI 1遺物群 48	0.397±0.015	0.754±0.015	0.088±0.012	7.099±0.844	0.434±0.062	0.925±0.130	0.368±0.059	0.138±0.079	0.603±0.022
鹿 児 島 県	HD 2遺物群 48	0.414±0.030	1.527±0.474	0.110±0.044	9.940±1.505	0.136±0.068	1.209±0.420	0.327±0.052	0.178±0.060	0.128±0.044	9.908±1.514
	UT 1遺物群 46	0.297±0.013	0.307±0.005	0.053±0.010	1.628±0.294	1.024±0.056	0.728±0.039	0.586±0.027	0.044±0.028	0.043±0.011	3.901±0.204
	KI 1遺物群 45	0.383±0.012	0.101±0.005	0.061±0.014	1.933±0.158	0.985±0.057	0.527±0.038	0.197±0.030	0.079±0.028	0.028±0.002	0.489±0.048
	KI 2遺物群 46	0.402±0.015	0.146±0.008	0.080±0.017	1.529±0.148	0.729±0.052	0.503±0.028	0.137±0.024	0.083±0.036	0.029±0.003	0.443±0.022
	SK 遺物群 48	1.969±0.014	0.728±0.028	0.082±0.010	4.146±0.222	0.205±0.014	0.699±0.025	0.133±0.013	0.025±0.019	0.027±0.011	0.533±0.013
	KG 遺物群 32	1.271±0.014	0.697±0.025	0.041±0.008	3.199±0.176	0.321±0.012	0.529±0.027	0.322±0.014	0.009±0.014	0.027±0.018	0.519±0.012
	NI 1遺物群 48	0.247±0.010	0.080±0.002	0.081±0.012	3.065±0.120	0.987±0.026	0.497±0.020	0.129±0.016	0.184±0.022	0.027±0.002	0.505±0.048
	HK 2遺物群 46	0.321±0.012	0.122±0.014	0.076±0.013	3.125±0.222	0.877±0.046	1.300±0.074	0.109±0.034	0.187±0.023	0.035±0.046	0.339±0.013
HI 1遺物群 44	0.603±0.024	0.084±0.021	0.063±0.013	6.876±0.662	0.642±0.029	0.739±0.054	0.127±0.031	0.063±0.018	0.047±0.005	0.282±0.048	
HI 2遺物群 30	0.483±0.022	0.121±0.006	0.054±0.014	1.925±0.122	0.695±0.040	0.454±0.034	0.191±0.028	0.028±0.028	0.044±0.006	0.474±0.019	
北 朝 鮮	春 雪 川 遺 跡 遺 物 群 70	0.135±0.012	0.062±0.006	0.027±0.001	1.128±0.051	0.565±0.026	0.998±0.019	0.150±0.022	0.272±0.015	0.025±0.004	0.319±0.012
	羅 亞 遺 跡 遺 物 群										
ロシ ャ	ノロニヤヤ 28	0.888±0.230	0.988±0.868	0.293±0.022	7.963±2.688	0.035±0.017	2.736±0.262	0.263±0.019	0.036±0.010	0.173±0.029	1.454±0.248
	ツリツリヤナ 1 56	0.786±0.068	0.225±0.011	0.048±0.010	1.851±0.180	0.236±0.011	0.752±0.027	0.075±0.016	0.015±0.006	0.041±0.004	0.482±0.023
	ツリツリヤナ 2 49	0.717±0.058	0.289±0.006	0.031±0.006	1.838±0.063	0.139±0.017	0.208±0.016	0.065±0.006	0.019±0.006	0.021±0.003	0.482±0.013
	ツリツリヤナ 3 48	0.384±0.006	0.095±0.004	0.043±0.007	1.642±0.053	0.382±0.011	0.713±0.026	0.066±0.026	0.033±0.002	0.017±0.003	0.178±0.016
	ツリツリヤナ 4 48	0.141±0.007	0.014±0.001	0.029±0.004	1.909±0.025	0.203±0.007	0.130±0.006	0.106±0.009	0.024±0.006	0.016±0.002	0.166±0.014
	ナ ナナ 48	0.220±0.006	0.204±0.004	0.099±0.016	1.261±0.062	0.698±0.028	0.500±0.026	0.122±0.010	0.064±0.023	0.044±0.011	0.303±0.016
	ア ナナナ 40	0.255±0.007	0.260±0.005	0.029±0.004	1.121±0.034	0.102±0.007	0.151±0.008	0.206±0.009	0.024±0.002	0.028±0.001	0.330±0.007
	標準試料 JG-1 127	0.716±0.010	0.232±0.015	0.028±0.011	3.709±0.111	0.993±0.006	1.321±0.046	0.251±0.017	0.105±0.017	0.028±0.002	0.322±0.004

M 群 = 金ノ木津原第1群, F 群 = UT 遺物群, HS 2 群 = 鹿ノ川・鹿ノ山群, FR 2 群 = クロヤマ群第一群にそれぞれ一致
 平均値±標準偏差。★: カラス貫山岩 区 遺物群, NI 遺物群, HI 遺物群, KN 遺物群, SN 遺物群; 三内丸山遺跡出土, KN 遺物群; 此所沢遺跡, HS 遺物群; 北海道遺跡, KI 遺物群; 樹木遺跡, UT 遺物群; 内陸内遺跡, AI 遺物群; 昭和遺跡, FS 遺物群; 下関洞窟遺跡, FR 遺物群; 新羅洞窟 2 遺跡, HI 遺物群; 鹿ノ川遺跡, KI 遺物群; 比呂山遺跡, KN 遺物群; 丸ノ川遺跡 第一地点, SN 遺物群; 日頃面遺跡, OK 遺物群; 奥美野遺跡, TR 遺物群; ノノ川遺跡, NM 遺物群; 長瀬遺跡, MK 遺物群; 南方遺跡, YM 遺物群; 黒川遺跡, AC 1, 2, 3 遺物群; フチノ平遺跡, IN 1, 2 遺物群; 岩野里遺跡, KI 遺物群; KI 3 遺物群, KK 1, 2 遺物群; 計志加里遺跡, HI 1, (フリント群); 八久保平遺跡, HI 遺物群; 扇塚遺跡, IM 遺物群; 巻ノ山遺跡など出土遺物の原料地不明の原石群。
 ウラジオニック付与: イリタヤ遺跡, 南カムチヤック, パラトゥンカ, ナチキ, アマチ遺跡

a) Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. (1974), 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granulite and JB-1 urase, Geochimical Journal Vol.8, 175-192.

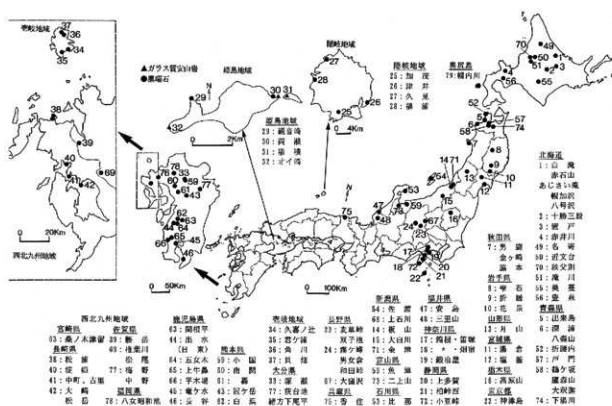
跡付近および雨文台北部などから採集される黒曜石の円礫は、20%が近文台第一群、69%が近文台第二群、11%が近文台第三群それぞれ分類された。また、滝川市江別乙で採集される親指大の黒曜石の礫は、組成で分類すると約79%が滝川群にまとまり、21%が近文台第二、三群に組成が一致する。滝川群に一致する組成の原石は、北竜市恵袋別川培本社からも採取される。秩父別町の雨竜川に開析された平野を見下す丘陵中腹の緩斜面から小円礫の黒曜石原石が採取される。産出状況と礫状は滝川産黒曜石と同じで、秩父別第一群は滝川第一群に組成が一致し、第二群も滝川第二群に一致しさらに近文台第二群にも一致する。赤井川産原石は、北海道余市郡赤井川村の土木沢上流域およびこの付近の山腹より採取できる。ここの原石には、少球果の列が何層にも重なり石器の原材料として良質とはいえない原石で赤井川第1群を、また、球果の非常に少ない握り拳半分大の良質な原石などで赤井川第2群を作った。これら第1、2群の元素組成は非常に似ていて、遺物を分析したときしばしば、赤井川両群に同定される。豊泉産原石は豊浦町から産出し、組成によって豊泉第1、2群の2群に区別され、豊泉第2群の原石は斑晶が少なく良質な黒曜石である。豊泉産原石の使用圏は道南地方に広がり、一部は青森県に伝播している。出来島群は青森県西津軽郡木造町七里長浜の海岸部より採取された円礫の原石で作られた群で、この出来島群と相互に似た組成の原石は、岩木山の西側を流れ鱈ヶ沢地区に流入する中村川の上流で1点採取され、また、青森市の鶴ヶ坂および西津軽郡森田村鶴ばみ地区より採取されている。青森県西津軽郡深浦町の海岸とか同町の六角沢およびこの沢筋に位置する露頭より採取された原石で六角沢群をまた、八森山産出の原石で八森山群をそれぞれ作った。深浦の両群と相互に似た群は青森市戸門地区より産出する黒曜石で作られた戸門第二群である。戸門第一群、成田群、浪岡町泉民の森地区より産出の大釈迦群（旧浪岡群）は赤井川産原石の第1、2群と弁別は可能であるが原石の組成は比較的似ている。戸門、大釈迦産黒曜石の産出量は非常に少なく、希に石鏃が作れる大きさがみられる程度であるが、鷹森群は鷹森山麓の成田地区産出の黒曜石中では5cm大のものもみられる。また、考古学者の話題になる下湯川産黒曜石についても原石群を作った。

結果と考察

遺跡から出土した石器、石片は風化しているが、黒曜石製のものは風化に対して安定で、表面に薄い水和層が形成されているにすぎないため、表面の泥を水洗するだけで完全な非破壊分析が可能であると考えられる。産地分析で水和層の影響は、軽い元素の分析ほど大きいと考えられるが、影響はほとんど見られない。Ca/K、Ti/Kの両軽元素比量を除いて産地分析を行なった場合、また除かずに産地分析を行った場合同定される原産地に差はない。他の元素比量についても風化の影響を完全に否定することができないので、得られた確率の数値にはやゝ不確かさを伴うが、遺物の石材産地の判定を誤るようなことはない。

今回分析した落部1遺跡から出土した黒曜石製石器、剥片の分析結果を表VI-3に示した。石器の分析結果から石材産地を同定するためには数理統計の手法を用いて原石群との比較をする。説明を簡単にするためRb/Zrの一変量だけを考えると、表VI-3試料番号82668番の遺物ではRb/Zrの値は0.971で、赤井川第1群の[平均値] ± [標準偏差値]は、 0.969 ± 0.060 である。遺物と原石群の差を標準偏差値 (σ) を基準にして考えると遺物は原石群から 0.03σ 離れている。ところで赤井川原産地から100ヶの原石を採ってきて分析すると、平均値から $\pm 0.03\sigma$ のずれより大きいものが97個ある。すなわち、この遺物が、赤井川第1群の原石から作られていたと仮定しても、 0.03σ 以上離れる確率は97%であると言える。だから、赤井川第1群の平均値から 0.03σ しか離れていないときには、この遺物が赤井川第1群の原石から作られたものでないとは、到底言い切れない。ところがこの遺物を赤

石山群に比較すると、赤石山群の平均値からの隔たりは、約 6σ である。これを確率の言葉で表現すると、赤石山群の原石を採ってきて分析したとき、平均値から 6σ 以上離れている確率は、百万分の一であるとと言える。このように、百万個に一個しかないような原石をたまたま採取して、この遺物が作られたとは考えられないから、この遺物は、赤石山群の原石から作られたものではないと断定できる。これらのことを簡単にまとめて言うと、「この遺物は赤井川第1群に97%の確率で帰属され、信頼限界の0.1%を満たしていることから赤井川第1群原石が使用されていると同定され、さらに赤石山群に一万分の一の低い確率で帰属され、信頼限界の0.1%を満たさないことから赤石山原石でないと同定される」。遺物が一ヶ所の産地（赤井川産地）と一致したからと言って、例えば赤井川第1群と赤石山群の原石は成分が異なっている、分析している試料は原石でなく遺物で、さらに分析誤差が大きくなる不定形（非破壊分析）であることから、他の産地に一致しないとは言えない、同種岩石の中での分類である以上、他の産地にも一致する可能性は推測される。即ちある産地（赤井川産地）に一致したと言っても一致した産地の原石とは限らないために、帰属確率による判断を表VI-2の211個すべての原石群について行ない、低い確率で帰属された原石群を消していくことにより、はじめて赤井川産地の石材のみが使用されていると判定される。実際はRb/Zrといった唯一ヶの変量だけでなく、前述した8ヶの変量で取り扱うので変量間の相関を考慮しなければならない。例えばA原産地のA群で、Ca元素とRb元素との間に相関があり、Caの量を計ればRbの量は分析しなくても分かるようなときは、A群の石材で作られた遺物であれば、A群と比較したとき、Ca量が一致すれば当然Rb量も一致するはずである。したがって、もしRb量だけが少しずれている場合には、この試料はA群に属していないと言わなければならない。このことを数量的に導き出せるようにしたのが相関を考慮した多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行なうホテリングのT2乗検定である。これによって、それぞれの群に帰属する確率を求めて産地を同定する^{4,5)}。産地の同定結果は1個の遺物に対して、黒曜石製では211個の推定確率結果が得られている。今回産地分析を行った遺物の産地推定結果については低い確率で帰属された原産地の推定確率は紙面の都合上記入を省略しているが、本研究ではこれら産地の可能性が非常に低いことを確認したという非常に重要な意味を含んでいる、すなわち、赤井川産原石と判定された遺物について、カムチャッカ産原石とかロシア、北朝鮮の遺跡で使用されている原石および信州和田峠産の原石の可能性を考慮する必要がない結果で、高い確率で同定された産地のみを結果を表VI-4に記入した。原石群を作った原石試料は直径3cm以上であるが、多数の試料を処理するために、小さな遺物試料の分析に多くの時間をかけられない事情があり、短時間で測定を打ち切る。このため、得られた遺物の測定値には、大きな誤差範囲が含まれ、ときには原石群の元素組成のパラツキの範囲を越えて大きくなる。したがって、小さな遺物の産地推定を行なったときに、判定の信頼限界としている0.1%に達しない確率を示す場合が比較的多くみられる。この場合には、原石産地（確率）の欄の確率値に替えて、マハラノビスの距離D2乗の値を記した。この遺物については、記入されたD2乗の値が原石群の中で最も小さなD2乗の値で、この値が小さい程、遺物の元素組成はその原石群の組成と似ていると言えるため、推定確率は低いが、その原石産地と考えてはば間違いないと判断されたものである。赤井川および十勝産原石を使用した遺物の判定は複雑である。これは青森市戸門、鷹森山地区、浪岡町大釈迦より産出する黒曜石で作られた戸門第一、鷹森山、大釈迦の各群の組成が赤井川第一、二群、十勝三股群に比較的似ているために、遺物の産地を同定したときに、戸門原産地と赤井川または十勝産地、またこれら3ヶ所の原産地に同時に同定される場合がしばしば見られる。戸門産地の原石が使用されたか否かは、一遺跡で多数の遺物を分析し戸門第1群と第2群に同定される頻度を求め、これを戸門産地における第1群（50%）と



図VI-1 黒曜石原産地

表VI-3 八雲町落部1遺跡出土黒曜石製石器・剥片の元素比分析結果

分析番号	元 素 比										
	Ca/K	Ti/K	Mn/Zr	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Nb/Zr	Al/K	Si/K	
82668	0.250	0.071	0.073	2.196	0.971	0.428	0.262	0.085	0.030	0.349	
82669	0.254	0.069	0.090	2.294	1.023	0.418	0.265	0.025	0.030	0.376	
82670	0.250	0.073	0.084	1.909	0.899	0.377	0.262	0.050	0.025	0.355	
82671	0.254	0.074	0.068	2.083	0.948	0.434	0.223	0.060	0.028	0.345	
82672	0.257	0.070	0.089	2.164	0.945	0.398	0.259	0.049	0.034	0.365	
82673	0.253	0.072	0.074	2.220	0.996	0.444	0.264	0.048	0.028	0.352	
82674	0.258	0.068	0.085	2.221	0.970	0.405	0.242	0.024	0.030	0.371	
82675	0.260	0.071	0.090	2.270	0.975	0.416	0.255	0.000	0.027	0.346	
JG-1	0.794	0.214	0.082	3.834	0.934	1.254	0.269	0.087	0.032	0.304	

JG-1: 標準試料 - Azao, A., Kurawawa, H., Ohmori, T. & Takeuchi, E. 1974 Accumulation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. *Geochemical Journal*, Vol. 8, 175-192 (1974)

表Ⅴ-4 八雲町落部1遺跡出土黒曜石製石器、石片の産地分析結果

分析番号	試料番号	発掘区	遺物番号	單位	器種	肉面鑑定	重さ	原産地(確率)	判定結果	備考
82668	1	K-32-b	1	V層	石鏃	赤井川	1.0	赤井川第1群(90%)、赤井川第2群(31%)、大釈迦(7%)、十勝三股(5%)、鷹森山(5%)、戸門第1群(13%)、古里第3群(3%)、中町第2群(1%)	赤井川	原V-34-1
82669	2	M-27-c	1	Ⅲ層5回目	スタレイバー	赤井川	3.8	赤井川第1群(73%)、赤井川第2群(47%)、大釈迦(2%)、戸門第1群(5%)	赤井川	原V-34-16
82670	3	M-18-b	3	Ⅲ層	スタレイバー	赤井川	2.4	赤井川第2群(17%)、赤井川第1群(8%)、松浦第4群(2%)、古里第3群(3%)	赤井川	原V-27-1
82671	4	I-20-b	1	Ⅲ層4回目	Uフレイク	赤井川	1.9	赤井川第2群(85%)、赤井川第1群(31%)、大釈迦(2%)、鷹森山(1%)、戸門第1群(5%)、古里第3群(5%)、松浦第4群(1%)、中町第2群(2%)	赤井川	
82672	5	J-20-b	1	Ⅲ層1回目	Uフレイク	赤井川	2.1	赤井川第1群(92%)、赤井川第2群(74%)、戸門第1群(2%)	赤井川	
82673	6	I-27-a	5	Ⅲ層3回目	フレイク	白滝?	3.0	赤井川第1群(91%)、赤井川第2群(82%)、大釈迦(14%)、十勝三股(10%)、戸門第1群(12%)、鷹森山(8%)、古里第3群(2%)	赤井川	
82674	7	J-20-a	1	Ⅲ層1回目	フレイク	赤井川	1.6	赤井川第1群(80%)、赤井川第2群(53%)、戸門第1群(1%)	赤井川	
82675	8	J-20-d	2	Ⅲ層1回目	フレイク	赤井川	2.1	赤井川第2群(91%)、赤井川第1群(53%)	赤井川	

注：近付産地分析を行う所が多くなりましたが、肉面鑑定が明確にも関わらず結果のみを報告される場合があります。本報告では日本における各地域の産地分析の相対的基準を一定にして、産地分析を行っています。結果は、土器形式の基準も複数方法で異なるようにも関わらず、似た産地名のために同じ結果のように思われるが、全く異なる場合があります。本報告は、産地を推定するには本報告の方法で再分析が必要です。本報告の分析結果を考古学資料とする場合には常に慎重で判定されている結果とする必要があります。

第2群(50%)の産出頻度と比較し戸門産地の原石である可能性を推定する。今回分析した遺物のなかに全く戸門第2群に帰属される遺物が見られないことから戸門産地からの原石は使用されなかったと推測できる。また浪岡町大釈迦産原石は非常に小さく、分析した遺物よりも小さい原石で本遺跡で使用された可能性は低いと推測された。鷹森山産地の原石、赤井川産原石と十勝産原石を使用した遺物の産地分析では、これら産地に同定された遺物の帰属確率の差が十分の一～百分の一がほとんどで、遺物の中で、赤井川、十勝、鷹森山の各群の帰属確率の差がほとんどない場合は原石産地の特定に苦慮するが、この場合は、客観的な産地分析法により赤井川産、十勝産、鷹森山産と限定したうえで、肉眼観察により遺物と似た原石が赤井川産地、十勝産地、鷹森山産地のいずれに多いかを考慮して原石産地を判定する場合もある。しかし、今回分析した遺物は全て、赤井川産群に高確率で帰属され、赤井川産原石が使用されていると判定した。遺跡で多く使用された原石産地と交流、交易が活発であると推測すると、落部1遺跡は赤井川原産地地方と活発な交流があり産地地方の生活情報、文化情報が落部1遺跡に伝播していたと推測しても産地分析の結果と矛盾しない。これら産地分析の結果は、他の出土遺物の様式学と組み合わせ、総合的に考古学することにより、本遺跡の性格を考察する上に貴重な資料を与えることができると思われる。

参考文献

- 1) 薬科哲男・東村武信(1975), 蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(Ⅱ)。考古学と自然科学, 8: 61-69
- 2) 薬科哲男・東村武信・鎌木義昌(1977), (1978), 蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(Ⅲ)。(Ⅳ)。考古学と自然科学, 10, 11: 53-81; 33-47
- 3) 薬科哲男・東村武信(1983), 石器原材の産地分析。考古学と自然科学, 16: 59-89
- 4) 東村武信(1976), 産地推定における統計的手法。考古学と自然科学, 9: 77-90
- 5) 東村武信(1990), 考古学と物理化学。学生社

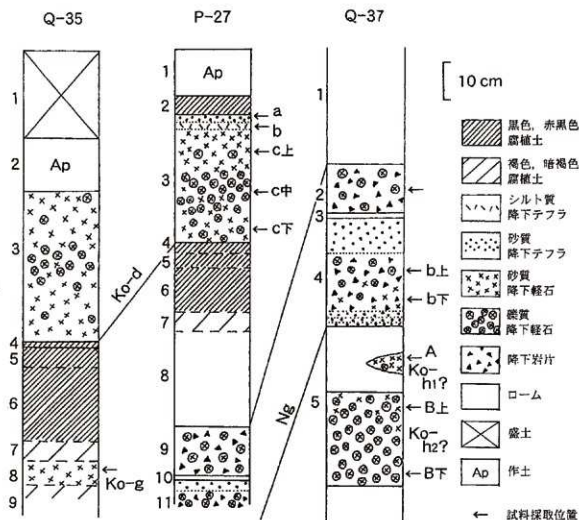
3 落部1遺跡のテフラ

落部1遺跡で認められたテフラについて記載し、既知のテフラとの対比を行なった。テフラは野外観察とともに鏡下観察を行なった。その結果、駒ヶ岳テフラ Ko-d と Ko-g、濁川テフラ Ng に対比されるものと、駒ヶ岳テフラ Ko-h₁ と Ko-h₂ に対比される可能性があるものが認められた。鏡下観察は、試料を水洗、篩い分けし、粒径1/4-1/8mmについてプレパラートを作成後、偏光顕微鏡で行なった。図VI-2にテフラ柱状図、表VI-5にテフラの構成物、図版VI-1にテフラの顕微鏡写真を示す。

1. Q-35-3層、P-27-3層：層厚35cm±で遺跡の全域を覆う。大きく三つのフォールユニットから成り、主部（P-27-3c）は砂～細礫サイズの灰白色軽石層（層厚30cm±）で、上方へ細粒化する。上部に砂サイズとシルトサイズの二層のユニットが認められる。どのユニットも斜長石が多いが、上部のユニットのうちシルトサイズのユニット（P-27-3b）では火山ガラスも多い。火山ガラスの形態は網目様である。
佐々木ほか（1970）に示された Ko-d (A.D. 1640) の分布と一致する。
2. Q-35-8層：砂サイズの橙色降下軽石層で層厚10cm未満、明瞭な層をなさず薄いレンズ状に産出することが多い。主に斜長石から成る。火山ガラスの形態は網目様で、Ko-d のガラスの気泡径よりも小さい。本テフラの鉱物組成、火山ガラスの形態、産出層準は、中野B遺跡、富野3遺跡、虎杖浜2遺跡で Ko-g (約6000y.BP. 勝井ほか、1989) に対比されたテフラ（北海道埋蔵文化財センター、1996・1999・2002）と同じである。
3. P-27-9～11層、Q-37-2～4層：六層前後のフォールユニットから成るテフラで、礫サイズの軽石・岩片層と火山灰との互層をなす。Q-37-2～3層は褐色、同4層は青灰色、灰色を呈する。角閃石を多く含むことで濁川カルデラ起源の Ng (約12000y.BP. 柳井ほか、1992) に対比される。
4. Q-37-5A層：Ng層の下位のローム層中にレンズ状に産出する。砂サイズの橙色降下軽石層で、上方へ細粒化する。最大層厚6cm。発掘範囲内ではQ-37付近以外では認めていない。斜長石と斜方輝石に富み、角閃石を微量含む。火山ガラスの形態は網目様で、Ko-g のガラスによく似ている。未詳の点が多いが、駒ヶ岳テフラ Ko-h₁ (約17000y.BP. 勝井ほか、1989. 柳井ほか、1992の Ko-h) に対比される可能性がある。ここでは Ko-h₁? としておく。
5. Q-37-5B層：Ko-h₁? のさらに下位に産出する礫サイズの橙色降下軽石層。層厚25cmで上方へ細粒化する。本層下部では軽石粒径1cmである。発掘範囲内ではQ-37付近以外では認めていない。斜長石と斜方輝石に富み、角閃石を微量含む。火山ガラスの形態は Ko-h₁? とほぼ同じである。本層も Ko-h₁? と同様に未詳の点が多いが、駒ヶ岳テフラ Ko-h₂ (>39000y.BP. 勝井ほか、1989. 柳井ほか、1992の Ko-h₂) に対比される可能性がある。ここでは Ko-h₂? としておく。

以上のテフラのほか、白頭山起源の B-Tm (10世紀。町田ほか、1992) と推定されるテフラがあるが残存性が非常に悪い。

遺物は、Ko-g と Ko-d の間の腐植土層から、縄文時代中期・後期・晩期、統縄文時代のものが出土している（第三章3参照）。



図VI-2 テフラ柱状図

表VI-5 テフラの構成物

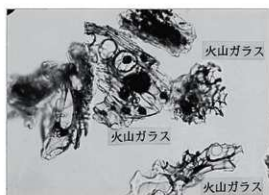
試料	石英	斜長石	角閃石	斜方輝石	単斜輝石	不透明鉱物	火山ガラス	軽石	岩片	風化粒
P-27-3 a	-	●	-	○	tr	○	+	-	-	-
3 b	-	○	-	+	tr	+	○	-	-	-
3 c上	-	●	-	+	+	+	+	-	-	-
3 c中	-	○	-	○	tr	+	tr	-	-	-
3 c下	-	○	-	○	+	○	tr	-	-	-
Q-35-8	-	●	-	+	tr	+	+	-	-	-
Q-37-2	+	○	○	+	-	○	tr	+	tr	+
4 b上	+	○	○	+	tr	+	tr	+	-	tr
4 b下	-	○	○	+	-	+	tr	○	-	+
5 A	-	●	tr	○	tr	+	+	+	-	-
5 B上	-	●	tr	○	+	+	+	tr	-	-
5 B下	-	●	-	○	+	+	○	+	-	-

粒径1/4-1.8mm ●: 頗る多い ○: 多い +: 少ない tr: まれ -: 未確認

引用文献

- 勝井義雄・鈴木建夫・曾屋龍典・吉久康樹（1989）：「北海道駒ヶ岳火山地質図」。地質調査所。
- 佐々木竜男・片山雅弘・音羽道三・天野洋司（1970）：渡島半島の火山灰について。北海道農業試験場土性調査報告、No. 20、pp. 255-281。
- 北海道埋蔵文化財センター（1996）：「函館市中野 B 遺跡第 4 分冊」。322pp。
- 北海道埋蔵文化財センター（1999）：「長万部町富野 3 遺跡」。381pp。
- 北海道埋蔵文化財センター（2002）：「白老町虎杖浜 2 遺跡（2）」。293pp。
- 町田 洋・新井房夫（1992）：「火山灰アトラス」。東京大学出版会、276pp。
- 柳井清治・鴎澤好博・古森康晴（1992）：最終氷期末期に噴出した濁川テフラの層序と分布。地質学雑誌、Vol. 98、No. 2、pp. 125-136。

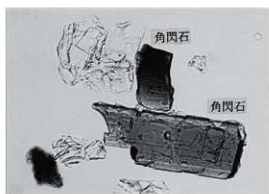
(花岡正光)



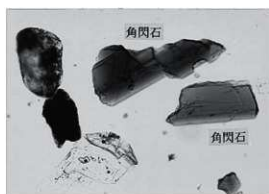
試料：P-27-3b (Ko-d)



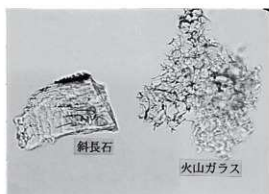
試料：Q-35-8 (Ko-g)



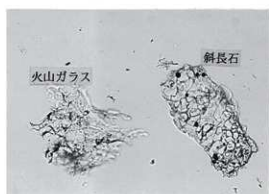
試料：Q-37-2 (Ng)



試料：Q-37-4b上 (Ng)



試料：Q-37-5A (Ko-h₁?)



試料：Q-37-5B下 (Ko-h₂?)

図版VI-1 テフラの顕微鏡写真 (下方ボーラーのみ。スケールは各写真に共通)

Ⅶ 成果と問題点

1 Tピットについて

平成13年の落部1遺跡の調査では住居跡2軒、土壇7基、Tピット7基、焼土14ヶ所、集石4ヶ所などの遺構が検出された。住居跡は小さく、掘り込みも浅いもので仮小屋的なものと推測した。本遺跡は復元土器は多いものの、出土点数の少ないことから、狩猟時などのキャンプ地もしくはTピットの存在から狩猟場そのものであったことが推測できる。

このようなTピットは函館市をはじめとして、道南では非常に多く検出されることが知られている。近年の発掘調査でも例えば函館市瀬戸川1遺跡では10,700㎡の調査で129基ものTピットが検出されている（函館市教委2000、2001）。ここでは最近調査例の増加している八雲町周辺の渡島地方北部におけるTピットについて見てみたい（以下で取り上げる遺跡の位置については図Ⅶ-1参照）。

（1）八雲町の遺跡

八雲町ではTピットの検出率が少なく、平成10年の山崎4遺跡の調査で初めて確認された。

山崎4遺跡ではA地区とされた、比高差20m程の無名沢に面した、標高38～42mの海岸段丘平坦部で7基が確認された（北埋調報162）。いずれも溝状のもので、長軸が等高線に直交して構築されている。規模は壙底面の長軸長が3mに近いかそれ以上のものが2基、1.5m前後のものが5基で、やや小さいものが多い。この7基中、T P-1・2・3・5の4基が標高約39.5m、T P-6・7の2基が標高約41.5mの等高線に沿って扇状に並んでいた。構築時期は不明である。

山崎5遺跡では比高差20m程の無名沢に面した、標高35.5mの海岸段丘上の沢地形部分で1基が確認された（北埋調報165）。溝状のものであるが、形状や位置からTピットとして機能したかは不明である。

野田生5遺跡では比高差20mほどの柏木川に面した、標高35.5mほどの海岸段丘緩斜面で1基が確認された（北埋調報164）。溝状のもので、長軸は等高線に直交している。壙底面での長軸長は3.97mでこの周辺では最も大きい。構築時期は不明である。

管見の限り、これらが八雲町でのTピット検出例の全てで、本遺跡例7基を加えて合計16基が検出されている程度である。いずれも、比高差20m程度の大きな沢・川に面した海岸段丘上緩斜面に構築されている。長軸は等高線に直交するものと平行するものがあり、前者がやや多い。複数が確認された山崎4遺跡A地区および本遺跡では遺物の出土量が少なく、等高線に沿って複数基が並んでいる。



図Ⅶ-1 八雲町周辺のTピット検出遺跡

(2) 長万部町の遺跡

共立遺跡は標高43～44mの丘陵緩斜面に位置する。浅い溝状の土壌2基が検出されているが、いわゆるTピット的な機能を持つものとは考えてはいない(長万部町教委2000)。

オバルベツ2遺跡はオバルベツ川左岸段丘の舌状台地部分にあり、標高は9～10m程である。Tピットは北海道文化財保護協会の調査により5基(北海道文化財保護協会1999・2000)、長万部町教育委員会の調査により48基(長万部町教委2001)が確認された。いずれも溝状のものである。町教委発掘分の48基は列構成不明の3基を除いて、A～F列の6列に分かれるという。最大のものは31基で構成され230mにもおよぶD列である。これは5～6基で一単位となると考えられている。各列と等高線との関係は標高差が無いこともあり見出し難い。長軸は等高線に直交するものと、平行するものがあり後者の方が多い。規模は墳底面の長軸長が2.0m前後のもののが最も多く、最小で0.99m、最大で3.57mである。構築時期は縄文時代中期もしくはそれ以前と考えられている。地点が若干離れている保護協会調査区域では5基が標高7～8mほどの平坦部にあり、この内2基は7m、別の2基は25m程離れ、長軸方向が揃い、等高線に直交もしくは直交気味に検出された。

オバルベツ4遺跡はオバルベツ川左岸丘陵上緩斜面にあり、標高は10～14mである。Tピットは11基が確認された(長万部町教委1999)。全て溝状のもので、明確に列をなすものは無く、調査区内に散在している。長軸は等高線に直交するものと、平行するものがあり後者の方が1基多い。規模はやや大きく、長軸長の平均は2.6mで3.0mを超えるものも4基ある。

花園3遺跡は標高46～48mの海岸段丘上平坦部に位置し、低地との比高差は30mほどである。Tピットは溝状のもので1基が確認された(北埋調報139)。長軸方向は等高線に直交し、墳底面での長軸長は2.18mである。構築時期は土壌との切り合いから縄文時代中期後半以降と考えられている。

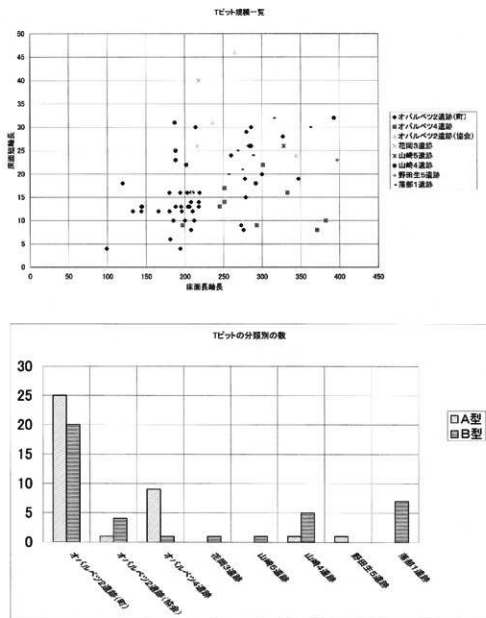
(3) 森町の遺跡

森町でのTピットについては管見の限り確認できなかった。しかし、御幸町遺跡では等高線に沿って帯状にフラスコ状ピットが検出されており、報告者はこれをTピット的な落とし穴ではないかと推測している(森町教委1985)。なお、遺跡は標高13～15m程の海岸段丘上平坦部に位置している。

(4) まとめ

以上が現在確認されているTピットの概要である。Tピットの形状はいずれも溝状のもので、杭穴があるものは無い。森田・遠藤の分類のA1・B1型に相当するものである(森田・遠藤1984)。また、長万部町では市街地周辺の標高の低い遺跡で、まとまってもしくは列をなして多く検出されることが特徴である。長万部町南部から八雲町にかけての標高の高い海岸段丘上では検出率が少なく、あったとしても複数がまとまって列をなして構築されることは少ない。この両者は規模・形態において若干の差異が指摘できる。

Tピット墳底面の長軸長・短軸長をグラフに示したものが図VII-2上段である。また、森田・遠藤のA・B型の分類基準である長軸長/短軸長の値が14以上のものと、それ以下のものに分けて検出数を棒グラフにしたものが図VII-2下段である。長万部町の低地に多数検出されるものはより細長いA型が多く、長万部町南部から八雲町の段丘上に少数検出されるものは若干丸みを帯びるB型が多い。図VII-2上段を見ると、長軸長ではむしろ前者に短いものが多く、この差は主に短軸長に拠るものと言える。段丘上に検出される後者は短軸長が全て20cm以上と幅が広く、その結果、長軸長/短軸長の値が14未満のB型が多くなっているのである。これは、時期差もしくは立地と密接に関連する多数が列をなして並ぶか否かによる差異と考えられる。しかしこの周辺でのTピットの構築時期は中期前後と推測されているが、不明の場合が多い。むしろ列をなすかどうかによって墳底面の幅の広さを変え



図VI-2 八雲町周辺のTピット規模一覧と分類別グラフ

ていた可能性が高いと思われる。つまり、列をなしてTピットを作ろうとした場合には、規模を小さく、特に横底面の幅を狭くして構築したと推測されるのである。

また、Tピットの分布については古く森田・遠藤らの論考があり、道南部では(1)松前町付近、及び(2)函館市周辺、が集中地域として挙げられている。八雲町周辺の噴火湾沿岸はこの1984年時点でも南茅部町を除いて検出例が無く、近年の大規模発掘調査によりやっと検出されるようになった。しかしそれでも、上記の集中域に比べるとその数は非常に少ない。

このように、八雲町周辺の噴火湾沿岸では今のところTピット自体が少ないと言える。Tピット2～4基程度で列をなす例は山崎4遺跡と落部1遺跡でのみ確認されたが、いずれも遺物の散布が比較的少ない遺跡もしくは地点である。このことを勘案すると、Tピットは海岸段丘上に連続と分布する

遺跡の辺縁部もしくは遺跡の確認されていない段丘上に存在する可能性があるが、今後も急速な種類の増加は期待できないと推測される。このような分布の少なさは植物性食料や海産物、海獣などを主体とし、陸獣によらない食生活を意味するものではない。長万部町静狩貝塚ではクマ・シカ・キツネの骨が出土している（大場・田川1955）。また、八雲町コタン温泉遺跡出土の陸獣で主体となるのはエゾシカで、重要な獲物の一つとして挙げられている（八雲町教委1992）。よって八雲町周辺ではTピットによらない狩猟が主体となっていたと推測される。（藤原秀樹）

2 III群 a-3 類土器について

ここでは落部1遺跡におけるIII群土器、特にIII群 a-3 類土器のあり方を集成しその特徴を簡単にまとめることとした。なお、図中で番号のみのものはV章包含層での掲載番号である。

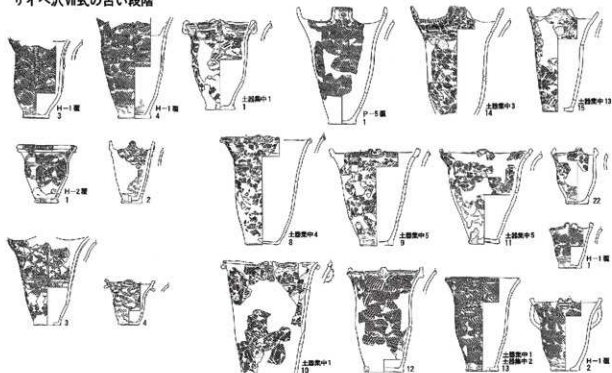
III群土器のうち復元されて器形がわかるもの（図上復元を含め）は70個体あまりである。これらは「サイベ沢Ⅷ式」から「見晴町式」、さらには後続する「榎林式、元和D群に関連するもの」である。このうちⅢ a-3 類；サイベ沢Ⅷ式について器形や文様要素等を概観したところ、これらが円筒上層B式の伝統を受け継ぐ「古い段階のもの」と見晴町式につながる「新しい段階のもの」の二者で構成されることが想定された。集成に際しては、遺跡全体での遺物の分布や15か所から検出された「土器集中」における出土状況にも若干注意を向けている（図V-1～7）。調査区が斜面であることや厳密に層位的に把握されたものではないといった消極的な出土状況ではあるが、2、3のところで伴出関係が認められるからである。

最上段から3段目にかけての資料は「サイベ沢Ⅷ式の古い段階」と考えられるものである。平縁のもの、4か所に突起部や貼り付けがあるもので比較的細い貼付帯により文様が描かれるものがある。口縁部が大きく外反し小さな突起部や2個一対の貼り付け等簡単な装飾が添えられる平縁のもの（8～13）、大きな台形状の突起を有するもの（P-5覆-1、14、15）は前段階の伝統を引くもので、このような類が組み合わせられるのであろう。アーチ状の把手を有するものも。縄文のみが施文された小型のものでは図右端に掲載した22、H-1覆-1、H-1覆-2等が伴うものとみられる。貼付帯による文様の3と8（土器集中4）、9・11（土器集中5）、12はK-L-15区周辺から出土している（図V-1）。このうち土器集中5の2個体は同時期と考えて良い。また1、10、13は「土器集中1・2」から出土している。

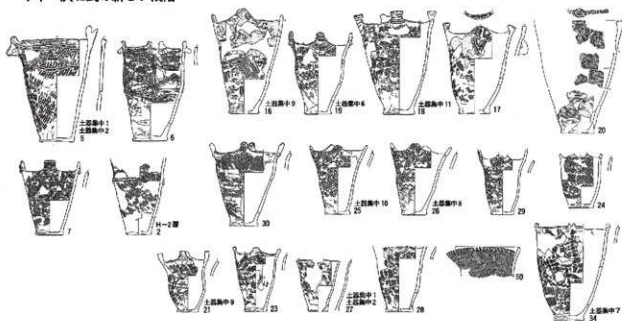
地文は斜行縄文（2は無節、13は結束のある斜行縄文）、結束第1種羽状縄文で口唇直下のごく狭い範囲、底部付近を除きほぼ全面に施文される。この段階、本遺跡では結束第2種羽状縄文のものや結節回転文（綾絡文）の付加されるものは認められない。2、4では文様帯は無文となっている。口唇部は作り出しが明瞭で、断面形は切り出し形や角形を呈し、この部分に縄の痕、ヘラ状施工具、棒状工具による刻みが整然とつけられる。貼付帯を用い口唇部に明瞭に波状の文様を付けるものは包含層出土の4を除き見当たらない。口唇の一部と貼り付け上に施文されるもの（10）、突起部周辺と口唇部に斜めに施すもの（9）があるだけである。貼付帯で文様を描くものでは文様帯は2条で区画され、波頂部から垂下する文様があり、文様帯が胴部半ばよりも大きく下るものもある（H-1覆-3）。貼付帯には縦位に撚紐の押捺、ヘラ状工具での刻み目などのあるものと素文のもの（3、4）があり、後者がより新しい段階になるとみられる。また、包含層図V-23-38 a・bに見られるような撚りの異なる三本一組の撚紐を貼付帯に並行に押捺するものが最も古い段階に位置付けられよう。

これら落部1遺跡の「古い段階」に相当する資料には八雲町野田生2遺跡フラスコ・ピットP-3

サイベ沢VII式の古い段階



サイベ沢VII式の新しい段階



見晴町式



榎林式に関連するもの



図Ⅷ-3 落部1遺跡出土のⅢ群土器

覆土の一括資料がある(北埋調報167)。そしてサイベ沢Ⅵ式に対比される「森越Ⅱ群第Ⅴ段階」の土器群(峯山・大島ほか1975)と比較すると、器形、馬蹄形瓦痕文の有無、貼付帯による文様の構成等の点で若干の相違が認められるもので、この点から本遺跡の資料はより新しい段階のものとして捉えることが可能である。

「サイベ沢Ⅵ式の新しい段階」には沈線により文様が描かれるものがある。前段階よりも小振りの台形状突起を有するもの(16)、棒状の突起、小さな方形、舌状の突起のあるものがこれに伴うとみられる。頸部のくびれは前段階ほど強くなく、底部からほぼ直線的に立ち上がる器形のものが多い。器高18~23cmの小型のものが多く認められるのもこの段階の特徴といえよう。口唇断面は丸みを帯びるもの、薄手で尖り気味のもの認められる。古い頃に多くある「口縁部が外反する平縁のもの」はこの段階では独自性を失い、全くかほとんど無くなるものとみられる。口唇断面が丸みを帯びあまりくびれない類のもの(50)がこの段階に伴う可能性がある。

沈線文のものは貼付帯のもの同様、出土点数が非常に少ないのが本遺跡の特徴である。文様は垂下する沈線と胴部をめぐる2、3条の沈線で区画された中に弧状、直線状の文様が描かれるものである。このなかで注目されるのは注口部がある土器(5)である。口唇の明瞭な作り出しや部分的に貼付帯により10に類する波状の文様が施文される点、また、ほかの土器には見られない刺突文の多用に注意する必要がある。出土状況を見るとこの土器の破片は「土器集中1・土器集中2」において1、10、13、27と混在している(図V-2)。

縄文のものでは突起部を肥厚させ頂部を凹ませる例が多く、突起周辺に貼付帯(19、20)や縄線(18)を施すもの、下位に粘土の貼り付けるものがある(19、21、24)。向かい合わせで異なる形状の突起部を持つものもある(17、20)。地文は単節斜行縄文、複節斜行縄文(5)、結束第1種・結束第2種羽状縄文、結節回転文(縦絡文)、魚骨回転文のもの(20)、自縄自巻的な縄文のもの(16)等多様であるが、結束第1種羽状縄文は少ないようである。口唇への施文は縄による瓦痕が多くに認められる。ヘラ状工具での刻みのあるもの、施文の無いもの(23)もある。34は体部の上下で縄文の施文方向を変えるもので、縦絡文も付加されている。最も新しく位置付けられるか後続する見晴町式に属する可能性がある。

これら「新しい段階」に対比される資料としてサイベ沢Ⅱ遺跡第2号住居址(森田・高橋1967)の資料があげられよう。なお、注口部のある土器の類例は函館市石川1遺跡(H-3床面出土)にあり、「筒状の貼り付け」のある土器として報告されている(道埋文1988a)。

見晴町式に相当するものは少ない。3、4か所に山形突起部、波頂部を有するもので、底部は前段階ほどは張り出さず直線的に立ち上がる器形である。地文は主に斜行縄文が施され、口唇断面は角形で施文がある。突起下に粘土の貼り付け(31)、頂部に刺突や凹みを加えるものもある。32、33は後続するⅢ群b類(35~37)と混在し斜面下部の沢地形部分から出土する傾向が認められた(図V-1)。

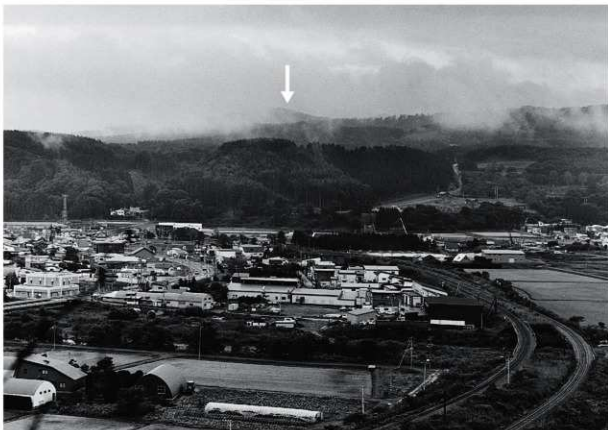
以上、落部1遺跡出土のサイベ沢Ⅵ式土器を、貼付帯のあるものと沈線文のものを中心と捉えそれぞれに伴うと想定される土器群を集成しその特徴をまとめてみた。しかし、沈線文のものと注口部のある土器(5)に認められるような前段階の要素を強く残す資料の位置付けなど、さらに検討の余地を残すものもある。5の土器などは出土状況を加味するとあるいは貼付帯のある土器群に伴う可能性も考えられるのである。このような点を踏まえ、遺構の一括資料や周辺地域での土器のあり方との比較を通し、サイベ沢Ⅵ式の細分、つまりはサイベ沢Ⅵa式とⅥb式の土器組成の検討を進めていくことがこれからの課題である。それにしても、当時の人々はこのようなきっかけから注ぎ口を付けるといった意匠を思いついたのだろうか。その用途、機能の問題とあわせ興味深い事項である。

(遠藤香澄)

写 真 图 版



1 遺跡遠景（左手に駒ヶ岳を望む）



2 遺跡遠景（北岸の段丘から）



1 A地区完掘（南西から）



2 管理用道路部分完掘（東から）



1 B地区完掘（北西から）



2 B地区調査前風景（南東から）



1 C地区完掘 (北西から)



2 C地区調査風景 (北から)



1 メインセクション① (Q-27杭から下方を望む)



2 メインセクション② (O-20杭から下方を望む)



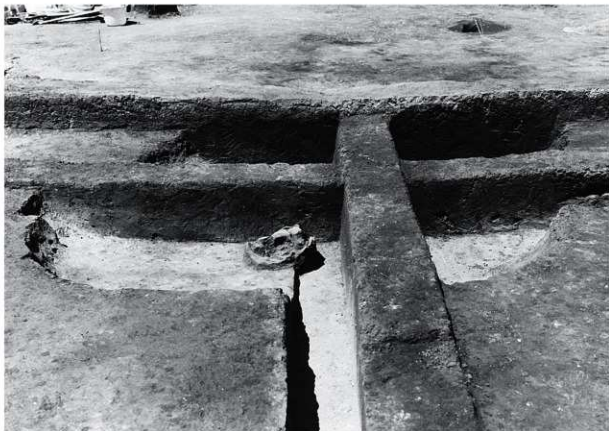
3 メインセクション③ (P-10杭から下方を望む)



1 H-1完掘 (南東から)



2 H-1セクション① (南西から)



1 H-1セクション②(南東から)



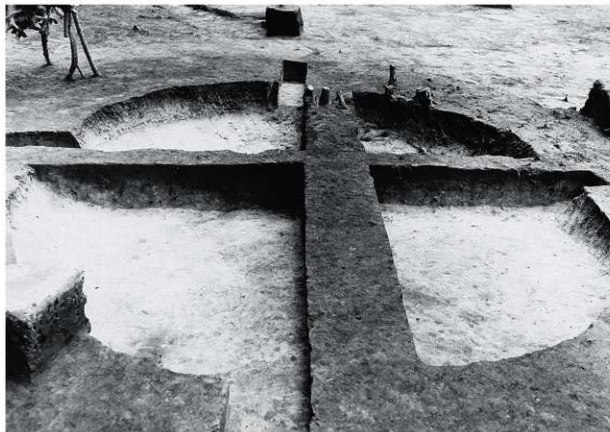
2 H-1覆土7層土器出土状況(東から)



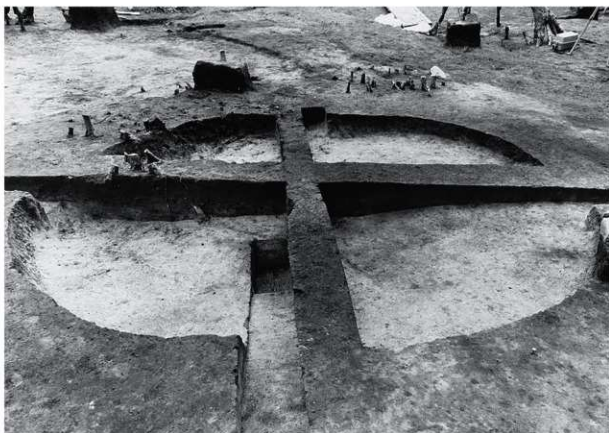
3 H-1覆土6層土器出土状況(北から)



1 H-2 完掘 (北西から)



2 H-2 セクション① (北から)



1 H-2 セクション② (東から)



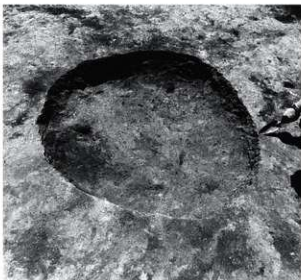
2 H-2 HF-1 (北から)



3 P-1 完掘 (西から)



1 P-2 完掘 (北西から)



2 P-3 完掘 (北から)



3 P-4 完掘 (北西から)



4 P-5 完掘 (北から)



5 P-6 完掘 (北から)



6 P-7 完掘 (北東から)



1 TP-1セクション (北から)



2 TP-1 完掘 (北東から)



1 TP-2セクション (西から)



2 TP-2完掘 (西から)



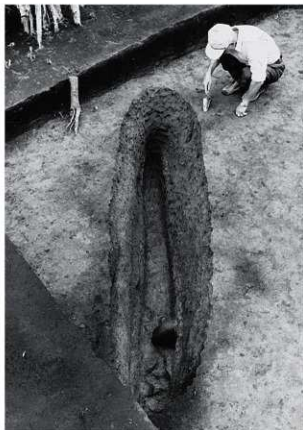
3 TP-3セクション (西から)



4 TP-3完掘 (南西から)



1 TP-4セクション (西から)



2 TP-4完掘 (西から)



3 TP-5セクション (西から)



4 TP-5完掘 (西から)



1 TP-6セクション (西から)



2 TP-6完掘 (北から)



3 TP-7セクション (南東から)



4 TP-7完掘 (東から)



1 F-1 検出 (南西から)



2 F-2 検出 (南東から)



3 F-3 検出 (北から)



4 F-4 検出 (北から)



5 F-5 検出 (北から)



6 F-6 検出 (北から)



7 F-7 検出 (北から)



8 F-8 検出 (北から)



1 F-9検出(南から)



2 F-10検出(西から)



3 F-11検出(北から)



4 F-12検出(東から)



5 F-13検出(北から)



6 F-14検出(北西から)



7 S-1検出(南から)



8 S-2検出(東から)



1 S-3 検出 (北西から)



2 S-4 検出 (北西から)



3 沢地形部分 (北から)



4 沢地形部分遺物出土状況 (北東から)



5 L-16-a・b区Ⅲ層4回目土器出土状況(西から)



6 I-27-b区Ⅲ層4回目土器出土状況(北西から)



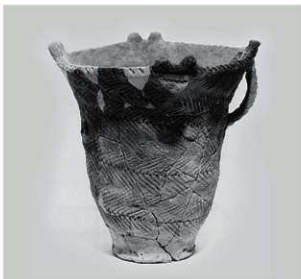
7 G-27-c区Ⅲ層3回目土器出土状況(北から)



8 J-26-a区Ⅲ層3回目土器出土状況(北西から)



1 H-1出土の土器(1)



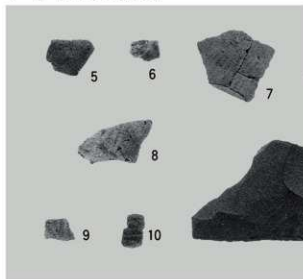
2 H-1出土の土器(2)



3 H-1出土の土器(3)



4 H-1出土の土器(4)



5 H-1出土の遺物

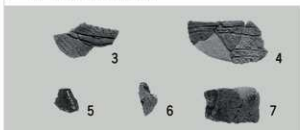




1 H-2出土の土器(1)



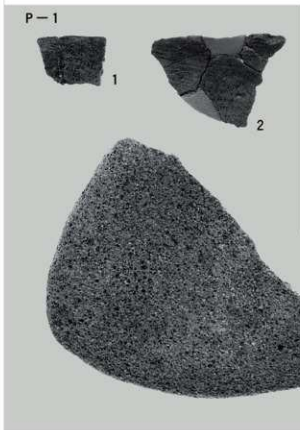
2 H-2出土の土器(2)



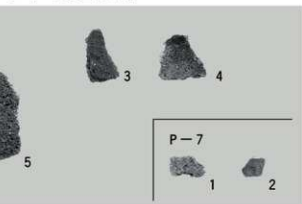
3 H-2出土の土器(3)

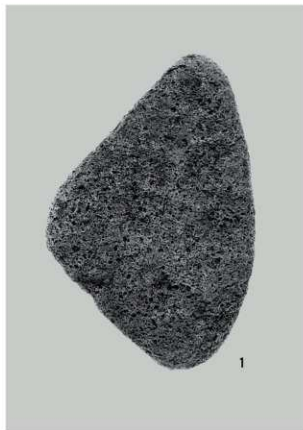


4 P-5出土の土器

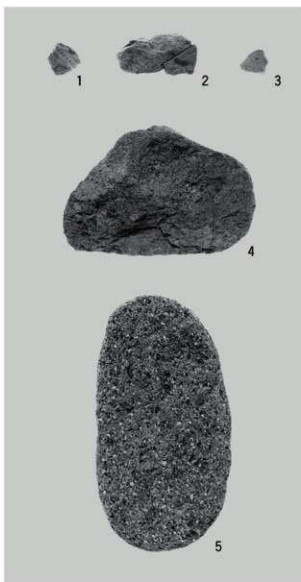


5 土壙出土の遺物





1 TP-2 出土の遺物



2 TP-6 出土の遺物



3 H-1、H-2 出土の土器



1 包含層出土のⅢ群 a類土器(1)



2 包含層出土のⅢ群 a類土器(2)



1 包含層出土の土器 (図V-10-1)



2 包含層出土の土器 (図V-10-2)



4 包含層出土の土器 (図V-10-4)



3 包含層出土の土器 (図V-10-3)



5 包含層出土の土器 (図V-11-7)



1 包含層出土の土器 (図V-11-5)



6 包含層出土の土器 (図V-11-6)



2 左上 (図V-11-5) の突起部 (正面)



3 左上 (図V-11-5) の突起部 (側面)



4 左上 (図V-11-5) の注口部 (正面)



5 左上 (図V-11-5) の注口部 (側面)



1 包含層出土の土器 (図V-12-8)



2 包含層出土の土器 (図V-12-9)



3 包含層出土の土器 (図V-13-10)



4 包含層出土の土器 (図V-14-11)



1 包含層出土の土器 (図V-14-12)



2 包含層出土の土器 (図V-15-13)



3 包含層出土の土器 (図V-15-14)



4 包含層出土の土器 (図V-16-15)



1 包含層出土の土器 (図V-16-16)



2 包含層出土の土器 (図V-17-17)



4 包含層出土の土器 (図V-18-19)



3 包含層出土の土器 (図V-17-18)



5 包含層出土の土器 (図V-18-20 d底部)



1 包含層出土の土器 (図V-19-21)



2 包含層出土の土器 (図V-19-22)



3 包含層出土の土器 (図V-19-23)



4 包含層出土の土器 (図V-19-24)



5 包含層出土の土器 (図V-19-25)



6 包含層出土の土器 (図V-19-26)



1 包含層出土の土器 (図V-20-27)



2 包含層出土の土器 (図V-20-28)



3 包含層出土の土器 (図V-20-29)



4 包含層出土の土器 (図V-20-30)



5 包含層出土の土器 (図V-20-31)



6 包含層出土の土器 (図V-21-32)



1 包含層出土の土器 (図V-21-33)



2 包含層出土の土器 (図V-21-34)



3 包含層出土の土器 (図V-22-35)



4 包含層出土の土器 (図V-22-36)



1 包含層出土の土器 (図V-22-37 d 底部)



2 包含層出土の土器 (図V-23-46 c 底部)



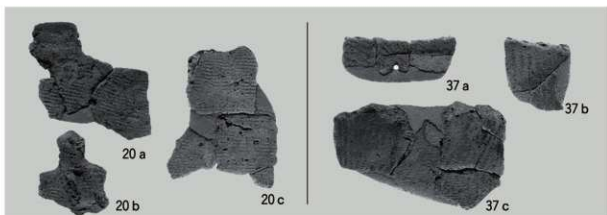
3 包含層出土の土器 (図V-23-50 口縁部)



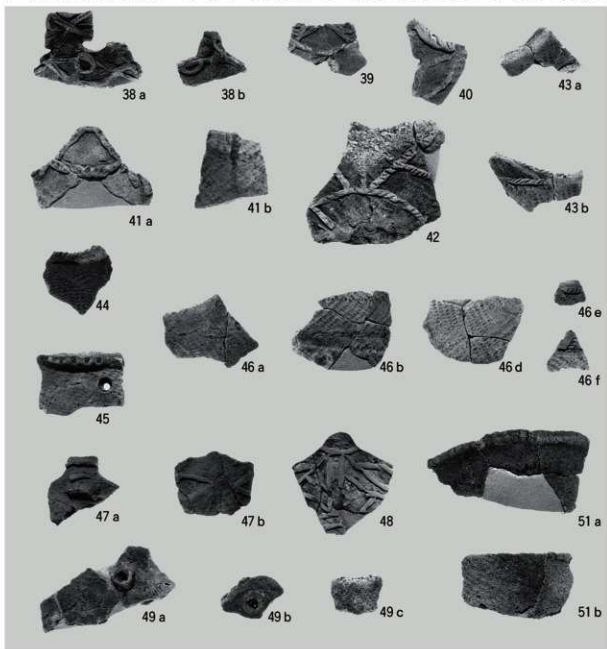
4 包含層出土の土器 (図V-26-74 a 口縁部)



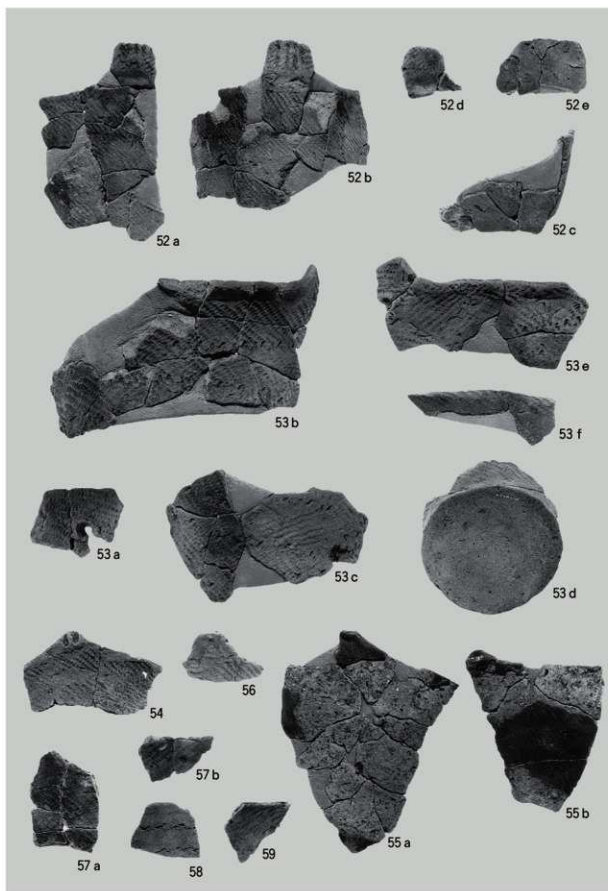
5 包含層出土の土器 (図V-27-99 b 底部)



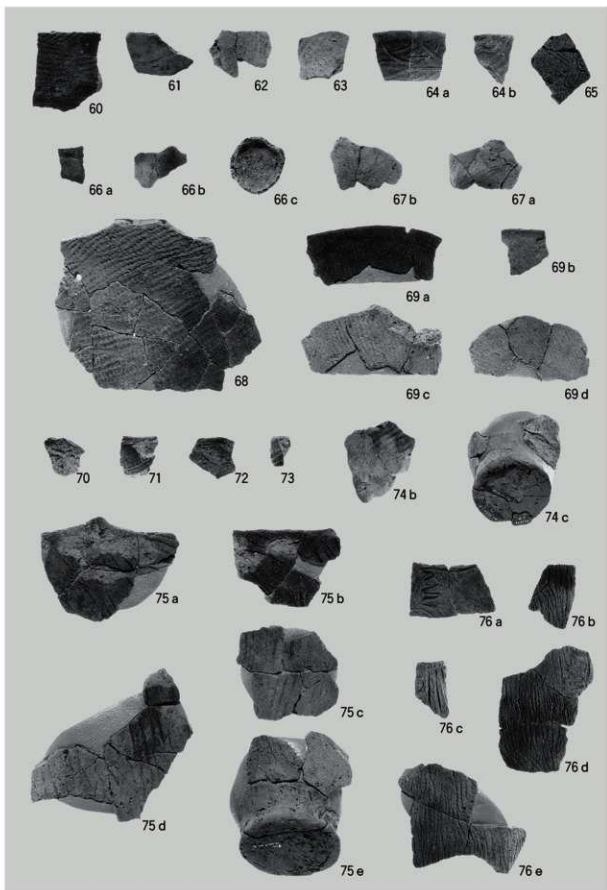
1 包含層出土の土器(図V-18-20 a~c口縁部) 2 包含層出土の土器(図V-22-37 a~c口縁部)



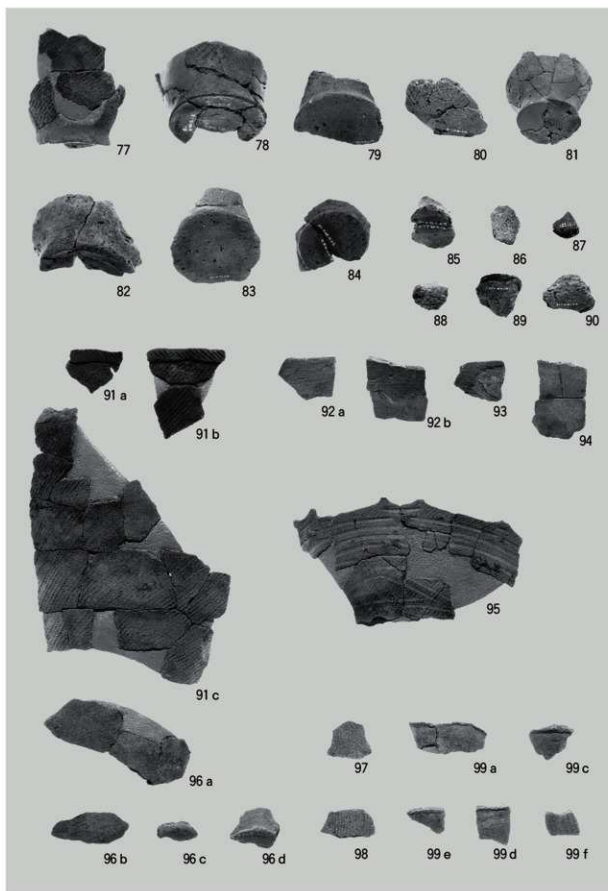
3 包含層出土のⅢ群 a類土器(1)



1 包含層出土のⅢ群 a 類土器(2)



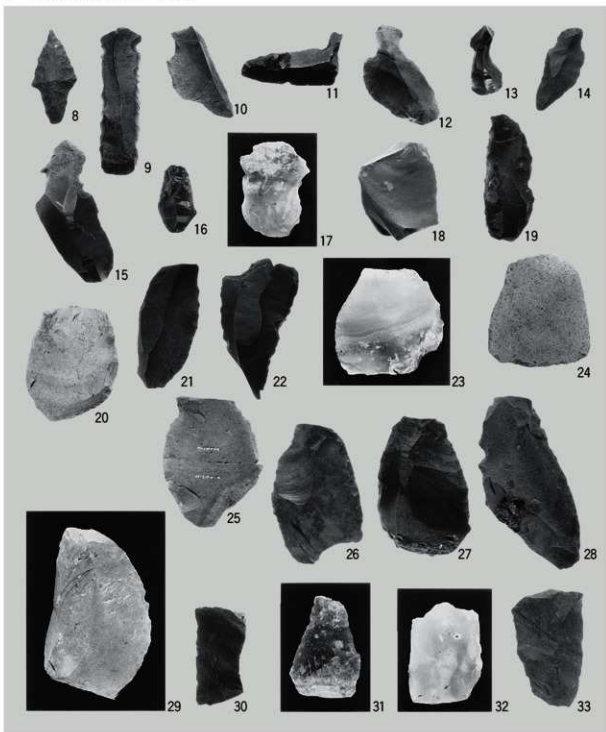
1 包含層出土のⅢ群a類(3)・Ⅲ群b類土器



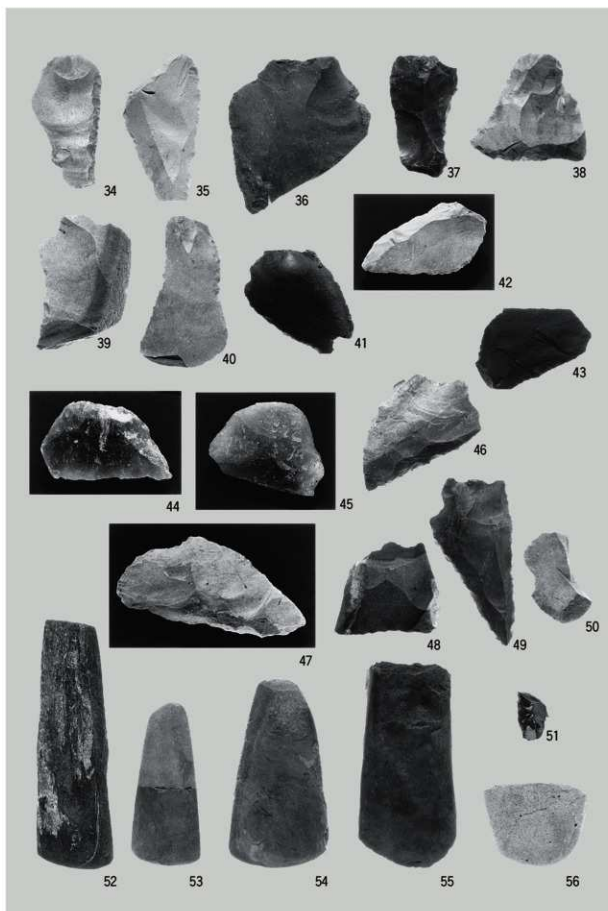
1 包含層出土のⅢ群a類(4)・Ⅳ群a類・Ⅳ群b類・Ⅴ群・Ⅵ群土器



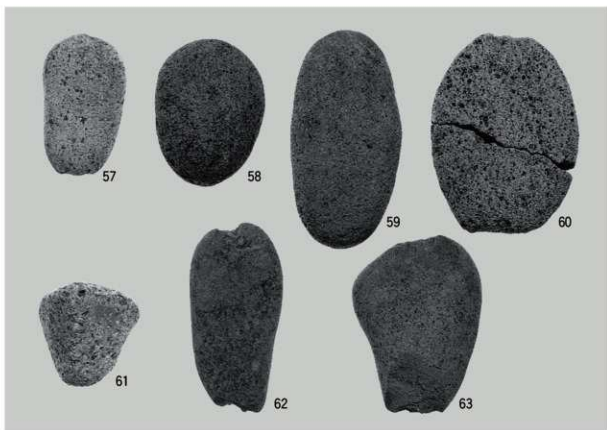
1 包含層出土の石器1 (石鏃)



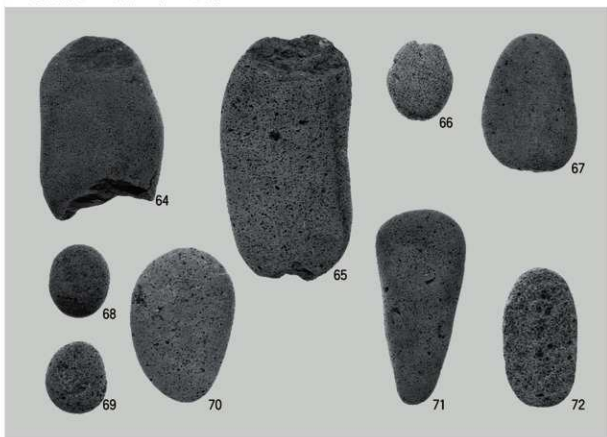
2 包含層出土の石器2 (石槍またはナイフ・つまみ付きナイフ・スクレイパー)



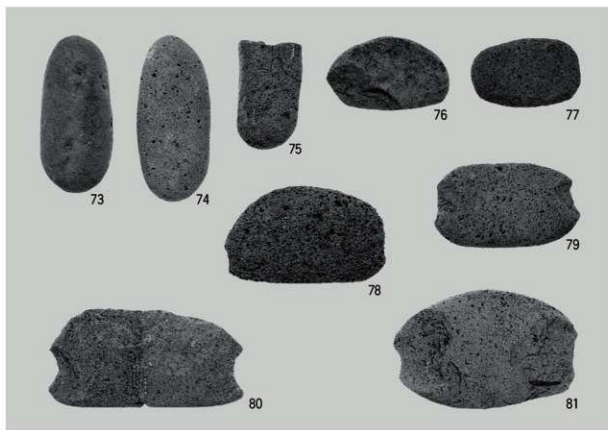
1 包含層出土の石器3 (スクレイパー・石斧)



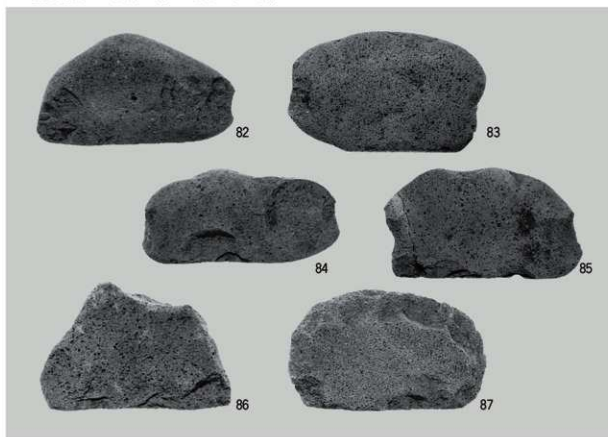
1 包含層出土の石器 4 (たたき石)



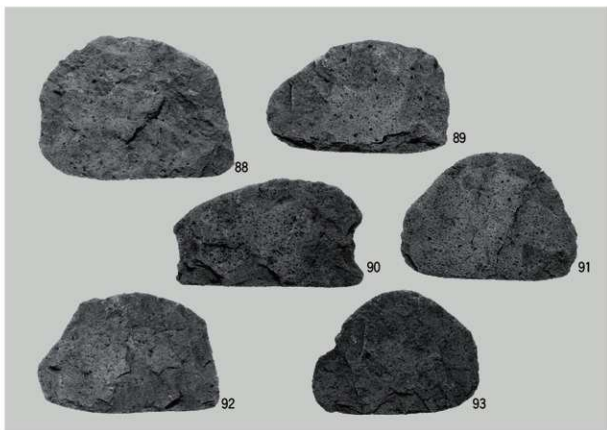
2 包含層出土の石器 5 (たたき石)



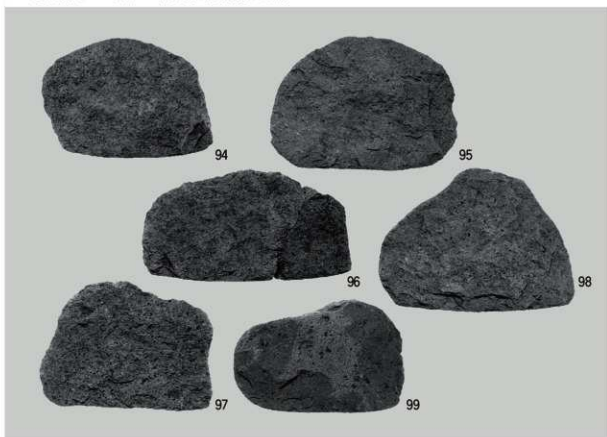
1 包含層出土の石器 6 (たたき石・すり石)



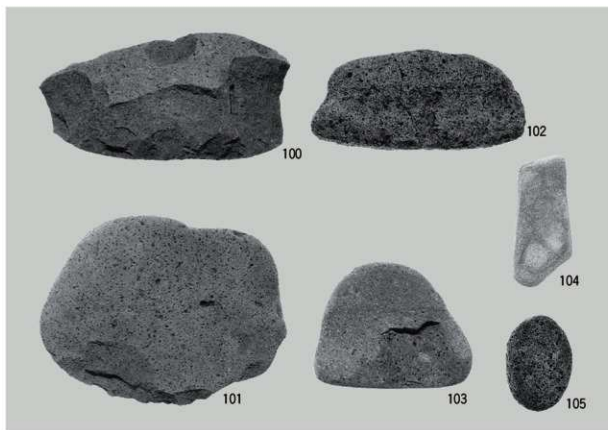
2 包含層出土の石器 7 (すり石・半円状扁平打製石器)



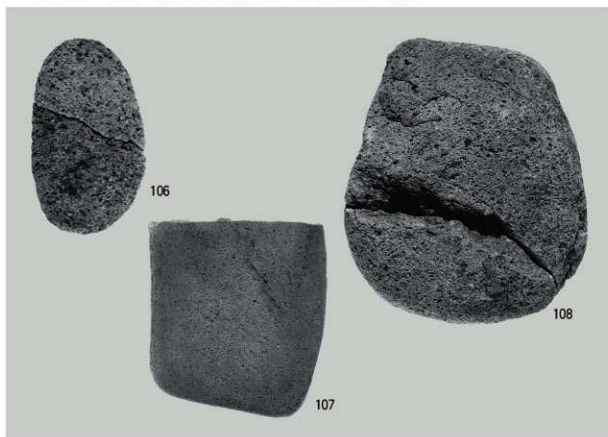
1 包含層出土の石器 8 (半円状扁平打製石器)



2 包含層出土の石器 9 (半円状扁平打製石器)



1 包含層出土の石器10（半円状扁平打製石器・北海道式石冠・砥石）



2 包含層出土の石器11（台石・石皿）



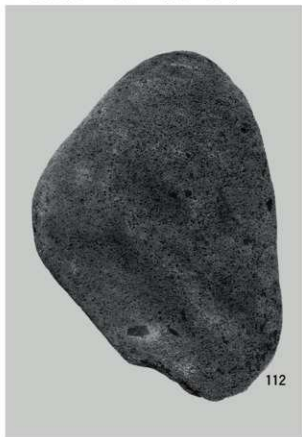
1 包含層出土の石器12 (台石・石皿)



2 包含層出土の石器13 (台石・石皿)



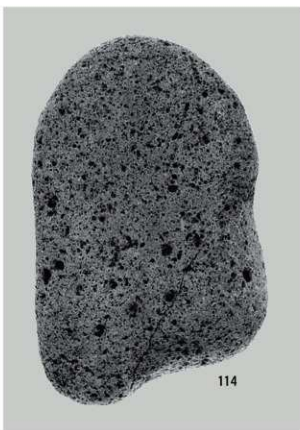
3 包含層出土の石器14 (台石・石皿)



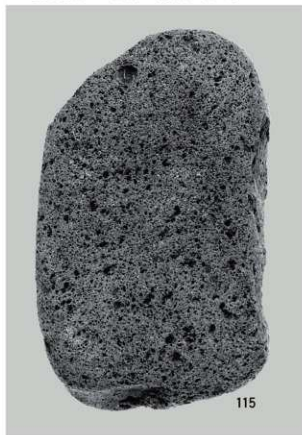
4 包含層出土の石器15 (台石・石皿)



1 包含層出土の石器16 (台石・石皿)



2 包含層出土の石器17 (台石・石皿)



3 包含層出土の石器18 (台石・石皿)



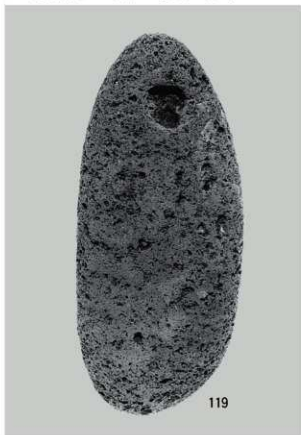
4 包含層出土の石器19 (台石・石皿)



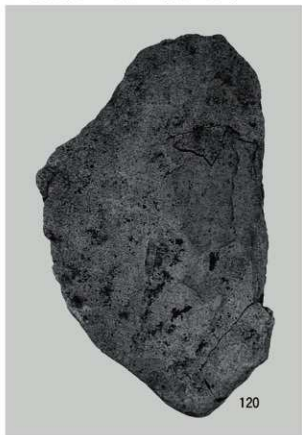
1 包含層出土の石器20 (台石・石皿)



2 包含層出土の石器21 (台石・石皿)



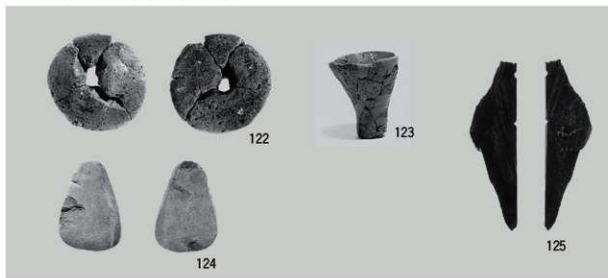
3 包含層出土の石器22 (台石・石皿)



4 包含層出土の石器23 (台石・石皿)



1 包含層出土の石器24 (台石・石皿)



2 包含層出土の土製品・石製品

引用参考文献

阿部正巳 1918「アイヌ墳墓発掘事件の顛末」(一)～(六)『人類学雑誌』第33巻第5～12号
真宗大谷派北海道教務所 1974『東本願寺北海道開教百年史』

江坂輝彌 1970『石神遺跡』石神遺跡研究会

及川研一郎 1987『北海道・八雲町落部遺跡出土土器の編年的位置』『溯航』第15号

小井田武 1987『アイヌ墳墓盗掘事件』

大島直行ほか 1991『入江遺跡発掘調査報告』虻田町教育委員会

大島秀俊ほか 1999『長万部町オハルベツ2遺跡』北海道文化財保護協会

大島秀俊ほか 2000『長万部町オハルベツ2遺跡(2)』北海道文化財保護協会

大場利夫・田川賢蔵 1955『静狩遺跡』長万部町

大場利夫ほか 1958『岩内遺跡』岩内町教育委員会

大沼忠春ほか 1976『元和』乙部町教育委員会

大沼忠春 1993『北海道東部の円筒土器文化』『考古学ジャーナル』No.362

小笠原忠久 1984『北海道南西部における縄文時代前・中期の集落』『北海道の研究』1 考古篇
渡島教育会落部村支会 1939『落部村郷土史』

加藤誠・勝井義雄・北川芳男・松井愈 1990『日本の地質1 北海道地方』

児玉作左衛門ほか 1958『サイベ沢遺跡』市立函館博物館

桜井清彦 1961『北海道山越郡落部遺跡』『日本考古学年報』12

桜井清彦 1964『北海道山越郡オトシベ遺跡』『日本考古学年報』15

(財)北海道埋蔵文化財センター 1986『木古内町建川1・新道4遺跡』北埋調報33

(財)北海道埋蔵文化財センター 1987『木古内町建川2・新道4遺跡』北埋調報43

(財)北海道埋蔵文化財センター 1988a『函館市石川1遺跡』北埋調報45

(財)北海道埋蔵文化財センター 1988b『函館市桔梗2遺跡』北埋調報46

(財)北海道埋蔵文化財センター 1988c『木古内町新道4遺跡』北埋調報52

(財)北海道埋蔵文化財センター 1995a『七飯町鳴川右岸遺跡』北埋調報87

(財)北海道埋蔵文化財センター 1995b『豊浦町高岡1遺跡』北埋調報88

(財)北海道埋蔵文化財センター 2000a『長万部町花岡2遺跡・花岡3遺跡』北埋調報139

(財)北海道埋蔵文化財センター 2000b『八雲町シリカ2遺跡』北埋調報142

(財)北海道埋蔵文化財センター 2000c『調査年報12 平成11年度』

(財)北海道埋蔵文化財センター 2001a『八雲町山崎4遺跡』北埋調報162

(財)北海道埋蔵文化財センター 2001b『八雲町山越2遺跡』北埋調報163

(財)北海道埋蔵文化財センター 2001c『八雲町野田生5遺跡』北埋調報164

(財)北海道埋蔵文化財センター 2001d『調査年報13 平成12年度』

(財)北海道埋蔵文化財センター 2002a『八雲町山崎5遺跡』北埋調報165

(財)北海道埋蔵文化財センター 2002b『八雲町山越3遺跡・山越4遺跡』北埋調報166

(財)北海道埋蔵文化財センター 2002c『八雲町野田生2遺跡』北埋調報167

(財)北海道埋蔵文化財センター 2002d『八雲町榮浜1遺跡』北埋調報175

(財)北海道埋蔵文化財センター 2002e『調査年報14 平成13年度』

佐藤一夫・宮夫靖夫ほか 1998『柏原27・ナルカ・静川5・6遺跡』苫小牧市埋蔵文化財調査センター

佐藤 稔 1999『オハルベツ3遺跡・オハルベツ4遺跡』長万部町埋蔵文化財調査報告3

- 佐藤 稔 2000『共立遺跡』長万部町埋蔵文化財調査報告 5
- 佐藤 稔 2001『オバルベツ 2 遺跡(1)』長万部町埋蔵文化財調査報告 6
- 柴田信一 1991 a 「八雲町より出土した魚形石器について」『南北北海道考古学情報』第 3 号
- 柴田信一 1991 b 「八雲町の縄文時代の遺跡と遺物について」『文京台考古』第 6 号
- 柴田信一 1995『柴浜 1 遺跡』八雲町教育委員会
- 菅江真澄著 内田武志・宮本常一編訳 1980『菅江真澄遊覧記』2
- 鈴木克彦 1997『注口土器の研究』『研究紀要』第 2 号 青森県埋蔵文化財調査センター
- 鈴木克彦 1998『北海道における縄文時代注口土器の研究』『北方の考古学』野村崇先生還暦記念論集
- 鈴木克彦 1999『東北地方 中期(円筒上層式)』『縄文時代』第 10 号
- 鈴木孝志 1958『若手県岩手郡松尾村水切場遺跡調査概報』『上代文化』28
- 高橋正勝・小笠原忠久 1980『4 縄文文化前期・中期』『北海道考古学講座』
- 高橋正勝 1966『函館市見晴町遺跡の資料』『北海道青年人類科学研究会会誌』8
- 高橋正勝 1981『中期の土器 北海道南部の土器』『縄文文化の研究』4
- 田川賢蔵 1956『トコタン遺跡について』『先史時代』第四輯
- 田川賢蔵 1958『北海道山越郡元山遺跡』『日本考古学年報』10
- 武内収太・山田悟郎 1968『山越郡八雲町熱田遺跡における緊急発掘調査』『ゆうらふ』第 12 号
- 竹内理三編 1987『角川地名大辞典』
- 立田 理 2002『山越 3 遺跡のⅢ群 a-3 類土器の編年的位置と放射性炭素年代について』『八雲町山越 3 遺跡・山越 4 遺跡』北理調報 166
- 田原良信 1979『見晴町 B 遺跡発掘調査報告書』函館市教育委員会
- 田原良信ほか 1981『権現台場遺跡』函館市教育委員会
- 田原良信ほか 1985『サイベ沢遺跡』函館市教育委員会
- 田原良信ほか 1986『サイベ沢遺跡Ⅱ』函館市教育委員会
- 田原良信ほか 1989『陣川町遺跡』函館市教育委員会
- 田原良信ほか 1990『権現台場遺跡』函館市教育委員会
- 千代 肇 1965『北海道八雲町大関遺跡について』『在華王路示』No 6 函館遺愛女子高・中学校歴史研究班考古学グループ
- 千代 肇 1975『北海道の円筒土器文化』『中の平遺跡発掘調査報告書』青森県教育委員会
- 千代 肇・岩本義雄 1975『北海道八雲町上八雲の遺跡について』『北海道考古学』第 11 号
- 千代 肇ほか 1981『尾白内』森町教育委員会
- 道南郷土史研究会 1953『郷土研究』第一号
- 野村 崇 1982『八雲町トコタン 2 遺跡』『北海道における農耕の起源(予報)』
- 野村 崇 1985『北海道縄文時代終末期の研究』
- 野村祐一ほか 2000『函館市瀬戸川 1 遺跡』函館市教育委員会
- 野村祐一ほか 2001『函館市瀬戸川 1 遺跡Ⅱ』函館市教育委員会
- 羽賀憲二 1992『二つの文化系統』『日本の古代 9 東北・北海道』
- 長谷部言人 1927『円筒土器文化』『人類学雑誌』第 42 卷第 1 号
- 藤田 登 1985『御幸町』森町教育委員会
- 北海道函館中部高等学校考古学研究部 1974『道南遺跡分布事典』
- 町田 洋・新井房夫 1992『火山灰アトラス』

- 松浦武四郎著 吉田武三校註 1970『三航蝦夷日誌』上巻
- 三浦孝一 1980『山崎遺跡発掘調査報告書』八雲町教育委員会
- 三浦孝一 1982『栄浜1遺跡発掘調査概報』八雲町教育委員会
- 三浦孝一 1983『栄浜』八雲町教育委員会
- 三浦孝一 1984『第二編先史時代』改訂八雲町史上巻
- 三浦孝一 1987『台の上遺跡』八雲町教育委員会
- 三浦孝一 1989『浜松2遺跡』八雲町教育委員会
- 三浦孝一 1990『八雲3遺跡発掘調査報告書』八雲町教育委員会
- 三浦孝一 1998『栄浜1遺跡Ⅳ』八雲町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一 1986『栄浜1遺跡』八雲町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一 1987『栄浜1遺跡』八雲町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一 1988『山越5・6遺跡発掘調査報告書』八雲町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一 1991『浜松2遺跡』八雲町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一 1992『コタン温泉遺跡』八雲町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一 1993『大関校庭遺跡』八雲町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一 1995『浜松5遺跡』八雲町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一 1997『大新遺跡Ⅰ』八雲町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一 1998a『大新遺跡Ⅱ』八雲町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一 1998b『旭丘1遺跡』八雲町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一ほか 2002『栄浜2遺跡・栄浜3遺跡発掘調査概要報告書』八雲町教育委員会
- 峯山 巖・大島直行ほか 1975『森越』知内町教育委員会
- 三宅徹也 1980『円筒土器』『縄文文化の研究』第3巻 縄文土器Ⅰ
- 村越 潔 1974『円筒土器文化』
- 森田知忠・高橋正勝 1967『サイベ沢B遺跡』函館市教育委員会
- 森田知忠・遠藤香澄 1984『Tビット論』『北海道の研究』1考古篇
- 八雲高等学校郷土史研究部 1970『郷研紀要』4
- 八雲高等学校郷土史研究部 1971『八雲町の恵山式土器』
- 八雲町編 1984『改訂八雲町史上巻・下巻』
- 八雲町編 2000『統計八雲』
- 山田秀三 1984『北海道の地名』
- 山内清男 1929『北関東に於ける織維土器』『史前学雑誌』第1巻第2号
- 吉崎昌一 1961『白滝遺跡と北海道の無土器文化』『民族学研究』26巻1号
- 吉崎昌一 1965『縄文文化の発展と地域性 北海道』『日本の考古学Ⅱ縄文時代』

報告書抄録

ふりがな	やくもちょう おとしべいちいせき							
書名	八雲町落部1遺跡							
副書名	北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	（財）北海道埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第181集							
編著者名	藤原秀樹・遠藤香澄							
編集機関	（財）北海道埋蔵文化財センター							
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685-1 TEL011-386-3231							
発行年月日	西暦2003年2月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査 面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
八雲町落部1遺跡	北海道山越郡八雲町入沢374番地他	01346	B-16-77	42度 13分 54秒	140度 25分 36秒	20010507～ 20011031	5,471㎡	高速道路北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）建設工事に伴う事前発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項
八雲町落部1遺跡	集落跡	縄文時代 中期	住居跡2軒、土壇7基、Tピット7基、焼土14ヶ所、炭化物集中1ヶ所、集石4ヶ所、土器集中15ヶ所		縄文土器7795点（サイベ沢Ⅷ式、見晴町式、榎林式、天祐寺式、手桶式、大洞A式）、続縄文土器69点（後北C ₂ ・D式） 石器など2032点（石鏃、石槍、つまみ付きナイフ、スクレイパー、Rフレイク、Uフレイク、フレイク、石核、石斧、たたき石、すり石、北海道式石冠、半円状扁平打製石器、台石・石皿） 土製品・石製品6点			落とし穴列 注口部のある 円筒上層式土器

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第181集

八雲町 落部1遺跡

—北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書—
平成15年2月20日発行

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832 江別市西野幌685番地-1
TEL.(011)386-3231 FAX(011)386-3238
[E-mail]mailto:domaibun.or.jp [URL]http://www.domaibun.or.jp

印刷 岩橋印刷株式会社
〒063-8580 札幌市西区西町南18丁目1番34号
TEL.(011)669-2500 FAX(011)669-2600
